

2026年度

大学院シラバス

国際日本学研究科

明治大学大学院

明治大学校歌

明治大学校歌

児玉花外

作詩

山田耕筰

作曲

白雲なびく駿河台

眉秀でたる若人が

撞くや時代の暁の鐘

文化の潮みちびきて

遂げし維新の栄になふ

明治その名ぞ吾等が母校

明治その名ぞ吾等が母校

二

権利自由の揺籃の

歴史は古く今もなほ

強き光に輝けり

独立自治の旗翳し

高き理想の道を行く

我等が健児の意気をば知るや

我等が健児の意気をば知るや

三

靈峰不二を仰ぎつつ

刻苦研鑽他念なき

我等に燃ゆる希望あり

いでや東亜の一角に

時代の夢を破るべく

正義の鐘を打ちて鳴らさむ

正義の鐘を打ちて鳴らさむ

目 次

2026 年度大学院学年歴・行事予定・カレンダー	2
人材養成その他の教育研究上の目的	4
「入学者受入」、「教育課程編成・実施」、「学位授与」方針	5
修士学位取得のためのガイドライン	9
博士学位取得のためのガイドライン	13
研究活動における不正行為への注意	23
履修登録について	24
履修登録スケジュール・登録完了までの流れ	25
科目ナンバリングについて	26
他大学大学院の聴講について	27
(博士前期課程)	
修了要件・履修方法について	31
授業科目及び担当者一覧表	32
シラバス	
主要科目	37
特修科目	73
(博士後期課程)	
修了要件・履修方法について	107
授業科目及び担当者一覧表	108
シラバス	
必修科目	110
選択必修科目	140
学校法人明治大学環境方針	146
交通遅延発生時の授業等の措置について	147
大規模地震等災害発生時の対応について	147
大地震発生時の避難マニュアル	150

◎2026年度 大学院学年暦・行事予定（2026年4月～2027年3月）

<春学期>

研究論集予備登録（9月発刊分）	2026年 3月2日（月）～3月6日（金）10:00
研究論集提出締切日（9月発刊分）	3月27日（金）10:00
時間割・履修関連書類配布	4月1日（水）～4月9日（木）
学生証更新	
国際日本学研究科ガイダンス	4月3日（金）
入学式	4月7日（火）
授業開始	4月10日（金）
WEB履修登録	4月17日（金）～4月20日（月）
履修計画書提出	
個人別時間割表公開	4月21日（火）～4月23日（木）
履修修正期間	
休日授業実施日	4月29日（水）〔昭和の日〕
臨時休業（休講）日	5月1日（金）・5月2日（土）
研究論集予備登録（2月発刊分）	6月22日（月）～6月26日（金）10:00
休日授業実施日	7月20日（月）〔海の日〕
授業終了日	7月22日（水）
夏季休業	8月1日（土）～9月19日（土）

※予定は変更されることがあります。変更や詳細については、Oh-o! Meiji や掲示等でお知らせします。

〔全キャンパス共通〕

学部・大学院
専門職大学院（法務研究科、会計専門職研究科）
【月～土曜日】

時 限	時 間 帯
1 時 限	9 : 00～10 : 40
2 時 限	10 : 50～12 : 30
3 時 限	13 : 30～15 : 10
4 時 限	15 : 20～17 : 00
5 時 限	17 : 10～18 : 50
6 時 限	19 : 00～20 : 40

※経営学研究科博士前期課程マネジメントコースは平日夜間および土曜日に授業を実施しています。

授業時間は下記の表のとおりとなります。（土曜日は上記の表の時間帯です。）

時 限	時 間 帯
マネジメント1時限 (M1時限)	18 : 00～19 : 40
マネジメント2時限 (M2時限)	19 : 50～21 : 30

CALENDAR

4

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

5

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

6

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

7

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

8

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

9

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

10

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

11

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

12

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2027年

1

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

2

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

3

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

<秋学期>

研究論集発刊	9月上旬
研究論集提出締切日(2月発刊分)	9月1日(火)10:00
授業開始	9月20日(日)
履修修正期間	9月21日(月)～9月25日(金)
休日授業実施日	9月21日(月)〔敬老の日〕 9月22日(火)〔国民の休日〕
修士論文予備登録	10月6日(火)・10月7日(水)
休日授業実施日	10月12日(月)〔スポーツの日〕
明大祭に伴う授業休講措置期間	10月29日(木)～11月3日(火)
明大祭・生明祭	10月30日(金)～11月1日(日)
創立記念祝日	11月1日(日)
休日授業実施日	11月23日(月)〔勤労感謝の日〕
臨時休業(休講)日	12月23日(水)・12月24日(木)
冬季休業	2027年 12月25日(金)～1月7日(木)
修士論文提出日	1月12日(火)・1月13日(水)
臨時休業(休講)日	1月16日(土)
創立記念日	1月17日(日)
授業終了	1月23日(土)
修士論文面接試験	2月1日(月)
春季休業	2月4日(木)～3月31日(水)
研究論集発刊	2月下旬
修了通知発送	3月中旬
修了式	3月26日(金)

※予定は変更されることがあります。変更や詳細については、Oh-o! Meiji や掲示等でお知らせします。

〔駿河台キャンパス〕

専門職大学院

(ガバナンス研究科、グローバル・ビジネス研究科)

【月～金曜日】

1	時 限	9 : 00～10 : 30
2	時 限	10 : 40～12 : 10
3	時 限	13 : 00～14 : 30
4	時 限	14 : 40～16 : 10
5	時 限	16 : 20～17 : 50
6	時 限	18 : 55～20 : 25
7	時 限	20 : 30～22 : 00

※ガバナンス研究科、グローバル・ビジネス研究科の平日授業は90分で授業を実施します。

人材養成その他教育研究上の目的

〔国際日本学研究科〕

国際日本学研究科では、国際的視点を持ち世界における日本を深く認識し、その認識に基づき的確に行動できる人間を育成することが重要であるという考えに立脚し、日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ち理解し、異文化及び多様な社会システムを理解するとともに、自らの意思を的確に表現することができる人材の育成を目指します。また、留学生の受入れ、送出しを含めて海外の教育研究機関との交流を活発に行い、本研究科が国際日本学の国際的拠点となるよう研究活動の展開を図っていきます。

〔国際日本学専攻〕

国際日本学専攻では、ポップカルチャー研究、日本社会・産業システム研究、多文化共生・異文化間教育研究、日本語学・日本語教育学研究、英語教育学研究、文化・思想研究といった幅広い研究領域をカバーします。博士前期課程では、そうした幅広い視野と高度な専門的知識を有する人材を養成し、研究者に限らず国際的に活躍しうる社会人の養成も目指します。博士後期課程では、それぞれの研究分野の更なる深化を図り、国際日本学の発展に寄与しうる柔軟で堅固な基礎を持つ研究者を養成します。

明治大学大学院国際日本学研究科

「入学者受入」、「教育課程編成・実施」、「学位授与」方針

【入学者受入方針】

【博士前期課程】

国際日本学研究科博士前期課程の目的は、日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ってよく理解するとともに、異文化や多様な社会システムに対する理解力を持ち、さらに自らの意思を的確に表現できる、国際社会で広く活躍できる主体性を備えた実務者・教育者・研究者等を養成することです。そこで、次のような学生を積極的に受け入れます。

- (1) 国際日本学分野における研究を遂行するのに必要な知識と能力を身に付けることができ、かつそのための努力を惜しまない者。
- (2) 自分自身の問題意識との関係において、従来の学問体系を踏まえて、さらに学際性をもつ研究を行うことを目指す者。
- (3) すでに言語教育に携わっている者、また、公的機関、NPO、NGO、民間企業等の各種団体に属する者をはじめとする社会人で、自己の職業上の体験から、問題の本質を見極めたい、あるいは少しでも実際に役立てることのできる問題解決法を探りたいと希望しており、当研究科を修了した後は、その成果を自己の職業に生かすことを目指す者。
- (4) 自国の文化や社会システムと比較しつつ日本の文化や社会システムについて研究することを目指す留学生。

以上の求める学生像に基づき、学内選考入学試験、一般入学試験、外国人留学生入学試験、社会人特別入学試験を実施し、これらの資質や意欲を個別または総合的に判断するための入学者選抜を行います。

なお、事前に修得しておくべき知識等の内容・水準は、以下のとおり求めます。

- (1) 国際日本学に関連した研究推進に不可欠な知識と能力。
- (2) 既存の学問分野のみならず新たな研究分野を構築しようとする強い意欲をもつこと。
- (3) 日本文化を理解し、さまざまな言語や表現手法を用いて世界に発信・紹介できる能力。

【博士後期課程】

国際日本学研究科博士後期課程においては、日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ってよく理解するとともに、異文化や多様な社会システムに対する理解を持ち、さらに自らの意思を的確に表現することができる、国際社会で広く活躍できる主体性を備えた人材、とりわけ国際日本学の発展に寄与しうる柔軟で堅固な基礎を持つ研究者を養成することを目的としています。この目的に沿う次のような学生を積極的に受け入れます。

- (1) 国際的視野で物事を考えることができる資質や能力を備えた者。
- (2) 自分自身の問題意識との関係において、従来の学問体系を踏まえて、さらに学際性をもつ研究を専門的に行うことを目指す者。

- (3) 本研究科の研究分野に関連する学問分野、または学際的分野において、研究者として自立することができる優れた博士論文を完成させるのに足る十分な知的能力と計画性を有する者。

以上の求める学生像に基づき、留学生、社会人を区別せず、博士論文作成に必要な能力、資質及び計画性を保持しているかを判断するために、入学者選抜を行います。

なお、事前に修得しておくべき知識等の内容・水準は、以下のとおり求めます。

- (1) さまざまな言語や表現手法を用いて、研究内容を議論し、発表できる能力。
- (2) 自らの追及する研究テーマについて国際日本学との関連性を明確に位置づけ、客観的に理解できる能力。
- (3) 留学生においては、出身国と日本との交流を促進させる強い意欲があること。

【教育課程編成・実施方針】

【博士前期課程】

国際日本学研究科博士前期課程の教育理念・目標である、「日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ってよく理解するとともに、異文化や多様な社会システムに対する理解力をもち、さらに自らの意思を的確に表現できる、国際社会で広く活躍できる主体性を備えた実務者・教育者・研究者等の養成」を実現するために、以下に示す方針に基づきカリキュラムを編成します。

- (1) 人文科学と社会科学を相互浸透的に捉えて認識し、その認識に基づき的確に行動し得る能力を構築するために、本研究科の研究領域として、ポップカルチャー研究、日本社会・産業システム研究、多文化共生・異文化間教育研究、日本語学・日本語教育学研究、英語教育学研究、文化・思想研究の6つの研究領域を設置します。これら6つの研究領域の研究を概観し、それぞれの研究方法を理解するために、研究領域横断的に展開する必修科目等を設置し、自身の研究領域とは異なる領域への理解を深め、視野を広げ、自身の研究領域を相対化します。また、大学院生が主体となった研究発表会や修士学位論文の「中間報告会」を複数回実施し、様々な研究領域に属する教員や大学院生から助言を受け、ともに議論する機会を設けます。
- (2) 日本研究と国際研究を複合的に捉え、国際的な視野で物事を考え、表現することができる資質や能力を習得するため、海外の大学等と協定を締結し、訪問・招聘事業を行うと共に、交換留学生を積極的に受入れます。
- (3) 現実社会や様々な学術分野で生じている新たな課題を発見し、その課題解決方法を探る資質や能力を習得するため、学外機関や各界の実務者・教育者・研究者を招いて行う講義に加え、多様なフィールドワーク等により、理論と実践を組み合わせた研究を行います。
- (4) これらの方針を踏まえ、学生が主体性を持って課題を広く深く考察し、それについて独自の知見を提示することが可能となるように、修士学位論文作成に向けて個別的指導を行います。

【博士後期課程】

国際日本学研究科博士後期課程では、国際日本学の発展に寄与しうる柔軟で堅固な基礎を持つ研究者を養成するため、自らの関心にしたがって学際的・国際的に学ぶことができる環境を整えています。博士後期課程で学ぶ研究テーマは、より具体的で高度なものとなり、それに伴って、より広い視野と深い知識が必要となります。カリキュラム編成に関わる教育・研究の特色は以下のとおりです。

- (1) 人文科学と社会科学の諸分野を相互に関係付け、学際的に研究を展開できる資質や能力を向上させるために、本研究科の研究分野として、ポップカルチャー、社会・情報・国際関係、言語・国際交流、文化・思想の4つの研究分野を設置します。研究分野の区分なく相互に学び、学术交流を図るために、大学院生が主体となった研究発表会を実施し、自らの研究を高めることを目指します。また、博士学位論文の作成過程では、「中間報告会」を複数回実施し、様々な研究分野の教員や大学院生からの助言を受け、ともに議論を深める機会を設けます。さらに、学会発表や学術論文等の執筆の指導を通して、学术界での活動を支援します。
- (2) 国際的な視野を養い、世界に通用する学術的に高い水準の研究成果を発信することができる能力を習得するため、海外の大学等と協定を締結し、訪問・招聘事業、国際シンポジウム等の国際的学术交流の機会を設けると共に、博士学位を有する研究員を積極的に受入れ、大学院生との共同研究発表会を展開していきます。
- (3) 日本社会、国際社会や様々な学術分野で生じている新たな課題の深層を探究し、その課題解決に貢献する資質や能力を習得するため、国内外の研究教育機関との連携や、各界の専門家との協働等を通じ、研究成果を社会へ還元できるよう、理論と実践を組み合わせた研究を行います。
- (4) これらの方針を踏まえ、博士学位論文作成に向けて、研究に必要な知見を体系的に身に付け、独創的な研究成果を提示し、各研究分野の発展に寄与するように、研究指導グループの下、個別的指導を行います。

【学位授与方針】

【博士前期課程】

国際日本学研究科博士前期課程は、日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ってよく理解するとともに、異文化や多様な社会システムに対する理解力を持ち、さらに自らの意思を的確に表現できる、国際社会で広く活躍できる主体性を備えた実務者・教育者・研究者等を養成することを目指しています。

この目的を踏まえ、本研究科の定める修了要件を満たし、かつ、学業成績ならびに修士学位論文から、以下に示す資質や能力を備えたと認められる者に対して修士（国際日本学）の学位を授与します。

- (1) 人文科学と社会科学を相互浸透的に捉え、国際日本学として研究できる資質や能力。
- (2) 日本研究と国際研究を複合的に捉え、国際的視野で物事を考え、表現することができる資質や能力。
- (3) 現実社会や様々な学術分野で生じている新たな課題を発見し、その解決方法を探る資質や能力。
- (4) 課題を広く深く考察し、それについて独自の知見を提示する資質や能力。

【博士後期課程】

国際日本学研究科博士後期課程は、日本の文化及び社会システムを国際的な視点に立ってよく理解するとともに、異文化や多様な社会システムに対する理解をもち、さらに自らの意思を的確に表現することができる、国際社会で広く活躍できる主体性を備えた人材、とりわけ国際日本学の発展に寄与しうる柔軟で堅固な基礎を持つ研究者を養成することを目的としています。

この目的を踏まえ、本研究科の定める修了要件を満たし、学業成績及び博士学位論文審査に合格し、以下に示す資質や能力を備えたと認められる者に対し博士（国際日本学）の学位を授与します。

- (1) 人文科学と社会科学の諸分野を相互に関係付け、学際的に研究を展開できる資質や能力。
- (2) 国際的視野で物事を考え、国際的水準で表現することができる資質や能力。
- (3) 日本社会、国際社会や様々な学術分野で生じている新たな課題の深層を探究し、その課題解決に貢献する資質や能力。
- (4) 研究課題について本質を究明し、体系的な知見を持ち、独創的な成果を提示し、学術分野に貢献する資質や能力。

明治大学大学院国際日本学研究科 修士学位取得のためのガイドライン

【本研究科で授与する学位】

国際日本学専攻

修士（国際日本学）

Master of Global Japanese Studies

【修士学位請求の要件】

在学期間

本研究科博士前期課程（修士課程）に2年以上（見込を含む）在学し、所定の研究指導を受けていること。

単位要件

- (1) 本研究科博士前期課程（修士課程）の履修にあたっては、以下の要件を満たし、30単位以上を修得しなければならない。
 - ア 主要科目のうち、指導教員が担当する専修科目（演習）8単位を必修とする。
 - イ 特修科目の中から、国際日本学総合研究2単位及び指導教員が指定する講義2単位を含めて、12単位以上を修得しなければならない。
 - ウ 特定科目については、4単位を上限に修得することができる。
 - エ 他研究科（専門職学位課程を含む。）及び単位互換協定による他大学院において修得した単位は、15単位を限度として修得したものとみなすことができる。
 - オ 本学大学院に入学する前に他の大学院において修得した単位（科目等履修生制度を含む。）は、15単位を限度として修得したものとみなすことができる。
 - カ エ及びオで修得したものとみなすことのできる単位数は、合わせて20単位を限度とする。
 - キ 研究科間共通科目については、4単位を限度として修了に必要な単位数に含めることができる。
- (2) 上記に定める単位を修得し、その成績が平均「B」以上の者。

研究指導

以下に掲げる本研究科学位請求までのプロセスを経ている者とする。

【学位請求までのプロセス】

研究指導体制

すでに入学時に決定している指導教員が研究指導の責任を負う。指導教員から論文作成指導を受け、2年間の論文作成計画により修士論文を提出できるよう努力することが必要である。また、当該指導教員の求めに応じて他の教員も研究指導に適宜協力する。

1年次春学期

学期初めに指導教員の指導のもとに各自の履修・研究計画を立て、4月中旬に当該年度の「履修計画書」を、7月末に、入試の際に提出した「研究計画書」を今一度検討して「研究計画概要」を作成提出する。

1年次秋学期

学期初めに、副指導教員が選定される場合がある。副指導教員は、本研究科で授業科目を担当する教員から選定される。11月末に「論文作成計画書」を提出する。12月中旬までに「論文作成計画書」を基に、第1次中間報告を行い、修正の必要があれば、指導教員と面談の上、指導を受ける。

2年次春学期

学期初めに、指導教員の指導のもとに、各自の履修・研究計画を立て、当該年度の「履修計画書」を提出する。6月下旬までに「論文作成計画書」に基づいて作成した「論文概要」の第2次中間報告を行い、論文作成指導を受ける。

2年次秋学期

論文の題名・内容・構成等について指導及び確認を受ける。予備登録までに手直しし、論文提出の承認を得る。

【修士論文に求められる要件】

修士の学位論文は、広い視野に立った深い教養と専攻分野における研究能力、または高度の専門性を要する職業等に必要の高度の能力を示すと認められるものでなければならない。

以下を修士論文に求められる要件とする。

(1) 研究目的

- ・問題提示の明確さ
- ・先行研究の整理
- ・研究意義

(2) 論文内容

- ・データや資料の分析力
- ・論証の説得性
- ・課題設定と結論の整合性

(3) 形式的要件

- ・執筆要項の遵守（表記の的確さ）

(4) 論文としての構成とまとめ

【修士学位請求論文等の提出書類・提出期日】 ※詳細は「修士学位請求論文」等提出・作成要領参照

予備登録

- (1) 予備登録時期は論文提出年度の10月中旬とする。
- (2) 論文提出予定者は、必ず指導教員と相談のうえ、論文題名（仮題でも可）を登録すること。
- (3) 予備登録時に「論文作成・提出要領」の他、「修士学位請求書」及び論文用「扉」を各自でダウンロードすること。

論文提出

- (1) 論文提出時期は論文提出年度の1月初旬とする。
- (2) 詳細は予備登録時に配付する「作成・提出要領」にて確認すること。
- (3) Oh-o! Meiji グループへの提出を原則とする。

ただし、ファイルサイズ（30MB）の制限などによりOh-o! Meijiでの提出ができない場合は、別途研究科の定める方法により提出する。事前にファイルサイズを確認し、30MBを超える可能性がある場合は、提出期間前に提出方法について研究科に問い合わせること。

なお、論文提出受付は、指定提出日・指定時間内のみとする。提出締め切り時間経過後は、理由の如何を問わず受け付けられないので、十分注意すること。

提出書類等

- (1) 「修士学位請求書」(本学指定様式：各自でダウンロード)：1通
必要事項を記入し、指導教員の承認を得たうえで、スキャンデータを提出すること。
※この請求書に記載された論文題名を正とする。
なお、論文題名に副題がある場合は、ダッシュ(―)で最初と最後を括ること。
- (2) 「修士学位請求論文」(下記①～④により完成されたもの)
 - ①用紙：A4判(横書きまたは縦書き)
図表・資料もA4判で作成すること。
 - ②字数：40,000字程度(外国語で書く場合はそれに相当する分量)
※必ずページ番号を付すこと。
 - ③書式：研究科の定めによる。
※縦書きの場合は2段組にする等、読みやすいよう配慮すること。(論文要旨も同じ)
 - ④論文用「扉」(各自でダウンロード)
必要事項を記入のうえ、論文の表紙とすること。
- (3) 「修士学位請求論文要旨」
A4判、3,000字程度(外国語で書く場合はそれに相当する分量)で作成し、表紙には論文題名、所属研究科名、専攻名、研究領域名、氏名、学生番号を明記すること。

【学位審査の概要】

指導教員による承認

修士学位を請求しようとする者は、修士論文提出要件を満たし、指導教員から当該論文の内容・水準・形式について指導及び確認を受け、指導教員が修士学位請求に十分な水準であるとの判断をした場合に、論文を提出することができる。

研究科委員会での受理

研究科委員会は、学位請求論文に対して受理を決定し、主査1名及び副査2名以上(副査には他研究科・他大学等の研究者を選定することがある)の審査委員を選出し、審査委員会を設置する。

審査委員会による面接試問

- (1) 審査委員会は、当該学位請求論文を中心としてこれに関連ある科目について、試問の方法により審査を行う。審査終了後、審査委員会は研究科委員会に可否の提案とその理由を記した審査結果報告書を提出する。
- (2) 面接試問は論文提出年度の2月上旬に実施する。

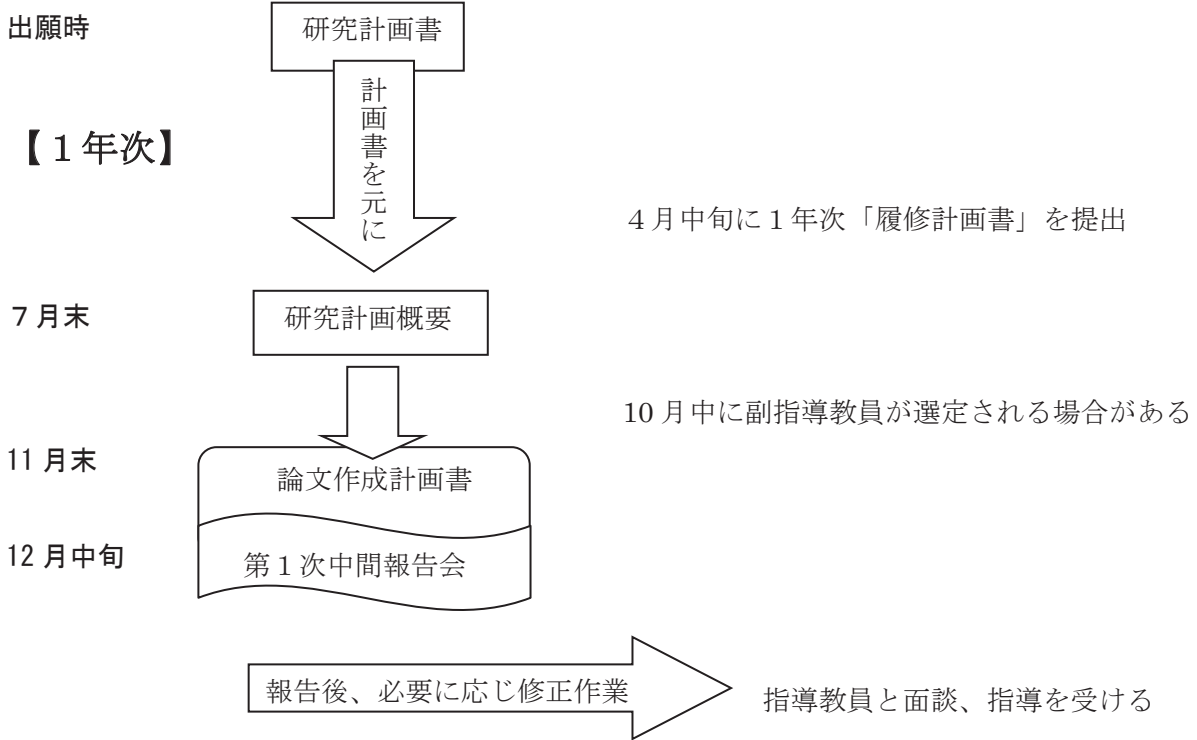
研究科委員会の合否判定

研究科委員会は審査委員会からの報告をもとに、審議のうえ合否を決定する。研究科委員会で合格と認められた者には、修士学位が授与される。

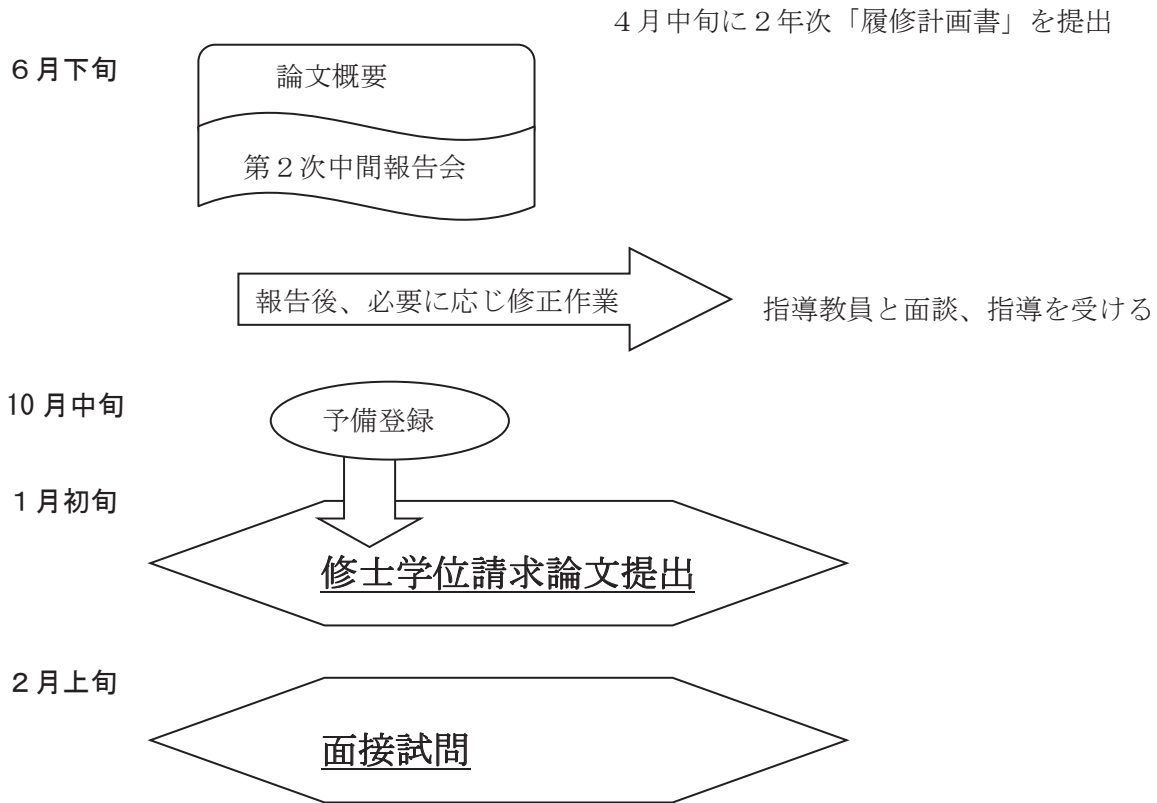
【合否判定後の論文の取扱いについて】

審査に合格した論文は、本学大学院で保管し、教育研究のため活用する。

国際日本学研究科博士前期課程（修士課程） 学位請求までのプロセス



【2年次】



明治大学大学院国際日本学研究所 博士学位取得のためのガイドライン

課程博士

【本研究科で授与する学位】

国際日本学専攻 博士（国際日本学） Doctor of Philosophy

【博士学位請求の要件】

在学期間

- (1) 本研究科博士後期課程に3年以上（見込を含む）在学し、所定の研究指導を受けていること。
- (2) 前在学時に本研究科博士後期課程に3年以上在学し、所定の研究指導を受けた後退学した者にあつては、前在学時の入学日から起算して8年以内に限り、研究科委員会の許可を得て再入学し、課程博士の学位を請求できるものとする。

単位要件

本研究科博士後期課程の履修にあつては、以下の要件を満たし、20単位以上を修得しなければならない。

- (1) 学位論文作成のため、指導教員による必要な研究指導を受けなければならない。
- (2) 指導教員が担当する研究論文指導Ⅰ～Ⅵを必修とする。
- (3) 選択必修科目のうちから、2単位以上を修得しなければならない。
- (4) 指導教員が必要と認めた場合には、博士前期課程の講義科目（特修科目）について、4単位を限度として、修了に必要な単位数に含めることができる。
- (5) 指導教員が必要と認めた場合には、他研究科（専門職学位課程を含む。）の授業科目及び研究科間共通科目を履修することができる。

研究業績

博士学位を請求するにあつては、以下の「博士学位請求に相当する研究業績」が認められなければならない。

「博士学位請求に相当する研究業績」

博士前期・後期課程在学中に、学外の査読付き学術誌、本研究科の『国際日本学研究論集』、本学社会科学研究所の『明治大学社会科学研究所紀要』、本学人文科学研究所の『明治大学人文科学研究所紀要』等の査読付き学内誌に掲載された学術論文3編以上（原則として、最低1編は単著論文）を有すること。

研究倫理教育の受講

本学が定める研究倫理教育を受講していること。

研究指導

以下に掲げる本研究科学位請求までのプロセスを経ている者とする。

【学位請求までのプロセス】

研究指導体制

入学時に決定している指導教員が3年間の論文作成計画により研究指導の責任を負うが、原則として、2年次の中間発表の段階までに、指導教員を中心とする研究指導グループによる複数指導体制を整える。

1年次

(1) 研究計画書の提出

4月中旬に、指導教員の指導のもとに、各自の履修計画を立て、当該年度の「履修計画書」を提出する。また、5月末に、指導教員の助言に基づき、博士後期課程における3年間の研究目標などをまとめた「研究計画書」を指導教員に提出する。

(2) 中間発表への準備

指導教員の指導を通じて、第1次中間発表に向けた準備を行う。なお、すでに優れた研究成果が得られている場合は、学会誌投稿・学会発表等を積極的に行う。

(3) 中間発表（第1回）

秋学期に、各自が進めている研究の第1次中間発表を行い、発表内容について、博士後期課程担当教員及び当該専門分野の専門家の評価と助言を受ける。その結果に基づいて、「研究計画書」の見直しを行う。

(4) 研究計画書の到達状況の確認

3月上旬に指導教員と面談し、1年次における研究成果に基づいて、年度当初に作成した「研究計画書」の到達状況を確認し、指導を受ける。また、1年間の成果を踏まえ、本研究科の『国際日本学研究論集』、本学社会科学研究所の『明治大学社会科学研究所紀要』、本学人文科学研究所の『明治大学人文科学研究所紀要』、レフリー制のある学会誌等への論文投稿や学会発表の準備を行う。

2年次

(1) 学位請求論文作成計画書の提出

4月中旬に、指導教員の指導のもとに、各自の履修計画を立て、当該年度の「履修計画書」を提出する。また、5月上旬に、指導教員の助言に基づき、博士論文のテーマ、論文の構成に関する構想、論文執筆に向けた作業計画等を記載した「学位請求論文作成計画書」を提出する。提出後、指導教員と面談のうえ、承認及び指導を受ける。

(2) 中間発表への準備

指導教員の指導を通じて、第2次中間発表に向けた準備を行う。

(3) 研究指導グループの決定

2年次の中間発表までに、指導教員を中心とする研究指導グループが決定する。決定次第、指導教員に加えて研究指導グループを構成する教員からの指導も受ける。

(4) 中間発表（第2回）

秋学期に、各自が進めている研究の第2次中間発表を行い、発表内容について、博士後期課程担当教員及び当該専門分野の専門家の評価と助言を受ける。その結果に基づいて、「学位請求論文作成計画書」の見直しを行う。

(5) 学会等での発表

中間発表の成果をもとに、本研究科の『国際日本学研究論集』、本学社会科学研究所の『明治大学社会科学研究所紀要』、本学人文科学研究所の『明治大学人文科学研究所紀要』、レフリー制のある学会誌等への論文投稿や学会発表を行う。

(6) 学位請求論文作成計画書の到達状況の確認

3月上旬に研究指導グループと面談し、2年次における研究成果に基づいて、年度当初に作成した「学位請求論文作成計画書」の到達状況を確認し、指導を受ける。

(7) 博士学位請求論文概要の提出準備

次年度に博士学位請求論文の提出を希望する場合は、研究指導グループと相談のうえ、「博士学位請求論文概要」の作成・提出準備を行う。

3年次（学位請求年度）

(1) 博士学位請求論文概要の提出と博士学位請求予定者予備登録

4月中旬に、指導教員の指導のもとに、各自の履修計画を立て、当該年度の「履修計画書」を提出する。

当該年度に学位を請求する場合は、指導教員の承認のもと、4月中の所定の期日までに「博士学位請求論文概要」を提出するとともに、博士学位請求予定者予備登録を行う。なお、予備登録を行わず、当該年度に学位請求論文を提出しない場合は、原則として2年次のプロセスに従って研究を進める。

(2) 学位請求論文の提出（予備審査）

研究指導グループにより論文提出資格を有すると判断された者は、所定の期日までに予備審査用の「博士学位請求論文」を提出する。提出を受けて、予備審査委員会が設置される。

予備審査委員会による「博士学位請求論文」の査読及び予備審査会での試問により、論文受理の可否について審査を受ける。

(3) 学位請求論文の提出（本審査）

学位請求論文の受理を承認された学生は、所定の期日までに本審査用の「博士学位請求論文」を提出する。提出を受けて、本審査委員会が設置される。

【博士論文に求められる要件】

博士の学位論文は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行い、またはその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を示すと認められるものであり、かつ、本研究科の博士論文として相応の質・量、内容・水準を備え、以下の点に留意したものでなければならない。

- (1) 論文の独創性
- (2) 研究テーマの学問的意義・適切性
- (3) 論文の体系性
- (4) 先行研究の調査
- (5) 理論的分析・実証的分析
- (6) 論旨・主張の統合性と一貫性
- (7) 形式的要件

【博士学位請求時の提出書類・提出期日等】

提出書類

- (1) 学位請求論文
表紙は、本学所定様式（各自でダウンロード）を使用すること。
- (2) 論文要旨（各自でダウンロード）
A 4判、邦文：4,000字程度、英文：1,000ワード程度
（邦文と英文でそれぞれ提出のこと）
- (3) 学位請求書（本学所定様式：各自でダウンロード）
指導教員の承認を得たうえでスキャンデータを提出すること。
論文題名は邦文には英文訳を、欧文には邦文訳を付すこと。
（欧文が英文以外の場合は英文訳も付すこと）
- (4) 履歴書（本学所定様式：各自でダウンロード）
暦年は西暦表記とすること。
- (5) 業績書（本学所定様式：各自でダウンロード）
暦年は西暦表記とすること。
- (6) 博士学位請求者推薦書
推薦者は指導教員及び研究指導グループを構成する教員とする。
- (7) 博士学位請求の要件を充足する研究業績（査読付き学術論文）
- (8) その他研究科が指定する提出書類

提出期日等

- (1) 提出期日
7月中旬（詳細は別途定める）
- (2) 提出先
Oh-o! Meiji グループへの提出を原則とする。
ただし、ファイルサイズ（30MB）の制限などにより Oh-o! Meiji での提出ができない場合は、別途研究科の定める方法により提出する。事前にファイルサイズを確認し、30MB を超える可能性がある場合は、提出期間前に提出方法について研究科に問い合わせること。
なお、論文提出受付は、指定提出日・指定時間内のみとする。提出締め切り時間経過後は、理由の如何を問わず受け付けられないので、十分注意すること。
- (3) 審査手数料：不要

【学位審査の概要】

学位請求予定者予備登録

博士学位の請求者は、「博士学位請求論文概要」の内容・形式についての指導を受け、研究指導グループと相談のうえ、指導教員の承認のもと「博士学位請求論文概要」を提出するとともに学位請求予定者予備登録を行う。

博士学位請求論文の提出

学位請求予定者予備登録を行った者は、博士学位請求の要件を満たし、研究指導グループから当該論文の内容・形式についての確認と指導を受け、学位請求に十分な水準であると判断された場合に、研究指導グループの推薦を得て「博士学位請求論文」を提出する。

執行部による形式要件の確認

研究科執行部は、提出された学位請求論文について申請資格と当該論文の形式要件の確認を行う。研究科執行部が提出資格と論文の形式要件を満たすと判断した場合、すみやかに研究科委員会へ当該論文の予備審査に係る付議を行う。

予備審査委員会による予備審査

研究科委員会は、研究科執行部より付議された学位請求論文に対して、「博士学位請求論文概要」「博士学位請求者推薦書」の確認により、当該論文の予備審査開始の可否を決定し、主査1名及び副査2名以上（副査には他研究科、他大学等の専門研究者を選出することがある。）の予備審査委員を選出する。

予備審査の期間は3ヵ月程度とする。予備審査委員会は当該論文の査読と学位授与要件の充足を確認し、予備審査会を実施するとともに、学位請求者に対して学位請求論文の加筆・修正を求めることができる。

予備審査報告と論文等の閲覧

予備審査委員会は、審査終了後、当該論文の受理の可否についての提案とその理由を記した「予備審査報告書」を研究科長に提出する。

研究科執行部は、予備審査結果の報告後から受理の可否を決定するまでの一定期間、当該学位請求論文と学位授与要件の充足を示す参考資料を研究科委員の閲覧に供する。

研究科委員会による受理審査

研究科委員会は、予備審査委員会から提出された「予備審査報告書」をもとに、当該学位請求論文の受理の可否を決定する。

本審査委員会による本審査

研究科委員会は、受理を決定した学位請求論文に対して、主査1名及び副査2名以上（副査には他研究科、他大学等の専門研究者を選出することがある。）の本審査委員を選出する。本審査委員には、原則として予備審査を担当した者を選出する。

本審査委員会は、所定の期日までに公開発表会及び面接試問を実施し、当該学位請求論文を中心としてこれに関連ある科目について、論文の内容が研究者・高度の職業人として自立できるための基礎を成しているかを審査する。審査終了後、当該論文の合否の提案とその理由を記した「審査報告書」を研究科委員会に提出する。

学内機関による審査

研究科委員会は、本審査委員会からの報告をもとに、審議のうえ投票により当該学位請求論文の合否を決定する。研究科委員会で合格と認められた者は、大学院委員会の承認を経て、博士学位が授与される。

【学位審査等に関わる教員の責務】

研究指導グループの役割

研究指導グループは、指導教員1名と、原則として本学の専任教員1名以上によって構成され、2年次の中間発表会までに決定し、研究分野を超えた複眼的な指導に努めるものとする。

予備審査委員会の構成と責務

予備審査委員会は、指導教員を主査とするほか、原則として当該論文に関連ある科目の担当教員2名以上の副査（審査のため必要がある場合は、研究科委員会の議を経て、講師または他の大学院もしくはは研究所等の教員等の協力を求めることがある）で構成し、厳正なる学位審査に努めるものとする。

本審査委員会の構成と責務

本審査委員会は、原則として予備審査を担当した委員によって、主査1名及び副査2名以上（審査のため必要がある場合は、研究科委員会の議を経て、講師または他の大学院もしくは研究所等の教員等の協力を求めることがある）で構成し、厳正なる学位審査に努めるものとする。

各教員の責務

各教員は、研究科委員会における審査において、当該学位論文を公正かつ客観的に評価し、当該学位の水準を保つよう努めるものとする。

【博士学位論文の公表】

審査要旨の公表

博士学位が授与された場合は、当該学位論文の内容の要旨及び審査結果の要旨をインターネットの利用により公表する。

学位論文の公表

博士学位論文は、本学学位規程第22条に準拠してこれを公表しなければならない。

明治大学学位規程 第22条

本大学において博士の学位を授与された者は、当該博士の学位を授与された日から1年以内に、明治大学審査学位論文と明記して、当該学位論文の全文を公表するものとする。ただし、当該博士の学位を授与される前に、既に公表したときは、この限りでない。

- 2 前項の規定にかかわらず、博士の学位を授与された者は、やむを得ない事由がある場合には、本大学の承認を受けて、当該学位論文の全文に代えて、その内容を要約したものを公表することができる。この場合において、本大学は、その論文の全文を、求めに応じ、閲覧に供するものとする。
- 3 前2項の規定による公表は、本大学の定めるところに従って、インターネットの利用により行うものとする。

※ 「やむを得ない事由がある場合」とは、客観的に見てやむを得ない特別な理由があると本大学が承認した場合をいう。

- 例 ① 博士論文が、立体形状による表現を含む等の理由により、インターネットの利用により公表することができない内容を含む場合
- ② 博士論文が、著作権保護、個人情報保護等の理由により、博士の学位を授与された日から1年を超えてインターネットの利用により公表することができない内容を含む場合
- ③ 出版刊行、多重公表を禁止する学術ジャーナルへの掲載、特許の申請等との関係で、インターネットの利用による博士論文の全文の公表により博士の学位を授与された者にとって明らかな不利益が、博士学位を授与された日から1年を超えて生じる場合

なお、これらの場合においても、やむを得ない事由が解消された際には、速やかに博士論文全文をインターネットで公開しなければならない。

※ 博士学位論文提出にあたり、学位請求者は博士学位論文をインターネットにより公表することについての著作権関係上の諸問題を解消しておかなければならない。

例 ○ 刊行物の場合、出版社の了解を得ておくこと。

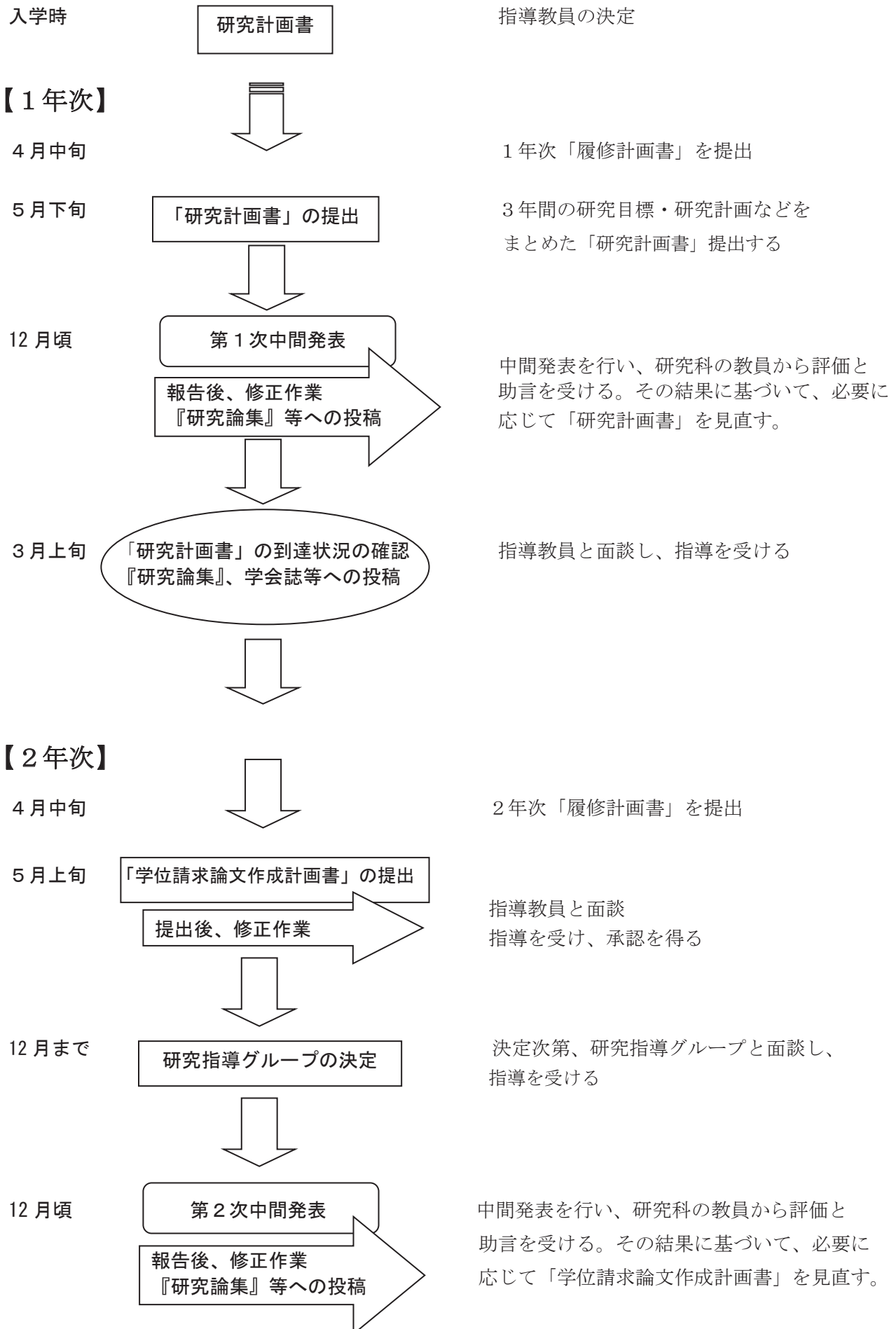
○ 引用の図版・写真がある場合、著作権者の同意を得ておくこと。

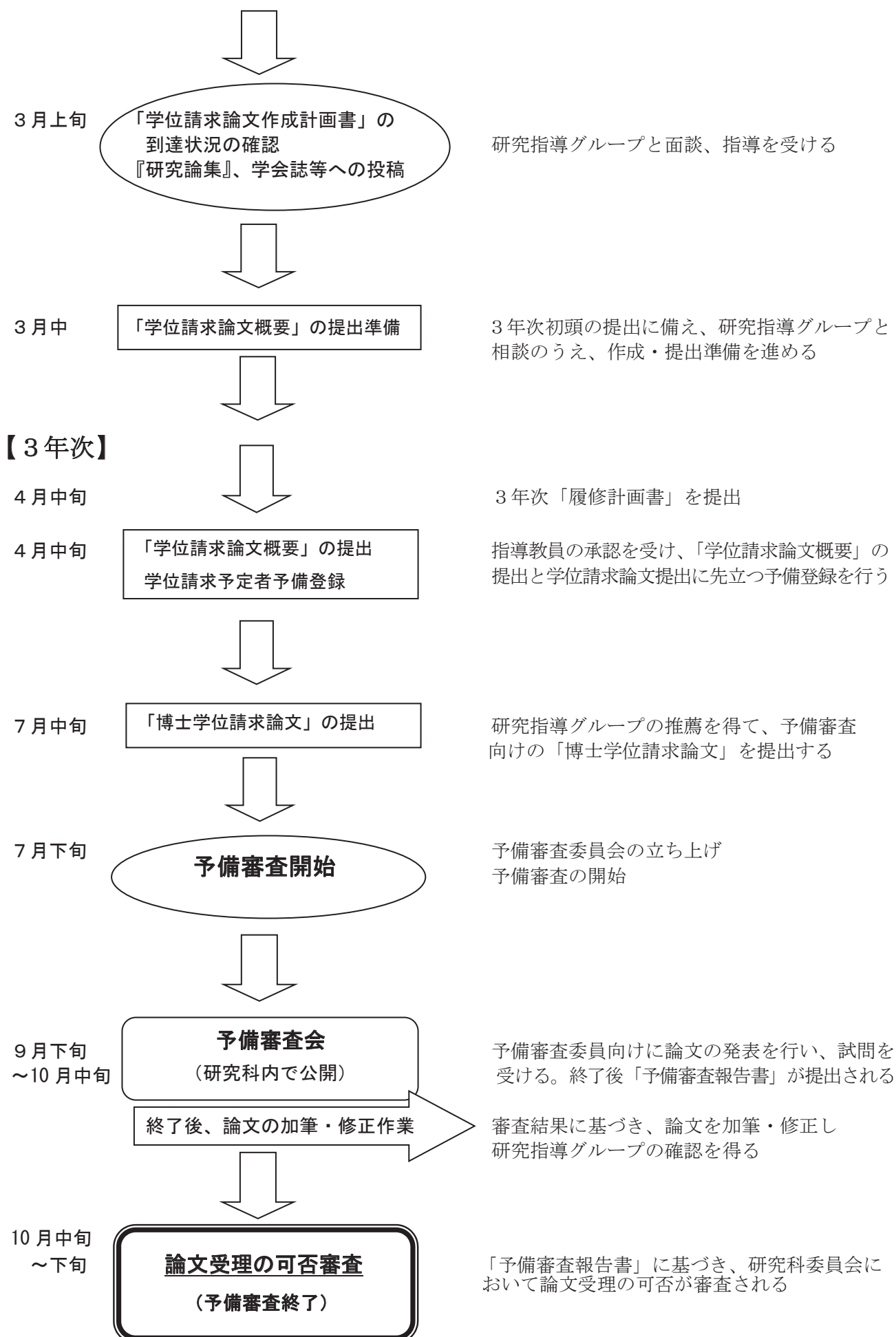
※ 博士学位論文が、特許などの申請に関連する場合、同申請手続きについては論文提出前に行っておかなければならない。なお、手続き方法等について不明な場合は、指導教員の指示を受けた後、各キャンパスの研究知財事務室に相談すること。

本学及び国立国会図書館における公表

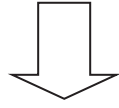
- ・ 博士学位論文の要旨及び全文は「明治大学学術成果リポジトリ」により公表される。
- ・ 明治大学学術成果リポジトリにより公表された博士学位論文の要旨及び全文のデータは、国立国会図書館において利用に供される。

国際日本学研究科博士後期課程 修了までのスケジュール





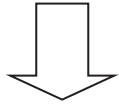
受理が認められた学生のみ



11月中旬

「博士学位請求論文」の提出

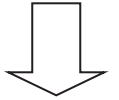
予備審査に合格し、論文の受理が認められた学生のみ、加筆・修正後の本審査向け「博士学位請求論文」を提出する



11月中旬
～下旬

本審査開始

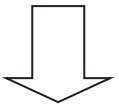
本審査委員会の立ち上げ
本審査の開始



1月上旬
～中旬

公開発表会及び面接試問

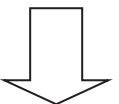
学内外向けに公開で発表会を行う
本審査委員による面接試問を受ける
終了後、「審査報告書」が提出される



2月初旬

論文の合否審査

「審査報告書」に基づき、研究科委員会において論文の合否が判定される

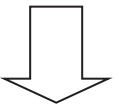


合格した学生のみ

2月中旬
～3月初旬

学位授与審査

大学院委員会にて審査



3月下旬

承認された学生のみ

博士学位授与

修了式、博士学位授与式

研究活動における不正行為への注意

明治大学大学院

昨今、大学を含む国内外の諸研究機関に対して、科学・学術研究を行う際の倫理基準の遵守を徹底し、こうした基準に反する不正行為（論文の「剽窃（盗用）」、資料・データの「改竄・捏造」等）への厳正なる対応、またそれらを未然に防ぐための方策の検討が求められています。大学院生諸君にも、こうした不正行為に対する忌避の意識を新たにする必要があります。

不正行為は、それを行った個人のみならず、研究機関としての本学の社会的信頼を著しく低下させるものであり、絶対に許されない行為です。本大学院は、不正行為を行った者に対して、大学院学則に則り、処分等の厳正なる措置をとります。大学院生諸君は、あらかじめ以下の点に十分に留意し、研究活動を適正に遂行するよう努めてください。

【論文の剽窃（盗用）は社会的に許されない犯罪行為】

剽窃（盗用）行為は、他人の研究業績を無断で借用することであり、研究活動の倫理に反するだけでなく、他人の著作権を侵害する犯罪行為ともなる社会的に許されない行為です。

〔剽窃（盗用）行為とみなされる事例〕

- 故意の有無を問わず、活字媒体（書籍・雑誌・新聞等）やWEBサイト等に掲載された他人の文章（無署名の文章も含む）や資料等を、出典を明記せずにそのまま使い、あるいは前後関係や語句を若干変更した程度で、論文（授業中のレポート等を含む）を作成すること。
- 当人が作成した論文の構成において、引用文献（出典を明示して引用した文献）を研究目的上適切と認められる範囲を逸脱して利用すること。

【データの改竄・捏造は研究活動そのものに対する背信行為】

データの改竄・捏造は、研究成果それ自体に対する信頼をなきものとするだけにとどまらず、研究者としての信用を失墜させ、自ら研究者としての道を断つ行為であり、科学・学術研究に対する信頼を低下させる重大な背信行為です。

〔データを改竄・捏造したとみなされる事例〕

- 調査収集・実験等により得られた資料・データ等を意図的に書き換えること。
- 事実でないこと、また実際にはなかったことを事実であるかのように作り上げること。

【不正行為に対する大学の処分】

以上のような不正行為が発覚した場合には、事実確認のうえ、当該学期または学年の単位の無効化は言うまでもなく、大学院学則第62条の規定に則り、「けん責」、「停学」または「退学」の懲戒処分を行います。

以上

履修登録について

1 履修登録について	<p>毎年度初めの所定の時期に、下記のとおりWEBにより履修科目の登録を行う必要があります。この登録を正しく行わなかった場合、受講した科目の単位が認定されないので、注意してください。修了要件・履修上の注意点は、該当ページで必ず確認してください。</p> <p>また、単位認定について相談したい場合は、必ず4月8日までに国際日本学部事務室へ申し出てください。この時期以外の単位認定は、取り扱いできません。</p>
2 「履修計画書」の提出	<p>各自の研究計画に基づいて研究指導教員と相談し、承認を得たうえで、WEBによる履修登録とは別途に「履修計画書」を提出してください。</p> <p>※なお、履修計画書の扱いについては、修了要件記載事項に従ってください。</p>
3 履修登録方法	<p>(1) 研究科ガイダンスで、履修計画書、大学院便覧、時間割表を配付します。シラバスそのものは、Oh-o! Meijiシステムより閲覧してください。</p> <p>(2) 博士前期課程はWEBにより、博士後期課程は専用の届出用紙により、所定の期間内に春学期・秋学期科目の履修登録を行ってください。</p> <p>(3) 履修登録期間後の科目の追加、変更、取消は認められません。 履修登録後、明治大学教務システムで個人別時間割表を公開するので、履修修正期間中に必ず確認してください。 この期間を過ぎると修正はできませんが、以下の場合に限り、相談に応じます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 登録科目の誤り ○ エラーメッセージ記載事項 ○ 修了要件不足 <p>(4) 秋学期に学習指導期間がある科目の履修修正（追加、取消）については、指導教員が承認した場合のみ、秋学期の履修修正期間内に限り修正を認めます。その場合、明確な修正理由と「履修計画書」への指導教員の許可印が必要になります。</p> <p>(5) 病気その他やむを得ない理由によって履修登録期間内に手続きができない場合は、事前に研究科担当者まで連絡してください。</p> <p>(6) 所定の単位を修得した者は、履修登録の必要はありません。</p> <p>(7) 他研究科履修をしようとする者は、大学院事務室等で該当する研究科のシラバス・時間割等を各自で確認してください。</p> <p>(8) 他大学院の授業科目を履修する場合は、他大学院の履修の手続に従ってください。</p>
4 個人別時間割表	<p>WEBによる履修登録後、4月下旬に明治大学教務システムで公開します。秋学期の履修修正を反映した時間割は、10月上旬に公開します。必ず確認してください。</p>
5 履修登録スケジュール	<p>履修計画書・時間割表の配付・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4月初旬</p> <p>WEB履修登録・履修計画書の提出・・・・・・・・・・・・・・・・ 4月中旬</p> <p>個人別時間割表の公開・登録内容の確認・・・・・・・・・・・・ 4月下旬</p> <p>履修登録不備の修正・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4月下旬</p> <p>秋学期履修科目修正願の提出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9月下旬</p>

履修登録スケジュール・登録完了までの流れ

国際日本学研究科ガイダンス **4月3日(金)**

●履修計画書・2026年度授業時間割表・履修の手引等の受領、各種事務説明

博士前期課程

博士後期課程

指導教員と履修計画について相談のうえ履修計画書を作成

履修計画書：大学院生は指導教員の指導の下に履修・研究計画を立てるものとする(大学院学則第24条第2項)ことから、修了までの履修科目について、指導教員と「履修計画書」を作成のうえ、別途提出すること。

履修計画書提出期間：4月17日(金)～20日(月)【厳守のこと】

博士後期課程履修計画書(1年生のみ)、及び履修届(1～3年生)を提出する

4月17日(金)～20日(月)

●Oh-ro! Meiji グループから「**博士後期課程履修計画書**」(もしくは「**履修届**」)をDLし、作成のうえ提出すること

※以下の登録手続は履修計画書に記載した科目についてシステムに登録する作業です。履修計画書の提出のみでは、履修登録を行ったことにはなりませんのでご注意ください。

WEB履修登録受付開始までに必要事項を確認

●履修計画を立てる

WEB履修非対応科目を登録する(該当者のみ)

4月17日(金)～20日(月)

●Oh-ro! Meiji グループから「**WEB履修非対応科目履修届**」をDLし、作成のうえ提出すること

WEB履修非対応科目(例)

- ・WEBで該当曜日時限に表示されなかった科目
- ・予め履修登録エラーとなる科目(配当年上位科目や重複科目)

明治大学教務システムを用いて履修登録を行う

4月17日(金)～20日(月)

注意事項：登録するのは当該年度に履修する科目のみ

(ただし、携帯電話・スマートフォンは不可)

※毎朝、8:00～9:30までは保守作業のためログインできません

個人別時間割表の公開 **4月21日(火)～23日(木)**

●明治大学教務システムの個人の時間割表から、履修科目が正しく登録できているか必ず確認すること。

履修エラー等がある場合

履修修正期間 **4月21日(火)～23日(木)**

●Oh-ro! Meiji グループから履修修正願をDLし、履修修正期間中に国際日本学部事務室へメールで申請すること

履修エラー等がなかった場合

履修計画書の記載科目が正しく登録できているかを必ず確認!

履修修正後の個人別時間割表の確認 5月上旬から

●明治大学教務システムの個人の時間割表から、履修登録にエラーがないかを確認する。

履修登録完了

科目ナンバリングについて

2020年度のシラバスから、本学の科目ナンバリング制度による科目ナンバーを、各授業科目シラバスに付番しています。この科目ナンバリング導入の目的、概要及び構造については以下のとおりです。

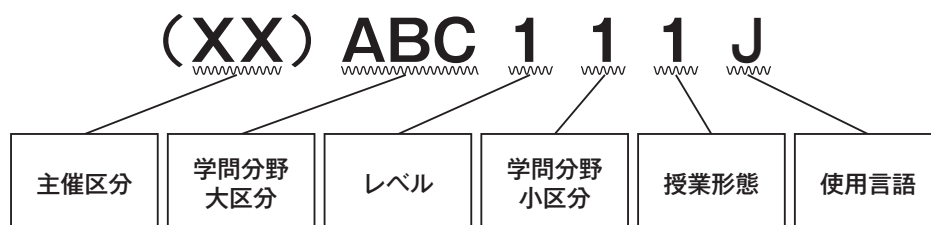
科目ナンバリング導入の目的

明治大学が開講する全ての授業科目を「学問分野」・「レベル」等で分類し、各々に科目ナンバーを付番することで、授業科目個々の学問的位置づけを示すことにより学生の計画的な学修への一助とすること、海外の大学との連携を容易とするためのツールとすること等を目的としています。

明治大学科目ナンバリングの概要及び構造

本大学が開講する全ての授業科目に、以下の科目ナンバリングコード定義に基づき、科目ナンバーを付番します。

<科目ナンバーの構造>



<各ナンバリングコードの定義>

- ① 主催区分コード
当該科目を開講する主催機関（学部・研究科・共通など）をアルファベット2文字で示しています。
- ② 学問分野 大区分コード
学問分野を本学が大きく区分した中で、当該科目が分類される学問分野をアルファベット3文字で示しています。
- ③ レベルコード
当該科目のレベルを数字1文字で示しています。
- ④ 学問分野小区分
本学が大区分として分類した学問分野の中で、さらに分類される分野を小区分として数字1文字で示しています。
- ⑤ 授業形態コード
当該授業の実施形態を数字1文字で示しています。
- ⑥ 使用言語コード
当該授業の教授における使用言語を英字1文字で示しています。

<各コードの詳細>

各ナンバリングコードの詳細及び他学部等の開講科目の科目ナンバーについては、本学ホームページ又は Oh-o! Meiji システムにて確認ください。

他大学大学院の聴講について

他大学大学院との学術的提携・交流を促進し、教育・研究の充実をはかることを目的として、「大学院特別聴講生制度（単位互換制度）」を設けています。

大学院特別聴講生制度とは、大学院学生が研究上の必要から、他の大学院（特別聴講生に関する協定を締結した大学院）に設置されている授業科目を履修して、その履修した単位を所属する大学院で修了に必要な単位として認定する制度のことです。

現在、国際日本学研究科博士前期課程では「首都大学院コンソーシアム」に加盟しています。首都大学院コンソーシアム加盟大学院研究科・専攻は、研究科ホームページで確認してください。

●単位互換協定等本学各研究科受付期間（本学から他大学へ） 2026年4月10日（金）～4月16日（木）
単位互換協定等他大学院生受付期間（他大学から本学へ） 2026年4月10日（金）～4月23日（木）

希望者は、国際日本学部事務室で事前に手続方法を確認してください。また、受入先大学の履修受付期間については各自で当該大学へ確認し、その指示に従ってください。

以 上

国際日本学研究科

博士前期課程

(授業科目・担当者及び履修方法)

修了要件・履修方法について（博士前期課程）

1 修了要件について

- (1) 本研究科の博士前期課程においては、2年以上在学し、30単位以上を基準点（平均「B」）以上で修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士学位請求論文の審査に合格した者には、修士の学位が授与されます。
- (2) 単位の修得にあたっては、次の要件を満たさなければなりません。
 - ア 主要科目のうち、指導教員が担当する専修科目（演習）8単位を必修とする。
 - イ 特修科目の中から、国際日本学総合研究2単位及び指導教員が指定する講義2単位を含めて、12単位以上を修得しなければならない。
 - ウ 特定科目については、4単位を上限に修得することができる。
 - エ 他研究科（専門職学位課程を含む。）及び単位互換協定による他大学院において修得した単位は、15単位を限度として修得したものとみなすことができる。
 - オ 本学大学院に入学する前に他の大学院において修得した単位（科目等履修生制度を含む。）は、15単位を限度として修得したものとみなすことができる。
 - カ エ及びオで修得したものとみなすことのできる単位数は、合わせて20単位を限度とする。
 - キ 研究科間共通科目については、4単位を限度として修了に必要な単位数に含めることができる。

2 履修にあたっての注意事項

指導教員の指導のもとに各自の履修・研究計画を立てなければなりません。

各自の研究計画にしたがって、4月の定められた期日までに当該年度の「履修計画書」（指導教員の承認が必要）を提出し、履修登録を行ってください。

3 修了見込証明書について

博士前期課程において、修了要件科目の単位を20単位以上修得している者にのみ、修了見込証明書を発行します。

授業科目及び担当者一覧（博士前期課程）

〔国際日本学専攻〕

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ
主要科目	視覚文化演習ⅠA	演2	1	専任教授	萩原 健	○		37
	視覚文化演習ⅠB	演2	1					37
	視覚文化演習ⅠC	演2	2				2026年度開講せず	38
	視覚文化演習ⅠD	演2	2				2026年度開講せず	38
	ポップカルチャー演習ⅠA	演2	1	専任教授	藤本 由香里	○		39
	ポップカルチャー演習ⅠB	演2	1					39
	ポップカルチャー演習ⅠC	演2	2					40
	ポップカルチャー演習ⅠD	演2	2					40
	ポップカルチャー演習ⅡA	演2	1	専任准教授	森川 嘉一郎	○		41
	ポップカルチャー演習ⅡB	演2	1					41
	ポップカルチャー演習ⅡC	演2	2					42
	ポップカルチャー演習ⅡD	演2	2					42
	ポップカルチャー演習ⅢA	演2	1	専任教授	宮本 大人	○		43
	ポップカルチャー演習ⅢB	演2	1					43
	ポップカルチャー演習ⅢC	演2	2					44
	ポップカルチャー演習ⅢD	演2	2					44
	ポップカルチャー演習ⅣA	演2	1				2026年度開講せず	
	ポップカルチャー演習ⅣB	演2	1				2026年度開講せず	
	ポップカルチャー演習ⅣC	演2	2				2026年度開講せず	
	ポップカルチャー演習ⅣD	演2	2				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム演習ⅠA	演2	1				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム演習ⅠB	演2	1				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム演習ⅠC	演2	2				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム演習ⅠD	演2	2				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム演習ⅡA	演2	1	専任准教授	田中 絵麻	○		2026年度開講せず
	日本社会・産業システム演習ⅡB	演2	1					2026年度開講せず
	日本社会・産業システム演習ⅡC	演2	2					2026年度開講せず
	日本社会・産業システム演習ⅡD	演2	2					2026年度開講せず
日本社会・産業システム演習ⅢA	演2	1				2026年度開講せず		
日本社会・産業システム演習ⅢB	演2	1				2026年度開講せず		
日本社会・産業システム演習ⅢC	演2	2				2026年度開講せず		
日本社会・産業システム演習ⅢD	演2	2				2026年度開講せず		
日本社会・産業システム演習ⅣA	演2	1	専任教授	呉 在 烜	○		2026年度開講せず	45
日本社会・産業システム演習ⅣB	演2	1					2026年度開講せず	45
日本社会・産業システム演習ⅣC	演2	2						46
日本社会・産業システム演習ⅣD	演2	2						46

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ
主要科目	多文化共生・異文化間教育演習ⅠA	演2	1	専任教授	平井達也	○	2026年度開講せず	47
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠB	演2	1				2026年度開講せず	47
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠC	演2	2					48
	多文化共生・異文化間教育演習ⅠD	演2	2					48
	多文化共生・異文化間教育演習ⅡA	演2	1	専任教授	山脇啓造	○	2026年度開講せず	49
	多文化共生・異文化間教育演習ⅡB	演2	1				2026年度開講せず	49
	多文化共生・異文化間教育演習ⅡC	演2	2				2026年度開講せず	50
	多文化共生・異文化間教育演習ⅡD	演2	2				2026年度開講せず	50
	多文化共生・異文化間教育演習ⅢA	演2	1	専任准教授	ピニロス マツダ, デレク K.	○		51
	多文化共生・異文化間教育演習ⅢB	演2	1					51
	多文化共生・異文化間教育演習ⅢC	演2	2				2026年度開講せず	52
	多文化共生・異文化間教育演習ⅢD	演2	2				2026年度開講せず	52
	多文化共生・異文化間教育演習ⅣA	演2	1	専任教授	岸磨貴子	○	2026年度開講せず	53
	多文化共生・異文化間教育演習ⅣB	演2	1				2026年度開講せず	53
	多文化共生・異文化間教育演習ⅣC	演2	2					54
	多文化共生・異文化間教育演習ⅣD	演2	2					54
	日本語学演習ⅠA	演2	1	専任教授	田中牧郎	○		55
	日本語学演習ⅠB	演2	1					55
	日本語学演習ⅠC	演2	2				2026年度開講せず	56
	日本語学演習ⅠD	演2	2				2026年度開講せず	56
	日本語教育学演習ⅠA	演2	1	専任教授	小森和子	○	2026年度開講せず	57
	日本語教育学演習ⅠB	演2	1				2026年度開講せず	57
	日本語教育学演習ⅠC	演2	2				2026年度開講せず	58
	日本語教育学演習ⅠD	演2	2				2026年度開講せず	58
	日本語教育学演習ⅡA	演2	1				2026年度開講せず	
	日本語教育学演習ⅡB	演2	1				2026年度開講せず	
	日本語教育学演習ⅡC	演2	2				2026年度開講せず	
	日本語教育学演習ⅡD	演2	2				2026年度開講せず	
	英語教育学演習ⅠA	演2	1	専任教授	廣森友人	○		59
	英語教育学演習ⅠB	演2	1					59
	英語教育学演習ⅠC 2025年度入学者は「英語教育学演習ⅣC」	演2	2					60
	英語教育学演習ⅠD 2025年度入学者は「英語教育学演習ⅣD」	演2	2					60
英語教育学演習ⅡA	演2	1	専任教授	大須賀直子	○	2026年度開講せず		
英語教育学演習ⅡB	演2	1				2026年度開講せず		
英語教育学演習ⅡC	演2	2				2026年度開講せず		
英語教育学演習ⅡD	演2	2				2026年度開講せず		
英語教育学演習ⅢA	演2	1	専任教授	大矢政徳	○	2026年度開講せず	61	
英語教育学演習ⅢB	演2	1				2026年度開講せず	61	
英語教育学演習ⅢC	演2	2				2026年度開講せず	62	
英語教育学演習ⅢD	演2	2				2026年度開講せず	62	

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ
主要科目	英語教育学演習ⅣA	演2	1				2026年度開講せず	
	英語教育学演習ⅣB	演2	1				2026年度開講せず	
	英語教育学演習ⅣC	演2	2				2026年度開講せず	
	英語教育学演習ⅣD	演2	2				2026年度開講せず	
	文化関係・文化変容演習ⅠA	演2	1	専任准教授	馬場 小百合	○	2026年度開講せず	63
	文化関係・文化変容演習ⅠB	演2	1				2026年度開講せず	63
	文化関係・文化変容演習ⅠC	演2	2				2026年度開講せず	64
	文化関係・文化変容演習ⅠD	演2	2				2026年度開講せず	64
	文化関係・文化変容演習ⅡA	演2	1	専任講師	張 佳能	○		65
	文化関係・文化変容演習ⅡB	演2	1					65
	文化関係・文化変容演習ⅡC	演2	2				2026年度開講せず	66
	文化関係・文化変容演習ⅡD	演2	2				2026年度開講せず	66
	文化関係・文化変容演習ⅢA	演2	1	専任教授	小谷 瑛輔	○	2026年度開講せず	67
	文化関係・文化変容演習ⅢB	演2	1				2026年度開講せず	67
	文化関係・文化変容演習ⅢC	演2	2				2026年度開講せず	68
	文化関係・文化変容演習ⅢD	演2	2				2026年度開講せず	68
	文化関係・文化変容演習ⅣA	演2	1	専任教授	鶴戸 聡	○	2026年度開講せず	69
	文化関係・文化変容演習ⅣB	演2	1				2026年度開講せず	69
	文化関係・文化変容演習ⅣC	演2	2				2026年度開講せず	70
	文化関係・文化変容演習ⅣD	演2	2				2026年度開講せず	70
日本思想演習ⅠA	演2	1	専任教授	美濃部 仁	○		71	
日本思想演習ⅠB	演2	1					71	
日本思想演習ⅠC	演2	2				2026年度開講せず	72	
日本思想演習ⅠD	演2	2				2026年度開講せず	72	
日本思想演習ⅡA	演2	1	専任教授	長尾 進	○	2026年度開講せず		
日本思想演習ⅡB	演2	1				2026年度開講せず		
日本思想演習ⅡC	演2	2				2026年度開講せず		
日本思想演習ⅡD	演2	2				2026年度開講せず		
特修科目	国際日本学総合研究	講2	1		オムニバス形式			73
	視覚文化研究(演劇)	講2	1・2	専任教授	萩原 健			73
	ポップカルチャー研究A	講2	1・2	専任教授	藤本 由香里			74
	ポップカルチャー研究B	講2	1・2	専任教授	藤本 由香里			74
	ポップカルチャー研究C	講2	1・2	専任准教授	森川 嘉一郎			75
	ポップカルチャー研究D	講2	1・2	専任教授	宮本 大人			75
	ポップカルチャー研究E	講2	1・2	兼任教授	福地 健太郎			76
	ポップカルチャー研究F	講2	1・2	兼任講師	氷川 竜介			76
	ポップカルチャー研究G	講2	1・2	兼任講師	氷川 竜介			77
	ポップカルチャー研究H	講2	1・2				2026年度開講せず	
ポップカルチャー研究I	講2	1・2	専任教授	宮本 大人			77	

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ
特 修 科 目	日本社会・産業システム研究 (国際メディア)	講2	1・2				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム研究 (情報産業)	講2	1・2	専任准教授	田中 絵麻		2026年度開講せず	78
	日本社会・産業システム研究 (国際知財)	講2	1・2	専任教授	小笠原 泰			78
	日本社会・産業システム研究 (クリエイティブ産業)	講2	1・2	兼任教授	宮下 芳明			79
	日本社会・産業システム研究 (広告)	講2	1・2	専任准教授	小野 雅琴			79
	日本社会・産業システム研究 (流通A)	講2	1・2				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム研究 (流通B)	講2	1・2				2026年度開講せず	
	日本社会・産業システム研究 (ものづくり経営A)	講2	1・2	専任教授	呉 在 烜			80
	日本社会・産業システム研究 (ものづくり経営B)	講2	1・2	専任教授	呉 在 烜			80
	多文化共生・異文化間教育研究 (異文化間教育学特論)	講2	1・2	兼任講師	渋谷 真樹			81
	多文化共生・異文化間教育研究 (多文化共生と地域社会)	講2	1・2				2026年度開講せず	
	多文化共生・異文化間教育研究 (留学生政策)	講2	1・2	兼任講師	近藤 祐一			81
	多文化共生・異文化間教育研究 (多文化共生特論)	講2	1・2	専任教授	山脇 啓造			82
	多文化共生・異文化間教育研究 (企業とダイバーシティ)	講2	1・2	兼任講師	井上 洋			82
	多文化共生・異文化間教育研究 (文化間移動と教育)	講2	1・2	専任准教授	ピニロス マツダ, デレク K.			83
	多文化共生・異文化間教育研究 (発達心理学)	講2	1・2	兼任講師	青山 征彦			83
	多文化共生・異文化間教育研究 (多文化共修)	講2	1・2	専任教授	平井 達也			84
	多文化共生・異文化間教育研究 (共生とメディア)	講2	1・2	専任教授	岸 磨貴子		隔年開講	84
	アクションリサーチ	講2	1・2	専任教授	岸 磨貴子		2026年度開講せず、 隔年開講	85
	日本語学研究 A	講2	1・2	専任教授	田中 牧郎		隔年開講	85
	日本語学研究 B	講2	1・2	専任教授	田中 牧郎		隔年開講	86
	日本語学研究 C	講2	1・2	兼任講師	朝日 祥之		隔年開講	86
	日本語学研究 D	講2	1・2	兼任講師	滝浦 真人			87
	日本語教育学研究 A	講2	1・2				2026年度開講せず	
	日本語教育学研究 B	講2	1・2	兼任講師	劉 志偉			87
	日本語教育学研究 C	講2	1・2	専任教授	小森 和子		隔年開講	88
	日本語教育学研究 D	講2	1・2	専任教授	小森 和子		2026年度開講せず、 隔年開講	88
	日本語教育学研究 E	講2	1・2	兼任講師	松下 達彦			89
	応用言語学研究(第2言語習得理論A)	講2	1・2	専任准教授	マクログリン, デイヴィッド アンセルム		英語による授業	89
	応用言語学研究(第2言語習得理論B)	講2	1・2	兼任講師	ロッセール, ヒュー ローデリック		英語による授業	90
	応用言語学研究(社会言語学)	講2	1・2	兼任講師	山本 綾			90
	応用言語学研究(語用論)	講2	1・2	専任教授	大須賀 直子			91
	応用言語学研究(Discourse Analysis)	講2	1・2	専任教授	ルーゲン, ブライアン デビット		英語による授業	91
応用言語学研究(コーパス言語学)	講2	1・2	専任教授	大矢 政徳		2026年度開講せず	92	
英語教育学研究(学習指導要領と指導法)	講2	1・2	特任講師	青山 拓実			92	
英語教育学研究(マテリアル・デベロップメント)	講2	1・2	兼任兼任講師	中谷 安男			93	
英語教育学研究(英語教授法)	講2	1・2	兼任兼任講師	中谷 安男			93	

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ
特修科目	英語教育学研究(カリキュラムデザイン)	講2	1・2	専任教授	ルーゲン, ブライアン デビット		2026年度開講せず、 隔年開講	94
	英語教育学研究(スピーチコミュニケーション)	講2	1・2	兼任講師	ロッセール, ヒュー ローデリック		英語による授業	94
	英語教育学研究(レトリック)	講2	1・2				2026年度開講せず	/
	英語教育学研究(心理言語学)	講2	1・2	専任教授	廣 森 友 人			95
	英語教育学研究 (インストラクショナル・コミュニケーション)	講2	1・2				2026年度開講せず	/
	リサーチメソッド研究(量的研究方法)	講2	1・2	兼任教授	中 村 和 幸			95
	リサーチメソッド研究(質的研究方法)	講2	1・2				2026年度開講せず	/
	視覚文化研究(演劇)	講2	1・2				2026年度開講せず	/
	文化関係・文化変容研究(日本近代文学A)	講2	1・2	専任教授	小 谷 瑛 輔		隔年開講	96
	文化関係・文化変容研究(日本近代文学B)	講2	1・2	専任教授	小 谷 瑛 輔		2026年度開講せず、 隔年開講	96
	文化関係・文化変容研究(日本近代文学C)	講2	1・2	兼任講師	高 橋 孝 次			97
	文化関係・文化変容研究(日本近代文学D)	講2	1・2	兼任講師	松 本 和 也			97
	文化関係・文化変容研究(フランス語圏A)	講2	1・2	専任教授	鵜 戸 聡		2026年度開講せず	98
	文化関係・文化変容研究(フランス語圏B)	講2	1・2	専任教授	鵜 戸 聡		2026年度開講せず	98
	文化関係・文化変容研究(映画)	講2	1・2				2026年度開講せず	/
	文化関係・文化変容研究(近代化と開発)	講2	1・2				2026年度開講せず	/
	文化関係・文化変容研究(記号と環境A)	講2	1・2	兼任講師	原 田 義 也			99
	文化関係・文化変容研究(記号と環境B)	講2	1・2	兼任講師	原 田 義 也			99
	文化関係・文化変容研究 (カルチュラル・スタディーズA)	講2	1・2	専任講師	張 佳 能			100
	文化関係・文化変容研究 (カルチュラル・スタディーズB)	講2	1・2	専任講師	張 佳 能			100
文化関係・文化変容研究 (日本古典文学)	講2	1・2	専任准教授	馬 場 小百合			101	
日本思想研究 A	講2	1・2	専任教授	長 尾 進			101	
日本思想研究 B	講2	1・2	専任教授	長 尾 進			102	
日本思想研究 C	講2	1・2	専任教授	美濃部 仁		隔年開講	102	
日本思想研究 D	講2	1・2	専任教授	美濃部 仁		2026年度開講せず、 隔年開講	103	
日本思想研究 E	講2	1・2	兼任講師	松 本 直 樹		2026年度開講せず	103	
日本思想研究 F	講2	1・2				2026年度開講せず	/	
特定科目	国際日本学特別指定講義 I	講2	1・2					/
	国際日本学特別指定講義 II	講2	1・2					/

主要科目

科目ナンバー：(GJ) ART512J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	視覚文化演習 I A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	萩原 健	

授業の概要・到達目標

ダン・フリードマン(茂呂雄二訳)『パフォーマンス・アクティヴィズム：先駆者たちと今日のパイオニアたち』(新曜社, 2025)を講読します。近年関心の高まっている〈アートベース・リサーチ (Arts-Based Research, ABR)〉との連関についても考えます。

実社会に実効を及ぼそうとするパフォーマンスについての研究を手がかりに、履修者各自で進めていく研究について考えることが授業の主眼です。各自の研究のアウトラインを把握することが、履修者の到達目標となります。

授業内容

(2026年1月現在の予定)

- 第1回：第1章 パフォーマンス・アクティヴィズムの紹介
- 第2回：第2章 儀礼、演劇、アクティヴィズム
- 第3回：第3章 アジテーション・プロパガンダ(アジプロ)
- 第4回：第4章 インプロヴィゼーション
- 第5回：第5章 サイコドラマとソシオドラマ
- 第6回：第6章 ハブニング、ビーイン、フラッシュモブ
- 第7回：第7章 パフォーマンス・アート
- 第8回：第8章 アヴァンギャルド演劇
- 第9回：第9章 パフォーマンス・ビデオと60年代
- 第10回：第10章 教育すること
- 第11回：第11章 政治化
- 第12回：第12章 橋を架ける実践
- 第13回：第13章 コミュニティの会話の創造
- 第14回：第14章 ト라우マの癒やし

履修上の注意

特にありません。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回の前に、当日扱う分野に関する先行研究について調べておいていただければ幸いです。

教科書

ダン・フリードマン(茂呂雄二訳)『パフォーマンス・アクティヴィズム：先駆者たちと今日のパイオニアたち』(新曜社, 2025)

参考書

授業内で適宜紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

平常点50%(各回の結び、授業内容を要約して提出するコメントシート)、学期末レポート50%

その他

特にありません。

科目ナンバー：(GJ) ART512J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	視覚文化演習 I B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	萩原 健	

授業の概要・到達目標

前学期に引き続き、ダン・フリードマン(茂呂雄二訳)『パフォーマンス・アクティヴィズム：先駆者たちと今日のパイオニアたち』(新曜社, 2025)を講読します。近年関心の高まっている〈アートベース・リサーチ (Arts-Based Research, ABR)〉との連関についても考えます。学期の後ろ2/3では履修者各自の研究内容を具体化する作業に入ります。

実社会に実効を及ぼそうとするパフォーマンスについての研究を手がかりに、履修者各自で進めていく研究について考えることが授業の主眼です。修士論文を念頭に、各自のリサーチ・クエスションと研究内容を明らかにすることが、履修者の到達目標となります。

授業内容

(2026年1月現在の予定)

- 第1回：第15章 創造性の再開
- 第2回：第16章 コミュニティづくり
- 第3回：第17章 生き方としてのパフォーマンス
- 第4回：第18章 パフォーマンスとしてのコミュニティの組織化
- 第5回：第19章 存在論、コミュニティ、持続可能性
- 第6回：修士論文執筆作業準備：先行研究調査とテーマ決定
- 第7回：同上
- 第8回：同上
- 第9回：同上
- 第10回：修士論文執筆作業準備：参考文献リスト作成
- 第11回：同上
- 第12回：同上
- 第13回：同上
- 第14回：同上

履修上の注意

特にありません。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回の前に、当日扱う分野に関する先行研究について調べておいていただければ幸いです。

教科書

ダン・フリードマン(茂呂雄二訳)『パフォーマンス・アクティヴィズム：先駆者たちと今日のパイオニアたち』(新曜社, 2025)

参考書

授業内で適宜紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

平常点50%(各回の結び、授業内容を要約して提出するコメントシート)、学期末レポート50%

その他

特にありません。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) ART612J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	視覚文化演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	萩原 健	

授業の概要・到達目標

履修者各自、関心を寄せるテーマに即して選定した先行研究から、自身の研究に直接関わ(りう)る箇所を取り上げて論じ、修士論文の結論とな(りう)る主張について考えていただきます。複数回の発表、および発表を受けて行われる、参加者間での意見交換を活動の柱とします。

次学期の結びに提出する修士論文の核となる主張を定めることを、授業の到達目標とします。

授業内容

- 第1回：導入(1Bのレビュー)、発表ローテーション決定
- 第2回：発表および意見交換
- 第3回：発表および意見交換
- 第4回：発表および意見交換
- 第5回：発表および意見交換
- 第6回：発表および意見交換
- 第7回：発表および意見交換
- 第8回：発表および意見交換
- 第9回：発表および意見交換
- 第10回：発表および意見交換
- 第11回：発表および意見交換
- 第12回：発表および意見交換
- 第13回：発表および意見交換
- 第14回：履修者各自の研究に関する総括および意見交換

履修上の注意

特にありません。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当回に向けての入念な準備、および当日の意見交換への積極的な参加を求めます。

教科書

指定しません。

参考書

「授業の概要・到達目標」参照。参考書については、履修者それぞれの関心によります。各自の研究テーマが具体化するにしたがって、研究に資すると判断されるものを指示します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

発表30%、意見交換への参加30%、学期末レポート40%

その他

科目ナンバー：(GJ) ART612J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	視覚文化演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	萩原 健	

授業の概要・到達目標

ICで行った活動をもとに、履修者各自、それぞれの研究を修士論文へと発展させていただきます。論文の具体的な構成を考えると同時に、ICで取り上げた、先行研究の所定の箇所を、これから書かれるべき自身の論文の特定の箇所へと配置し、これを手掛かりにして論文執筆を進めていただきます。複数回の発表、および発表を受けて行われる、参加者間での意見交換を活動の柱とします。

修士論文の重要な基盤となる上記の活動を十全に行うことを、授業の到達目標とします。

授業内容

- 第1回：導入(ICのレビュー)、発表ローテーション決定
- 第2回：発表および意見交換
- 第3回：発表および意見交換
- 第4回：発表および意見交換
- 第5回：発表および意見交換
- 第6回：発表および意見交換
- 第7回：発表および意見交換
- 第8回：発表および意見交換
- 第9回：発表および意見交換
- 第10回：発表および意見交換
- 第11回：発表および意見交換
- 第12回：発表および意見交換
- 第13回：発表および意見交換
- 第14回：履修者各自の研究に関する総括および意見交換

履修上の注意

特にありません。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表担当回に向けての入念な準備、および当日の意見交換への積極的な参加を求めます。

教科書

指定しません。

参考書

「授業の概要・到達目標」参照。参考書については、履修者それぞれの関心によります。各自の研究テーマが具体化するにしたがって、研究に資すると判断されるものを指示します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

発表50%、意見交換への参加50%

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POP512J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅠA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

修論を書くための問題設定、方法論等の問題点を検討し、練り上げていくための指導をするとともに、各学生の研究の方向、関心を考慮しながら、マンガを中心としたポップカルチャーについての基礎文献を読んでいきます。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：オリエンテーション講義(1)
- 第3回：オリエンテーション講義(2)
- 第4回：修論の問題設定と方法論の検討(1)
- 第5回：修論の問題設定と方法論の検討(2)
- 第6回：修論の問題設定と方法論の検討(3)
- 第7回：基礎文献講読(1)
- 第8回：基礎文献講読(2)
- 第9回：基礎文献講読(3)
- 第10回：基礎文献講読(4)
- 第11回：学生による研究発表 先行研究調査(1)
- 第12回：学生による研究発表 先行研究調査(2)
- 第13回：学生による研究発表 先行研究調査(3)
- 第14回：まとめ討議

履修上の注意

迷走せずに修論を仕上げていくための力を付けるためには、まず、自分の問題設定や方法論を見直し、甘いところを正し、鍛え上げていくことが必要です。最初に、論文とは何か、何が必要とされるのかをしっかりと押さえ、自分の問題意識の核心、それを明らかにする方法論を絞り込んでいきます。

そのためにはまず先行研究にあたること。事前に、自分の問題設定と、それを明らかにするための方法論を、自分なりに絞り込んできてください。また、言うまでもないことですが、『論文の書き方』本はたくさん出ていますから、基礎を押さえること。自分が問題とする分野の「先行研究リスト」を作るところから始めましょう。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に、自分の問題設定と、それを明らかにするための方法論を、自分なりに絞り込んできてください。

また、『論文の書き方』本はたくさん出ていますから、最低でも1冊は熟読し、自分の研究計画を再検討してみてください。

教科書

指導する学生の研究テーマに応じて、その都度指定します。

参考書

指導する学生の研究テーマに応じて、その都度指定します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

問題設定の的確さ、先行研究の選択のしかた、読み込みの的確さ、他の学生とのディスカッション、意見交換の適切さ、によって判断されます。自分の研究実績と発表70%、他学生の研究への貢献度30%。

その他

あとで迷わなくてすむよう、最初に的確な羅針盤を自分の中に持ちましょう。

科目ナンバー：(GJ) POP512J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅠB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

前学期で基本的な方向を固めた上で、調査を進めつつ、より進んだ先行研究を読み込んでいくとともに、必要な基礎文献を講読しつつ、自分の選んだ問題設定を明らかにするための基礎的な力をつけていきます。

この学期が終わる頃には、修論完成までのスケジュールと自分の中の地図が明確に出来上がっていることを目指します。

授業内容

- 第1回：休み中の研究報告とスケジューリング
- 第2回：修論の現状報告と問題点の検討(1)
- 第3回：修論の現状報告と問題点の検討(2)
- 第4回：修論の現状報告と問題点の検討(3)
- 第5回：修論の現状報告と問題点の検討(4)
- 第6回：基礎文献講読(1)
- 第7回：基礎文献講読(2)
- 第8回：基礎文献講読(3)
- 第9回：基礎文献講読(4)
- 第10回：学生による研究発表 課題報告(1)
- 第11回：学生による研究発表 課題報告(2)
- 第12回：学生による研究発表 課題報告(3)
- 第13回：学生による研究発表 課題報告(4)
- 第14回：残った問題の検討・まとめ

履修上の注意

今学期は、今の時点での研究の現状を報告してもらい、見えてきた問題点について検討します。その上で、各人についてそれぞれ、研究して明らかにすべき課題を明らかにし、後半では、それぞれの課題について報告してもらいます。

ここまでで、それぞれの研究の全体像とそこに至る道のりが具体的に見えてくるはずですが。

準備学習（予習・復習等）の内容

自分が研究しようとしているテーマと方法、現在迷っている点、研究を進めていく上でここが難所だと予測される点を、きちんと他人に伝えられるようにしてください。研究の見通しと乗り越えるべき問題を明確にすること。

教科書

学生の研究テーマと進捗状況に応じて、適宜指定します。

参考書

学生の研究テーマと進捗状況に応じて、適宜指定します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

各人の発表の内容、課題への取り組み70%、討議への参加の積極性、他学生の研究への貢献度30%を基本として総合的に評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POP612J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

今学期は、各人の研究をより進めるとともに、狭い範囲でない、より総合的な問題まで視野を広げ、研究の視点を深くする訓練をしていきます。研究に取り組む基礎体力を十分なところまで高めます。

授業内容

- 第1回：休み中の研究報告とスケジューリング
- 第2回：修論の現状報告とさらなる課題の検討(1)
- 第3回：修論の現状報告とさらなる課題の検討(2)
- 第4回：修論の現状報告とさらなる課題の検討(3)
- 第5回：修論の現状報告とさらなる課題の検討(4)
- 第6回：高度基礎文献講読(1)
- 第7回：高度基礎文献講読(2)
- 第8回：高度基礎文献講読(3)
- 第9回：高度基礎文献講読(4)
- 第10回：学生による研究発表：別視点の気付き(1)
- 第11回：学生による研究発表：別視点の気付き(2)
- 第12回：学生による研究発表：別視点の気付き(3)
- 第13回：学生による研究発表：別視点の気付き(4)
- 第14回：残った問題の検討・まとめ

履修上の注意

博士前期課程も2年目に入り、自分の研究の基盤を固めるとともに、より視野の広さを持った文献の講読が必須になります。研究をより進めるためのヒントは、直接関係のありそうな分野だけでなく、隣接領域や、思いがけないところに埋まっています。可能な限りアンテナを立てておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

もう一度、自分の研究を少し離れたところから見直し、研究の具体的な方法や目的だけでなく、自分の研究をより広い問題意識の中に位置づけなおし、研究の意義を問い直すことを意識的にやってみてください。

教科書

学生の研究の方向や進捗状況によって、その都度指定します。

参考書

学生の研究の方向や進捗状況によって、その都度指定します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

各人の発表の内容、課題への取り組み80%、討議への参加の積極性、他学生の研究への貢献度20%を基本として総合的に評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP612J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

いよいよ修論をまとめる時期に入ってきます。固まってきた研究を確実にし、よりブラッシュアップしていくとともに、残った問題点をクリアにしていきます。また、研究の成果を他人に確実に伝えるために、論文の記述方法、プレゼンテーションの方法についても改善できるところは最大限改善していきます。

授業内容

- 第1回：休み中の研究報告とスケジューリング
- 第2回：学生による現時点での修論発表(1)
- 第3回：学生による現時点での修論発表(2)
- 第4回：学生による現時点での修論発表(3)
- 第5回：学生による現時点での修論発表(4)
- 第6回：修論の課題のクリア(1)
- 第7回：修論の課題のクリア(2)
- 第8回：修論の課題のクリア(3)
- 第9回：修論の課題のクリア(4)
- 第10回：修論発表のブラッシュアップ(1)
- 第11回：修論発表のブラッシュアップ(2)
- 第12回：修論発表のブラッシュアップ(3)
- 第13回：修論発表のブラッシュアップ(4)
- 第14回：残った問題の検討・まとめ討議

履修上の注意

最後に気を抜かないように、全力でラストスパートを。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究そのものも大事ですが、確実に伝わるような見せ方も大事です。授業時間外でも、発表を誰かに聞いてもらったり、論文を読んでわかりにくい表現を指摘してもらったりしましょう。とくに留学生は必ずネイティブにチェック・訂正してもらって、日本語のブラッシュアップをしておくこと。

教科書

特に指定しません。

参考書

特に指定しません。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

各人の発表の内容、課題への取り組み80%、討議への参加の積極性、他学生の研究への貢献度20%を基本として総合的に評価する。

その他

特になし。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POP512J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅡA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー演習ⅡA～Dでは、マンガ・アニメ・ゲーム・おたく文化および関連する諸文化について、表現、産業、公的にも活用される文化資源、コミュニティの形成基盤などの諸々の側面や、デザインや美術、現代都市への影響などのテーマを扱う。英語による発表や論文も可とする。演習ⅡAでは、発表とディスカッションを繰り返しながら、各々の関心に沿った研究テーマの企画立案と、調査法の検討を中心に行い、予備調査を通してその実施可能性の確認にいたることを目標とする。学期末にはそれらの成果を製本された状態にまとめる。また、マンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：マンガ・アニメ・ゲーム・おたく文化の諸相と研究テーマ
 第2回：研究テーマの企画立案：既存研究の報告(1)
 第3回：研究テーマの企画立案：既存研究の報告(2)
 第4回：研究テーマの企画立案：調査法の検討(1)
 第5回：研究テーマの企画立案：調査法の検討(2)
 第6回：研究テーマの企画立案：調査法の検討(3)
 第7回：予備調査の経過報告と討論(1)
 第8回：予備調査の経過報告と討論(2)
 第9回：予備調査の経過報告と討論(3)
 第10回：研究計画の発表に向けた検討(1)
 第11回：研究計画の発表に向けた検討(2)
 第12回：期末提出に向けた構成の検討
 第13回：期末提出に向けたレイアウトの検討
 第14回：本調査に向けた仮説と調査法の検討

履修上の注意

期末には各自で一学期分の成果を一冊の小冊子にまとめて提出する。このため、印刷・製本に2,000円程度の出費を見込むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。研究のテーマや方法が定まるまでは、複数のテーマを併行して進める。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。研究成果は、その内容や意義を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP512J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅡB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

演習ⅡAが研究テーマの設定とそのため予備調査に力点を置いたのに対し、演習ⅡBでは、フィールドワークやインタビューなどの調査の遂行に重心を移す。学期末にはそれらの成果を製本された状態にまとめる。就職を希望する業種によっては、就職活動のポートフォリオの一部となるように作成してもよい。適宜、受講者の関心や傾向に応じ、展覧会や見本市、街を視察する学外演習を実施する。また、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：研究テーマの再検討：仮説の検討と討論
 第2回：研究テーマの再検討：最新の既存研究の報告
 第3回：調査の経過報告と討論(1)
 第4回：調査の経過報告と討論(2)
 第5回：調査の経過報告と討論(3)
 第6回：調査の経過報告と討論(4)
 第7回：調査の経過報告と討論(5)
 第8回：調査の経過報告と討論(6)
 第9回：中間発表に向けた検討(1)
 第10回：中間発表に向けた検討(2)
 第11回：調査の経過報告と討論(7)
 第12回：期末提出に向けた構成の検討
 第13回：期末提出に向けたレイアウトの検討
 第14回：研究計画の再検討

履修上の注意

期末には各自で一学期分の成果を一冊の小冊子にまとめて提出する。このため、印刷・製本に2,000円程度の出費を見込むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。研究成果は、その内容や意義を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POP612J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅡC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授	森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー演習ⅡC・Dでは、演習ⅡA・Bでまとめた成果と経験を下敷きしながら、研究計画を再検討し、遂行を進め、学外場で発表できる水準の修士論文の作成に焦点を合わせる。

演習ⅡCでは、逐次成果報告を行いながら、一次資料の追加採取を進め、演習ⅡD開始時には修士論文の草稿が完成にいたるよう、準備を進める。学期末にはそれらの成果を製本された状態にまとめる。また、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：研究計画の再検討：仮説の再検討と討論
- 第2回：研究計画の再検討：最新の既存研究の報告
- 第3回：調査の経過報告と討論(1)
- 第4回：調査の経過報告と討論(2)
- 第5回：調査の経過報告と討論(3)
- 第6回：調査の経過報告と討論(4)
- 第7回：調査の経過報告と討論(5)
- 第8回：調査の経過報告と討論(6)
- 第9回：調査の経過報告と討論(7)
- 第10回：中間発表に向けた検討(1)
- 第11回：中間発表に向けた検討(2)
- 第12回：期末提出に向けた構成の検討
- 第13回：期末提出に向けたレイアウトの検討
- 第14回：研究計画の再検討

履修上の注意

期末には各自で一学期分の成果を一冊の小冊子にまとめて提出する。このため、印刷・製本に2,000円程度の出費を見込むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。研究成果は、その内容や意義を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP612J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅡD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授	森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

演習ⅡA～Cの成果をもとに、初回までに書き上げた修士論文の草稿の加筆修正や推敲を進める。必要に応じて追加的な取材や調査を行い、12月に入る前に修士論文として仕上げる。また、引き続きマンガ・アニメ・ゲームの重要作品を紹介・鑑賞する機会を設ける。

授業内容

- 第1回：修士論文の草稿の発表と討論
- 第2回：研究計画の再検討：論文の構成の再検討と討論
- 第3回：研究計画の再検討：最新の既存研究の報告
- 第4回：推敲・追加調査の経過報告と討論(1)
- 第5回：推敲・追加調査の経過報告と討論(2)
- 第6回：推敲・追加調査の経過報告と討論(3)
- 第7回：推敲・追加調査の経過報告と討論(4)
- 第8回：推敲・追加調査の経過報告と討論(5)
- 第9回：修士論文の仕上げに向けた検討と討論(1)
- 第10回：修士論文の仕上げに向けた検討と討論(2)
- 第11回：修士論文の内容確認と省察(1)
- 第12回：修士論文の内容確認と省察(2)
- 第13回：面接試問に向けた検討と討論(1)
- 第14回：面接試問に向けた検討と討論(2)

履修上の注意

演習ⅡA～Cの成果をもとに、初回までに修士論文の草稿を書き上げておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。研究成果は、その内容や意義を伝えるための工夫も重視する。

その他

特になし。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POP512J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅢA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

漫画、およびアニメーションを考える上で必要な基礎文献の講読を通じて、修士課程において必要な読解力を養うことと、漫画・アニメーションについての研究・評論史の概要を把握することを目指す。具体的には、毎回担当者を決め、当該テキストの詳細なレジюмеを作成した上で、内容の要旨を発表する。他の受講者には、発表者の要約を踏まえて、活発に質疑を行うことを求める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：漫画関連文献の講読と討論(1)
- 第3回：漫画関連文献の講読と討論(2)
- 第4回：漫画関連文献の講読と討論(3)
- 第5回：漫画関連文献の講読と討論(4)
- 第6回：漫画関連文献の講読と討論(5)
- 第7回：漫画関連文献の講読と討論(6)
- 第8回：中間総括討論
- 第9回：アニメーション関連文献の講読と討論(1)
- 第10回：アニメーション関連文献の講読と討論(2)
- 第11回：アニメーション関連文献の講読と討論(3)
- 第12回：アニメーション関連文献の講読と討論(4)
- 第13回：アニメーション関連文献の講読と討論(5)
- 第14回：総括討論

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の要約担当者は、当該テキストのみならず、それが参照している重要文献等、そのテキストの背景にも目配りしておくことが求められる。担当者以外の受講者も、必ず事前に当該テキストを読んで論点を押さえてくることが求められる。

教科書

各年度ごとに取り上げる文献はある程度更新される。当該年度に扱う文献についてはイントロダクションの際に、指示する。

参考書

その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でコメントを伝える。

成績評価の方法

レジюме作成と発表:60%, 討論への貢献度:40%

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP512J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅢB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

漫画、およびアニメーションの研究・評論上の、先端的な議論を重点的に検討することを通じて、最新の研究動向を把握し、その意義と問題点を自分なりに要約できる力を身につけることを目指す。また、これを通じて、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付けられるようになることを目指す。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：漫画論の先端的文献の講読と討論(1)
- 第3回：漫画論の先端的文献の講読と討論(2)
- 第4回：漫画論の先端的文献の講読と討論(3)
- 第5回：漫画論の先端的文献の講読と討論(4)
- 第6回：漫画論の先端的文献の講読と討論(5)
- 第7回：漫画論の先端的文献の講読と討論(6)
- 第8回：中間総括討論
- 第9回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論(1)
- 第10回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論(2)
- 第11回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論(3)
- 第12回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論(4)
- 第13回：アニメーション論の先端的文献の講読と討論(5)
- 第14回：総括討論

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の要約担当者は、当該テキストのみならず、それが参照している重要文献等、そのテキストの背景にも目配りしておくことが求められる。担当者以外の受講者も、必ず事前に当該テキストを読んで論点を押さえてくることが求められる。

教科書

各年度ごとに取り上げる文献はある程度更新される。当該年度に扱う文献についてはイントロダクションの際に、指示する。

参考書

その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でコメントを伝える。

成績評価の方法

レジюме作成と発表:60%, 討論への貢献度:40%

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POP612J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅢC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

漫画・アニメーションに関する先行研究の批判的検討に基づいて、自らの研究の内容と意義をプレゼンテーションする訓練を行う。具体的には、受講者各自が、まず、自らの関心に即した文献を要約、発表し、これについて受講者全員で討論を行う。その上で、受講者各自が、自らの修士論文のテーマ、内容、手法の概要を発表し、これについて受講者全員で討論する。これを通じて、修士論文における自らの研究を、この分野の最前線に位置付ける力を高めることを目指す。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：文献要約と研究発表(1)
- 第3回：文献要約と研究発表(2)
- 第4回：文献要約と研究発表(3)
- 第5回：文献要約と研究発表(4)
- 第6回：文献要約と研究発表(5)
- 第7回：文献要約と研究発表(6)
- 第8回：文献要約と研究発表(7)
- 第9回：文献要約と研究発表(8)
- 第10回：文献要約と研究発表(9)
- 第11回：文献要約と研究発表(10)
- 第12回：文献要約と研究発表(11)
- 第13回：文献要約と研究発表(12)
- 第14回：文献要約と研究発表(13)

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の担当者は、文献要約のみならず、自らの研究の概要の発表においても、的確なレジユメの作成、図版資料の用意などが求められる。担当者以外の受講者も、必ず事前に当該テキストを読んで論点を押さえてくることが求められる。

教科書

扱うテキストは受講者の関心に応じたものを選ぶ。

参考書

その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でコメントを伝える。

成績評価の方法

レジユメ作成と発表:60%、討論への貢献度:40%

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP612J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー演習ⅢD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

漫画・アニメーションに関する受講者各自の研究の発表と、それに対する検討を行う。具体的には、受講者各自が、まず、自らの修士論文のための研究の内容について発表し、これについて受講者全員で討論を行う。これを通じて、修士論文の完成に向けて、自らの研究の問題点を把握し、その改善、調整を行えるようにする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：発表と討論(1)
- 第3回：発表と討論(2)
- 第4回：発表と討論(3)
- 第5回：発表と討論(4)
- 第6回：発表と討論(5)
- 第7回：発表と討論(6)
- 第8回：発表と討論(7)
- 第9回：発表と討論(8)
- 第10回：発表と討論(9)
- 第11回：発表と討論(10)
- 第12回：発表と討論(11)
- 第13回：発表と討論(12)
- 第14回：発表と討論(13)

履修上の注意

議論への積極的な参加が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回の発表者は、自分の研究の進捗状況を客観的にとらえ、今、何を優先すべきなのかを意識すること、他の受講者は、発表者の現状にとって何が必要なかを真剣に考え、発表者の助けになるコメント、討論ができるよう心がけてもらいたい。

教科書

特に用いない。

参考書

その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でコメントを伝える。

成績評価の方法

発表60%、討論への貢献度40%。

その他

特になし。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) MAN522J			
日本社会・産業システム研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本社会・産業システム演習ⅣA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

この演習では、研究の方法論を学びながら、自分の研究テーマに関する基本文献を選び、講読・討論していきます。研究の方法論としては、学術的な文章の書き方から研究テーマの設定、研究の問いと仮説の設定、資料の収集方法などについて学びます。そして、自分の研究テーマ関連の文献の講読と討論を行なっていきます。

この演習では、研究の方法を身につけ、研究テーマに関連した基礎知識を習得し、各人の論文作成の準備をすることが目標である。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン
- 第2回 研究テーマの相談
- 第3回 文献リスト作成・指導
- 第4回 論文の作成方法
- 第5回 論文の作成方法
- 第6回 論文の作成方法
- 第7回 資料収集の方法
- 第8回 基本資料講読および討論
- 第9回 基本資料講読および討論
- 第10回 基本資料講読および討論
- 第11回 基本資料講読および討論
- 第12回 基本資料講読および討論
- 第13回 基本資料講読および討論
- 第14回 論文作成計画の確認

履修上の注意

無断欠席は厳禁。

準備学習（予習・復習等）の内容

文献の講読・討論による授業が多いので、授業の前に関連資料を読んで準備すること。

教科書

「これから研究を書くためのガイドブック（第2版）」佐渡島沙織・吉野亜矢子（ひつじ書房）

参考書

- 「戦略の原点」清水勝彦（日経BP社）
- 「経営戦略入門」網倉久永・新宅 純二郎（日本経済新聞出版）
- 「組織デザイン」沼上幹（日本経済新聞出版）
- 「マーケティングを学ぶ」石井淳蔵（ちくま新書）
- 「1からのデジタル・マーケティング」西川英彦・澁谷覚（碩学舎）

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に時間を設け、フィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加度（70%）と期末レポート（30%）によって評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN522J			
日本社会・産業システム研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本社会・産業システム演習ⅣB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

この演習では、自分の研究に対する構想を具体化していくとともに、その関連文献の講読と討論を行なっていきます。研究構想に関しては、そのテーマと問いを明確化し、関連文献の学習や関連資料の収集を通じて、仮説の妥当性も検討していきます。

この演習では、自分の研究テーマ関連の理論を習得し、関連資料を幅広く収集し、読み込むことによって、論文の作成が始めるられるような準備を整うことが目標である。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン
- 第2回 論文構想の検討と相談
- 第3回 研究の問いと仮説の検討
- 第4回 先行研究文献の確認・指導
- 第5回 基本資料講読および討論
- 第6回 基本資料講読および討論
- 第7回 基本資料講読および討論
- 第8回 基本資料講読および討論
- 第9回 基本資料講読および討論
- 第10回 基本資料講読および討論
- 第11回 基本資料講読および討論
- 第12回 基本資料講読および討論
- 第13回 基本資料講読および討論
- 第14回 研究の問いと仮説の設定

履修上の注意

無断欠席は厳禁。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、関連資料をしっかりと読んで準備して授業に参加すること。

教科書

特になし。

参考書

- 「1からの流通論（第2版）」石原武政・竹村正明・細井謙一（碩学舎）
- 「1からのデジタル経営」伊藤宗彦・松尾博文・富田純一（碩学舎）
- 「人事管理入門（第3版）」今野浩一郎・佐藤 博樹（日本経済新聞出版）
- 「ジョブ型雇用社会とは何か：正社員体制の矛盾と転機」濱口桂一郎（岩波新書）

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に時間を設け、フィードバックを行う。

成績評価の方法

授業への参加度（70%）と期末レポート（30%）によって評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) MAN622J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム演習IVC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在 垣		

授業の概要・到達目標

この演習では、これまで検討してきた研究テーマとその問い、そして仮説を確定し、論文の作成について相談と指導を行なっていきます。論文作成に当たっては、序論や本文、結論の書き方について相談・討論していきます。

授業内容

- 第1回 インTRODダクション
- 第2回 論文構想の検討
- 第3回 研究の問いと仮説の検討・確定
- 第4回 先行研究文献の確認・指導
- 第5回 先行文献の講読と討論
- 第6回 先行文献の講読と討論
- 第7回 先行文献の講読と討論
- 第8回 先行文献の講読と討論
- 第9回 論文作成の指導
- 第10回 論文作成の指導
- 第11回 論文作成の指導
- 第12回 論文作成の指導
- 第13回 論文作成の指導
- 第14回 論文作成の指導

履修上の注意

自分の研究に集中して取り込むこと。なお、生成 AI は、文献検索・アイデアの発想・文章校正の目的に限り利用を認めます。ただし、最終的な文章の内容・構成・主張は学習者自身の責任で作成してください。提出物には、AI を利用した場合は「AI 名」「利用目的」「出力結果の利用方法」を提出物に明記してください。記載がない場合、再提出を求めることや、不正行為として扱うことがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

論文作成の進捗について報告すること。

教科書

特になし。

参考書

研究テーマに応じて参考文献を紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に時間を設け、フィードバックを行う。

成績評価の方法

論文作成に取り組む姿勢によって評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN622J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム演習IVD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在 垣		

授業の概要・到達目標

この演習では、論文作成について討論・指導を引き続き行ない、論文を仕上げることを目標とします。

授業内容

- 第1回 インTRODダクション
- 第2回 研究作成の日程計画
- 第3回 論文作成の指導
- 第4回 論文作成の指導
- 第5回 論文作成の指導
- 第6回 論文作成の指導
- 第7回 論文作成の指導
- 第8回 論文作成の指導
- 第9回 論文作成の指導
- 第10回 論文作成の指導
- 第11回 論文作成の指導
- 第12回 論文作成の指導
- 第13回 論文作成の指導
- 第14回 論文作成の指導

履修上の注意

自分の研究に集中して取り込むこと。なお、生成 AI は、文献検索・アイデアの発想・文章校正の目的に限り利用を認めます。ただし、最終的な文章の内容・構成・主張は学習者自身の責任で作成してください。提出物には、AI を利用した場合は「AI 名」「利用目的」「出力結果の利用方法」を提出物に明記してください。記載がない場合、再提出を求めることや、不正行為として扱うことがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

論文作成の進捗について毎回の授業で報告すること。

教科書

特になし。

参考書

研究テーマに応じて参考文献を紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に時間を設け、フィードバックを行う。

成績評価の方法

自分の論文に取り組む姿勢によって評価する。

その他

特になし。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) EDU532J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅠA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	平井 達也	

授業の概要・到達目標

本演習ではまず、異文化間教育に関するいくつかの研究(多文化共修、グローバルリーダーシップ、異文化間カウンセリングなど)ゼミ生の興味に近いものを適宜選択する。英語論文を含む)を読み込む。その中で履修者が自分の博士前期課程で取り組むテーマを決め、どのように研究を進めていきたいかについての大筋を決めることが前半の課題である。このプロセスは漠然とディスカッションするのではなく、具体的な研究の切り口を見つけていく作業であり、その後の研究のベースとなる。後半からは実際に(予備)調査を開始し、各自がレジюмеを作成して発表する。

異文化間教育については国や民族の違いという「国際」の観点だけでなく、異なる文化的背景や価値観、生き様という意味での「文化際」というより広い観点で捉えるので、学生のテーマも広いものになり得る。

授業は、文献講読、発表とディスカッションという形式で行う。なお、本領域に所属する他の教員・大学院生との集団指導の回を適宜設定する予定である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：参加者の興味関心のシェア
- 第3回：異文化間教育の文献講読と討論(1)
- 第4回：異文化間教育の文献講読と討論(2)
- 第5回：異文化間教育の文献講読と討論(3)
- 第6回：異文化間教育の文献講読と討論(4)
- 第7回：各自のテーマと方法についての構想発表(1)
- 第8回：異文化間教育学会大会への参加
- 第9回：各自のテーマと方法についての構想発表(2)
- 第10回：各自のテーマと方法についての構想発表(3)
- 第11回：各自のテーマと方法についての構想発表(4)
- 第12回：各自のテーマと方法についての構想発表(5)
- 第13回：各自のテーマと方法についての構想発表(6)
- 第14回：包括的な討論

履修上の注意

全ての文献の精読と活発な討論が求められる。後半では各自が研究テーマに従って文献講読や調査に入るのので、毎回レジюмеを作成して発表してもらう。例年6月初旬に開催される異文化間教育学会の大会に、次年度の発表のための準備として参加することを予定している。

準備学習(予習・復習等)の内容

前回の授業で担当教員や学生の仲間からもらったコメントを生かし、次回のレジюмеを作成して発表するので、そのための復習と予習が不可欠である。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に主に口頭にて行う。院生には毎回の授業の最後に振り返りを記入してもらい、特に重要と思われる内容については翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

文献輪読や議論への参加(14回×5点=70点) 70%
 中間報告 10%
 学期末報告 20%
 ※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価する。

その他

異文化間教育学会への入会(学生会員)を求める。

科目ナンバー：(GJ) EDU532J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅠB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	平井 達也	

授業の概要・到達目標

ⅠBでは、個人の演習テーマ(修士論文につながるテーマ)を決めて、そのテーマに関する文献を読み進みながら具体的な調査を設計し、後半ではその計画に則り調査(文献研究を含む)を開始する。2月には、異文化間教育学会大会(6月)の発表申請(ポスター発表等)を行い、3月に大会発表抄録のための原稿を提出する。また、これに並行して、およそ1万字の修士論文の草稿(問題と目的、研究方法、予備調査の結果と考察などを含む)を一旦執筆し、提出する。これらを通して、受講者の関心を調査と学会発表という具体的な成果に結実させる力量を鍛える。なお、本領域に所属する他の教員・大学院生との集団指導を適宜設定する予定である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論(1)
- 第3回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論(2)
- 第4回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論(3)
- 第5回：個人の演習テーマと調査計画についての発表と討論(4)
- 第6回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論(1)
- 第7回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論(2)
- 第8回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論(3)
- 第9回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論(4)
- 第10回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論(5)
- 第11回：個人の演習テーマに即した文献講読と討論(6)
- 第12回：個人の演習テーマに即した調査実践報告と討論(1)
- 第13回：個人の演習テーマに即した調査実践報告と討論(2)
- 第14回：包括的な討論

履修上の注意

演習テーマは受講者によって異なるが、全員で協力しながら完成度の高い調査と討論を行うことが求められる。春期休業期間中にも、調査等学会発表のための真剣な準備が求められる。この期間に、抄録作成を目的とした合宿または集中的な議論の機会を設ける予定である。

準備学習(予習・復習等)の内容

前回の授業で担当教員や学生の仲間からもらったコメントを生かして次回のレジюмеを作成するので、そのための復習と予習が不可欠である。また、学会の大会発表抄録を提出することになるので、その推敲を行うことになる。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に主に口頭にて行う。院生には毎回の授業の最後に振り返りを記入してもらい、特に重要と思われる内容については翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 56%
 中間報告 14%
 学期末報告(1万字論文) 30%
 ※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価する。

その他

異文化間教育学会の学生会員として、次年度の大会発表申請を行う。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) EDU632J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	平井 達也	

授業の概要・到達目標

ICでは、個人の演習テーマ（修士論文につながるテーマ）に関する文献を読み進めるとともに、6月に開催される異文化間教育学会大会において発表するための調査の補足作業を行い、模擬発表を繰り返して洗練させる。大会発表後は、そこで得られたコメントなどをもとに、必要に応じて追加調査を実施し、修士論文執筆に備える。これを通して、修士論文の中核となる調査とその理論的な筋立てを最終的に完成させ、さらにそれを表現する力量、パワーポイントを用いた発表力を鍛える。なお、本領域に所属する他の教員・大学院生との集団指導を適宜設定する予定である。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：模擬発表1-1
第3回：模擬発表1-2
第4回：模擬発表1-3
第5回：模擬発表2-1
第6回：模擬発表2-2
第7回：模擬発表2-3
第8回：異文化間教育学会大会での発表
第9回：異文化間教育学会大会発表を踏まえた討論(1)
第10回：異文化間教育学会大会発表を踏まえた討論(2)
第11回：異文化間教育学会大会発表を踏まえた討論(3)
第12回：異文化間教育学会大会発表を踏まえた討論(4)
第13回：追加調査の計画発表と討論
第14回：包括的な討論

履修上の注意

演習テーマは受講者によって異なるが、全員で協力しながら活発な討論を行うことが求められる。IC後の夏期休業期間中には、必要に応じて追加調査を実施することが求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

模擬発表を繰り返しながら学会発表での質を高めていくので、指導教員や学生の仲間からもらったコメントを生かすための予習と復習が不可欠である。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に主に口頭にて行う。院生には毎回の授業の最後に振り返りを記入してもらい、特に重要と思われる内容については翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 56%
中間報告1(4月) 9%
中間報告2(6月) 15%
学期末報告(8月) 20%
※ループリックに基づいて研究成果報告を評価する。

その他

6月に異文化間教育学会大会での発表（口頭発表あるいはポスター発表）が求められる。

科目ナンバー：(GJ) EDU632J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 Ph.D.	平井 達也	

授業の概要・到達目標

IDでは、6月の異文化間教育学会大会における個人発表ならびに夏期休業期間中の追加調査に基づき、修士論文の最終的な構成を発表し、順次執筆しながら発表を繰り返して完成させる。

なお、本領域に所属する他の教員・大学院生との集団指導を適宜設定する予定である。

授業内容

第1回：イントロダクション
第2回：発表と討論(1)
第3回：発表と討論(2)
第4回：発表と討論(3)
第5回：発表と討論(4)
第6回：発表と討論(5)
第7回：発表と討論(6)
第8回：発表と討論(7)
第9回：発表と討論(8)
第10回：発表と討論(9)
第11回：発表と討論(10)
第12回：発表と討論(11)
第13回：修士論文提出
第14回：包括的な討論

履修上の注意

演習テーマは受講者によって異なるが、全員で協力しながら活発な討論を行うことが求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回レジュメを準備して発表することになるので、そのための復習と予習が不可欠である。

教科書

特定の教科書は使用しない。

参考書

受講者の関心に応じて推薦する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に主に口頭にて行う。院生には毎回の授業の最後に振り返りを記入してもらい、特に重要と思われる内容については翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

文献輪読や議論への参加(14回×2-3点=30点) 30%
中間報告1(9月15日) 20%
中間報告2(10月15日) 20%
学期末報告(12月1日) 30%
※ループリックに基づいて研究成果報告を評価する。

その他

特になし。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POL542J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅡA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に関する研究を行い、国や自治体、学校、NPO、企業などで、外国人住民にかかわる施策や事業にかかわる者あるいはそうした分野の職業に就くことを目指す者の受講を想定している。多文化共生分野の文献を講読し、討論を重ねることで、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に関する理解を深め、国や自治体、学校、NPO、企業などが果たすべき役割を探る。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：問題意識の共有
- 第3回：多文化共生分野の文献講読と討論(1)
- 第4回：多文化共生分野の文献講読と討論(2)
- 第5回：多文化共生分野の文献講読と討論(3)
- 第6回：多文化共生分野の文献講読と討論(4)
- 第7回：多文化共生分野の文献講読と討論(5)
- 第8回：多文化共生分野の文献講読と討論(6)
- 第9回：多文化共生分野の文献講読と討論(7)
- 第10回：多文化共生分野の文献講読と討論(8)
- 第11回：多文化共生分野の文献講読と討論(9)
- 第12回：多文化共生分野の文献講読と討論(10)
- 第13回：多文化共生分野の文献講読と討論(11)
- 第14回：包括的な討論

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、適度な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に口頭で行う。毎回、授業の最後に記入してもらうコメントについては、翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

担当文献のレジメと発表(50%)、討論への貢献(50%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POL542J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅡB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に関する研究を行い、国や自治体、学校、NPO、企業などで、外国人住民にかかわる施策や事業にかかわる者あるいはそうした分野の職業に就くことを目指す者の受講を想定している。多文化共生分野の文献を講読し、討論を重ねることで、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に関する理解を深め、国や自治体、学校、NPO、企業などが果たすべき役割を探る。

ⅡBでは、諸外国における多文化共生社会の形成に関する主要文献（日本語および英語）について、受講生がその要旨を発表し、他の受講生と活発な質疑応答を行う。また、学期末までに各受講生がそれぞれ研究テーマと研究計画を定める。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：問題意識の共有
- 第3回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(1)
- 第4回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(2)
- 第5回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(3)
- 第6回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(4)
- 第7回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(5)
- 第8回：研究テーマと研究計画の相談
- 第9回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(6)
- 第10回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(7)
- 第11回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(8)
- 第12回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(9)
- 第13回：諸外国における多文化共生分野の文献講読と討論(10)
- 第14回：研究テーマと研究計画の発表

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、適度な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

初回授業時に指定。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に口頭で行う。毎回、授業の最後に記入してもらうコメントについては、翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

担当文献のレジメと発表(50%)、討論への貢献(50%)

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) POL642J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅡC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に関する研究を行い、国や自治体、学校、NPO、企業などで、外国人住民にかかわる施策や事業にかかわる者あるいはそうした分野の職業に就くことを目指す者の受講を想定している。多文化共生分野の文献を講読し、討論を重ねることで、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に関する理解を深め、国や自治体、学校、NPO、企業などが果たすべき役割を探る。

ⅡCでは、各受講生が研究テーマにそって文献講読や調査を進める。各受講生による関連文献の紹介を経て、2回の中間報告を行い、互いに論評を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：問題意識の共有セッション
- 第3回：文献紹介(1)
- 第4回：文献紹介(2)
- 第5回：文献紹介(3)
- 第6回：中間報告(1)
- 第7回：中間報告(2)
- 第8回：中間報告(3)
- 第9回：文献紹介(4)
- 第10回：文献紹介(5)
- 第11回：文献紹介(6)
- 第12回：中間報告(4)
- 第13回：中間報告(5)
- 第14回：総括

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、相当な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に口頭で行う。毎回、授業の最後に記入してもらうコメントについては、翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

担当文献および中間報告のレジメと発表(50%)、討論への貢献(50%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POL642J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅡD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	山脇 啓造	

授業の概要・到達目標

この演習は、多文化共生社会の形成に関する研究を行い、国や自治体、学校、NPO、企業などで、外国人住民にかかわる施策や事業にかかわる者あるいはそうした分野の職業に就くことを目指す者の受講を想定している。多文化共生分野の文献を講読し、討論を重ねることで、多文化共生社会の形成に関する現状と課題に関する理解を深め、国や自治体、学校、NPO、企業などが果たすべき役割を探る。

ⅡDでは、各受講生が研究テーマにそって、論文を完成させる。各受講生が中間報告と最終報告を行うほか、各自の研究の中で、特に他の受講生にも関連する興味深いテーマ（文献、調査等）について、別途、自由報告を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：問題意識の共有セッション
- 第3回：自由報告(1)
- 第4回：自由報告(2)
- 第5回：自由報告(3)
- 第6回：中間報告および論文提出(1)
- 第7回：中間報告および論文提出(2)
- 第8回：中間報告および論文提出(3)
- 第9回：自由報告(4)
- 第10回：自由報告(5)
- 第11回：自由報告(6)
- 第12回：最終報告および論文提出(1)
- 第13回：最終報告および論文提出(2)
- 第14回：総括

履修上の注意

英語の文献も取り上げるので、相当な英語力が必要である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、授業の最後に次週までの課題を課す。

教科書

初回のイントロダクション時に指定する。

参考書

適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に口頭で行う。毎回、授業の最後に記入してもらうコメントについては、翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

報告のレジメと発表(25%)、討論への貢献(25%)、論文(50%)

その他

特になし。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) EDU532J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅢA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) ピニロス マツダ、デレク K.		

授業の概要・到達目標

本演習では、多文化共生・異文化間教育にアプローチするために必要な認識論および研究方法論について理解を深めることを目的とする。
 輪読文献として Research Design: Quantitative, Qualitative, Mixed Methods, Arts-Based, and Community-Based Participatory Research Approaches を用い、量的研究、質的研究、ミックスド・メソッド、アートベース・リサーチ、コミュニティベース参加型研究などの多様な研究デザインを体系的に学ぶ。
 あわせて、多文化共生・異文化間教育学に関連する主要概念や先行研究を輪読・検討し、院生各自の研究テーマに即した研究の問いの具体化および研究計画の精緻化を図る。
 複数回にわたる受講者の研究発表と、それに基づく討議・意見交換を通して、主体的かつ協働的に研究を深化させることを目指す。
到達目標
 受講者は本演習を通して、以下の点を達成することを目標とする。
 多文化共生・異文化間教育研究における主要な研究方法論を説明できる。
 自身の研究テーマに適した研究デザインを選択し、根拠をもって説明できる。
 先行研究を批判的に検討し、研究課題を明確化できる。
 研究倫理を理解し、適切に研究計画へ反映できる。
 学会発表を見据えた研究計画・研究成果報告を行うことができる。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価方法の説明
 - 第2回：受講者各自の研究計画発表
 - 第3回：本領域における研究動向
 - 第4回：研究倫理
 - 第5回：先行研究レビュー
 - 第6回：研究デザイン概論
 - 第7回：量的研究デザイン
 - 第8回：質的研究デザイン
 - 第9回：ミックスド・メソッド研究デザイン
 - 第10回：アートベース・リサーチ
 - 第11回：コミュニティベース参加型研究
 - 第12回：研究計画発表(先行研究・方法論)
 - 第13回：研究計画発表(先行研究・方法論)
 - 第14回：研究計画発表(先行研究・方法論)
- *授業内容は受講者の関心や理解状況に応じて、必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

本演習ではICTを多用する。資料のオンライン共有、議論の記録、先行研究リストの作成をオンライン上で行うほか、反転授業やオンライン講座への参加を予定している。
 各自、ノートパソコンやタブレット端末等を持参すること。事前に十分な充電を行うこと。
 受講生の関心や理解状況に応じて、シラバス内容の一部を調整する場合がある。
 生成AIの利用について
 本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。
 生成AIを使用した場合は、どの部分に、どのツールを、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱うことがある。

準備学習（予習・復習等）の内容

発表担当回では、事前に発表資料を作成し、指定された方法で共有すること。
 発表担当でない回においても、必ず発表者の資料に目を通し、議論に参加すること。
 反転授業およびオンライン講座への参加は、演習時間外に行う。

教科書

Patricia Leavy (2017) Research Design: Quantitative, Qualitative, Mixed Methods, Arts-Based, and Community-Based Participatory Research Approaches Guilford Press

参考書

課題に対するフィードバックの方法

各回の演習終了後、受講者はゼミの振り返りをMicrosoft Teams上に提出する。教員は提出された内容に対して随時フィードバックを行い、特に重要な論点については次回演習で取り上げ、全体で共有する。

成績評価の方法

定期試験は行わず、平常の学修状況および課題提出を総合的に評価する。
 文献輪読・議論への参加(14回 × 5点) ……60%
 中間報告 ……10%
 学期末報告 ……20%
 ※研究成果報告はルーブリックに基づいて評価する。

その他

本演習では、以下の学会等での研究発表を積極的に推奨する。
 異文化間教育学会(全国大会)
 International Conference for Media in Education (全国大会・8月)
 日本教育工学会(全国大会)
 日本教育メディア学会(全国大会)

科目ナンバー：(GJ) EDU532J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅢB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) ピニロス マツダ、デレク K.		

授業の概要・到達目標

先行研究のレビュー、フィールド調査を通して、研究の問いをさらに深めていく。具体的には、国際教育学、異文化間教育の教育社会学系アプローチからの文献を輪読、発表、議論、意見交換を行う。同時に、フィールドで調査(観察やインタビューを含む)を行うための方法論を指導し、研究の問いを軸としてデータ収集と分析を始められるよう指導する。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：修士論文構想発表と議論(1)
 - 第3回：修士論文構想発表と議論(2)
 - 第4回：データ収集の方法論についての講義(1)
 - 第5回：データ収集の方法論についての講義(2)
 - 第6回：データの分析の方法論についての講義(1)
 - 第7回：データの分析の方法論についての講義(2)
 - 第8回：収集したデータの分析結果についての検討(1)
 - 第9回：収集したデータの分析結果についての検討(2)
 - 第10回：収集したデータの分析結果についての検討(3)
 - 第11回：先行研究レビューの批判的考察—研究の独創性について(1)
 - 第12回：先行研究レビューの批判的考察—研究の独創性について(2)
 - 第13回：研究発表の準備(1)
 - 第14回：研究発表の準備(2)
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持参してください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
 ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
 ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
 ・文献輪読や議論への参加(14回 × 4点 = 56点) 56%
 ・中間報告 14%
 ・学期末報告(1万字論文) 30%
 ※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

いずれかの学会での研究発表を推奨します。
 ・異文化間教育学会(全国大会)
 ・International Conference for Media in Education (全国大会) 8月
 ・日本教育工学会(全国大会)
 ・日本教育メディア学会(全国大会)

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) EDU632J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅢC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) ピニロス マツダ、デレク K.		

授業の概要・到達目標

2年次では、受講生の修士論文の執筆を指導する。1年次で立てた研究の問いを、収集したデータとその分析および研究と関連づけて、検討、確定する。必要に応じてさらにデータの収集と分析を行う。研究成果の中間報告として、6月の異文化間教育学会および8月予定の国際学会 (International Conference for Media in Education)にて研究成果を行うことを予定している。

授業内容

- 第1回：異文化間教育学会および国際学会での発表の概要と方法についての説明
- 第2回：研究の背景と目的・方法論についての発表とディスカッション(1)
- 第3回：研究の背景と目的・方法論についての発表とディスカッション(2)
- 第4回：追加のデータ収集・分析のための議論(1)
- 第5回：追加のデータ収集・分析のための議論(2)
- 第6回：データ収集と分析結果の発表と議論(2)
- 第7回：データ収集と分析結果の発表と議論(2)
- 第8回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(1)
- 第9回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(2)
- 第10回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(3)
- 第11回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(4)
- 第12回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(5)
- 第13回：研究発表の準備(1)
- 第14回：研究発表の準備(2)

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンライン上で共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。

文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 56%

- ・中間報告1(4月) 9%
- ・中間報告2(6月) 15%
- ・学期末報告(8月) 20%

※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

- ・異文化間教育学会(全国大会)
 - ・International Conference for Media in Education (全国大会) 8月
 - ・日本教育工学会(全国大会)
 - ・日本教育メディア学会(全国大会)
- のいずれかへの参加、発表が求められます。

科目ナンバー：(GJ) EDU632J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅢD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(教育学) ピニロス マツダ、デレク K.		

授業の概要・到達目標

修士論文完成へ向けて指導する。先行研究をさらに広く、深く読み進め、同時に、理論的枠組み理解を強化する。秋学期には、日本教育工学会全国大会または日本教育工学会研究会で研究成果を報告し、学外の研究者からフィードバックを得て、修士論文の完成度を高める。さらに、修士論文発表会では、他の領域の(同じ専門領域ではない)研究者・院生にも自らの研究の意義、独創性を伝えることができるようにする。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
- 第2回：多文化共生・異文化間教育演習ⅢCで提出した修士論文の内容発表とディスカッション(1)
- 第3回：多文化共生・異文化間教育演習ⅢCで提出した修士論文の内容発表とディスカッション(2)
- 第4回：修士論文の修正のための計画発表
- 第5回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(1)
- 第6回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(2)
- 第7回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(3)
- 第8回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(4)
- 第9回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(5)
- 第10回：修士論文の相互評価(1)
- 第11回：修士論文の相互評価(2)
- 第12回：修士論文の軽微な修正
- 第13回：修士論文発表の準備(1)
- 第14回：修士論文発表の準備(2)

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンライン上で共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。

文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 30%

- ・中間報告1(9月15日) 20%
- ・中間報告2(10月15日) 20%
- ・学期末報告(12月1日) 30%

※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) EDU532J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅣA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

多文化共生・異文化間教育へアプローチしていくための認識論、方法論として、教育工学的アプローチと、学習・発達への文化・歴史のアプローチを抑える。教育工学および学習・発達研究の流れをおさえ、現場(実践)を読み解くための視点を広げる。関連する先行研究を輪読し、院生の研究の問いを具体化していく。受講者による複数回の発表、発表を受けて行われる議論、意見交換をもとに指導する。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：研究計画の発表
 - 第3回：教育工学的アプローチとインスタラクショナルデザイン
 - 第4回：文化・歴史のアプローチと学習環境のデザイン
 - 第5回：先行研究の発表
 - 第6回：先行研究の批判的読み
 - 第7回：先行研究の輪読(1)
 - 第8回：先行研究の輪読(2)
 - 第9回：先行研究の輪読(3)
 - 第10回：研究の中間報告とディスカッション
 - 第11回：院生の研究の問いの具体化と先行研究の批判的考察(1)
 - 第12回：院生の研究の問いの具体化と先行研究の批判的考察(2)
 - 第13回：研究の学期末報告とディスカッション
 - 第14回：フィールドとデータ収集に関する研究計画の発表と議論
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンライン上で共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

- 定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
 - ・文献輪読や議論への参加(14回×5点=70点) 70%
 - ・中間報告 10%
 - ・学期末報告 20%
- ※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

- いずれかの学会での研究発表を推奨します。
- ・異文化間教育学会(全国大会)
- ・International Conference for Media in Education (全国大会) 8月
- ・日本教育工学会(全国大会)
- ・日本教育メディア学会(全国大会)

科目ナンバー：(GJ) EDU532J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	多文化共生・異文化間教育演習ⅣB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

先行研究のレビュー、フィールド調査を通して、研究の問いをさらに深めていく。具体的には、教育工学的アプローチと社会歴史のアプローチからの文献を輪読、発表、議論、意見交換を行う。同時に、フィールドで調査(観察やインタビューを含む)を行うための方法論を指導し、研究の問いを軸としてデータ収集と分析を始められるよう指導する。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：修士論文構想発表と議論(1)
 - 第3回：修士論文構想発表と議論(2)
 - 第4回：データ収集の方法論についての講義(1)
 - 第5回：データ収集の方法論についての講義(2)
 - 第6回：データの分析の方法論についての講義(1)
 - 第7回：データの分析の方法論についての講義(2)
 - 第8回：収集したデータの分析結果についての検討(1)
 - 第9回：収集したデータの分析結果についての検討(2)
 - 第10回：収集したデータの分析結果についての検討(3)
 - 第11回：先行研究レビューの批判的考察—研究の独創性について(1)
 - 第12回：先行研究レビューの批判的考察—研究の独創性について(2)
 - 第13回：研究発表の準備(1)
 - 第14回：研究発表の準備(2)
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンライン上で共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

- 定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
 - ・文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 56%
 - ・中間報告 14%
 - ・学期末報告(1万字論文) 30%
- ※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

- いずれかの学会での研究発表を推奨します。
- ・異文化間教育学会(全国大会)
- ・International Conference for Media in Education (全国大会) 8月
- ・日本教育工学会(全国大会)
- ・日本教育メディア学会(全国大会)

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) EDU632J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育演習IVC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

2年次では、受講生の修士論文の執筆を指導する。1年次で立てた研究の問いを、収集したデータとその分析および研究と関連づけて、検討、確定する。必要に応じてさらにデータの収集と分析を行う。研究成果の中間報告として、国内外の学会にて研究成果を行うことを予定している。

授業内容

- 第1回：学会での研究発表の概要と方法についての説明
 - 第2回：研究の背景と目的・方法論についての発表とディスカッション(1)
 - 第3回：研究の背景と目的・方法論についての発表とディスカッション(2)
 - 第4回：追加のデータ収集・分析のための議論(1)
 - 第5回：追加のデータ収集・分析のための議論(2)
 - 第6回：データ収集と分析結果の発表と議論(1)
 - 第7回：データ収集と分析結果の発表と議論(2)
 - 第8回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(1)
 - 第9回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(2)
 - 第10回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(3)
 - 第11回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(4)
 - 第12回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(5)
 - 第13回：研究発表の準備(1)
 - 第14回：研究発表の準備(2)
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意してください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。
- (4)生成AIの利用について：本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。生成AIを使用した場合は、どの部分に、どのツールを、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱うことがある。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通してください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 56%
・中間報告1(4月) 9%
・中間報告2(6月) 15%
・学期末報告(8月) 20%
※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

- 以下のいずれかの学会にて研究発表を推奨します。
・異文化間教育学会(全国大会)
・International Conference for Media in Education(全国大会)8月
・日本教育工学会(全国大会または研究会)
・日本教育メディア学会(全国大会または研究会)

科目ナンバー：(GJ) EDU632J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育演習IVD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

修士論文完成へ向けて指導する。先行研究をさらに広く、深く読み進め、同時に、理論的枠組み理解を強化する。秋学期には、日本教育工学会全国大会または日本教育工学会研究会で研究成果を報告し、学外の研究者からフィードバックを得て、修士論文の完成度を高める。さらに、修士論文発表会では、他の領域の(同じ専門領域ではない)研究者・院生にも自らの研究の意義、独創性を伝えることができるようにする。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：多文化共生・異文化間教育演習IVCで提出した修士論文の内容発表とディスカッション(1)
 - 第3回：多文化共生・異文化間教育演習IVCで提出した修士論文の内容発表とディスカッション(2)
 - 第4回：修士論文の修正のための計画発表
 - 第5回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(1)
 - 第6回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(2)
 - 第7回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(3)
 - 第8回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(4)
 - 第9回：修士論文の進捗状況報告とディスカッション(5)
 - 第10回：修士論文の相互評価(1)
 - 第11回：修士論文の相互評価(2)
 - 第12回：修士論文の軽微な修正
 - 第13回：修士論文発表の準備(1)
 - 第14回：修士論文発表の準備(2)
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意してください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。
- (4)生成AIの利用について：本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。生成AIを使用した場合は、どの部分に、どのツールを、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱うことがある。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通してください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
文献輪読や議論への参加(14回×4点=56点) 30%
・中間報告1(9月15日) 20%
・中間報告2(10月15日) 20%
・学期末報告(12月1日) 30%
※ルーブリックに基づいて研究成果報告を評価します。

その他

- 以下の学会において研究発表をし、フィードバックをもらうことを推奨します。
・異文化間教育学会(全国大会)
・International Conference for Media in Education(全国大会)8月
・日本教育工学会(全国大会)
・日本教育メディア学会(全国大会)

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN532J			
日本語学・日本語教育学研究	備考		
科目名	日本語学演習 I A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学の研究は、一般言語学の枠組によりながら、日本社会に特有な日本語の問題を的確に見定め、それにふさわしい研究方法を用いて、取り組んでいく必要があります。日本語学演習 I A～I Bでは、その日本語学の方法を、理論と実践の両面から学びます。具体的には、優れた論文の講読と、受講者の研究発表に基づくディスカッションを重ねていきます。そのうち、日本語学演習 I Aは、基礎的な内容を扱います。

授業内容

論文講読は、例えば次に示す論文などを対象に、音声、文法、語彙、文章、談話などの諸分野にわたり精読していきます。論文は変更になる場合があります。

- ・川原繁人(2017)「音そのものに意味はあるのか——ポケモンから考える「音とことばのふしぎな世界」」
- ・瀬戸賢一(2017)「時間」と「とき」
- ・久屋愛実(2021)「英語由来語彙を公共コミュニケーションでどう運用するべきか」
- ・石黒圭(2015)「書き言葉・話し言葉と「硬さ/軟らかさ」
- ・高木智世・森田笑(2015)「「ええと」によって開始される応答」

受講者の研究発表は、各自の研究テーマに基づいて、次のような手順で進めます。

- (1) 先行研究のレビュー
- (2) 問いの設定
- (3) 研究目的、研究課題の明文化
- (4) 調査方法の策定
- (5) 予備調査の実施と得られたデータの分析
- (6) 研究課題や調査方法の見直し

履修上の注意

論文は、読んでその内容を理解するだけでなく、批判的に読むことで、議論の仕方や研究の方法を身に付けることが必要です。そのためには、精読と議論への積極的な参加が求められます。

各自の研究の実践に、教員は支援を惜しみませんが、学生が主体となり、様々な創意工夫を重ねていくことが必要です。

準備学習（予習・復習等）の内容

論文講読に際しては、指定する論文以外にも、その論文が引用する論文や、関連する論文も積極的に読むようにしてください。

各自の研究は、2年次に本格的に執筆する修士論文につながるように意識していきましょう。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

授業時の取り組み(70%)と、レポート(30%)によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

この授業は、国際日本学部の「国際日本学特別演習 A」としても開講しますので、国際日本学部生も受講します。

科目ナンバー：(GJ) LIN532J			
日本語学・日本語教育学研究	備考		
科目名	日本語学演習 I B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学の研究は、一般的な言語学の枠組によりながら、日本社会に特有な日本語の問題を的確に見定め、それにふさわしい研究方法を用いて、取り組んでいく必要があります。日本語学演習 I A～I Bでは、その日本語学の方法を、理論と実践の両面から学びます。具体的には、優れた論文の講読と、受講者の研究発表に基づくディスカッションを重ねていきます。そのうち、日本語学演習 I Bは、応用的な内容を扱います。

授業内容

論文講読は、例えば次に示す論文などを対象に、語彙接触、語彙交流、漢字論、コーパス研究、言語問題などの諸分野にわたり精読していきます。論文は変更になる場合があります。

- ・金愛蘭(2006)「外来語「トラブル」の基本語化」
- ・荒川清秀(1988)「地理学用語「回帰線」の起源をめぐって和製漢語検証のための一試論」
- ・笹原宏之(2015)「日本の漢字の変化と多様性」
- ・中俣尚己(2017)「接続助詞の前接語に見られる品詞の偏り—コーパスから見える南モデル—」
- ・宇佐美洋(2022)「「やさしい日本語」を支える「マインド」とその育成」

受講者の研究発表は、各自の研究テーマに基づいて、次のような手順で進めます。

- (1) 問い、研究目的、研究課題の策定
- (2) 調査の設計と実施
- (3) 調査によって得られたデータの分析
- (4) データ分析を踏まえた考察の展開
- (5) 先行研究や隣接研究に照らした視野の拡大
- (6) 修士論文の執筆計画の作成

履修上の注意

論文は、読んでその内容を理解するだけでなく、批判的に読むことで、議論の仕方や研究の方法を身に付けることが必要です。そのためには、精読と議論への積極的な参加が求められます。

受講者各自の研究に対して、教員は支援を惜しみませんが、修士論文に向かう研究は、学生が主体的に取り組む必要があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

論文講読に際しては、指定する論文以外にも、その論文が引用する論文や、関連する論文も積極的に読むようにしてください。

受講者各自の研究は、研究対象を掘り下げて深めることと、関連研究や研究スキルを広く吸収して広げることの、どちらも大切です。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

授業時の取り組み(70%)と、レポート(30%)によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

この授業は、国際日本学部の「国際日本学特別演習 B」としても開講しますので、国際日本学部生も受講します。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN632J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本語学演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

修士論文の研究課題を明確化し、その課題に取り組むための言語調査と言語分析を実践していきます。受講者の研究テーマに即して、(1)文献レビュー、(2)論点の抽出、(3)研究目的の設定、(4)研究方法の吟味、(5)調査の企画と実施、(6)得られたデータの分析、(7)考察、などを行っていきます。こうした研究の過程の進行に応じて、発表し合い、討議を重ねていきます。

授業内容

- 第1回：日本語学における文献レビューの方法
- 第2回：文献レビューの実践
- 第3回：論点の抽出
- 第4回：研究目的の設定
- 第5回：研究方法の吟味
- 第6回：調査の企画と予備調査の実施
- 第7回：予備調査結果の検討
- 第8回：仮説の設定と本調査の設計
- 第9回：調査結果データの集計
- 第10回：多角的なデータ分析(1)
- 第11回：多角的なデータ分析(2)
- 第12回：考察の展開(1)
- 第13回：考察の展開(2)
- 第14回：この授業のまとめ

履修上の注意

受講者は具体的な研究テーマをひとつ定める必要があります。

準備学習（予習・復習等）の内容

自らの研究を論文にまとめるためには、日々の積み重ねが大事です。

教科書

使用しない。

参考書

各回の授業時に指示。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

授業時の取り組み(70%)と、レポート(30%)によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) LIN632J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本語学演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語学演習ICに引き続き、各自の修士論文執筆に向けた活動を行っていきます。具体的には、(1)考察の論理構築、(2)仮説の検証、(3)再調査(追加調査)の設計、(4)考察の総合、(5)文章の推敲、などを行っていきます。また、他の受講者の修士論文に向けた研究に対して、適切に批評ができるよう、ディスカッションを重ねていきます。

授業内容

- 第1回：研究目的・研究方法の確認
- 第2回：考察の論理構築(1)
- 第3回：考察の論理構築(2)
- 第4回：仮説の検証
- 第5回：再調査(追加調査)の設計
- 第6回：再調査(追加調査)データの集計
- 第7回：データ分析から考察へ
- 第8回：展開した考察の総合
- 第9回：章立ての確定
- 第10回：文章の推敲(1)
- 第11回：文章の推敲(2)
- 第12回：残された課題の検討
- 第13回：修士論文の完成
- 第14回：研究結果の発表と評価

履修上の注意

受講者の修士論文のテーマに応じて、進めていきます。自身の研究を進めることだけでなく、他の受講者の研究に対しても、ディスカッションに十分に参加しなければなりません。

準備学習（予習・復習等）の内容

十分なデータ、明晰な論理、平明な表現が備わった研究成果に結実するよう、修士論文完成に向けて、日々努力してください。また、他の受講者の研究に対して、適切な批評ができるよう、日本語や日本語学への見識を高めてください。

教科書

使用しません。

参考書

その都度指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

授業時の取り組み(100%)によって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN552J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本語教育学演習 I A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

第二言語としての日本語の語彙習得に関する実証研究の成果を読み、これまでどのような観点から、どのような方法で研究されてきたかを整理し、今後どのような研究が期待されるかを考える。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：日本語の語彙(1)
- 第3回：日本語の語彙(2)
- 第4回：複合動詞の習得(1)
- 第5回：複合動詞の習得(2)
- 第6回：外来語・和製英語の習得(1)
- 第7回：外来語・和製英語の習得(2)
- 第8回：漢語の習得(1)
- 第9回：漢語の習得(2)
- 第10回：漢語と和語の習得(1)
- 第11回：漢語と和語の習得(2)
- 第12回：複合辞の習得
- 第13回：連語の習得(1)
- 第14回：連語の習得(2)

履修上の注意

授業では実証研究の論文等を講読するが、実証研究の背景となる言語理論の枠組みを深く理解するために、追加で文献講読を課す予定である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

教材として論文を講読する。論文は授業内で指示、配布する。

参考書

『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森和子（編）（研究社、2012）

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内でフィードバックを行うほかに、Teamsやメール等でも対応する。

成績評価の方法

課題(40%)、授業参加度(20%)、レポート(40%)

その他

学部の「日本語教育学(語彙)」を履修していない学生は、並行して、あるいは事前に履修すること。

科目ナンバー：(GJ) LIN552J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本語教育学演習 I B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

第二言語の語彙習得に関する、(1)テストを用いた研究、(2)実験研究、および(3)コーパス研究を取り上げ、文献講読と討論を行いながら、(a)言語習熟度による違い、(b)第一言語の影響、(c)習得や記憶に及ぼす要因、(d)理解と産出の違い等について考える。受講生はそれぞれ研究課題を絞り、先行研究のリストアップとレビューの作成が求められる。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：語彙知識の量的側面と文章理解との関係
- 第3回：語彙知識の質的側面と文章理解との関係
- 第4回：修士研究の研究計画立案と発表(1)
- 第5回：第二言語の習得に及ぼす第一言語の知識(1)
- 第6回：第二言語の習得に及ぼす第一言語の知識(2)
- 第7回：修士論文に関する先行研究レビュー(1)
- 第8回：修士研究の研究計画立案と発表(2)
- 第9回：コーパスを用いた第二言語の語彙習得研究(1)
- 第10回：コーパスを用いた第二言語の語彙習得研究(2)
- 第11回：修士論文に関する先行研究レビュー(2)
- 第12回：言語テスト理論に基づく第二言語の語彙習得研究(1)
- 第13回：言語テスト理論に基づく第二言語の語彙習得研究(2)
- 第14回：修士研究の研究計画立案と発表(3)

履修上の注意

授業では実証研究の論文等を講読するが、並行して、各自の修士論文の研究テーマを決定し、調査概要を作成することが求められる。学期末には、先行研究レビュー、研究課題、調査方法等について、詳細な報告が求められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森和子（編）（研究社、2012）

『新・日本語教育のためのコーパス調査入門』李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（くろしお出版、2018）

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールでも適宜フィードバックを実施する。

成績評価の方法

課題(50%)、レポート(40%)、授業参加度(10%)

その他

特になし。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN652J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本語教育学演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森	和子

授業の概要・到達目標

様々な統計処理を用いた第二言語としての日本語の語彙習得研究の実証研究の論文を講読しながら、語彙習得研究の研究課題に即した適切な調査方法と分析方法は何かを学ぶ。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：変数の種類、記述統計
- 第3回：t検定を用いた実証研究
- 第4回：一元配置の分散分析を用いた実証研究
- 第5回：二元配置の分散分析を用いた実証研究(1)
- 第6回：二元配置の分散分析を用いた実証研究(2)
- 第7回：二元配置の分散分析を用いた実証研究(3)
- 第8回：相関関係と因果関係
- 第9回：回帰分析と重回帰分析を用いた実証研究
- 第10回：カイ二乗分析を用いたコーパス研究
- 第11回：多変量解析を用いたコーパス研究
- 第12回：エン트로ピー・冗長度を用いたコーパス研究
- 第13回：因子分析を用いた実証研究
- 第14回：第二言語習得研究における反証可能性の検証方法

履修上の注意

本演習は、実証的な研究論文を読み、その中で使われている統計手法について確認する。授業で扱う統計手法に関しては、必要に応じて解説を行うが、ある程度の予備知識が必要である。受講に際しては、各自統計の基礎的な知識を得ておくこと。また、本演習は日本語教育学演習IA、IBを履修していることが条件である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

『言語研究のための統計入門』石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠(編)(くろしお出版, 2010)

『認知言語学研究の方法』辻幸夫(監修), 中本敬子・李在鎬(編)(ひつじ書房, 2011)

『言語テストの基礎知識』J.D.ブラウン, 和田稔訳(大修館書店, 1999)

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールでも適宜フィードバックを実施する。

成績評価の方法

課題(50%), レポート(40%), 授業参加度(10%)

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN652J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本語教育学演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森	和子

授業の概要・到達目標

受講生が各自収集したデータを扱いながら、研究課題(あるいは、仮説)に即した分析方法を吟味し、考察方法を検討する。また、自らの研究を、(1)新規性、(2)論理性、(3)客観性、(4)反証可能性、(5)再現性等の観点から評価し、それを論文に記述する方法を学びながら、修士論文の完成を目指す。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：修士論文の目次作成の手順
- 第3回：先行研究レビュー
- 第4回：先行研究の知見と研究課題の整合性
- 第5回：研究の意義性と新規性(1)
- 第6回：研究課題と調査方法の整合性
- 第7回：操作的定義の方法
- 第8回：実証研究における統制群、統制条件、中立条件
- 第9回：反証可能性と調査方法の整合性
- 第10回：APAによる図表の記述方法
- 第11回：調査結果の論述方法
- 第12回：考察の妥当性の検証
- 第13回：研究の意義性と新規性(2)
- 第14回：参考文献、要旨の示し方

履修上の注意

本演習は、受講生のそれぞれの修士論文の進捗状況も考慮しながら進めていく。また、本演習は日本語教育学演習IA、IB、ICを履修していることが条件である。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎週課題を課すので、指示に従うように。

教科書

特に指定しない。

参考書

特になし。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールでも適宜フィードバックを実施する。

成績評価の方法

授業への取り組みを基に、総合的に評価する。

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN522J			
英語教育学研究	備考		
科目名	英語教育学演習 I A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語学習の成功や失敗に影響を与える心理的要因に焦点をあてた最新の理論や研究について学ぶ。より具体的には、動機づけを中心とした心理的構成概念に対する理解を深めるとともに、それらの適切な測定方法（統計手法を用いた基本的な分析を含む）や実際の教室場面での活用方法を身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション（授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など）
 - 第2回：Theoretical Approaches to L2 Motivation – Overview
 - 第3回：The Socio-educational Model of Second Language Acquisition
 - 第4回：From Integrative Motivation to Directed Motivational Currents
 - 第5回：The L2 Motivational Self System
 - 第6回：Self-determination and Motivated Engagement in Language Learning
 - 第7回：Complexity Theory and L2 Motivation
 - 第8回：Directed Motivational Currents: Extending the Theory of L2 Vision
 - 第9回：Motivation and Individual Differences
 - 第10回：Emotions Are Motivating
 - 第11回：L2 Motivation and Willingness to Communicate
 - 第12回：The Contexts of SLA Motivation: Linking Ideologies to Situational Variations
 - 第13回：L2 Motivation and Investment
 - 第14回：全体のまとめ
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定する。

参考書

廣森友人（編著）. (2020). 『英語教育論文執筆ガイドブック：ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』大修館書店.

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況（25%）、論文レビュー（25%）、課題発表（50%）により評価する。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN522J			
英語教育学研究	備考		
科目名	英語教育学演習 I B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語学習の成功や失敗に影響を与える心理的要因に焦点をあてた最新の理論や研究について学ぶ。より具体的には、動機づけを中心とした心理的構成概念に対する理解を深めるとともに、それらの適切な測定方法（統計手法を用いた分析を含む）や実際の教室場面での活用方法（リサーチ・プロポーザルの執筆を含む）を身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション（授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など）
 - 第2回：L2 Motivation in Practice – Overview
 - 第3回：Task Motivation
 - 第4回：Motivational Teaching Strategies
 - 第5回：Motivational Group Dynamics in SLA: The Interpersonal Interaction Imperative
 - 第6回：Motivation and Projects
 - 第7回：Motivation in Content and Language Integrated Learning (CLIL) Research
 - 第8回：The Process of Demotivation in Language Learning: An Integrative Account
 - 第9回：Language Teacher Motivation Research: Its Ends, Means and Future Commitments
 - 第10回：Language Mindsets, Meaning-Making, and Motivation
 - 第11回：Motivation and the Unconscious
 - 第12回：Motivation and Flow
 - 第13回：L2 Motivation and Digital Technologies
 - 第14回：全体のまとめ
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習（予習・復習等）の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定する。

参考書

廣森友人（編著）. (2020). 『英語教育論文執筆ガイドブック：ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』大修館書店.

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業（討議含む）への参加状況（25%）、論文レビュー（25%）、課題発表（50%）により評価する。

その他

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN622J			
英語教育学研究		備考	
科目名	英語教育学演習 IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語の学習・指導と認知・社会・文化的要因との関連を扱った先行研究を概観した上で、(1)自らが追求したい研究課題や研究仮説の設定、(2)それらに基づいた調査計画の立案、(3)実際の調査実施と分析・考察、(4)調査結果の報告・公表、といった一連のプロセスを学ぶ。本演習では、とりわけ(1)、(2)に焦点をあてるとともに、研究を遂行する上で必要となる基礎的な研究手法(統計解析)を身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
第2回：研究課題の明確化と先行研究の調査(1)
第3回：研究課題の明確化と先行研究の調査(2)
第4回：研究課題の明確化と先行研究の調査(3)
第5回：研究仮説の設定と研究方法の検討(1)
第6回：研究仮説の設定と研究方法の検討(2)
第7回：研究仮説の設定と研究方法の検討(3)
第8回：予備調査の計画・実施と振り返り(1)
第9回：予備調査の計画・実施と振り返り(2)
第10回：予備調査の計画・実施と振り返り(3)
第11回：本調査の計画と研究発表に向けた準備(1)
第12回：本調査の計画と研究発表に向けた準備(2)
第13回：学生による研究発表と講評(1)
第14回：学生による研究発表と講評(2)
* 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定します。

参考書

廣森友人(編著)。(2020)、『英語教育論文執筆ガイドブック：ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』大修館書店。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN622J			
英語教育学研究		備考	
科目名	英語教育学演習 ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

第二言語の学習・指導と認知・社会・文化的要因との関連を扱った先行研究を概観した上で、(1)自らが追求したい研究課題や研究仮説の設定、(2)それらに基づいた調査計画の立案、(3)実際の調査実施と分析・考察、(4)調査結果の報告・公表、といった一連のプロセスを学ぶ。本演習では、とりわけ(3)、(4)に焦点をあてるとともに、研究を遂行する上で必要となる研究手法(統計解析)を身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
第2回：本調査の実施と振り返り(1)
第3回：本調査の実施と振り返り(2)
第4回：本調査の実施と振り返り(3)
第5回：本調査の実施と振り返り(4)
第6回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較(1)
第7回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較(2)
第8回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較(3)
第9回：調査結果の多角的検討と関連研究との比較(4)
第10回：研究発表に向けた準備と意見交換(1)
第11回：研究発表に向けた準備と意見交換(2)
第12回：研究発表に向けた準備と意見交換(3)
第13回：学生による研究発表と講評(1)
第14回：学生による研究発表と講評(2)
* 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前に入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定します。

参考書

廣森友人(編著)。(2020)、『英語教育論文執筆ガイドブック：ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』大修館書店。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN542J			
英語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	英語教育学演習ⅢA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	大矢 政徳	

授業の概要・到達目標

修士論文作成にあたり、言語学の下位分野についての知見を再復習し、各人の研究テーマ決定を準備する。各回の授業において言語学の下位分野（音韻、音声、形態、統語、語用論など）について取り上げ、主要な論点についての理解を深化させ、かつ必要に応じてコーパスをデータとして利用した研究についても紹介し、学生個人が研究テーマ決定への足掛かりを得ることを企図する。

授業内容

- 第1回：Introduction
 - 第2回：The origin of language
 - 第3回：Animals and human language
 - 第4回：Phonetics
 - 第5回：Phonology
 - 第6回：Morphology
 - 第7回：Generative syntax
 - 第8回：Dependency grammar (1)
 - 第9回：Dependency grammar (2)
 - 第10回：Corpus linguistics (1)
 - 第11回：Corpus linguistics (2)
 - 第12回：Semantics
 - 第13回：Pragmatics
 - 第14回：Review
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

ディスカッション中心の授業なので、課題テキストを読んだから授業に臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

教科書の各章末尾に提示されているDiscussion Topicsについての事前準備
 その他、教科書で取り上げられていないトピックについては、事前に課題テキストを指定する。

教科書

Yule, G. (2017). The study of language (7th ed.). Cambridge University Press.

参考書

Jones, C. & Waller, D. (2015). Corpus linguistics for Grammar. Routledge.

課題に対するフィードバックの方法

各回のレポートを授業内で共有し、コメントを加える。または、授業内プレゼンテーションに対してコメントを加える。

成績評価の方法

授業参加度(30%)、レポート(30%)、発表(40%)を評価する。

その他

特になし

科目ナンバー：(GJ) LIN542J			
英語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	英語教育学演習ⅢB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	大矢 政徳	

授業の概要・到達目標

修士論文のテーマ決定と作成準備を進める。研究テーマの決定には、当該研究分野で何が問題となっているのかについての理解が必要不可欠であり、これに基づいた先行研究資料の検索・収集・読解、テーマによっては適切なコーパスデータの解析を進めていく。各回の研究進捗状況発表会において個々の研究テーマに関連した研究論文の紹介を行い、その理解度の確認と修士論文テーマとの関連について理解を深めることを企図する。

授業内容

- 第1回：Introduction
 - 第2回：Neurolinguistics (1)
 - 第3回：Neurolinguistics (2)
 - 第4回：First language acquisition (1)
 - 第5回：First language acquisition (2)
 - 第6回：Second language acquisition (1)
 - 第7回：Second language acquisition (2)
 - 第8回：Historical linguistics (1)
 - 第9回：Historical linguistics (2)
 - 第10回：Sociolinguistics (1)
 - 第11回：Sociolinguistics (2)
 - 第12回：Language and culture (1)
 - 第13回：Language and culture (2)
 - 第14回：Review
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

ディスカッション中心の授業なので、課題テキストを読んだから授業に臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

教科書の各章末尾に提示されているDiscussion Topicsについての事前準備
 その他、教科書で取り上げられていないトピックについては、事前に課題テキストを指定します。

教科書

Yule, G. (2017). The study of language (6th ed.). Cambridge University Press.

参考書

Jones, C. & Waller, D. (2015). Corpus linguistics for Grammar. Routledge.

課題に対するフィードバックの方法

各回のレポートを授業内で共有し、コメントを加える。または、授業内プレゼンテーションに対してコメントを加える。

成績評価の方法

授業参加度(30%)、レポート(30%)、発表(40%)を評価する。

その他

特になし

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIN642J			
英語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	英語教育学演習ⅢC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	大矢 政徳	

授業の概要・到達目標

修士論文作成を主目的とする。先行研究の収集及び理解、各回の研究進捗状況発表会から得られたフィードバックの反映、データ分析の手法確認と検証を通じて、学術的価値の高い修士論文作成を企図する。各回の授業では、学生個人が検索した学術論文の内容についての発表とディスカッションを行う。春学期期間中に、各自の研究の進捗状況についてのプレゼンテーションを課す(2回)。

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Discussion (1)
- 第3回：Discussion (2)
- 第4回：Discussion (3)
- 第5回：Discussion (4)
- 第6回：Discussion (5)
- 第7回：Presentation (1)
- 第8回：Discussion (6)
- 第9回：Discussion (7)
- 第10回：Discussion (8)
- 第11回：Discussion (9)
- 第12回：Discussion (10)
- 第13回：Discussion (11)
- 第14回：Review; Presentation (2)

* 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

ディスカッション中心の授業なので、先行研究論文を読んでから授業に臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に研究内容と関連の高い先行研究論文を読み、その内容についての発表の準備をすることが求められる。

教科書

使用しない。

参考書

教室内で適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

各回のレポートを授業内で共有し、コメントを加える。または、授業内プレゼンテーションに対してコメントを加える。

成績評価の方法

授業参加度(30%)、レポート(30%)、発表(40%)を評価する。

その他

特になし

科目ナンバー：(GJ) LIN642J			
英語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	英語教育学演習ⅢD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	大矢 政徳	

授業の概要・到達目標

修士論文の完成を目指す。ⅢCまでに蓄積した知見を基盤として、先行研究の再確認、調査結果に対する考察の深化などを通じて、個々の研究の学術的価値の向上を図り、修士論文発表会での完成度の高い研究発表を企図する。英語教育学演習ⅢCと同様、各回の授業では、学生個人が検索した学術論文の内容についての発表とディスカッションを行う。秋学期期間中に、各自の研究の進捗状況についてのプレゼンテーションを課す(2回)。最終プレゼンテーションは、口頭試問の練習とする。

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Discussion (1)
- 第3回：Discussion (2)
- 第4回：Discussion (3)
- 第5回：Discussion (4)
- 第6回：Discussion (5)
- 第7回：Presentation (1)
- 第8回：Discussion (6)
- 第9回：Discussion (7)
- 第10回：Discussion (8)
- 第11回：Discussion (9)
- 第12回：Discussion (10)
- 第13回：Discussion (11)
- 第14回：Review; Presentation (2)

* 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

ディスカッション中心の授業なので、先行研究論文を読んでから授業に臨みましょう。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に研究内容と関連の高い先行研究論文を読み、その内容についての発表の準備をすることが求められる。

教科書

指定しない。

参考書

教室内で適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

各回のレポートを授業内で共有し、コメントを加える。または、授業内プレゼンテーションに対してコメントを加える。

成績評価の方法

授業参加度(30%)、レポート(30%)、発表(40%)を評価する。

その他

特になし

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIT512J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅠA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(学術) 馬場 小百合		

授業の概要・到達目標

日本の古典文学を精読します。
馬場の専門分野は『古事記』や『万葉集』などの上代文学ですが、ゼミにおいて学生が研究の対象とする作品はそれらに限定せず、学生と相談の上で作品やテーマを決定します。
古典文学を研究する上での基本的な辞書・注釈書等の扱い方について学び、自ら新たな問題を立てて調査し、結果を論理的に報告する力を身につけます。
重要な先行研究について批判的に検討し、各自が研究対象とする文学作品について、問いを設定して調査・発表を行い参加者全員でディスカッションを行います。

授業内容

- 第1回：イントロダクション・研究テーマについて
- 第2回：先行研究の整理と批判(1)
- 第3回：先行研究の整理と批判(2)
- 第4回：先行研究の整理と批判(3)
- 第5回：研究発表(1)
- 第6回：研究発表(2)
- 第7回：研究発表(3)
- 第8回：先行研究の整理と批判(4)
- 第9回：先行研究の整理と批判(5)
- 第10回：先行研究の整理と批判(6)
- 第11回：研究発表(4)
- 第12回：研究発表(5)
- 第13回：研究発表(6)
- 第14回：総合討論とまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に共有された論文やテキストを読み、疑問点や批判すべき点を考えてくること。
その他、読むべき資料は適宜指示します。

教科書

教科書はありません。

参考書

適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内に直接コメントします。

成績評価の方法

授業参加度50%、発表50%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIT512J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅠB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(学術) 馬場 小百合		

授業の概要・到達目標

日本の古典文学を精読します。
馬場の専門分野は『古事記』や『万葉集』などの上代文学ですが、ゼミにおいて学生が研究の対象とする作品はそれらに限定せず、学生と相談の上で作品やテーマを決定します。
古典文学を研究する上での基本的な辞書・注釈書等の扱い方について学び、自ら新たな問題を立てて調査し、結果を論理的に報告する力を身につけます。
重要な先行研究について批判的に検討し、各自が研究対象とする文学作品について、問いを設定して調査・発表を行い参加者全員でディスカッションを行います。

授業内容

- 第1回：イントロダクション・研究テーマについて
- 第2回：先行研究の整理と批判(1)
- 第3回：先行研究の整理と批判(2)
- 第4回：先行研究の整理と批判(3)
- 第5回：研究発表(1)
- 第6回：研究発表(2)
- 第7回：研究発表(3)
- 第8回：先行研究の整理と批判(4)
- 第9回：先行研究の整理と批判(5)
- 第10回：先行研究の整理と批判(6)
- 第11回：研究発表(4)
- 第12回：研究発表(5)
- 第13回：研究発表(6)
- 第14回：総合討論とまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に共有された論文やテキストを読み、疑問点や批判すべき点を考えてくること。
その他、読むべき資料は適宜指示します。

教科書

教科書はありません。

参考書

適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中にコメントします。

成績評価の方法

授業参加度50%、発表50%

その他

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIT612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(学術) 馬場 小百合		

授業の概要・到達目標

日本の古典文学を精読します。馬場の専門分野は『古事記』や『万葉集』などの上代文学ですが、ゼミにおいて学生が研究の対象とする作品はそれらに限定せず、学生と相談の上で作品やテーマを決定します。

演習A・Bでの議論を通じて設定した問いをより明確なものとし、調査・分析によって論証を積み上げていきます。修士論文についてアウトラインを構想し、必要な作業や研究計画についての見直しを持つことを目的とします。

授業内容

- 第1回：イントロダクション・研究テーマについて
- 第2回：先行研究の整理と批判(1)
- 第3回：先行研究の整理と批判(2)
- 第4回：先行研究の整理と批判(3)
- 第5回：研究発表(1)
- 第6回：研究発表(2)
- 第7回：研究発表(3)
- 第8回：先行研究の整理と批判(4)
- 第9回：先行研究の整理と批判(5)
- 第10回：先行研究の整理と批判(6)
- 第11回：研究発表(4)
- 第12回：研究発表(5)
- 第13回：研究発表(6)
- 第14回：総合討論とまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に共有された論文やテキストを読み、疑問点や批判すべき点を考えてくること。その他、読むべき資料は適宜指示します。

教科書

教科書はありません。

参考書

適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内に直接コメントします。

成績評価の方法

授業参加度50%、発表50%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIT612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 博士(学術) 馬場 小百合		

授業の概要・到達目標

日本の古典文学を精読します。馬場の専門分野は『古事記』や『万葉集』などの上代文学ですが、ゼミにおいて学生が研究の対象とする作品はそれらに限定せず、学生と相談の上で作品やテーマを決定します。

修士論文の完成に向けて、各論の議論を深め、形式面についても整備します。また、口頭試問に向けて質疑応答の準備も行います。

授業内容

- 第1回：イントロダクション・研究テーマについて
- 第2回：先行研究の整理と批判(1)
- 第3回：先行研究の整理と批判(2)
- 第4回：先行研究の整理と批判(3)
- 第5回：研究発表(1)
- 第6回：研究発表(2)
- 第7回：研究発表(3)
- 第8回：先行研究の整理と批判(4)
- 第9回：先行研究の整理と批判(5)
- 第10回：研究発表(4)
- 第11回：研究発表(5)
- 第12回：質疑応答演習(1)
- 第13回：質疑応答演習(2)
- 第14回：総合討論とまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に共有された論文やテキストを読み、疑問点や批判すべき点を考えてくること。その他、読むべき資料は適宜指示します。

教科書

教科書はありません。

参考書

適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業時間内に直接コメントします。

成績評価の方法

授業参加度50%、発表50%

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) HIS512J			
文化・思想研究	備考		
科目名	文化関係・文化変容演習ⅡA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任講師 博士(文学)	張 佳能	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近代以降の日本の大衆音楽史を中心に、この分野の重要な文献を講読する。アカデミックな音楽研究とは何かを念頭に置き、俯瞰的な視点をもって自らの関心領域と向き合う。

【到達目標】

研究関連のテキスト及び先行研究を正確に読み解く力を培いつつ、学位論文の執筆に向けてアカデミック・ライティングの基礎を固める。研究テーマによってフィールド調査を行う場合は、きちんと学術的な手順を把握し、現実的な調査プランを立てるスキルを身につける。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：テーマ設定
- 第3回：資料調査の方法
- 第4回：先行研究の概観
- 第5回：先行研究の精読
- 第6回：先行研究の課題
- 第7回：問題設定の推敲
- 第8回：一次資料調査の方針
- 第9回：一次資料調査の分析
- 第10回：研究の方向性と可能性
- 第11回：考察と分析1
- 第12回：考察と分析2
- 第13回：考察と分析3
- 第14回：今期の振り返り

履修上の注意

シラバスの進捗は履修者の関心や知識によって調整する場合がある。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめてくること。また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

必要に応じて授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッション50%、研究発表50%

その他

科目ナンバー：(GJ) HIS512J			
文化・思想研究	備考		
科目名	文化関係・文化変容演習ⅡB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任講師 博士(文学)	張 佳能	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近代以降の日本の大衆音楽に関する研究文献を講読し、議論を行う。先行研究の成果を吸収し、そのアプローチを参考にしつつ、学術的な規範に則る論文の執筆を進める。

【到達目標】

音楽研究の基本的な考え方や研究方法を学び、明確な問題意識に基づき自ら思考を言語化できるようになり、最終的に論文の形でまとめられることを目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：テーマ設定
- 第3回：資料調査の方法
- 第4回：先行研究の概観
- 第5回：先行研究の精読
- 第6回：先行研究の課題
- 第7回：問題設定の推敲
- 第8回：一次資料調査の方針
- 第9回：一次資料調査の分析
- 第10回：研究の方向性と可能性
- 第11回：考察と分析1
- 第12回：考察と分析2
- 第13回：考察と分析3
- 第14回：今期の振り返り

履修上の注意

シラバスの進捗は履修者の関心や知識によって調整する場合がある。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめてくること。また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

必要に応じて授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッション50%、研究発表50%

その他

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) HIS612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅡC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任講師 博士(文学)	張 佳能	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近代以降の日本の大衆音楽史を中心に、重要な先行研究について発表し、自らの研究テーマを定める。アカデミックな音楽研究とは何かを念頭に置き、俯瞰的な視点をもって自らの関心領域と向き合う。

【到達目標】

研究関連のテキスト及び先行研究を正確に読み解く力を培いつつ、綿密な研究計画のもとで学位論文の執筆を開始する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究計画の立て方
- 第3回：研究計画の作成と改善(1)
- 第4回：研究計画の作成と改善(2)
- 第5回：研究計画の作成と改善(3)
- 第6回：先行研究の把握と調査
- 第7回：先行研究の分析(1)
- 第8回：先行研究の分析(2)
- 第9回：先行研究の分析(3)
- 第10回：論文の執筆開始に向けて
- 第11回：章立てと方法論(1)
- 第12回：章立てと方法論(2)
- 第13回：章立てと方法論(3)
- 第14回：今期の振り返り

履修上の注意

シラバスの進捗は履修者の関心や知識によって調整する場合がある。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめておくこと。また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

必要に応じて授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッション50%、研究発表50%

その他

科目ナンバー：(GJ) HIS612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅡD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任講師 博士(文学)	張 佳能	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近代以降の日本の大衆音楽史を中心に、自らの研究テーマを定めて論文を執筆する。アカデミックな音楽研究とは何かを念頭に置き、俯瞰的な視点をもって自らの関心領域と向き合う。

【到達目標】

研究関連のテキスト及び先行研究を正確に読み解く力を培いつつ、綿密な研究計画のもとで学位論文を完成させる。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：今期の研究計画の作成
- 第3回：研究計画の見直し(1)
- 第4回：研究計画の見直し(2)
- 第5回：研究計画の見直し(3)
- 第6回：本論文の執筆開始
- 第7回：論文執筆の進捗報告(1)
- 第8回：論文執筆の進捗報告(2)
- 第9回：論文執筆の進捗報告(3)
- 第10回：中間発表
- 第11回：問題点と改善策(1)
- 第12回：問題点と改善策(2)
- 第13回：論文の完成に向けて
- 第14回：論文執筆の振り返り

履修上の注意

シラバスの進捗は履修者の関心や知識によって調整する場合がある。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめておくこと。また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

特に指定しない。

参考書

必要に応じて授業中に指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッション50%、研究発表50%

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIT512J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅢA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近現代日本文学の研究文献を講読し、その内容についてディスカッションする。扱う文献は、研究史において大きなインパクトを持った必読文献や、最先端の研究書、学会誌の最新の論文などである。また、それを参考にしつつ、それぞれが自身の研究上の関心をもとに、研究計画を構想する。

【到達目標】

近現代日本文学研究の課題設定の基本的な考え方や研究方法を身に付け、自身でもそれを踏まえたアプローチを構想できるようになること、その上で学んでおくべき知見を把握し、適切に文献を選択し、議論を理解できるようになることを目標とする。

授業内容

履修者の関心や知識によって進行は異なるが、標準的には下記のような進行を予定している。

- 1 インTRODクダクシヨン テーマの設定
- 2 先行研究を概観する
- 3 先行研究の精読
- 4 先行研究の調査範囲を広げる
- 5 先行研究の精読2
- 6 先行研究の課題の分析
- 7 先行研究を更新するために
- 8 一次資料調査の方針
- 9 一次資料調査の報告とフィードバック
- 10 一次資料の調査範囲を広げる
- 11 一次資料調査の報告とフィードバック2
- 12 一次資料の分析
- 13 分析から考察を導く
- 14 今期のまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめてくること。

また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加度50%、研究発表50%

その他

履修者の関心や、各自が身に付けるべきこと、また人数などに応じて、オーダーメイド的に授業を組み立てていく。

「文化関係・文化変容演習ⅢC」、国際日本学部「国際日本学特別演習A」と合同開講とする。

科目ナンバー：(GJ) LIT512J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅢB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近現代日本文学の研究文献を講読し、その内容についてディスカッションする。扱う文献は、研究史において大きなインパクトを持った必読文献や、最先端の研究書、学会誌の最新の論文などである。また、それを参考にしつつ、自身の研究計画を設定する。

【到達目標】

近現代日本文学研究の課題設定の基本的な考え方や研究方法を身に付け、自身でもそれを踏まえたアプローチを構想できるようになること、先行研究の知見を生かし、またその知見をさらに更新していくための具体的な研究の道筋を付けられるようになることを目標とする。

授業内容

授業の進行は各履修者のテーマや進捗に応じて変わるが、標準的には下記の通り。

- 1 インTRODクダクシヨン テーマの設定
- 2 先行研究を概観する
- 3 先行研究の精読
- 4 先行研究の調査範囲を広げる
- 5 先行研究の精読2
- 6 先行研究の課題の分析
- 7 先行研究を更新するために
- 8 一次資料調査の方針
- 9 一次資料調査の報告とフィードバック
- 10 一次資料の調査範囲を広げる
- 11 一次資料調査の報告とフィードバック2
- 12 一次資料の分析
- 13 分析から考察を導く
- 14 今期のまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめてくること。

また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加度50%、研究発表50%

その他

履修者の関心や、各自が身に付けるべきこと、また人数などに応じて、オーダーメイド的に授業を組み立てていく。

「文化関係・文化変容演習ⅢD」、国際日本学部「国際日本学特別演習B」と合同開講とする。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIT612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅢC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近現代日本文学の研究文献を講読し、その内容についてディスカッションする。扱う文献は、研究史において大きなインパクトを持った必読文献や、最先端の研究書、学会誌の最新の論文などである。また、それを参考にしつつ、自身の研究計画に沿って具体的な成果を出していくことを目指す。

【到達目標】

近現代日本文学研究の課題設定の基本的な考え方や研究方法を身に付け、自身でもそれを踏まえたアプローチを構想できるようになること、研究の具体的な成果を出していくために、適切に資料調査や分析ができるようになることを目標とする。

授業内容

履修者の関心や知識によって進行は異なるが、標準的には下記のような進行を予定している。

- 1 インTRODクシヨN テマの設定
- 2 先行研究を概観する
- 3 先行研究の精読
- 4 先行研究の調査範囲を広げる
- 5 先行研究の精読2
- 6 先行研究の課題の分析
- 7 先行研究を更新するために
- 8 一次資料調査の方針
- 9 一次資料調査の報告とフィードバック
- 10 一次資料の調査範囲を広げる
- 11 一次資料調査の報告とフィードバック2
- 12 一次資料の分析
- 13 分析から考察を導く
- 14 今期のまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめてくること。

また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加度50%、研究発表50%

その他

履修者の関心や、各自が身に付けるべきこと、また人数などに応じて、オーダーメイド的に授業を組み立てていく。

「文化関係・文化変容演習ⅢA」、国際日本学部「国際日本学特別演習A」と合同開講とする。

科目ナンバー：(GJ) LIT612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅢD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

近現代日本文学の研究文献を講読し、その内容についてディスカッションする。扱う文献は、研究史において大きなインパクトを持った必読文献や、最先端の研究書、学会誌の最新の論文などである。また、それを参考にしつつ、研究成果を説得力ある論文の形にまとめる。

【到達目標】

近現代日本文学研究の課題設定の基本的な考え方や研究方法を身に付け、自身でもそれを踏まえたアプローチを構想できるようになること、また、自身で行った研究の成果を論文の形にまとめられるようになることを目標とする。

授業内容

授業の進行は各履修者のテーマや進捗に応じて変わるが、標準的には下記の通り。

- 1 インTRODクシヨN テマの設定
- 2 先行研究を概観する
- 3 先行研究の精読
- 4 先行研究の調査範囲を広げる
- 5 先行研究の精読2
- 6 先行研究の課題の分析
- 7 先行研究を更新するために
- 8 一次資料調査の方針
- 9 一次資料調査の報告とフィードバック
- 10 一次資料の調査範囲を広げる
- 11 一次資料調査の報告とフィードバック2
- 12 一次資料の分析
- 13 分析から考察を導く
- 14 今期のまとめ

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で扱う文献をあらかじめ精読して自分の考えをまとめてくること。

また、自身の研究計画の進捗を随時まとめ、発表に向けて準備を行うこと。

教科書

参考書

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加度50%、研究発表50%

その他

履修者の関心や、各自が身に付けるべきこと、また人数などに応じて、オーダーメイド的に授業を組み立てていく。

「文化関係・文化変容演習ⅢB」、国際日本学部「国際日本学特別演習B」と合同開講とする。

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIT552J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅣA		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学) 鷗戸 聡		

授業の概要・到達目標

修士論文作成のための文献講読, 研究発表を行う。

授業内容

第1回：研究テーマと参考文献の検討
 第2回：文献講読(1)
 第3回：文献講読(2)
 第4回：文献講読(3)
 第5回：文献講読(4)
 第6回：文献講読(5)
 第7回：中間発表
 第8回：文献講読(6)
 第9回：文献講読(7)
 第10回：文献講読(8)
 第11回：文献講読(9)
 第12回：文献講読(10)
 第13回：期末発表
 第14回：総合討議

履修上の注意

日本語の理論的文献のほか, 英語・フランス語など外国語の文献を講読する。

準備学習(予習・復習等)の内容

精密な読解を基調とするため, とりわけ外国語文献の場合は, こまめに辞書を引くこと。

教科書

なし

参考書

受講者の研究テーマに合わせて授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

議論への参加度(50%), 研究発表(50%)。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIT552J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習ⅣB		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学) 鷗戸 聡		

授業の概要・到達目標

修士論文作成のための文献講読, 研究発表を行う。

授業内容

第1回：研究テーマと参考文献の検討
 第2回：文献講読(1)
 第3回：文献講読(2)
 第4回：文献講読(3)
 第5回：文献講読(4)
 第6回：文献講読(5)
 第7回：中間発表
 第8回：文献講読(6)
 第9回：文献講読(7)
 第10回：文献講読(8)
 第11回：文献講読(9)
 第12回：文献講読(10)
 第13回：期末発表
 第14回：総合討議

履修上の注意

日本語の理論的文献のほか, 英語・フランス語など外国語の文献を講読する。

準備学習(予習・復習等)の内容

精密な読解を基調とするため, とりわけ外国語文献の場合は, こまめに辞書を引くこと。

教科書

なし

参考書

受講者の研究テーマに合わせて授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

議論への参加度(50%), 研究発表(50%)。

その他

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) LIT652J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習IVC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	鶴戸 聡	

授業の概要・到達目標

修士論文作成のための文献講読, 研究発表を行う。

授業内容

第1回：研究テーマと参考文献の検討
第2回：文献講読(1)
第3回：文献講読(2)
第4回：文献講読(3)
第5回：文献講読(4)
第6回：文献講読(5)
第7回：中間発表
第8回：文献講読(6)
第9回：文献講読(7)
第10回：文献講読(8)
第11回：文献講読(9)
第12回：文献講読(10)
第13回：期末発表
第14回：総合討議

履修上の注意

日本語の理論的文献のほか, 英語・フランス語など外国語の文献を講読する。

準備学習(予習・復習等)の内容

精密な読解を基調とするため, とりわけ外国語文献の場合は, こまめに辞書を引くこと。

教科書

なし

参考書

受講者の研究テーマに合わせて授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

議論への参加度(50%), 研究発表(50%)。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIT652J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容演習IVD		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	鶴戸 聡	

授業の概要・到達目標

修士論文作成のための文献講読, 研究発表を行う。

授業内容

第1回：研究テーマと参考文献の検討
第2回：文献講読(1)
第3回：文献講読(2)
第4回：文献講読(3)
第5回：文献講読(4)
第6回：文献講読(5)
第7回：中間発表
第8回：文献講読(6)
第9回：文献講読(7)
第10回：文献講読(8)
第11回：文献講読(9)
第12回：文献講読(10)
第13回：期末発表
第14回：総合討議

履修上の注意

日本語の理論的文献のほか, 英語・フランス語など外国語の文献を講読する。

準備学習(予習・復習等)の内容

精密な読解を基調とするため, とりわけ外国語文献の場合は, こまめに辞書を引くこと。

教科書

なし

参考書

受講者の研究テーマに合わせて授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

議論への参加度(50%), 研究発表(50%)。

その他

主要科目

科目ナンバー：(GJ) PHL512J			
文化・思想研究	備考		
科目名	日本思想演習 I A		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部 仁	

授業の概要・到達目標

この授業では、履修者の研究にとって重要であると考えられる古典的著作を取り上げて読む予定である。その一例として西田幾多郎の『善の研究』についての授業計画を記す。
日本の哲学の古典として知られる『善の研究』(1911)の「骨子」を記した第二編「実在」を読み、西田の哲学の立場を理解するとともに、その射程について考える。

授業内容

- 第1回 導入(1)『善の研究』について
- 第2回 導入(2)「純粹経験」について
- 第3回 導入(3)ジェイムズとヘーゲルからの影響
- 第4回 『善の研究』第2編第1章「考究の出发点」
- 第5回 『善の研究』第2編第2章「意識現象が唯一の実在である」
- 第6回 『善の研究』第2編第3章「実在の真景」
- 第7回 『善の研究』第2編第4章「真実在はつねに同一の形式を有っている」
- 第8回 『善の研究』第2編第5章「真実在の根本的方式」
- 第9回 『善の研究』第2編第6章「唯一実在」
- 第10回 『善の研究』第2編第7章「実在の分化発展」
- 第11回 『善の研究』第2編第8章「自然」
- 第12回 『善の研究』第2編第9章「精神」
- 第13回 『善の研究』第2編第10章「実在としての神」
- 第14回 まとめとディスカッション

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

西田幾多郎『善の研究』(どの版でもかまいません)

参考書

授業中に紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特にありません。

科目ナンバー：(GJ) PHL512J			
文化・思想研究	備考		
科目名	日本思想演習 I B		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部 仁	

授業の概要・到達目標

この授業では、履修者の研究にとって重要であると考えられる古典的著作を取り上げて読む予定である。その一例として九鬼周造の『偶然性の問題』についての授業計画を記す。
『偶然性の問題』(1935)は哲学上で非常に重要な概念である「偶然」を丁寧に論じたものである。それは、テキストを読む中で「偶然」についてのさまざまな見方を知ることができるという点でも、また、九鬼の「偶然」についての独自の見方を学ぶことができるという点でも重要である。

授業内容

- 第1回 導入(1)偶然性とは何か
- 第2回 導入(2)定言的偶然・仮説的偶然・離接的偶然
- 第3回 導入(3)因果性と目的性における偶然
- 第4回 『偶然性の問題』講読(1)ミランダ王の問い
- 第5回 『偶然性の問題』講読(2)偶然性と意味
- 第6回 『偶然性の問題』講読(3)偶然性と科学
- 第7回 『偶然性の問題』講読(4)偶然性と時間
- 第8回 『偶然性の問題』講読(5)偶然性と歴史
- 第9回 『偶然性の問題』講読(6)偶然性と事実
- 第10回 『偶然性の問題』講読(7)原始偶然
- 第11回 『偶然性の問題』講読(8)偶然性と運命
- 第12回 『偶然性の問題』講読(9)偶然性と他者性
- 第13回 『偶然性の問題』講読(10)偶然性と宗教
- 第14回 まとめとディスカッション

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

九鬼周造『偶然性の問題』(岩波文庫)

参考書

授業中に紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特にありません。

博士前期課程

主要科目

科目ナンバー：(GJ) PHL612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本思想演習IC		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

明治時代以降の日本の思想を考察する際には、それに影響を与えたさまざまな思想伝統の意義を十分に認識しておくことがとりわけ重要です。この授業では「自己」に焦点をあて、キェルケゴールの『死にいたる病』を読みます。『死にいたる病』は「自己」について考える際の古典的著作であり、ヨーロッパの実存哲学にも、また近代の日本思想にも大きな影響を与えています。

授業内容

- 第1回：キェルケゴールの生涯
- 第2回：キェルケゴールにおける宗教
- 第3回：キェルケゴールにおける自己(1)：自己の自己関係性あるいは閉鎖性
- 第4回：キェルケゴールにおける自己(2)：自己関係の自己にとつての他者
- 第5回：まとめ
- 第6回：絶望(1)：絶望が死にいたる病であること
- 第7回：絶望(2)：絶望しているという自覚のない絶望
- 第8回：絶望(3)：有限性と無限性の絶望
- 第9回：絶望(4)：可能性と必然性の絶望
- 第10回：まとめ
- 第11回：絶望(5)：自己自身であろうと欲しない絶望
- 第12回：絶望(6)：自己自身であろうと欲する絶望
- 第13回：絶望と罪
- 第14回：まとめ

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

キェルケゴール『死にいたる病』(どの版を用いるかについては、第1回の授業で指示します。)

参考書

授業中に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) PHL612J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本思想演習ID		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

西谷啓治の『宗教とは何か』(1961)を読みます。この西谷の主著は、日本人哲学者の著作としては国外で最もよく読まれているものの一つです。この授業では、この著作の立場である「空」の立場とはどのような立場であるのかについて考え、さらに、空の立場における「自己」について考えます。その際、西谷の立場の独自性を際立てるために、この著作に大きな影響を与えているハイデガーの「世界内存在」概念に注目します。

授業内容

- 第1回：西谷の生涯
- 第2回：宗教とは何か(1)：宗教は何のためにあるか、という思考方法について
- 第3回：宗教とは何か(2)：リアリティについて
- 第4回：宗教とは何か(3)：意識というあり方について
- 第5回：宗教とは何か(4)：ニヒリズムについて
- 第6回：宗教とは何か(5)：悪と罪について
- 第7回：まとめ
- 第8回：宗教における人格性と非人格性(1)：宗教と科学
- 第9回：宗教における人格性と非人格性(2)：宗教と道徳
- 第10回：虚無と空(1)：空について
- 第11回：虚無と空(2)：火は火を焼かない
- 第12回：空の立場(1)：空と自己
- 第13回：空の立場(2)：回互
- 第14回：まとめ

履修上の注意

履修者の関心によって、テキストを変更する可能性があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

テキストを予め読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

『宗教とは何か』西谷啓治(創文社)(単行本版でも著作集版でも可)

参考書

授業中に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

授業中の発表によって評価します。

その他

特にありません。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) IND511J			
その他	備考		
科目名	国際日本学総合研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	小谷瑛輔、森川嘉一郎、呉在烜、 ピニロス マツダ、デレク K.、岸磨貴子、小森和子、 青山拓実、大須賀直子、張佳能、馬場小百合、 宮本大人、平井達也、廣森友人		

授業の概要・到達目標

本科目は、国際日本学とは何かを考えつつ、本研究科でおこなわれているさまざまな研究を、その方法も含めて具体的に知ること、それを通して自分の研究の意義を理解することを目的とする。履修者には、とくに、自分とは異なる専門領域についての理解を深め、それによって、視野を広げるとともに自分の領域を相対化する機会としてもらいたい。

第一回における国際日本学研究の概要説明の後、各研究領域の教員が、当該研究領域の研究を概観するとともに、いくつかの研究事例を取り上げて、方法や手順とともにそれを解説するという形で授業をすすめる。最終回には履修者に、それまでの授業をふまえて、自分自身の研究テーマを発表してもらう予定。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
(本授業の目的/進め方、国際日本学研究の概略、研究倫理教育等)
- 第2回：ポップカルチャー研究の概観と方法1
- 第3回：ポップカルチャー研究の概観と方法2
- 第4回：企業・メディア・コンテンツ研究の概観と方法1
- 第5回：企業・メディア・コンテンツ研究の概観と方法2
- 第6回：多文化共生・異文化間教育研究の概観と方法1
- 第7回：多文化共生・異文化間教育研究の概観と方法2
- 第8回：日本語学・日本語教育学研究の概観と方法1
- 第9回：日本語学・日本語教育学研究の概観と方法2
- 第10回：英語教育学研究の概観と方法1
- 第11回：英語教育学研究の概観と方法2
- 第12回：文化・思想研究の概観と方法1
- 第13回：文化・思想研究の概観と方法2
- 第14回：各自の研究計画によるディスカッション

履修上の注意

各自の研究テーマについて、定期的に指導教員と相談しながら授業を履修すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究分野ごとに講義のシラバスに掲げられている参考書等を事前に読んでおくことが望ましい。

教科書

特に指定しない。必要に応じて、プリントを配布する。

参考書

本研究科講義科目のシラバス中に掲げられている参考書。

課題に対するフィードバックの方法

各回の担当教員により異なる。

成績評価の方法

各研究領域（6領域）のテーマごとの課題（各14点×6）、第14回授業における評価（16点）に基づき、総合的に評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) ART511E			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	視覚文化研究（演劇）		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授	博士（文学）	萩原 健

授業の概要・到達目標

We will read and discuss Augusto Boal's *Theatre of the Oppressed*. Originally published in Buenos Aires in 1973, the book has been read and applied repeatedly by practitioners around the world. In 2026, we will read it and discuss how theatrical practices can empower various groups of "oppressed" people.

授業内容

(as of January 2026)

- Week 1: Course introduction; discussion about research objects of the participants
- Week 2-4: Chapter 1 (42p); Aristotle's Coercive System of Tragedy
- Week 5-6: Chapter 2 (27p); Machiavelli and the Poetics of Virtù
- Week 7-8: Chapter 3 (25p); Hegel and Brecht: The Character as Subject or the Character as Object?
- Week 9-11: Chapter 4 (41p); Poetics of the Oppressed
- Week 12-13: Chapter 5 (33p); Development of the Arena Theatre of São Paulo
- Week 14: Roundup

履修上の注意

Active discussion in class is expected, and Japanese will be used when needed.

準備学習（予習・復習等）の内容

In the first session, the turn of presentation is determined. In each following session, a particular student gives a presentation and summarizes one section of the textbook. All students are required to have read the section prior to the session.

教科書

Boal, Augusto: *Theatre of the Oppressed*, New Edition. London: Pluto Press, 2008.

参考書

None.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Active participation in class: 60%
Final paper: 40% - Students will write about own research object in relation to some of the sections above.

その他

None.

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究A		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

K-POPの人気はいまや世界中を席巻しています。K-POPの男性アイドルが体現する美意識は、アジア各国の男性の美意識を塗り替え、男性のお化粧も珍しいことではなくなりつつあります。一方、「ガールクラッシュ」と呼ばれるK-POPの女性アイドル像は、強くてカッコいい新しい女性像を打ち出しました。つまりK-POPはそれまでのジェンダー観を打ち破るような影響力を持っているといえます。それゆえにK-POPはLGBTsつまりクィアなファンからも注目を集めています。そうしたクィアなファンとシスヘテロのファンの間には葛藤もありました。今回はこのK-POPとクィアの関係をさまざまな側面から考えます。

毎週ひとつずつ論文を読みますが、レポーターは当該論文のレジュメをつくり、コメンテーターは、その論文で取り上げられているテーマに関連した発表をした上で、その回のテーマに沿ったディスカッションテーマを提案してください。それを受けてグループディスカッションを行い、最後にその結果を皆に報告してまとめる形式で進めていきます。一方的な講義形式ではない、双方向的な参加型のディスカッションゼミです。

「K-POP」というテーマに関心がある人ばかりでなく、ジェンダーやセクシュアリティ、ポップカルチャーの現在に関心のある人の参加を歓迎します。毎年、取り上げるテーマが変わりますので、これまでの回をすでに履修した人の参加も歓迎します。

ディスカッションによる延長が多くなると考えられますので、前の時間から始まります。履修の案内も「一つ前の時間」(時間割が5限なら4限、6限なら5限)に行いますので、時間を間違えないで出席してください。

授業内容

- 第1回：イントロダクションと役割分担
- 第2回：K-POPをクィアリングする
- 第3回：世代論から読み解くK-POPのクィアネス
- 第4回：K-POPとK-POPの「ゲイの歌姫」
- 第5回：男性アイドルが好きなレスビアン
- 第6回：BL、幻想、欲望と「当事者性」
- 第7回：「アルペス」：男性同士のカップリング小説という文化
- 第8回：女性同士のファンフィクション
- 第9回：男性アイドルのアルペス文化におけるトランス嫌悪
- 第10回：非女性的なアイドル：トムボーイ・ガールクラッシュ...
- 第11回：クィア・フェミニストがガールズグループを愛する方法
- 第12回：K-POPのジェンダー・クィアな美学
- 第13回：アイドルが遂行するトランス・フェミニズム
- 第14回：まとめ

履修上の注意

レポーターはその章で扱われている要点のまとめが役割ですが、コメンテーターにあたった個人あるいはグループは、その章で語られている内容の発展的な例示、たとえば他の文献を読んだ資料・論点の提示や、具体的なコンテンツの動向、社会的な視点や他国の視点からの問題提起など、有用なディスカッションを行うことができるような問題提起が求められます。

ディスカッションによる延長が考えられるので、後の時間も確保できることが望ましい。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回テキストを読んで参加するようにしてください。また、テキストで取り上げられている問題提起について、国による状況の違いの解説やケーススタディの報告を歓迎します。

教科書

ヨン・ヘウォン編著『K-POPはなぜマイノリティを惹きつけるのか』、河出書房新社、2024年

参考書

特にありません。

課題に対するフィードバックの方法

演習の中で発表してもらいますので、その場で講評を行います。レポーターは前日までにレジュメを送って、形式などのチェックを受けること。

成績評価の方法

発表(60%) ディスカッションへの貢献度(30%) その他(出席など日常的評価10%)。とくに理由のない3回以上の欠席は履修放棄とみなします。

その他

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究B		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

日本のマンガは、その99%がまず「雑誌」に掲載され、それから単行本になることに最も大きな特徴がある。つまり作品の成立は「掲載誌」の性格と切り離すことができない。本科目では、その一次資料である雑誌の性格を押さえ、具体的にデータを取ってその結果を分析・発表することで、「調査」によって自分なりに新しいことを発見できる基礎力を養う。

データ調査はたいへんではあるが、大きな発見もあり、修論を書く上で非常に大きな力になる。院生の場合とはくに、特定の雑誌の傾向の分析にとどまらず、自分でテーマを決めて対象範囲をしぼって調べる、といった実践に力を入れる予定である。

授業内容

- 第1回：イントロダクション～雑誌調査データ表とその成果について
- 第2回：役割分担と基準の検討
- 第3回：国会図書館にて調査実践
- 第4回：(その他の)図書館にて調査実践
- 第5回：雑誌A中間発表
- 第6回：雑誌B中間発表
- 第7回：雑誌C中間発表
- 第8回：テーマA中間発表
- 第9回：テーマB中間発表
- 第10回：雑誌A本発表
- 第11回：雑誌B本発表
- 第12回：雑誌C本発表
- 第13回：テーマA本発表
- 第14回：テーマB本発表

履修上の注意

実際には2コマ続きで授業を行うので、前の時間も履修時間を確保すること。(とくに後半)

雑誌研究であれば、調べるのは5年おきの10冊程度になりますが、それぞれ詳細なデータをとっていくので、1冊3時間くらいはかかります(テーマを絞って調査する場合はまた別の時間配分になります)。それをデータ分析表に記入し、分析結果をグラフにまとめ、特徴を見極めて、見えてきたことを発表します。

テーマを設定する場合は、テーマの選び方と調査対象の選び方が大切です。時間のかかる地道な作業ですが、間違いなく研究力の基礎になります。

準備学習（予習・復習等）の内容

雑誌研究であれば、調べるのは5年おきの10冊程度になりますが、それぞれ詳細なデータをとっていくので、データをとるだけで1冊3時間くらいはかかります(テーマを絞って調査する場合は、また別の時間配分になる)。それをデータ分析表に記入し、分析結果をグラフにまとめ、特徴を見極めて、見えてきたことを発表します。発表の仕方、見やすいデータのまとめ方にも留意してください。

教科書

履修者が選ぶ雑誌やテーマに応じて指定します。

参考書

『藤本由香里ゼミ卒論・修論集』1～10

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

発表(60%)、調査データ表(25%)、ディスカッション(15%)。特段の事情のない3回以上の欠席は履修放棄とみなします。

その他

特になし。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究C		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授	森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮、さらにはライトノベルやVTuberなど関連する諸領域は、さまざまな国で人気を博すようになったことから、政府は「クールジャパン」と枠付け、輸出を推進するようになった。併行して企業や自治体では、広報や販売促進の強力なツール、さらには観光資源としてとらえるようになり、多種多様な形でビジネスや公共事業に活用するようになった。美術館等文化施設でも、展覧会が頻繁に催されるようになってきている。

他方で、かつては低俗なサブカルチャーともみなされていたことから、今も世代や個人によって、イメージや文化的な位置付け方がまちまちの様相となっている。その複雑さの大きな要因の一つとして、日本において、マンガ・アニメ・ゲーム・特撮にまたがるサブカルチャーの一角が、「おたく」という人物像と強い結び付きを形成してきたことが見出される。その結び付きは、美少女キャラクターの絵柄や「やおい」をはじめ、日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮を国際的に特徴付ける作風や様式の源泉にもなってきた。

本講では、日本のマンガ・アニメ・ゲーム・特撮の商業的価値や、公共的利活用の増大により、「おたく」との結び付きがどのような複雑さ帯びる状況を多角的に講ずるとともに、そのような状況を踏まえて研究対象として扱うための演習を行う。

授業内容

- 第1回：マンガ・アニメ・ゲーム・特撮と少子化(1)
- 第2回：マンガ・アニメ・ゲーム・特撮と少子化(2)
- 第3回：マンガ・アニメ・ゲーム・特撮とジェンダー (1)
- 第4回：マンガ・アニメ・ゲーム・特撮とジェンダー (2)
- 第5回：「おたく」の人物像とその変遷(1)
- 第6回：「おたく」の人物像とその変遷(2)
- 第7回：アニメとスポンサーとキャラクター商品(1)
- 第8回：アニメとスポンサーとキャラクター商品(2)
- 第9回：課題成果中間発表
- 第10回：魔法少女アニメの発達と変遷
- 第11回：同人文化の発達と変遷
- 第12回：マンガ・アニメ・ゲーム・特撮の展示
- 第13回：マンガ・アニメ・ゲーム・特撮の原画類とアーカイブ構築
- 第14回：課題成果最終発表

履修上の注意

発表や提出物は英語でも可とする。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で取り上げたトピックに関し、各々の研究テーマと関わりについて、文献等によって知見を補強すること。

教科書

使用しない。

参考書

講義中、適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

小課題および本課題それぞれについて、個々の研究進捗や成果の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

課題に対する発表(40%)と提出物(60%)によって評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究D		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

日本のアニメーション史概説。アニメーションを論じる基本的な観点を押さえた上で、戦前、戦中から戦後、現在までの主要な作品について見ていく。

授業内容

- 第1回：なぜアニメーションの歴史が問題になるのか
- 第2回：戦前・戦中のアニメーション―「桃太郎 海の神兵」と「くももちゅうりっぷ」―
- 第3回：東映動画の仕事(1)―日本初の大規模アニメーション会社の出発―
- 第4回：東映動画の仕事(2)―長編動画製作体制の確立―
- 第5回：「アニメ」の始まり―虫プロの設立と「鉄腕アトム」―
- 第6回：東映動画の仕事(3)―高畑勲と宮崎駿の台頭―
- 第7回：「劇画」からアニメへ―「あしたのジョー」の場合―
- 第8回：東映動画からテレビアニメへ(1)―二つの「ルパン三世」―
- 第9回：東映動画からテレビアニメへ(2)―「アルプスの少女ハイジ」と「未来少年コナン」―
- 第10回：タツノコプロの仕事
- 第11回：「アニメ」の青年期―「宇宙戦艦ヤマト」と「機動戦士ガンダム」―
- 第12回：「アニメ」の自意識―「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」―
- 第13回：「アニメ」をいったん終わらせる―GAINAXと「新世紀エヴァンゲリオン」―
- 第14回：ネット時代のアニメ―「ほしのこえ」以後―

履修上の注意

授業内容についての積極的な質問を歓迎する。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回で取り上げる作品を極力見ておくこと。

教科書

用いない。

参考書

その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内、またはオーメイジを通じてコメントする。

成績評価の方法

期末レポート、または授業内での発表等、受講者数に応じて、初回、または第2回までに決定する。

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究E		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任教授 博士(理学) 福地 健太郎		

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー研究Eでは、コンピュータゲームの歴史と現状について学ぶ。インタラクティブメディアとしてのコンピュータゲームの特性を踏まえながら、ゲームならではの表現・演出技法を主に扱う。インタラクティブ技法やキャラクター演出に基づいたゲームの批評分析を、講義中のディスカッションやレポート作成を通じて学ぶ。

講義を通じて、インタラクティブメディア特有の分析批評の手法を深く理解し、また先行するポップカルチャーと比較分析する考え方を身につけることを目標とする。

授業内容

- 第1回：概要説明
- 第2回：コンピュータゲーム前史
- 第3回：コンピュータゲーム史の概観
- 第4回：グラフィクス表現1
- 第5回：グラフィクス表現2
- 第6回：ゲームシステム論
- 第7回：インタフェースの発達とインタラクティブデザイン
- 第8回：ディスカッション：インタラクティブに注目したゲーム論
- 第9回：キャラクター表現と演出
- 第10回：オープンワールドゲーム設計
- 第11回：ゲーム環境と社会
- 第12回：ポップカルチャー
- 第13回：ゲーム研究の手法
- 第14回：ディスカッション：ゲーム表現論

履修上の注意

本講義では、前半の講義内容を基にした分析レポートと、後半の講義内容を加味した総合レポートの二度のレポート提出が求められる。それぞれのレポートについて提出締切前に設けられたディスカッションの回においてレポートの内容について受講者を含めた全員と議論する機会がある。論点を絞り、ディスカッションに臨むこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

講義資料は事前に配布されているので、予習においては講義資料を確認し、自分の研究と関連するトピックを調べておくこと。

また講義で学んだ内容を応用した分析批評を、各自で選んだテーマに対して試みる。必要に応じて「参考書」として挙げた文献を援用するとよい。

教科書

特になし。

参考書

- 『現代ゲーム全史』中川大地、早川書房
- 『日本デジタルゲーム産業史』小山友介、人文書院
- 『ビデオゲームの美学』松永伸司、慶應義塾大学出版会
- 『クロフォードのインタラクティブデザイン論』クリス・クロフォード、オーム社
- 『日本の「ゲームセンター」史』川崎寧生、福村出版
- 『僕たちのゲーム史』さやわか、講談社
- "Replay: The history of video games" Tristan Donovan, Yellow Ant
- "Playing at the World" Jon Peterson, Unreason Press
- "Half-real: Video games between Real Rules and Fictional Worlds" Jesper Juul, The MIT Press (邦訳『ハーフリアル: 虚実のあいだのビデオゲーム』ニューゲームズオーダー)

課題に対するフィードバックの方法

分析レポートの準備稿に対するフィードバックは、第8回のディスカッション中に行う。提出された分析レポートへのコメントは第14回のディスカッション冒頭で行う。また同じ回にて、総合レポートの準備稿を発表してもらいそれを元に議論するが、その過程で準備稿に対するフィードバックを口頭で行う。

成績評価の方法

二つのレポートの評価を合計して成績とする。

以下の割合で評価する：

- ・分析レポート:30%
- ・総合レポート:70%

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究F		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師	氷川 竜介	

授業の概要・到達目標

アニメビジネス通史。1963年の『鉄腕アトム』以後、半世紀におよぶアニメビジネスの変遷と発展、主要ジャンルの変化を社会や産業、メディアの変化に照らし合わせて総覧する。そこに見てとれる文化的特徴を研究することで日本製アニメの独自性を理解し、未来像を展望する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：1960年代前半:アニメ文化はSFヒーローとお菓子のオマケから始まった
- 第3回：1960年代後半:高度成長の行き詰まり、怪奇とスポーツものの台頭とビジネス
- 第4回：1970年代前半:ロボットアニメの出現、CM的アニメと特撮文化のクロスオーバー
- 第5回：1970年代後半:テレビまんが時代からの脱皮、思春期アニメの台頭と商材の変化
- 第6回：1980年代前半:ガンダムとプラモデルの蜜月、オリジナルアニメの時代
- 第7回：1980年代後半:オリジナルアニメ冬の時代、ゲーム文化の台頭
- 第8回：バブル経済期のアニメ:80年代合作ブームとビデオソフト文化
- 第9回：1990年代前半:児童向け玩具への回帰とネット文化の夜明け
- 第10回：1990年代後半:作品自体がビジネスと直結、「もののけ姫」と「エヴァンゲリオン」
- 第11回：2000年代前半:21世紀=デジタル時代のDVDビジネスと国際化
- 第12回：2000年代後半:深夜アニメビジネスのピーク、ネット配信、デジタル放送時代
- 第13回：2010年代前半:マルチウィンドウ時代のアニメビジネス
- 第14回：2010年代後半以降と将来展望:映画と配信時代、ビジネスと作品性の変化

履修上の注意

事前視聴が推奨または必須となる作品タイトル、話数などは指定する。

準備学習（予習・復習等）の内容

各年代の代表作品につき、事前に概要を調べておくこと。また、日本の近代史、戦後文化史などについても、概要を調べておくこと。

教科書

使用しない。

参考書

KADOKAWA発行、氷川竜介著「日本アニメの革新 歴史の転換点となった変化の構造分析(角川新書)」2023年3月10日 その他、中野図書館に氷川竜介の同人誌「ロトさんの本」があるため、必要なものを参照のこと。適宜、必要な資料を配布する。

課題に対するフィードバックの方法

リアクションペーパーを毎週提出し、それに対する指導教官の講評をOh-of Meijiで毎週公開する。質問や疑問は放置せず、必ずそのつど提出すること。

成績評価の方法

採点はレポート評価を70%、授業への参加度、授業態度等を30%とする。レポートは毎回のリアクションペーパーの他、期末レポートをA4サイズ2枚程度で提出。授業内容から得られた知見、自分なりの新しい視点などを織りこみ、可能であれば自身の研究内容に関連づけること。難しい場合は、講義の感想でも良い。触発された視点、理解度、受講者各自の独自性を高く評価する。

その他

日本のアニメ史はいくつか書かれているが、作品・作家に寄せたものが多い。しかし、商業アニメの場合は産業的側面が内容に大きく影響しているため、その理解が必要である。日本のアニメ年表には出てこない「80年代合作ブーム」など、本講義でしか得られない知見を多く盛りこみ、俯瞰的な視点をあたえる所存である。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究G		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師	氷川 竜介	

授業の概要・到達目標

アニメ表現論。日本で独自に発展したアニメ文化の特質を知るために、表現に関する諸要素の分類と機能、的確な用語と役割を知る。適宜、海外との比較や歴史的経緯も参照し、一部クリエイターについては、「以前以後」で語られる表現の特徴を述べる。デジタル時代以後の表現についても掘り下げる。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：作画：アニメーションの根源となる運動
- 第3回：脚本：ストーリーとドラマを決定づける
- 第4回：絵コンテ：時空間の連続性を設計する
- 第5回：演出：フィルム品質に責任をもつ
- 第6回：撮影と編集：平面の画に奥行きをもたらす技術
- 第7回：エフェクトアニメ：日本で独自発展した特殊作画発展史
- 第8回：音楽と音響：質感と実在感をあたえる音
- 第9回：美術：舞台と世界観を決めるもの
- 第10回：設定：キャラクターとメカのデザイン論
- 第11回：レイアウトシステム：独特のリアリティを生み出す作画法
- 第12回：デジタル時代とCG：コンピュータ導入による表現拡張
- 第13回：必見作品と作家
- 第14回：まとめと今後の展望

履修上の注意

事前視聴が推奨または必須となる作品タイトル、話数などは講義中に指定する。図版、映像を講義内で参照しつつ進める。

準備学習（予習・復習等）の内容

手近なメイキング書籍、雑誌、映像などに目を通し、工程の概略を知っておくこと。富野由悠季著「映像の原則」など、「画（動く絵）で表現すること」の理論的な書籍を推奨。その他、必要に応じて指定し、コピーなどで抜粋を配布する。

教科書

使用しない。

参考書

中野図書館に氷川竜介の同人誌「ロトさんの本」があるため、必要なものを参照のこと。適宜、必要な資料を配布する。

課題に対するフィードバックの方法

リアクションペーパーを毎週提出し、それに対する指導教官の講評をOh-of Meijiで毎週公開する。質問や疑問は放置せず、必ずそのつど提出すること。

成績評価の方法

採点はレポート評価を70%、授業への参加度、授業態度等を30%とする。レポートは毎回のリアクションペーパーの他、期末レポートをA4サイズ2枚程度で提出。授業内容から得られた知見、自分なりの新しい視点などを織りこみ、可能であれば自身の研究内容に関連づけること。難しい場合は、講義の感想でも良い。触発された視点、理解度、受講者各自の独自性を高く評価する。

その他

日本のアニメ評論の多くは、作品・作家をテキスト論で解説するものが主流である。しかし、小説や漫画とすべてを同列に論じることが可能なものであれば、多大な人的リソースとコストを投入して映像化する必要はない。その一方で「アニメのメイキング」は専門学校生が制作現場に入るためのスキル、ノウハウ本としてしか書かれていない。「アニメの映像が何を伝えているか」という点は空洞化して、映像としての評価手法が貧弱である。

本講義では「映像が物語る」という原点を重視し、商業アニメを制作するための作業を分析して、どのような非言語的伝達を何を実現しているのか、掘り下げる。市販書籍などではまだ書かれていない、本講義だけの知見を多く盛りこむ予定である。

科目ナンバー：(GJ) POP511J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	ポップカルチャー研究I		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

日本の戦後漫画の展開を、少年漫画については主にスポーツを題材にした作品を取り上げ、少女漫画については主に恋愛を題材にした作品を取り上げ、それぞれ概観する。戦後漫画史の概略を、その主題と表現の両面に即して把握できるようになることが目標である。

授業内容

- 第1回 授業の主題と形態の説明+「SLAM DUNK」を読む(1)
- 第2回 「SLAM DUNK」を読む(2)
- 第3回 「魔球はどこへ消えた？」(1)
- 第4回 「魔球はどこへ消えた？」(2)
- 第5回 「魔球はどこへ消えた？」(3)
- 第6回 スポーツ漫画における練習観・スポーツ観の変容
- 第7回 多様化するスポーツ漫画－80年代以降
- 第8回 「NANA」を読む
- 第9回 少女マンガというジャンルの独自性はどのように形成されたか(1)－「リボンの騎士」と高橋真琴－
- 第10回 少女マンガというジャンルの独自性はどのように形成されたか(2)－『少女クラブ』の冒険－
- 第11回 少女マンガというジャンルの独自性はどのように形成されたか(3)－「24年組」の周辺で何が起こっていたか－
- 第12回 少女漫画の1970年代後半、「乙女ちっく」の時代
- 第13回 80年代の恋愛漫画－紡木たく「ホットロード」、終あおい「星の瞳のシルエット」など
- 第14回 90年代以降の恋愛漫画－「ハチミツとクローバー」、「坂道のアポロン」など

履修上の注意

遅刻・欠席する際や、事情があってオンライン受講を希望する場合は、下記にメールで連絡すること。
hrhtm2002@yahoo.co.jp

準備学習（予習・復習等）の内容

今回の授業に関わる小課題に取り組むこと

教科書

用いない

参考書

その都度指示する

課題に対するフィードバックの方法

授業内、またはオーメージを通じてコメントする。

成績評価の方法

毎週の小課題(4000字以上)：20%、期末課題(4000字以上)：80%

その他

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) COM561J			
日本社会・産業システム研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本社会・産業システム研究 (情報産業)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(学術) 田中 絵麻		

授業の概要・到達目標

情報産業は、多様な産業の基盤産業となっています。また、新技術による産業構造の変化もあり、関連産業のすそ野も広いことから、学際的な研究領域となっています。加えて、情報産業は、他のインフラが提供する財と比較して多彩なサービス、財を供給しています。総務省の産業分類では、情報通信産業には、通信、放送、ソフトウェア、情報制作(映像・新聞・出版・ニュース)、機器製造業、広告、印刷、娯楽(映画館)、研究が分類されています。本講義では、これらを総称して情報産業と呼びます。

さらに、情報産業により、グローバルな情報流通が加速しているばかりでなく、情報流通を巡って国際的なコンフリクトも見られるようになってきています。各国は新技術の開発や市場開拓に積極的であり、新サービス・機器が次々と登場しています。近年では、AIの技術進展が著しく、今後も第四次産業革命を牽引していくものと見られています。一方で、ユーザーが新サービスや機器を 수용するかが、イノベーションが普及するかを左右します。

本講義の到達目標は、原著講読や関連する国内での研究を参照することを通じて、情報産業にかかる国内外の理論的・実証的な研究における学術的なアプローチや方法論の理解を深めることです。

授業内容

- 第1回：イントロダクション 領域の広がりや越境的な相互参照【情報産業の変化】
- 第2回：情報産業とイノベーション
- 第3回：情報産業と産業変化(DX)
- 第4回：情報産業とプラットフォーム【情報産業と政策分析】
- 第5回：政策形成プロセスとメディアコミュニケーションの政策領域
- 第6回：産業構造変化とレイヤー別規制の形成
- 第7回：グローバル、リージョナル、ドメスティックな政策形成【情報産業のユーザー研究の展開】
- 第8回：ユーザー研究—ユーザーインターフェースとアフォーダンス
- 第9回：ファン研究—Henry Jenkins, Paul Booth, Jonathan Glay等
- 第10回：クリエイター研究—クリエイター・エコノミー【情報産業の研究アプローチ】
- 第11回：原著講読・研究発表 アンケート分析
- 第12回：原著講読・研究発表 ユーザー評価分析(レビュー等)
- 第13回：原著講読・研究発表 質的データ分析
- 第14回：まとめ 研究アプローチの多様性と学際性

履修上の注意

受講生の人数や参加者の関心に依りて、取り上げる回数や内容が変更となる可能性もあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

レジュメ作成・発表の分担があります。
発表者以外も指定の章や書籍を事前に学習してディスカッションに参加してください。

教科書

なし。資料を配布します。

参考書

なし。資料を配布します。

課題に対するフィードバックの方法

中間報告やレポートへは採点結果を通知します。また、全体講評を行うほか、コメントシートやレポートのからの抜粋を共有し、相互学習の機会を提供します。

成績評価の方法

参加・発表(70%)、期末レポート(30%)。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN591J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム研究 (国際知財)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	小笠原 泰	

授業の概要・到達目標

本講義は、クールジャパンとしてくられるものを知的財産の観点から多面的に捉え、現状を理解し、その内在する問題を認識することで、その考察を深めていくことを目的とします。まず、文化とは根本的に知財となりえるのかを議論します。収益性を伴えば知財と言えるのかどうかを問います。具体的には、グローバル化を前提として、(政治学の定義としての)ソフトパワーではなく、パブリック・ディプロマシーや経済活動としてのコンテンツの収益モデルの観点から、クールジャパンを議論し、その後、より根源的な理解のために、相互矛盾をはらむ著作権、文化、デジタル化という3つの観点から、クールジャパンに代表されるコンテンツ・ビジネスを国際知財の観点から解題します。

授業内容

- 第1回 イントロダクション:講義内容の説明と進め方についての共通理解の確立
- 第2回 クールジャパンの現状と定義
- 第3回 知的財産の基本的理解(1)
- 第4回 知的財産の基本的理解(2)
- 第5回 グローバル化とクールジャパン
- 第6回 ソフトパワーとパブリックディプロマシーの観点から(1)
- 第7回 ソフトパワーとパブリックディプロマシーの観点から(2)
- 第8回 コンテンツの収益モデルの観点から(1)
- 第9回 コンテンツの収益モデルの観点から(2)
- 第10回 著作権の観点からのクールジャパン
- 第11回 文化の観点からのクールジャパン
- 第12回 デジタル化という観点からのクールジャパン
- 第13回 著作権、文化、デジタル化の観点からの課題(1)
- 第14回 著作権、文化、デジタル化の観点からの課題(2)

履修上の注意

履修にあたり、著作権や商標権などの知財に関する基礎知識があることを前提とします。履修希望者には、著作権と産業知財(なかでも商標権と意匠権)についての基礎的書籍を読んで理解していることを求めます。事前に、私が担当する学部の知財文化マネジメント(知的財産と企業戦略)を履修していることを強く望みます。

話題が多岐にわたり、学際的であるので、事前予習による知識レベルの向上が必要になります。また、講義科目ですが、双方向授業としたいため、自分の意見をもって、積極的に議論に参加して下さい。また、事前のリサーチを課すことがあります。

GPT(生成AI)については、そのメリットとデメリットを理解した上で、AIに依存することなく、より良い理解の為に生産的に使ってください。

準備学習(予習・復習等)の内容

特になし。

教科書

講義内容は多岐にわたるので、教科書は指定しません。講義に使う資料は、ウェブ上に掲載しますので、事前に確認してください。

参考書

講義において、適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

基本、Oh-ol Meijiシステムのクラスウェブを通して行います。少人数であれば、講義内でフィードバックを行い、議論を先に展開していきます。

成績評価の方法

講義への参画度と期末レポートによって、総合的に判断します。

その他

特になし。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) INF531J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム研究(クリエイティブ産業)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任教授 博士(知識科学) 宮下 芳明		

授業の概要・到達目標

人々に情報提供や感動を伝えるコンテンツの制作は、様々な技術の支援によってなされており、その形態も多様化している。本講義では、音響・音楽・画像・映像・3DCG・ゲーム・ウェブコンテンツなどを対象に、その制作を支援する技術について講義を行う。講義にあたっては多くのデモンストレーションを行う予定であるが、作曲・音響コンテンツ制作、3DCG制作演習、そしてコンテンツ・プログラミング演習の回を設け、「体験」としても理解できるようにする(これらの演習にあたっては基本的なパソコン操作スキルで足りるよう配慮する。)最新のトピックを織り交ぜながら、コンテンツ制作の未来について考察・議論を行う。

授業内容

- 第1回：音響コンテンツを支える制作技術
- 第2回：音楽コンテンツを支える制作技術
- 第3回：作曲・音響コンテンツ制作演習
- 第4回：画像・DTPを支える制作技術
- 第5回：映像コンテンツを支える制作技術
- 第6回：3DCGを支える制作技術
- 第7回：3DCG制作演習
- 第8回：ゲームを支える制作技術
- 第9回：ウェブコンテンツを支える制作技術
- 第10回：コンテンツ・プログラミング演習
- 第11回：ヒューマンコンピュータインタラクション(HCI)の貢献
- 第12回：コンテンツと著作権 CGMとN次創作
- 第13回：味覚・嗅覚・触覚コンテンツ
- 第14回：最新メディア技術と今後の課題
(履修者の興味関心、その年の最新情報に応じて修正することがある)

履修上の注意

日常目にするコンテンツはどのように制作されているのか、関心を持って講義に臨んでもらいたいという観点から、履修者に数分程度の技術紹介プレゼンを1回、および総合的な考察を行った最終プレゼンを1回行ってもらう予定である。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書の該当箇所を振り返り、不明な部分があれば授業で質問すること。余力がある者は、授業内容について調査することでさらに発展的な技術・知識を習得すると良い。

教科書

『コンテンツは民主化をめざす 表現のためのメディア技術』宮下芳明(明治大学出版会)

参考書

- 『デジタルコンテンツ制作入門』デジタルコンテンツ協会(編)(オーム社)
- 『コンテンツ学』長谷川文雄・福富忠和編(世界思想社)
- 『コンテンツ産業論』川島伸子(ミネルヴァ書房)
- 『コンテンツ産業論』出口弘・田中秀幸・小山友介(東京大学出版会)
- 『映像コンテンツ産業の政策と経営』山崎茂雄・立岡浩(中央経済社)

課題に対するフィードバックの方法

授業内で講評・フィードバックを行う。

成績評価の方法

プレゼン・議論参加(2回・各50点)により総合的に評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) CMM531J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム研究(広告)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(商学) 小野 雅琴		

授業の概要・到達目標

広告やマーケティング等、企業の活動を研究対象とする多くの分野において、定量的なデータを用いて理論を実証する研究が広く行われています。本授業は、いくつかの基本的な統計解析の手法を講義及び実習形式で習得します。さらに、海外トップジャーナル(“Journal of Advertising”, “Journal of Advertising Research” など)の実証論文の精読を通じて広告の実証研究の手法を学びます。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：統計解析の手法について
- 第3回：リサーチ・デザイン
- 第4回：相関分析(講義)
- 第5回：相関分析(実習)
- 第6回：回帰分析(講義)
- 第7回：回帰分析(実習)
- 第8回：カイ二乗検定(講義)
- 第9回：カイ二乗検定(実習)
- 第10回：t検定(講義)
- 第11回：t検定(実習)
- 第12回：分散分析(講義)
- 第13回：分散分析(実習)
- 第14回：総括

履修上の注意

フリーの統計ソフトRを利用しますので、各自パソコンを持参してください。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業内で提示された課題に取り組み、その成果をレポートにまとめて提出してください。普段の授業内容の復習と合わせて、少なくとも週平均2時間の学習が必要となります。

教科書

教科書は使用しません。担当教員が作成した資料を使用します。

参考書

参考書の推薦を求める学生に対しては、理解度や興味に応じて個別に紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

提出課題について授業時間内にフィードバックを行います。

成績評価の方法

授業中の貢献度を50%、レポート等の提出物を50%として評価します。

その他

ありません。

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) MAN561J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム研究 (ものづくり経営A)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在 垣		

授業の概要・到達目標

この授業では、日本企業の経営システムに関する様々なテーマを取り上げ、講義します。株式会社での仕組みやそのガバナンス、経営戦略、グローバル経営、流通システム、雇用システム、働き方とワーク・ライフ・バランスなどの問題について、日本企業が欧米の企業と比べてどのような違いや特徴があるか、そして日本企業の課題は何かについて説明します。

この授業は戦後日本企業が作り上げてきた経営システムがどのようなものであり、デジタル化、グローバル化が進んでいる今日にどのような問題や課題を抱えているかについて考察し、日本企業の経営方式についての理解を深めることを目標とします。

授業内容

- 第1回 インTRODクダクシヨク
- 第2回 日本企業の経営方式の特徴
- 第3回 株式会社の仕組みとガバナンス
- 第4回 経営戦略(1)：二つのアプローチ
- 第5回 経営戦略(2)：マーケティング戦略
- 第6回 日本企業の国際化とグローバル経営
- 第7回 日本企業の流通システム(1)：その歴史
- 第8回 日本企業の流通システム(2)：コンビニシステム
- 第9回 日本企業の雇用システム(1)：人事管理の構造
- 第10回 日本企業の雇用システム(2)：採用管理
- 第11回 日本企業の雇用システム(3)：昇進システム
- 第12回 日本企業の雇用システム(4)：報酬システム
- 第13回 日本企業の雇用システム(5)：労働時間の管理
- 第14回 日本企業の働き方とワーク・ライフ・バランス

履修上の注意

授業はパワーポイントを使って講義形式(対面授業)で行う。なお、生成 AI は、文献検索・アイデアの発想・文章校正の目的に限り利用を認めます。ただし、最終的な文章の内容・構成・主張は学習者自身の責任で作成してください。提出物には、AI を利用した場合は「AI 名」「利用目的」「出力結果の利用方法」を提出物に明記してください。記載がない場合、再提出を求めると、不正行為として扱うことがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

講義の前後に参考書を読んで学習することが望ましい。

教科書

特に指定しない。毎回、講義資料を配布する。

参考書

- 「戦略の原点」清水勝彦(日経BP社)
- 「1からの戦略論」(第2版)嶋口充輝・内田和成他(碩学舎)
- 「マーケティングを学ぶ」石井淳蔵(ちくま新書)
- 「新しい人事労務管理」(第5版)佐藤博樹・藤村博之・八代 充史(有斐閣アルマ)
- 「ワーク・ライフ・バランスと働き方改革」佐藤博樹・武石恵美子(勁草書房)
- 「現場から見上げる企業戦略論：デジタル時代にも日本に勝機はある」藤本隆宏(角川新書)
- 「セブン-イレブン覇者の興衰」田中陽(日本経済新聞出版)
- 「個を動かす 新浪剛史 ローソン作り直しの10年」池田信太郎(日経BP社)
- 「国際経営」(第4版)吉原英樹(有斐閣)
- 「日本企業の国際化」大石芳裕(文眞堂)

課題に対するフィードバックの方法

レポートの課題に対してはOh-ol Meiji で講評を公開する。

成績評価の方法

授業への参加度(60%)と期末レポート(40%)によって評価する。

その他

対面授業形式で行う(ただし、コロナ問題の状況によって授業形式が変わることもある)。

科目ナンバー：(GJ) MAN561J			
日本社会・産業システム研究	備考		
科目名	日本社会・産業システム研究 (ものづくり経営B)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在 垣		

授業の概要・到達目標

この授業では、ものづくり競争力の3大指標と言われる生産性と品質、そして納期に焦点を当てて、日本企業のものづくりシステムの特徴について学習します。日本企業は独自の考え方と仕組みを持ったものづくりシステムを創り上げて、ものづくりの世界では今でもそれがグローバル標準となっている。この授業ではまず、そのような日本企業のものづくりシステムの特徴(仕組みや考え方)について考察します。

次に、日本企業は、生産性、品質、納期という面では高い競争力を持ちながらも、1990年代以降、グローバル市場で劣位に落ちた製品・産業が増えたが、その理由について製品アーキテクチャ論に基づいて探ることになります。

この授業では、日本企業のものづくりシステムの特徴を理解して、日本企業の課題についての認識を深めることが目標である。

授業内容

- 第1回 インTRODクダクシヨク
- 第2回 ものづくり競争力とは何か
- 第3回 生産性の管理と改善
- 第4回 全員参加型の品質管理
- 第5回 生産計画とジャストインタイム(JIT)方式
- 第6回 製品開発のプロセス
- 第7回 製品開発期間の短縮
- 第8回 製品特性の変化と日本企業の競争力
- 第9回 日本企業の事例分析：テレビ
- 第10回 日本企業の事例分析：携帯電話
- 第11回 日本企業の事例分析：半導体
- 第12回 日本企業の事例分析：自動車
- 第13回 日本企業の事例分析：電気自動車と自動運転
- 第14回 総括：日本企業のものづくりの課題

履修上の注意

欠席の際には事前に連絡すること。なお、生成 AI は、文献検索・アイデアの発想・文章校正の目的に限り利用を認めます。ただし、最終的な文章の内容・構成・主張は学習者自身の責任で作成してください。提出物には、AI を利用した場合は「AI 名」「利用目的」「出力結果の利用方法」を提出物に明記してください。記載がない場合、再提出を求めると、不正行為として扱うことがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、パワーポイントの資料を配布するので、そこに追記して復習すること。

教科書

特になし。

参考書

- 「生産マネジメント入門Ⅰ」藤本隆宏(日本経済新聞出版)
- 「生産マネジメント入門Ⅱ」藤本隆宏(日本経済新聞出版)
- 「ものづくりの国際経営戦略：アジアの産業地理学」新宅・天野(有斐閣)
- 「メイド・イン・ジャパンは終わったのか」青島矢一・武石彰・クルマノ(東洋経済新報社)
- 「ものづくり経営学：製造業を超える生産思想」藤本隆宏・東大ものづくり経営研究センター(光文社新書)
- 「日本の電機産業 何が勝敗を分けるのか」泉田良輔(日本経済新聞出版)
- 「携帯電話産業の進化プロセス-日本はなぜ孤立したのか」丸川知雄・安本雅典(有斐閣)
- 「AIが変えるクルマの未来：危機かチャンスか？」中村吉明(NTT出版)
- 「モビリティ革命2030：自動車産業の破壊と創造」アロイト トーマツコンサルティング(日経BP社)
- 「EVと自動運転：クルマをどう変えるか」鶴原吉郎(岩波新書)

課題に対するフィードバックの方法

レポートの課題に対してはOh-ol Meiji で講評を公開する。

成績評価の方法

授業への参加度(60%)と期末レポート(40%)によって評価する。

その他

対面授業形式で行う。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) EDU531J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究(異文化間教育学特論)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(人文科学) 渋谷 真樹		

授業の概要・到達目標

日本における異文化間教育学の成立背景やその変遷を概観した上で、国境を越えて移動する人々の教育がどのように「問題」とされ、どのような政策、実践、研究が行われてきたのかを、時代を追って考察します。さらに、インターナショナルスクールや国際バカロレアを取り上げ、グローバリゼーションと教育について議論していきます。

到達目標は、以下のとおりです。

1. 日本における異文化間教育学の成立過程や主要な研究課題を説明できる。
2. 国境を越えて移動する人々の教育をめぐる政策や実践の変遷や、主要な研究成果を説明できる。
3. 自らの研究関心に対して、異文化間教育学の知見を応用できる。

授業内容

- 第1回：オリエンテーション：問いの共有
 第2回：異文化間教育の歴史と背景
 第3回：異文化間教育：「社会問題」から「新しい特権層」へ
 第4回：「帰国子女」の位置取りの政治
 第5回：もうひとつの「帰国子女」：中国帰国者
 第6回：外国人児童生徒教育：「オールドカマー」から「ニューカマー」そして「移民」へ
 第7回：移動する人々の教育と就業
 第8回：「グローバル人材」とは何か？
 第9回：民族学校とインターナショナルスクール
 第10回：国際バカロレアの理念と実際
 第11回：移動する人々と文化・階層
 第12回：移動する人々のアイデンティティ
 第13回：「日本人」とは誰か？
 第14回：まとめと振り返り

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

指定した論文を読んで要約した上で、疑問点や議論したいポイントをとめる。

教科書

なし

参考書

- 異文化間教育学会企画(2016)『異文化間教育学大系(全4巻)』明石書店
 異文化間教育学会編著(2022)『異文化間教育事典』明石書店
 佐藤郡衛他(2020)『海外で学ぶ子どもの教育：日本人学校、補習授業校の新たな挑戦』明石書店

課題に対するフィードバックの方法

LMSでコメントをする。次回以降の授業に反映させる。

成績評価の方法

授業への取り組み(50%)：授業への参加状況や事前事後学習の成果を通して、理解と思考を評価する。
 最終レポート(50%)：異文化間教育における論点について、どのくらい多角的に考察し、論理的に表現できるかを評価する。

その他

履修者と授業者、および、履修者間でのディスカッションを重視し、創造的な発想や複眼的な思考を促していきます。

科目ナンバー：(GJ) EDU531J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究(留学生政策)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 Ph.D.	近藤 祐一	

授業の概要・到達目標

近年、これまでのグローバル社会や多様性を目指す社会から、反対の方向に進む傾向が多くなってきた。その文脈の中で大学をはじめとする教育機関はどのように留学生を迎え入れるべきなのだろうか。また国のレベルでどのような政策・施策の立案や実行が求められていくのだろうか。留学生施策は単なる大学への留学生受け入れではなく、国や社会に将来的に大きな影響を及ぼす可能性がある。この授業では留学生施策を日本社会のマクロやミクロの視点から考えるとともに、それをグローバルな流れの中でも考えることを行う。

この授業を履修する学生には留学生施策だけでなく、他の社会の現象も多様な視点で捉えることができ、また具体的・実行可能な施策を考えることができるようになることを目標とする。

授業はインプットとアウトプットを行いながら進めていくが、授業ではNotebookLMのような仕組みも活用し、大量の多言語による資料収集を短時間でを行い、それによって十分に時間を教員や他の学生との討議に割き、現状の分析や具体案の案出をする。

授業内容

- 第1回目 インTRODクッション、講義1(日本の大学概況)及び討議
 第2回目 講義2(日本の留学生施策1)及び討議
 第3回目 講義3(日本の留学生施策2)及び討議
 第4回目 ミニプレゼン(英語圏の国々における留学生施策1)及び討議
 第5回目 ミニプレゼン(英語圏の国々における留学生施策2)及び討議
 第6回目 ミニプレゼン(ASEANにおける留学生施策)及び討議
 第7回目 ミニプレゼン(EUの国々における留学生施策)及び討議
 第8回目 ゲスト講義(韓国における留学生施策)及び討議
 第9回目 最終発表・レポートトピックについての討議
 第10回目 講義4(国内外の留学生施策1)*及び討議
 第11回目 中間発表1及び討議
 第12回目 中間発表2及び討議
 第13回目 講義5(国内外の留学生施策2)*及び討議
 第14回目 最終発表及びまとめ

*講義4・5の「国内外の留学生施策」では、学期中にも起こる留学生施策の変更や、話題となった課題などを取り上げる。この回以外にも「ホットトピック」があれば授業で討議し現代社会の課題について洞察力を高める。ホットトピックは教員から提供されるだけでなく、学生からのインプットも奨励される。

履修上の注意

準備学習（予習・復習等）の内容

授業のトピック自体が広く社会の状況によって変化するものであるため、常時国内外の新聞やウェブニュースなどを視聴すること。また、多くが学生の発表とディスカッションによって構成される授業であるため、発表の準備が求められる。同時に最終発表・レポートについての準備が必要とされる。

教科書

特に指定しない。

参考書

特に指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

小規模の授業であるので、常にプレゼンテーションや、最終レポートの進捗については授業での討議によってフィードバックが行われる。

成績評価の方法

- ミニ・プレゼンテーション 20%
 中間発表 40% (20×2回)
 最終発表及びレポート 40%

その他

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) POL541J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究(多文化共生特論)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授		山脇 啓造

授業の概要・到達目標

日本に暮らす外国人はコロナ禍で一時的に減少したが、再び増加し、現在、350万人を超えている。永住者は増加傾向にあるなど、日本の総人口が減少する中、外国人の定住化が進んでいる。今後も外国人の定住化は進み、グローバル化と人口減少・少子高齢化が進む21世紀の日本にとって、国籍や民族の異なる人々が共に生きる多文化共生社会の形成は喫緊の課題といえよう。

本講義では、全国の外国人が多く暮らす地域を取り上げ、多文化共生のあり方について検討する。また、欧州やアジアの事例も取り上げる。その中で、多文化共生社会の形成に関する基本的な課題への理解を深め、国や自治体等が果たすべき役割を探る。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：国の最新動向
- 第3回：総務省(旧自治省)の国際化施策の推移
- 第4回：地方自治体の外国人施策の歴史
- 第5回：事例研究(自治体)
- 第6回：事例研究(都市ネットワーク)
- 第7回：多文化共生の学校づくり
- 第8回：学生による中間報告
- 第9回：外国の事例(欧州)
- 第10回：外国の事例(北米)
- 第11回：外国の事例(アジア)
- 第12回：外国の事例(都市ネットワーク)
- 第13回：学生による報告
- 第14回：総括

履修上の注意

毎回、パソコンを持参すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、授業の最後に次週の授業までの課題を課す。

教科書

特になし。

参考書

山脇啓造, 上野貴彦(編)『多様性×まちづくり インターカルチュラルシティ-欧州、日本、韓国、豪州の実践から』(明石書店, 2022)
山脇啓造, 服部信雄(編)『新 多文化共生の学校づくり』(明石書店, 2019)
山脇啓造「多文化共生2.0の時代」(自治体国際化協会・多文化共生ポータルサイト) <http://www.clair.or.jp/tabunka/portal/column/20/>

課題に対するフィードバックの方法

授業中に口頭で行う。毎回、授業の最後に記入してもらうコメントについては、翌週の授業の冒頭に取り上げる。

成績評価の方法

授業中の討論(40%)、受講生が設定した特定のテーマに関する約10分の報告(30%)、4000字程度のレポート(30%)。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN521J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究(企業とダイバーシティ)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師		井上 洋

授業の概要・到達目標

概要:

日本において、多様な属性の人々がそれぞれの価値観で生きることのできる社会は構築可能か、そのために企業はどのような役割を果たしうるのであるか、などについて考えてもらいます。

前半は、(1)日本の歴史を踏まえた社会慣習や日本人の価値観、(2)社会制度やそれを規定する法律の変遷などを考察し、後半に、(3)戦後の企業組織と経営理念の変化、(4)ジェンダー(男女、LGBTQ)、ジェネレーション(年齢)、国籍・民族、障がいの有無など多様性包摂の状況、(5)人口減少下で講じられている行政施策(外国人材の受け入れ施策、男女共同参画社会づくり・働き方改革、LGBTQへの配慮、障がい者雇用等)と企業の対応を考察していきます。最終的には、企業が「ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン」(DE&I)を重視する経営を行うことで、社員の活力や幸福感がどのようなかたちで高まるのか、また企業業績や実体経済への波及効果がどのようなかたちで及ぶのかについて結論を得たいと考えています。そのために日本の大企業の多くが会員となっている経団連の取り組みについても研究し、可能であれば経団連の担当本部より説明を受ける機会を設けます。

到達目標:

多様性をめぐる日本の現状について理解を深めるとともに、「多様性のダイナミズム」を活かす社会、組織づくりに主体的に取り組めるよう、知見を深めてもらえればと考えています。

授業内容

講義が中心となる授業ですが、その内容を踏まえ各授業の最後の時間20分ほどディスカッションをしてもらいます。

- 第1回 イントロダクション:ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン(DE&I)の基本
- 第2回 歴史面での考察(1)江戸時代以来の家制度と女性の役割
- 第3回 歴史面での考察(2)皇統に属する男系の男子による天皇制の維持(明治維新による天皇を中心とした国体確立)
- 第4回 歴史面での考察(3)明治時代に制定された戸籍法、民法の諸規定(家父長制の制度化)
- 第5回 社会実相面での考察(1)戦後の民法改正(夫婦同姓の維持)、高度経済成長期における男女の役割分担(企業戦士の存在、寿退職の慣行)
- 第6回 社会実相面での考察(2)地方圏におけるムラ社会の因習と女性の東京圏への人口流入
- 第7回 社会実相面での考察(3)LGBTQに対する理解の高まりと制度の拡充(パートナーシップ制度)
- 第8回 学期前半の振り返り
- 第9回 政策面での考察(1)働き方改革を通じた女性の活躍促進
- 第10回 政策面での考察(2)外国人受け入れ拡大と地域における共生社会づくり(外国人住民の日本語能力向上)
- 第11回 政策面での考察(3)障がい者雇用促進と関連法規制
- 第12回 企業経営面での考察(1)DE&I社会を目指す経団連の取り組み
- 第13回 企業経営面での考察(2)DE&Iの取り組みから見えてくる企業の経営戦略
- 第14回 学期を通じた振り返り

履修上の注意

毎回、ディスカッションを行うことで、問題の本質、課題解決に向けた方策などについて深く掘り下げ、履修生の間で共有してほしいと思います。

準備学習(予習・復習等)の内容

各授業の最後に次週の課題を示すことにします。

教科書

特定の教科書は使用しません。

オリジナルの資料をプロジェクターに投影しながら授業を進めていきます。授業終了後、各回の資料(PDFファイル)をクラスウェブに載せます。

参考書

経団連が公表している提言・報告書、企業の統合報告書などを適宜、指定します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業終了後、クラスウェブにフィードバックの文章を載せますので、それを参考にしつつ授業を振り返るようにして下さい。

成績評価の方法

出席日数50%、授業への参加度(ディスカッションでの発言など)50%で成績評価を行います。期末の試験、レポートは課しません。

その他

本科目は日本語により、教室にて対面で行います。

本科目に関して質問がある場合には、下記のアドレスまで問い合わせください。

inoue@diversityjapan.jp 井上 洋(兼任講師)

特修科目

科目ナンバー：(GJ) EDU531J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究(文化間移動と教育)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(教育学) ピニロス マツダ、アレク K.		

授業の概要・到達目標

本授業は、「人の移動」と「エスニシティ」を中心概念として、多文化共生社会における教育の役割を理論的に検討する博士前期課程向けの専門科目である。国境を越える国際移動に加え、国内移動や越境的な生活実践が常態化する現代社会において、国民国家が前提としてきた社会的境界や成員区分は揺らきを見せている。こうした状況の中で、エスニシティは固定的な文化属性としてはなく、移動や制度、他者との関係の中で生成・再編される社会的カテゴリーとして捉え直す必要がある。

本授業では、「人の移動とエスニシティ」移動する人々と「国民国家」多文化共生社会におけるESD・市民教育を主要文脈として用い、人の移動が国民国家の枠組みや包摂・排除の構造にどのような影響を与えてきたのかを検討する。その上で、教育がこうした社会構造の中でエスニシティをどのように位置づけ、扱ってきたのかについて理論的に考察する。授業は文献精読とディスカッションを中心に進め、理論や概念を知覚して理解することにとどまらず、研究のための分析枠組みとして用いる姿勢を重視する。

博士前期課程の授業として、本授業では理論を両手ものとして受け取るのではなく、その前提や射程、限界を検討することを重視する。受講者は、自身の研究関心を踏まえながら、移動、エスニシティ、国民国家、多文化共生といった概念がどのような現象を説明しようのかを検討し、研究課題との関係を整理することが求められる。

本授業の到達目標は、
 ①人の移動とエスニシティをめぐる主要な理論的議論を理解し、学術的文脈の中で整理できるようにすること、
 ②エスニシティを本質化せず、社会的・制度的文脈の中で分析する視座を身につけること、
 ③多文化共生社会における教育の役割と課題を理論的に検討できるようにすること、
 ④これらを検討を自身の研究テーマに接続し、博士前期課程における研究課題や理論枠組みを明確化できるようにすることである。

本授業を通して、受講者が「移動」や「多文化共生」を自明の前提として扱うのではなく、社会的に構築された現象として捉え直し、研究者として問いを立てるための基盤を形成することを目指す。

授業内容

- 1 授業の説明と問題設定
 授業の目的、進め方、評価方法を確認した上で、本授業で扱う「人の移動」「エスニシティ」「多文化共生」を研究概念として整理する。教科書3冊の構成と役割を提示し、本授業では全章精読ではなく、章指定による精読と理論的活用を行うことを確認する。受講者は自身の研究関心を簡潔に共有する。
- 2 人の移動をどう捉えるか
 人の移動を、国際移住や国内移動といった事象に限定せず、社会的境界や所属の再編と結びついた現象として捉える視点を整理する。教科書は概論部分を中心に抜粋精読し、移動概念の射程を確認する。
- 3 エスニシティ概念の整理
 エスニシティを文化的属性として捉える理解と、社会的・関係的に構築されるカテゴリーとして捉える理解を対比しながら検討する。「人の移動とエスニシティ」の理論章を精読し、概念の前提と特徴を整理する。
- 4 移動とエスニシティの関係
 引き続き「人の移動とエスニシティ」を用い、移動の過程でエスニシティがどのように可視化・再編されるのかを検討する。理論の説明力と限界を議論し、研究への応用可能性を考察する(精読)。
- 5 国民国家と移動
 「移動する人々と国民国家」を用い、国民国家が前提とする成員区分、境界管理、市民権の枠組みを整理する。指定章を精読し、人の移動と国家の緊張関係を理論的に理解する。
- 6 移動・国家・エスニシティの交差
 第4回・第5回の内容を統合し、「移動」「国民国家」「エスニシティ」の相互関係を整理する。複数文献を横断的に精読し、概念同士の接続と差異を明確化する。
- 7 中間整理と研究接続
 これまでの理論を踏まえ、各自の研究テーマにおいて、どの概念がどのように有効かを整理する。文献は再読・参照を中心とし、理論の使い分けについて相互にコメントを行う。
- 8 多文化共生と教育の位置づけ
 多文化共生の理念と政策的背景を整理し、「多文化共生社会におけるESD・市民教育」を用いて、教育が果たす役割を検討する。本書は全体通読ではなく、章指定による抜粋精読とする。
- 9 教育におけるエスニシティの扱われ方
 教育制度や教育実践の中で、エスニシティがどのように可視化・中立化・周縁化されてきたのかを理論的に考察する。前回の文献を中心に精読と討議を行う。
- 10 事例と理論の仕組
 移動と教育に関わる具体的事例を取り上げ、理論が現象をどこまで説明できるのかを検討する。教科書は参照文献として用い、理論の適用可能性を検証する。
- 11 理論枠組みの再構成
 各自の研究テーマに即して、理論枠組みの組み立て方や修正の必要性を検討する。文献の再精読・参照を行いながら、理論の取捨選択について議論する。
- 12 最終課題準備
 最終課題に向けて、研究課題と理論概念の関係を明確化する。教科書3冊を横断的に参照し、自身の研究に必要な理論的位置づけを整理する。
- 13 最終発表
 自身の研究テーマにおける「人の移動とエスニシティ」の理論的位置づけを発表し、討議を行う。文献は根拠提示のために参照する。
- 14 総括と今後の研究への接続
 授業全体を振り返り、理論的到達点を確認する。博士前期課程における研究の深化や修士論文への接続を整理する。

履修上の注意

本授業は博士前期課程向けの専門科目であり、文献精読と討議を中心に進める。学部段階での概観的理解を前提とするため、授業内では基礎事項の解説に多くの時間を割かない。指定された文献は事前に必ず読み、授業で扱う章については、各自がディスカッション・ディスカッションを準備するとともに、それに対する自身の考えを整理した上で授業に臨むことが求められる。授業内では、受講者自身の研究関心や問題意識に基づく発言と討議への積極的な参加を重視するため、受動的な受講態度は認められない。なお、教科書は全章精読を目的とするものではなく、指定章を中心に理論的に活用することを目的とする。

準備学習(予習・復習等)の内容

予習として、各回で指定された文献の該当章を、著者の主張や論点を自分なりに整理した要約を行うことを求める。その上で、単なる内容確認にとどまらず、授業内の討議に用いるためのディスカッション・ディスカッションを各自で準備し、それに対する自身の考えや暫定的な回答を整理した上で授業に臨むことが必要である。
 復習としては、授業内での討議や他の受講者の視点を踏まえ、文献で提示された概念や議論が自身の研究テーマにどのように接続しうるかを再検討する。特に中盤以降は、複数の文献を横断的に参照しながら、概念間の関係性や理論の有効性・限界について整理することを想定する。

教科書

以下の文献を本授業の主要教科書として用いる。いずれも全章の精読を目的とするものではなく、授業ごとに指定する章を中心に精読し、理論的に活用する。
 ・中坂 恵美子・池田 賢市(編著)。(2021)。「人の移動とエスニシティ」越境する他者と共生する社会に向けて。明石書店。
 ・杉村 英紀(編著)。(2017)。「移動する人々と国民国家」ポスト・グローバル化時代における市民社会の変容。明石書店。
 ・田中 治彦・杉村 英紀(共編)。(2014)。「多文化共生社会におけるESD・市民教育」。上智大学出版(発売:きょうせい)。

参考文献

授業内で適宜紹介する。受講者の研究関心に応じて、移民研究、エスニシティ研究、異文化間教育研究、教育社会学等の関連文献を主体的に参照することが望ましい。特定の参考書の通読は求めないが、最終課題や研究計画の検討において、自身の研究に必要な文献を選択・活用する姿勢が求められる。

課題に対するフィードバックの方法

ディスカッション・ディスカッションやリアクションペーパーについては、授業内での討議および全体講評を通じてフィードバックを行う。中間段階では、理論的理解や問いの立て方に関するコメントを口頭で提示する。最終課題については、提出後に文書によるコメントを返却し、概念の使い方、理論枠組みの妥当性、研究テーマとの接続について指摘を行う。必要に応じて個別相談を行う。

成績評価の方法

成績は以下の要素を総合的に評価する。
 授業への参加および討議への貢献(30%)、準備学習・リアクションペーパー等の課題(30%)、最終課題(40%)。
 特に、文献内容を踏まえた問いの設定、理論や概念を自身の研究テーマに接続する力を重視する。単なる要約や感想にとどまる場合、評価は高くならない。

その他

本授業は博士前期課程における研究の基礎形成を目的とし、修士論文に向けた理論的枠組みの構築に接続する内容で構成されている。受講者の研究分野や関心に応じて、扱う事例や文献を一部調整する場合がある。授業外での研究相談にも適宜対応する。

科目ナンバー：(GJ) PSY521J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究(発達心理学)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 青山 征彦		

授業の概要・到達目標

近年、人間を個体として扱うのではなく、関係の中で捉えようとするアプローチが興隆しつつある。この授業では、社会文化的アプローチを中心にしつつ、越境学習やアクターネットワーク理論についての議論を参考に、人間を関係の中で捉えるとはどのようなことなのかを具体的に考えていく。従来は心理学は人間を個体として捉えており、発達について個体中心に考えられてきたが、人間を関係の中で捉えるアプローチでは、発達はコミュニティと切り離すことができないものである。従来は心理学による見方を乗り越え、関係的な人間観から発達の見方を問い直す場を目指す。

授業内容

- 1 第1回：社会文化的アプローチについての概説
- 2 第2回：テキスト講読(1)：1章
- 3 第3回：テキスト講読(2)：2章
- 4 第4回：テキスト講読(3)：3章
- 5 第5回：テキスト講読(4)：10章
- 6 第6回：テキスト講読(5)：11章
- 7 第7回：関連する文献の講読(1)
- 8 第8回：テキスト講読(6)：12章
- 9 第9回：テキスト講読(7)：13章
- 10 第10回：テキスト講読(8)：14章
- 11 第11回：テキスト講読(9)：15章
- 12 第12回：テキスト講読(10)：16章
- 13 第13回：関連する文献の講読(2)
- 14 第14回：まとめ

履修上の注意

演習であるので、議論に積極的に参加すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

発表の担当者は、事前にレジジュメを作成しておくこと。担当者以外の受講者も、前もって文献に目を通しておくこと。

教科書

「越境する対話と学び」香川秀太・青山征彦(編)(新曜社)
 なお、受講者と相談の上、変更する場合がある。

参考書

授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で行う。

成績評価の方法

担当回の発表(30%)、および平常点(70%)による。

その他

連絡にはメール(aoyama@seijo.ac.jp)を利用すること。

科目ナンバー：(GJ) EDU531J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考		
科目名	多文化共生・異文化間教育研究 (多文化共修)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 Ph.D.	平井 達也	

授業の概要・到達目標

本授業では、近年多くの大学で重視されるようになってきた「多文化共修」もしくは「国際共修」と呼ばれる、「国籍や文化、背景が異なる人々が小グループでの活動を通して、お互いから学び合う教育実践方法」について理解を深め、スキルを向上させることを目的とする。より具体的には、多文化共修の理論と背景、各国における実践、カリキュラムおよびプログラムの組み立て方、多文化ファシリテーションの方法、TA (Teaching Assistant) の活用、多文化間能力と評価方法などについて、文献や書籍、事例/実践報告の輪読と議論を行う。また、ロールプレイ、もしくは実際の多文化共修の授業への参加およびファシリテーションを通して、グループプロセスの分析や多文化ファシリテーションの実践練習も予定している。

授業内容

- 第1回：多文化共修とは
- 第2回：多文化共修の理論、背景、意義
- 第3回：多文化共修の効果と多文化間能力
- 第4回：多文化共修とコミュニケーションスタイル
- 第5回：グループダイナミクスとグループプロセス (1)
- 第6回：グループダイナミクスとグループプロセス (2)
- 第7回：多文化共修におけるファシリテーション (1)場づくり
- 第8回：多文化共修におけるファシリテーション (2)問いによって学びを促す
- 第9回：多文化共修におけるファシリテーション (3)コンフリクトを学びに活かす
- 第10回：事例検討 (1)
- 第11回：事例検討 (2)
- 第12回：多文化共修の効果測定
- 第13回：多文化共修の研究手法
- 第14回：総括

履修上の注意

テキストをきちんと読み込み、積極的にディスカッションに参加する意欲が求められる。また、授業内外で履修生がファシリテーションやグループワークを経験する。

準備学習（予習・復習等）の内容

次の回の授業で取り上げるテキストをしっかりと読んでから参加すること。

教科書

授業開始時に適宜指定する。

参考書

授業時に適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内で課題についてのフィードバックを教員もしくは受講生同士で共有する。

成績評価の方法

レポート課題40%、授業におけるプレゼンテーション30%、授業への積極的な参加30%

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) EDU531J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	隔年開講	
科目名	多文化共生・異文化間教育研究 (共生とメディア)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(情報学)	岸 磨貴子	

授業の概要・到達目標

▶授業の概要
本授業では、アートベース・リサーチ (Arts-Based Research: ABR) を通じて、「共生社会をいかに探究し、いかに表現できるか」という問いに取り組む。ABRは、質的研究と芸術実践の接点に位置する研究アプローチであり、社会や人間の経験をアートの形で理解・表現・共有することを目的とする。本授業では、P. Leavy『研究法がアートと出会うとき』の文献を中心に、国内外の理論・事例を学び、受講生自身の関心領域と関連づけながら、実際に簡単な創作的エクササイズにも取り組む。社会科学におけるABRを主軸としながらも、アートセラピーや芸術教育から派生したABRの流れにも目を向け、「研究」「表現」「社会変革」をつなぐ多様な実践の可能性を探る。

▶到達目標

- ・アートベース・リサーチの理論的背景と多様なアプローチを理解する。
- ・社会科学・教育・芸術実践におけるABRの位置づけを整理できる。
- ・海外および日本のABR事例を分析し、研究としての意義を批判的に検討できる。
- ・自身の研究テーマにABRの視点を応用する構想を立てられる。

授業内容

- 第1回：アートベース・リサーチとはなにか
- 第2回：社会調査とアート
- 第3回：ナラティブ・インクワイアリー
- 第4回：詩的探究
- 第5回：音楽という研究法
- 第6回：研究としてのダンス・ムーブメント
- 第7回：演劇・ドラマ・映画
- 第8回：ビジュアルアート
- 第9回：アートベース・リサーチの評価
- 第10回：アートと科学の橋をかける
- 第11回：ABR実践の事例分析①
- 第12回：ABR実践の事例分析②
- 第13回：ABR実践の事例分析③
- 第14回：講義全体を通じた省察

履修上の注意

- ・本演習ではICTを多用する。資料のオンライン共有、議論の記録、先行研究リストの作成をオンライン上で行うほか、反転授業やオンライン講座への参加を予定している。
- ・各自、ノートパソコンやタブレット端末等を持参すること。事前に十分な充電を行うこと。
- ・受講生の関心や理解状況に応じて、シラバス内容の一部を調整する可能性がある。
- ・生成AIの利用について：本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。生成AIを使用した場合は、どのツールを、どの部分を、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱われることがある。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表担当回では、事前に発表資料を作成し、指定された方法で共有すること。
- ・発表担当でない回においても、必ず発表者の資料に目を通し、議論に参加すること。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は、演習時間外に行う。

教科書

パトリシア・リーヴィー (著)、岸 磨貴子・東村 知子・久保田 賢一(2025) 研究法がアートと出会うとき アートベース・リサーチへの招待、福村出版

参考書

- ・パトリシア・リーヴィー 著(岸磨貴子・川島裕子・荒川歩・三代純平 訳)『アートベース・リサーチ・ハンドブック』福村出版、2024年9月。
- ・小松佳代子 編著『アートベース・リサーチの可能性——制作・研究・教育をつなぐ』勁草書房、2023年9月。
- ・尾上明代 編著『アートベース・リサーチ(ABR)とクリエイティブ・アーツセラピー——臨床実践・研究のための芸術による知の技法』遠見書房、2025年8月。
- ・Mary M. Gergen & Kenneth J. Gergen Playing with Purpose: Adventures in Performative Social Science (Writing Lives: Ethnographic Narratives). Routledge, 2012.

課題に対するフィードバックの方法

- ・各回の課題はクラスウェブ上にて提出する。
- ・教員は提出された内容に対して随時フィードバックを行い、特に重要な論点については次の回の演習で取り上げ、全体で共有する。

成績評価の方法

- ・成績は、授業全体への積極的な参加姿勢を重視して評価する。
- ・文献輪読や議論への参加(全体の56%=12回×5点=60点)を中心に、ABR事例および自己のABR実践に関する発表(25%)、および学期末に提出する省察的レポート(15%)によって総合的に判定する。

その他

特修科目

科目ナンバー：(GJ) ACD521J			
多文化共生・異文化間教育研究	備考	2026年度開講せず、隔年開講	
科目名	アクションリサーチ		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

アクションリサーチは、大きくいうと「変化を起こしてみ、何が起るかを確認する方法」といえますが、その背景には、批判理論、フェミニズム、人種差別への抵抗や社会改革の思想などがあります。アクションリサーチは1940年代のクルト・レヴィンの研究から始まり発展してきました。レヴィンは、研究する側とされる側の権力関係に批判的な目を向け、アクションリサーチを推進しました。アクションリサーチでは、研究という営みそのものを、それまで「研究の対象」とされてきた人と共に行うことで彼らの地位の対等性、意識化、エンパワーメントを同時にめざします。

アクションリサーチを行うためには、問題の現状とニーズの査定が必要です。そこで、本講義では、問題の現状を理解するためのフィールドワークの技法を中心に学びます。また、アクションリサーチの背景には上述したように批判理論、フェミニズムといった流れがありますのでこれらの背景もおさえていきます。

本講義では、次の2つを目標とします。
 (1) フィールドワークの技法を学び、実践できること
 (2) アクションリサーチの意義と方法、具体事例を学び、自分の研究に活かすことができる

授業内容

- 第1回 知への3つのメタアプローチ
 - 第2回 アクションリサーチとは？
 - 第3回 フィールドにおけるポジショニング
 - 第4回 フィールドでダブルロールを担うとき
 - 第5回 エスノグラフィー
 - 第6回 フィールドノートの分析
 - 第7回 モノが語る意味
 - 第8回 リサーチ・エスチョンの絞り込み
 - 第9回 リサーチ・エスチョンを変えていく
 - 第10回 コーディングから解釈へ
 - 第11回 アクションリサーチの事例研究(1)
 - 第12回 アクションリサーチの事例研究(2)
 - 第13回 研究と実践の往還
 - 第14回 受講生による発表
- ※受講生の興味関心、進度によって順番を変えたり、変更したりすることがあります。

履修上の注意

- (1) 本講義では、主に次の2つを評価します。
- ・指定図書の内容：受講生が担当した文献の発表を評価します。受講生の人数によりりますが複数回担当します。
- ・アクションリサーチの計画：本講義で学んだ背景となる理論と方法論を用いた研究計画を評価します。
- (2) データの収集においては、授業外の時間を使うことがあります(または映像などをを用いて授業中に行う)。
- (3) 受講生の理解に合わせて授業の進度や内容を一部変更する可能性があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

- (1) 輪読の準備
- ・輪読を担当する受講生は、授業までに輪読資料を作成し、Google documentでシェアをしてください。
- ・輪読を担当しない受講生も、指定された文献を事前に読んできてください。
- (2) 演習課題
- ・本講義では前半に輪読、後半にテーマに関して教員が準備した演習課題をおこないます。
- ・演習課題を授業内で行うこともあれば、復習として位置付け授業外で行うこともあります。

教科書

箕浦康子(2009)『フィールドワークの技法と実際II:分析・解釈編』ミネルヴァ書房

参考書

バニスター他(編著)『質的心理学研究入門:フィルレキシビティの視点』新曜社
 イアン・パーカー(著)八塚塚一郎(訳)『ラディカル質的心理学—アクションリサーチ入門』ナカニシヤ出版
 ブシュカラ・プラサド・箕浦康子(編著)(2018)『質的研究のための理論入門:ポスト実証主義の諸系譜』ナカニシヤ出版

その他、参考文献については適宜授業で指示する。また講義資料については授業内にて配布します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

- ・毎授業における議論への参加と演習課題(40%)
- ・輪読担当における発表、資料作成(40%)
- ・アクションリサーチの研究計画書(20%)

その他

特になし

科目ナンバー：(GJ) LIN531J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	隔年開講	
科目名	日本語学研究A		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 田中 牧郎		

授業の概要・到達目標

歴史言語学の視座から日本語を研究する方法を学びます。近年、日本語の歴史の研究に使うことのできる国立国語研究所編『日本語歴史コーパス(CHJ)』『昭和・平成書き言葉コーパス(SHC)』が整備されたことから、このコーパスを使った日本語史の研究を実践することを通して、データに基づく日本語の歴史的研究を行うことができるようになることを目指します。

授業内容

- 第1回 日本語史研究の現在
- 第2回 『日本語歴史コーパス』『昭和・平成書き言葉コーパス』の概要
- 第3回 コーパスを使って日本語を研究すること
- 第4回 奈良時代、平安時代の日本語の研究
- 第5回 鎌倉時代の日本語の研究
- 第6回 室町時代の日本語の研究
- 第7回 江戸時代の日本語の研究
- 第8回 明治・大正時代の日本語の研究
- 第9回 昭和・平成時代の日本語の研究
- 第10回 語史の研究
- 第11回 語種構成の変遷の研究
- 第12回 外国語から受けた影響の研究
- 第13回 文体差・位相差の歴史の研究
- 第14回 この授業のまとめ

履修上の注意

日本語史研究を行うには、日本語学・日本語史の理論的な知識とともに、コーパスを適切に使うスキルへの習熟が不可欠です。授業では、教科書が示す「例題」に取り組むほか、「演習」については、受講者があらかじめ調査・分析を行ったものについてプレゼンテーションをしてもらい、プレゼンを踏まえたディスカッションを行います。教科書が扱っていないテーマについての研究も、随時行っていく予定です。

準備学習(予習・復習等)の内容

『日本語歴史コーパス(CHJ)』『昭和・平成書き言葉コーパス(SHC)』を、『中納言』で利用する実線は、予習・復習を行うことで確かな活動になります。

教科書

『日本語の歴史(コーパスで学ぶ日本語学)』田中牧郎編(朝倉書店)

参考書

『コーパスによる日本語史研究 近代編』田中牧郎・橋本行洋・小木曾智信編(ひつじ書房)
 『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』青木博史・岡崎友子・小木曾智信編(ひつじ書房)
 『コーパスによる日本語史研究 近世編』岡部嘉幸・橋本行洋・小木曾智信編(ひつじ書房)
 『近代書き言葉はこうしてできた』田中牧郎(岩波書店)
 『日本語の歴史』全8巻 亀井孝ほか(平凡社)
 『言語の標準化を考える—日中英独仏対照言語史の試み—』高田博行・田中牧郎・堀田隆一編(大修館書店)
 『雑誌「日本語学」2020年夏号 特集「コーパスによる語史と現代語誌』(明治書院)
 そのほか、授業時に提示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

プレゼンテーション(40%)、ディスカッション(30%)、期末レポート(30%)。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) LIN531J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	隔年開講	
科目名	日本語学研究B		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

コーパス言語学の方法で日本語を研究する方法を学びます。国立国語研究所から公開されている、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』、『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』、『日本語日常会話コーパス(CEJC)』などを用いて、現代日本語の文法、音声、語彙、表記などを研究していきます。コーパスを使って日本語を研究する実践を重ねることを通じて、研究の目的や方法に応じたコーパスの活用方法に応じて、コーパスを適切に使うことができるようになることを目指します。

授業内容

- 第1回：日本語のコーパス言語学
- 第2回：国立国語研究所のコーパス概説
- 第3回：検索アプリケーション『中納言』
- 第4回：コーパスデータをExcelで集計する
- 第5回：コロケーションとは
- 第6回：コーパスを用いて文法形式のバリエーションを把握する
- 第7回：コーパスを用いて発音のバリエーションを把握する
- 第8回：コーパスを用いてら抜き言葉を研究する
- 第9回：コーパスを用いて言葉の経年変化を研究する。
- 第10回：コーパス関連ツールに習熟する
- 第11回：コーパスによる文法研究
- 第12回：コーパスによる語彙研究
- 第13回：コーパスによる表記研究
- 第14回：この授業のまとめ

履修上の注意

コーパスを使うための技術的なことへの習熟は、これからの日本語学には必須です。また、コーパスを適切に使うためには、日本語学全般の理論的な知識が不可欠です。本授業では、技術的なことと、理論的なこととの双方を重視します。授業では、教科書が示す「例題」に取り組むほか、「演習」については、受講者があらかじめ調査・分析を行ったものについてプレゼンテーションをしてもらい、プレゼンを踏まえたディスカッションを行います。教科書が扱っていないテーマについての研究も、随時行っています。

準備学習（予習・復習等）の内容

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』、『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』、『日本語日常会話コーパス(CEJC)』などを、『中納言』で利用する実践は、予習・復習を行うことで確かな活動になります。

教科書

『日本語の文法・音声（コーパスで学ぶ日本語学）丸山岳彦編（朝倉書店）』

参考書

- 『雑誌「日本語学」2026年春号 特集「日本語コーパス案内図」』（明治書院）
 - 『「中納言」を活用したコーパス日本語研究入門』中俣尚己（ひつじ書房）
 - 『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の語彙・表記』小椋秀樹（朝倉書店）
 - 『日本語教育のためのコーパス調査入門』李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子（くろしお出版）
 - 『ベーシックコーパス言語学 第2版』石川慎一郎（ひつじ書房）
 - 『探索的コーパス言語学-データ主導の日本語研究・試論』石井正彦（大阪大学出版会）
 - 『講座日本語コーパス1 コーパス入門』前川喜久雄（朝倉書店）
 - 『講座日本語コーパス2 書き言葉コーパス』山崎誠（朝倉書店）
 - 『講座日本語コーパス3 話し言葉コーパス』小磯花絵（朝倉書店）
 - 『講座日本語コーパス4 コーパスと国語教育』田中牧郎（朝倉書店）
 - 『講座日本語コーパス5 コーパスと日本語教育』砂川有里子（朝倉書店）
 - 『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』田野村忠温（朝倉書店）
- そのほか、授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

プレゼンテーション（40%）、ディスカッション（30%）、期末レポート（30%）。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) LIN531J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	隔年開講	
科目名	日本語学研究C		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学)	朝日 祥之	

授業の概要・到達目標

普段の生活で日常的に使用していることばに関する研究が行えるようになるために、まず、社会言語学に関連する研究テーマについての考え方を関連する研究事例を示しながら講義する。最終的に各自で社会言語学のテーマに関する実証的な調査ができるようになることを目指す。

本授業では、社会言語学の概説書(和文・英文)を活用しながら、研究テーマの説明を行い、受講生には理解を深めてもらう。その後、各自で取り組んで見たい研究テーマを選んでもらい、データ収集・分析をしてもらう。その結果を最終レポートとして提出してもらう。

授業内容

- 第1回：社会言語学とは何か:社会言語学史
- 第2回：属性論(1)年齢
- 第3回：属性論(2)性・ジェンダー
- 第4回：属性論(3)階層・集団語
- 第5回：敬語・待遇表現とポライトネス
- 第6回：言語行動:待遇・謝罪・勧誘・断り
- 第7回：ことばのスタイル研究:発話への注意度モデル・アコモデーション
- 第8回：ことばのスタイル研究:スタイルの構築とアイデンティティ
- 第9回：言語変異と言語変化:音声変異・文法変異・文字変異
- 第10回：言語接触:借用
- 第11回：ビジン・クレオール
- 第12回：外地の日本語
- 第13回：言語意識:言葉への評価・話者への評価・ことばの認知・方言の認知
- 第14回：言語計画:国語施策・標準語の成立

履修上の注意

講義を進めながら、受講生とのディスカッションを積極的に行います。日頃から自分自身の言葉づかいを観察するようにしてください。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で学ぶ・学んだテーマについて、自身で観察すること。関連文献を積極的に読むこと。

教科書

なし。パワーポイントを利用した講義を行う。参考文献を各自が読むこと。

参考書

真田信治編(2006)『社会言語学の展望』くろしお出版

課題に対するフィードバックの方法

Oh-oi Meijiシステム等を利用して行う

成績評価の方法

授業参加(議論への参加・出席)(40%)
期末レポート(60%)

その他

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN531J			
日本語学・日本語教育学研究	備考		
科目名	日本語学研究D		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学) 滝浦 真人		

授業の概要・到達目標

言語を用いて人が何を為すか?を関心の対象とする語用論の観点から、日本語がどのような特徴を持った言語であるかを考えていきます。とりわけ、対人関係の構築や維持に関わる事象に焦点を当てながら、東アジア諸言語の中での日本語の位置取りについても考察します。語用論という学問手法の成り立ちや主要学説などについても、理解ができるよう解説します。

授業内容

- 第1回：導入：語用論的に見た日本語
- 第2回：語用論の基本(グライス)
- 第3回：効率と配慮(ブラウン&レヴィンソン、リーチ)
- 第4回：ポライトネス(デュルケム、ゴフマン)
- 第5回：コミュニケーションの回路に関わる事象①：呼称
- 第6回：コミュニケーションの回路に関わる事象②：あいさつ
- 第7回：言語行為(オースティン、サール)
- 第8回：言語行為に関わる事象①：感謝、謝罪
- 第9回：言語行為に関わる事象②：ほめと応答
- 第10回：標準語と日本語
- 第11回：敬語の意味論と文法
- 第12回：敬語の語用論
- 第13回：授受表現とその変遷
- 第14回：日本語の現在(イン／ポライトネス)

履修上の注意

ただ解説を聞くのではなく、事前課題・授業内課題を通して問題の所在を理解することが肝要です。授業はリアル対面で行いますが、資料の共有や授業内のコメントおよびフィードバック用にZoomも用います。また、インターネット上に置いた「資料箱」を常時利用しますので、それらが利用できる状態で参加してください。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題への取り組みが多く求められます。自分が日頃意識せずに行っていることを意識化する重要な意味を持ちます。

教科書

教科書は使用しません。

参考書

- ・滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社
- ・加藤重広・滝浦真人編(2016)『語用論研究法ガイドブック』ひつじ書房
- ・椎名美智・滝浦真人編(2022)『「させていただく」大研究』くろしお出版
- ・滝浦真人・椎名美智編(2023)『イン／ポライトネス—からまる善意と悪意—』ひつじ書房

課題に対するフィードバックの方法

授業内課題は授業内でフィードバックします。期末課題については総評によるフィードバックを基本とします。

成績評価の方法

平常点(授業への貢献、授業内課題；60%)と期末課題(40%)によって評価します。

その他

日本語母語話者も留学生も、自文化の価値観を相対化して考えることを楽しんでください！

科目ナンバー：(GJ) LIN551J			
日本語学・日本語教育学研究	備考		
科目名	日本語教育学研究B		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(人間・環境学) 劉 志偉		

授業の概要・到達目標

本授業は、日本語学習経験者の視点からニアネイティブレベルを目指すための日本語教育文法と語彙のシラバスに焦点をあてる。具体的には、学習者が教えてほしかった項目またはその下位ポイント、このように提示してくれていたらもっと分かりやすかった等を解説する。本授業の目標は次の通りである。授業の内容を踏まえた上で、日本語教育における学習者の視点の重要性とその限界を知ると同時に、日本語教師と日本語学習者が協働で何ができるかについて深掘りしてゆく。

授業内容

- 第1回：導入—日本語教育における学習者の視点の位置づけ—
- 第2回：教科書に出てこない日本語たち—学習経験者から見た文法シラバス—
- 第3回：いつまで経っても聞き取れない日本語の音1—ラ行音の撥音化と両面性—
- 第4回：いつまで経っても聞き取れない日本語の音2—肯定か否定か—
- 第5回：学習対象から除外されているはずなのに、混ざってくることは1—標準単語—
- 第6回：学習対象から除外されているはずなのに、混ざってくることは2—通時的観点を踏まえつつ—
- 第7回：文法の史的的研究と日本語教育の接点1—キムタクの「わりー、わりー」—
- 第8回：文法の史的的研究と日本語教育の接点2—551の「しゅうまい」と崎陽軒の「シウマイ」—
- 第9回：学習者が求める文法項目の提示の仕方1—ハとガの使い分けに関する平面式提示法—
- 第10回：学習者が求める文法項目の提示の仕方2—モダリティ形式に前置するのの有無に関する提示案—
- 第11回：学習者が求める文法項目の提示の仕方3—指示詞の指導方法—
- 第12回：学習者が求める文法項目の提示の仕方4—トイウの有無—
- 第13回：敬語は難しいか—二系列二段階導入の試み—
- 第14回：独学能力を有する学習者に求められるもの—ニアネイティブレベルを目指すために—

*講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

特になし。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業には毎回受講者全員が事前に指定された資料を読み、疑問点や自分の意見を授業中に積極的に発言できるように準備してから出席すること。授業後は、配布資料を精読し、当日の内容についてレポートにまとめる。

教科書

必要なプリントを授業中に配布する。

参考書

- ・劉志偉(2022a)『敬語三分類に拠らない現代日本語の敬語指導に関する提案—外国人の目から見た日本語の一環として—』日中言語文化出版社
- ・劉志偉(2022b)『学習経験者の視点から見た日本語教育文法—ニア・ネイティブレベルを目指すために—』日中言語文化出版社
- ・劉志偉(2023)『ニア・ネイティブレベルを目指すための語彙学習—日本語学習の経験者の視点から—』日中言語文化出版社
- ・劉志偉／森篤嗣編(2026)『上級以上の日本語教育を問い直す』日中言語文化出版社
- ・劉志偉／井上直美(近刊)『日本語学習者にとって必要な音声転記ハンドブック』(配布資料)
- ・(上記以外)授業時に適宜に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

リアクションペーパーとレポートについては次週の授業の際に取り上げ、議論を深める。学生による個別的な質問に関してはOh-ol Meijiでも受け付ける。

成績評価の方法

授業への参加度・貢献度(60%)と課題レポート(40%)から総合的に判断する。

その他

能動的な努力姿勢を特に重要視する。

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN551J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	隔年開講	
科目名	日本語教育学研究C		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森	和子

授業の概要・到達目標

多義語の意味を記述的に分析するための言語理論を学び、実際の分析を通して、受講生の研究対象となる語についてより良い意味分析の方法について考える。

授業内容

- 第1回：イントロダクション、ヒトの言語理解
- 第2回：第一言語習得と第二言語習得の相違
- 第3回：第二言語の語彙習得研究の射程範囲
- 第4回：日本語の語彙の特徴と習得上の問題
- 第5回：第二言語の語彙習得のゴール
- 第6回：第二言語の語彙知識の定義—量的側面
- 第7回：第二言語の語彙知識の定義—質的側面
- 第8回：第二言語の語彙知識の測定—テスト理論
- 第9回：第二言語の語彙知識の測定—テスト分析
- 第10回：第二言語の語彙習得に見られる第一言語の転移
- 第11回：第一言語と第二言語の心内辞書
- 第12回：言語と脳
- 第13回：第二言語の付随的語彙学習
- 第14回：第二言語の語彙知識と技能の関係

履修上の注意

事前に以下の二点を準備することが求められる。①文献を事前に読むこと、および②授業日前日までにSearching Questions課題を提出すること。授業は課題に基づいて討論形式で進められる。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業までに毎回の論文講読課題を行うこと。

教科書

配布資料を使用する予定。

参考書

- 『Learning Vocabulary in Another Language』Nation, I.S.P. (2001) (Cambridge: Cambridge University Press.)
『Words in the Mind: An Introduction to the Mental Lexicon』Aitchison, J. (Oxford: Blackwell., 2003)
『研究社 日本語教育事典』近藤安月子・小森和子(編) (研究社, 2012)

課題に対するフィードバックの方法

講義科目専用の用Slack やTeamsにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

事前課題の達成度 (30%)、授業参加度 (30%)、期末レポート (40%)

その他

講読する文献は、日本語で書かれたものと英語で書かれたものが半数ずつになる予定だが、授業では、第二言語としての日本語について、中国語、韓国語、英語との対照から議論していく。

科目ナンバー：(GJ) LIN551J			
日本語学・日本語教育学研究	備考	2026年度開講せず、隔年開講	
科目名	日本語教育学研究D		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森	和子

授業の概要・到達目標

日本語のリーダビリティと文章理解の関係について考えます。まず、日本語の文章のリーダビリティに関する研究を概観し、日本語の文章の難易度はどのような方法で測られる得るかについて、さまざまな方法を知り、学ぶ。その上で、実際に複数の文章を複数のリーダビリティ公式に当てはめて分析し、それぞれのリーダビリティ公式の特徴について検討する。次に、第二言語における文章理解研究を概観する。これまでの研究史の流れをつかんだ後、文章理解に関わる要因について、これまでの研究で明らかになっていることを理解する。

本講義では、日本語のリーダビリティと読解研究の先駆的研究をリードしてきた柴崎秀子氏の研究成果を中心に取り上げ、輪読で進めていく。

授業内容

- 第1回 オリエンテーション、読解研究と日本語のわかりやすさの研究視座
- 第2回 リーダビリティ研究とやさしい日本語の関わり
- 第3回 日本語のリーダビリティ研究(1)
- 第4回 日本語のリーダビリティ研究(2)
- 第5回 日本語のリーダビリティ研究(3)
- 第6回 日本語のリーダビリティ研究(4)
- 第7回 日本語のリーダビリティ研究(5)
- 第8回 リーダビリティ調査の実践
- 第9回 読解研究 背景知識と語彙知識(1)
- 第10回 読解研究 背景知識と語彙知識(2)
- 第11回 読解研究 研究史概観(1)
- 第12回 読解研究 研究史概観(2)
- 第13回 読解研究 内容理解モデル(Kintchの理論)
- 第14回 読解研究 研究方法概観・まとめ

履修上の注意

国立国語研究所の「中納言」の利用申請が必要。事前に課題文献を講読し、授業に参加すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

事前に「中納言」の利用申請をしておくこと。毎回、文献課題を指示するので、指示に従うこと。

教科書

Oh-ol Meijiに毎回の資料のPDFやdownload用URLを提示する。

参考書

- 柴崎秀子(2006)『第二言語のテキスト理解と読み手の知識』風間書房。
近藤安月子・小森和子(2012)『研究社日本語教育事典』研究社。
迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬(編)(2020)『日本語学習者コーパスI-JAS入門』くろしお出版。
李在鎬(編著)(2017)『文章を科学する』ひつじ書房。

課題に対するフィードバックの方法

講義科目専用の用Slack やTeamsにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

事前課題の達成度 (30%)、授業参加度 (30%)、期末レポート (40%)

その他

特になし。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN551J			
日本語学・日本語教育学研究	備考		
科目名	日本語教育学研究E		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 Ph.D. (Applied Linguistics) 松下 達彦		

授業の概要・到達目標

第二言語・外国語としての日本語の語彙の学習・教育を探究する。第一言語(国語)の学習・教育への応用も視野に入れる。指定教科書は英語で書かれているが、授業では日本語への適用を意識し、必要に応じて中国語や英語などと比較する。学期末までに以下の諸点ができるようにすることを旨とする。

- 1) 語彙学習の観点(文章の語彙的レベルや語彙的ジャンル、学習負担、学習条件、学習活動分析など)からカリキュラムを設計あるいはチェックすること
- 2) 語彙の学習や教育に役立つツールを使うこと
- 3) 語彙学習ストラテジーや自律的語彙学習の方法を知ること
- 4) 語彙の学習・教育の基本的な枠組みを理解し、先行研究を批判的に検討すること

具体的には、例えば以下のようなことである。

- 例1: 生教材から使いやすく効果的な語句リストが作れる
- 例2: 語彙学習の観点から既存の教科書の長所と欠点について理解できる
- 例3: 語彙の学習・教育・研究に役立つツールに関する学習者・教師・研究者の質問に答えられる
- 例4: 語彙習得に影響する諸要素を意識し、学習者を観察して語彙学習についてアドバイスできる
- 例5: 学習者の語彙レベルについて適切に測定ができる

授業内容

- 第1回: 科目の説明、語彙の学習・教育に関する研究の概観
- 第2回: 日本語語彙、語彙教育の基礎知識
- 第3回: (1)どの語を学ぶべきか、ツール演習①「例文検索」
- 第4回: (2)学習負担、ツール演習②「共起成分検索」
- 第5回: (3)語彙量とその発達、ツール演習③「データベース、語彙リスト」
- 第6回: (4)語彙学習に適した条件、ツール演習④「語彙頻度プロファイラとリーダビリティ」
- 第7回: (5)語彙学習活動の分析、ツール演習⑤「学習者コーパス」
- 第8回: (6)多様なコンテキストにおける語彙学習、ツール演習⑥「形態素解析」
- 第9回: (7)語彙学習の自律性を育てる、ツール演習⑦「特徴語抽出」
- 第10回: (8)効果的な語彙学習プログラムの開発、ツール演習⑧「語彙テスト」
- 第11回: (9)語彙学習リソース
- 第12回: (10)語彙学習に関する重要な問い
- 第13回: 語句リスト作成演習、類義語分析演習
- 第14回: 期末レポートへのアドバイス、まとめ

履修上の注意

ノートパソコンを持参してください。教室でインターネットに接続することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

テキストの予習、探求課題に関するハンドアウト作成、ツール演習課題です。

探求課題はテキストの各章の内容に即してはいますが、テキスト以外の文献にも積極的に当たることが期待されます。ハンドアウトはテキストの各章のまとめではなく、探求課題に関する各自の調査の報告としてください。

教科書

Webb, S. & Nation, P. (2017). How vocabulary is learned. Oxford University Press.

参考書

Nation, I.S.P. (2022). Learning vocabulary in another language (3rd ed.). Cambridge University Press. 他は授業内で紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

期末レポートについてはコメントを付したうえでOh-ol Meijiシステム等を利用して返却します。それ以外は授業内でフィードバックを行います。

成績評価の方法

- 1) クラス活動への参加 10%
- 2) 予習確認テスト(10回) 20%
- 3) ツール演習課題 15%
- 4) 探求課題の口頭報告とハンドアウト 25%
- 5) 期末レポート 30%

その他

英語のテキストは大変だなと思う方にも積極的にチャレンジしてほしいと思います。

科目ナンバー：(GJ) LIN521E			
英語教育学研究	備考	英語による授業	
科目名	応用言語学研究(第2言語習得理論A)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This is a survey course in Second Language Acquisition (SLA). The field of SLA research is concerned with how people learn a second (or third, fourth, etc.) language. It is an interdisciplinary field, overlapping with research in linguistics, psychology, cognitive science, neuroscience, first (child) language acquisition, and language teaching.

The goals of this course are:

- (1) To gain an understanding of the main issues in SLA, and to become familiar with the principal theories of SLA.
- (2) To understand the processes at work in acquiring a second language, cognitive and sociocultural.
- (3) To become acquainted with the role of individual differences in the acquisition of further languages.
- (4) To become familiar with the methods of SLA research.

授業内容

- 第1回 Course Introduction/Chapter 1: What is SLA?
- 第2回 Chapter 2: Age and SLA
- 第3回 Chapter 3: Crosslinguistic Influences
- 第4回 Chapter 4: Linguistic Environment
- 第5回 Chapter 5: Cognition and SLA
- 第6回 Chapter 6: Development of Learner Language
- 第7回 Chapter 7: Foreign Language Aptitude
- 第8回 Chapter 8: Motivation in SLA
- 第9回 Chapter 8: Motivation in SLA
- 第10回 Chapter 9: Affect and SLA
- 第11回 Chapter 9: Affect and SLA
- 第12回 Chapter 10: Social Dimensions of L2 Learning
- 第13回 Final Paper (Preparation/Conference)
- 第14回 Final Paper (Presentation)

履修上の注意

Class participation: in-class discussions, preparation for discussions, pre-class reading, class assignments.

Being prepared for each class by reading required articles/book chapters.

Completion of assignments.

準備学習(予習・復習等)の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and collaboration in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

『Understanding Second Language Acquisition (Understanding Language).』 Ortega, L. (2008). (London: Hodder Education.)

参考書

『The Psychology of the Language Learner Revisited.』 Dornyei, Z. & Ryan, S. (2015). (New York, NY: Routledge.)

課題に対するフィードバックの方法

Feedback for assignments will be provided via the Oh-ol Meiji system and through in-class discussion.

成績評価の方法

Class participation 60% Students will be assessed on their participation in class in the following ways: completion of assignments; participation in discussions; being prepared for each class by doing the required pre-class reading.

Final paper 40% Students will write a paper on a chosen area of Second Language Acquisition Research. The paper will contain a literature review and a discussion of research in the context of the learner's own L2 learning and/or future teaching plans.

その他

Instructor's contact email: dmclough@meiji.ac.jp

科目ナンバー：(GJ) LIN521E			
英語教育学研究	備考	英語による授業	
科目名	応用言語学研究(第2言語習得理論B)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 Ed.D. ロッセール, ヒュー		

授業の概要・到達目標

Course Components
 A) Critical Reading and Discussion
 Through a critical reading and discussion of the chapters in the textbook (and complementary materials), learners will gain a deeper understanding of the role of testing in language teaching, of how to apply testing principles in practice, and ultimately, of how to develop better tests and rubrics. More specifically, studying the stages of test development and testing techniques will enable learners to devise tests which are not only valid, reliable, and practical, but which also provide beneficial backwash for both teachers and their students. Finally, learners will gain insight into how tests can best be administered, and become familiar with a variety of simple statistical analyses that can be applied to provide insight into the results once the test data have been gathered.

B) Critique and Construction of Tests
 Individuals will be required to construct four short tests (10-20 items) designed to assess each of the major language skills (reading, writing, listening, and speaking) and at least one rubric, and provide a detailed rationale for the design and grading criteria for each. Prior to being submitted for grading, the strengths and weaknesses of the format, individual items, and grading criteria of each test will be discussed and evaluated in small groups in class.

The learning targets for this course include the development of your understanding of the role of tests in language teaching, as well as the ability to write and administer tests effectively.

授業内容

- Week 1-3—Introduction/Goals of the course/Preface/Assessment Concepts and Issues (Ch. 1), Grading and Student Evaluation (Ch. 11), Beyond Letter Grading- Self-/Peer assessment, portfolios, journals, etc. (Ch. 12), and Principles of Language Assessment (Ch. 2)
- Week 4—Designing Classroom Language Tests (Ch. 3)
- Week 5-7—Assessing Listening (Ch. 6)/Assessing Reading (Ch. 8)
- Week 8-10—Assessing Speaking (Ch. 7)/Assessing Writing (Ch. 9)
- Week 11—Assessing Grammar and Vocabulary (Ch. 10)
- Week 12—The Statistical Analysis of Test Data (Hughes, Appendix 1)
- Week 13—Standards-Based Assessment (Ch. 4)/Standardized Testing (Ch. 5)
- Week 14—Submit Statistical Analyses of Test Data/Complete Course Questionnaire.

履修上の注意

Students will be required to come to each class prepared to discuss the assigned readings, critique and design a variety of assessment instruments, and conduct and interpret the results of basic statistical analyses of test data.

準備学習(予習・復習等)の内容

Since your homework helps you to prepare for the next class, much of the value of doing the assignments will be lost if done late.

教科書

Brown, H. D., and Abeywickrama, P. [Language assessment: Principles and classroom practices (3rd ed.)]. (Pearson Education), 2018. Print.

参考書

A good English-English LEARNER dictionary is required. (And you must bring it to each class!!)

課題に対するフィードバックの方法

Students receive detailed written feedback, from both the professor and their peers, on each of the tests and rubrics they construct. In addition, after submitting their statistical analyses assignments, a detailed written answer/explanation is provided for each question.

成績評価の方法

- Your grade for the course will be determined in the following manner:
- Participation in discussions and use of English:35%
- Completion of readings and 5-Points I would Like to Discuss:20%
- Construction and evaluation of assessment instruments:40%
- Statistical analyses assignment:5%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN521E			
英語教育学研究	備考		
科目名	応用言語学研究(社会言語学)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(人文科学) 山本 綾		

授業の概要・到達目標

社会言語学が扱う研究トピックをいくつか取り上げ、それらの背景、主な先行研究、研究や調査の方法、応用の可能性、社会課題や教育実践との関連について学ぶ。各回の授業では1つのトピックに焦点をあて講義形式で学んだうえで、ディスカッションやロールプレイなどを通して演習課題に取り組み、リアクションペーパーを提出する。

到達目標1. 社会言語学の主要な概念や知見について、自分のことばで説明できる

到達目標2. 英語・日本語(この他に履修者の母語も可)の話者の言語行動の記述・分析を通して、言語を実証的に研究する方法を身につける。

授業内容

- 第1回：社会言語学の射程
- 第2回：言語と地域
- 第3回：言語と社会階層
- 第4回：言語と民族
- 第5回：言語とジェンダー
- 第6回：言語と年齢
- 第7回：言語の選択
- 第8回：言語の状況差、適切さ
- 第9回：コミュニケーションの民族誌
- 第10回：相互行為的社会言語学
- 第11回：社会言語学からの貢献
- 第12回：社会言語学の研究方法
- 第13回：期末課題(レポート)のためのディスカッション
- 第14回：総括

履修上の注意

履修者の興味関心や研究対象、母語などにあわせてシラバスを調整することがある。ディスカッションやロールプレイでは積極的に発言すること、また自身とは異なる見方や立場、経験を尊重することが求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

配付資料と参考書の該当範囲を読み、疑問や関連するニュース、自身の経験をまとめておく(100分)。

教科書

なし。資料を映写・配布する。

参考書

“An Introduction to Sociolinguistics” Ronald Wardhaugh, Janet M. Fuller, Blackwell.
 『改訂版 社会言語学—基本からディスコース分析まで』岩田祐子・重光由加・村田泰美(ひつじ書房)

課題に対するフィードバックの方法

授業内課題(ディスカッション、ロールプレイ、リアクションペーパー)は当該回・翌週の授業で、期末課題(レポート)はOh-ol Meiji上でフィードバックします。

成績評価の方法

授業内課題 60%、期末課題 30%、授業への参加貢献 15%

その他

特になし。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN521J			
英語教育学研究	備考		
科目名	応用言語学研究 (語用論)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 Ph.D.(Linguistics) 大須賀 直子		

授業の概要・到達目標

本科目のテーマは、外国語教育において、語用論的能力を伸ばすためには、どのような指導をおこなえばいいのかについて考察することにある。語用論的能力とは、状況や場面に応じて適切に言語を使用したり、相手の発話の意図を正しく理解したりする能力である。語用論的能力は文法能力などと並んで言語能力を構成する重要な要素とされているが、外国語教育においては、伝統的に文法能力の育成に重点が置かれ、語用論的能力の育成にはあまり注意が払われてこなかった現実がある。これは日本のみならず、海外においても共通する問題点である。そこで、本授業では、このような現状を打開して、語用論的指導を言語教育に取り入れるにはどのような方法があるのかを、具体的に考えていくこととする。

授業内容

- 第1回：導入(授業の概要・進め方等の説明)
 - 第2回：Pragmatic competence and interactional competence (1)
 - 第3回：Pragmatic competence and interactional competence (2)
 - 第4回：How to make teaching materials and tests for pragmatics (1)
 - 第5回：How to make teaching materials and tests for pragmatics (2)
 - 第6回：Pragmatics and Curriculum (1)
 - 第7回：Pragmatics and Curriculum (2)
 - 第8回：Teaching Pragmatics (1)
 - 第9回：Teaching Pragmatics (2)
 - 第10回：Teaching Pragmatics (3)
 - 第11回：Testing Pragmatics (1)
 - 第12回：Testing Pragmatics (2)
 - 第13回：学生による語用論の模擬授業(1)
 - 第14回：学生による語用論の模擬授業(2)
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- ・授業ごとに担当者を決め、資料を作成して発表する。
- ・担当者以外の受講生は、事前に当該箇所を読み、ディスカッションに積極的に参加すること。
- ・最終的に、語用論的な指導を主眼とする模擬授業を一人ひとりが行なう。

準備学習 (予習・復習等) の内容

- ・当該のチャプターは必ず事前に読んでくること。
- ・発表に関してはきちんと準備を行うこと。
- ・授業内の議論に積極的に参加すること。
- ・課題に真剣に取り組むこと。

教科書

『Teaching and Testing Second Language Pragmatics and Interaction』Carsten Roever (Routledge)

参考書

授業内で適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

- ・担当箇所発表のあとに、講評をおこなう。
- ・授業の最後に課題をおこない、全体で答え合わせをする。

成績評価の方法

授業参加度(30%), 担当箇所の発表(40%), 模擬授業(30%)等によって総合的に評価する

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN521E			
英語教育学研究	備考	英語による授業	
科目名	応用言語学研究 (Discourse Analysis)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) ルーゲン, ブライアン		

授業の概要・到達目標

Discourse analysis refers to the study of spoken and written language in use, focusing especially on how language is used to express meaning beyond the sentence in a variety of contexts. In this course, students will be expected to meet the following objectives:

The objectives of the course are as follows:

1. Students will develop a broad understanding of the different methodological approaches to discourse analysis.
2. Students will demonstrate the ability to apply insights from the methodological approaches to their own analyses of texts and talk.

授業内容

- 第1回：What is discourse analysis?
- 第2回：Discourse and genre
- 第3回：Discourse and conversation
- 第4回：Discourse and conversation
- 第5回：Discourse and pragmatics
- 第6回：Discourse and pragmatics
- 第7回：Discourse and identity
- 第8回：Discourse and identity
- 第9回：Discourse and ideology
- 第10回：Discourse and ideology
- 第11回：Discourse and multimodality
- 第12回：Discourse and multimodality
- 第13回：Project work
- 第14回：Project presentations

履修上の注意

In this course, there will be frequent whole-class and small-group discussions, so students must complete the reading assignments and homework tasks before class every week.

準備学習 (予習・復習等) の内容

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

None

参考書

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Class participation: 30%
Discourse analysis assignments: 40%
Final project: 30%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN521J			
英語教育学研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	応用言語学研究(コーパス言語学)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 大矢 政徳		

授業の概要・到達目標

コーパス言語学研究において必要とされる知識の理解、コーパスを利用した研究の実践、そして小規模な英語コーパス作成を目標とする。

コーパスとは、ある言語を研究するための資料として、その言語の発話やテキストを大規模に収集して体系的に整理したものである。この講義では、既存の主要なコーパスの歴史と特徴を振り返り、それらを言語資料として利用した先行研究を踏まえ、コーパス研究で利用されるツールを実際を利用してコーパスデータ分析を行い、最後に実際に各自の研究課題に応じた小規模コーパスの構築を試みる。

授業内容

- 第1回：Course overview
 - 第2回：Introduction to corpus linguistics (1)
 - 第3回：Introduction to corpus linguistics (2)
 - 第4回：The design of corpora (1)
 - 第5回：The design of corpora (2)
 - 第6回：Corpus-based descriptions of English (1)
 - 第7回：Corpus-based descriptions of English (2)
 - 第8回：Corpus analysis (1)
 - 第9回：Corpus analysis (2)
 - 第10回：Developing corpora (1) ; basics
 - 第11回：Developing corpora (2) ; linguistic annotation
 - 第12回：Developing corpora (3) ; metadata
 - 第13回：Developing corpora (4) ; character encoding
 - 第14回：Review
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

言語学についての基礎知識をすでに学習済みであることが望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回の授業で取り上げる内容(事前に連絡する)について準備しておくこと。

教科書

Kennedy, G. (2014). An introduction to corpus linguistics. London: Routledge.

参考書

- Jones, C. & Waller, D. (2015). Corpus linguistics for grammar: A guide for research. London: Routledge.
- Wynne, M. (ed.) (2005). Developing linguistic corpora: A guide to good practice. Oxford: Oxbow books.

課題に対するフィードバックの方法

各回のレポートを授業内で共有し、コメントを加える。

成績評価の方法

授業参加度(30%)、レポート(30%)、発表(40%)を評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN561J			
英語教育学研究	備考		
科目名	英語教育学研究(学習指導要領と指導法)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	特任講師	青山 拓実	

授業の概要・到達目標

現行の学習指導要領では、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指すこととされている。本科目では、様々な外国語指導法について背景と目的について理解するとともに、それらが実際の教室内における英語指導においてどのように用いられるのか、学習指導要領の目標や内容と関連づけて分析する。また、実際の中学校・高等学校における外国語の授業を観察・分析することを通して、授業において用いられている指導法や教師の持つ指導観についての理解を深めることを目指す。

授業内容

- 第1回：授業の概要説明、イントロダクション
- 第2回：学習指導要領の目標と内容
- 第3回：A brief history of early developments in language teaching (Chapter 1)
- 第4回：The nature of approaches and methods in language teaching (Chapter 2)
- 第5回：Communicative Language Teaching (Chapter 5)
- 第6回：Content-Based Instruction and Content and Language Integrated Learning (CLIL) (Chapter 6)
- 第7回：Competency-Based Language Teaching, standards, and the Common European Framework of Reference (Chapter 8)
- 第8回：Task-Based Language Teaching (Chapter 9)
- 第9回：Text-Based Instruction (Chapter 10)
- 第10回：The teaching and learning environment (Chapter 11)
- 第11回：教科書・教材と学習指導要領
- 第12回：授業観察と授業分析1(中学校)
- 第13回：授業観察と授業分析2(高等学校)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

授業では、課題テキストや資料について受講生が各自担当パートに関する報告を行い、その内容に基づいたディスカッションを中心として行う。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で扱う資料を事前に読み、関連する資料収集を行ったうえで授業に参加すること。

教科書

- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2014). Approaches and methods in language teaching (3rd ed.). Cambridge University Press.
- 文部科学省(2017).『中学校学習指導要領』『中学校学習指導要領解説・外国語編』
- 文部科学省(2018).『高等学校学習指導要領』『高等学校学習指導要領解説・外国語編』

参考書

その他参考書・参考資料は随時配布する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

- 各授業回のリフレクション(20%)
- 担当部分のプレゼンテーション(40%)
- 最終レポート(40%)

その他

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN561J			
英語教育学研究	備考		
科目名	英語教育学研究(マテリアル・デベロップメント)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任兼任講師 博士(応用言語学) 中谷 安男		

授業の概要・到達目標

既存の第二言語習得理論に基づいた、学習者の言語能力の向上に役立つ英語教材の開発に関してディスカッションを行う。英語のリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングのそれぞれの技能を伸ばすには、どのような教材が有効で、どのようなシラバスデザインが必要なのかを考察する。この中で日本の学習者が苦手とするアカデミック・ライティング教材の開発に注目する。また、いくつかの技能を統合したアプローチの導入や、異文化理解を推進するには、どのような教材が役に立つのかテキスト開発の基礎を学ぶ。CEFRなどの概念を導入したテキストやCALL教材の評価も行う。LESSONプランを実際に作成し、授業のデモンストレーションを行う。

授業内容

- 第1回：Introduction (イントロダクション:授業の目的及び概要の説明, 授業の進め方, 課題の説明)
- 第2回：Content-Based Instruction
- 第3回：Developing Teaching Writing Materials 1
- 第4回：Task-based Language Teaching
- 第5回：Developing Teaching Writing Materials 2
- 第6回：The Political Dimensions of Language Teaching and the Participatory Approach Using Corpus
- 第7回：A Curriculum Planning Guide for Teaching Writing
- 第8回：Expressive Writing
- 第9回：Learning Strategy Training, Cooperative Learning, and Multiple Intelligences
- 第10回：Cohesion & Coherence
- 第11回：Move
- 第12回：Using Corpus Analysis
- 第13回：Emerging Uses of Technology in Language Teaching and Learning
- 第14回：Review/Developing Oral Proficiency

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前にテキストおよび課題を十分に予習しておくこと。

教科書

『Techniques & Principles in Language Teaching』 Diane Larsen-Freeman and Marti Anderson (2011) Oxford University Press.

『Academic Writing Strategies for University Students』 Nakatani. Y. (2016)(東京:大修館書店)

参考書

授業内で指示する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

- 60分授業のLESSONプラン2つ 30%
- 授業のプレゼンテーション 40%
- 論文のレビュー 30%

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN561J			
英語教育学研究	備考		
科目名	英語教育学研究(英語教授法)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任兼任講師 博士(応用言語学) 中谷 安男		

授業の概要・到達目標

既存の代表的な英語教授を概観し、どのような教授法が、なぜ有効なのか、第二言語習得理論に基づきディスカッションを行う。具体的には、学習者の情緒的要因、認知的要因を考慮して言語能力を養成するには、授業をいかに組み立て、どのような活動を取り入れ、どのような役割を教室内で果たせばいいのかを考察を行う。また、スピーキングやライティングに関する学習者のパフォーマンスをどのように評価するのかなどについて考慮する。以上のような観点から、授業の重要な方向性を決断するときに役立つ概念や考え方を考察する。

授業内容

- 第1回：Introduction (イントロダクション:授業の目的及び概要の説明, 授業の進め方, 課題の説明)
- 第2回：Defining Language Proficiency
- 第3回：Proficiency and Language Acquisition Theory
- 第4回：The Grammar-Translation Method
- 第5回：The Direct Method
- 第6回：Principles and Priorities in Methodology
- 第7回：The Audio-Lingual Method
- 第8回：The Silent Way
- 第9回：Desuggestopedia
- 第10回：Community Language Learning
- 第11回：Total Physical Response
- 第12回：Communicative Language Teaching
- 第13回：Debate and Speech
- 第14回：Review

履修上の注意

授業では、ディスカッションを頻繁に行うので、課題であるテキストを必ず読んでから授業に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前にテキストおよび課題を十分に予習しておくこと。

教科書

『Techniques & Principles in Language Teaching』 Diane Larsen-Freeman and Marti Anderson (2011) OUP

参考書

『Academic Writing Strategies for University Students』 Nakatani. Y. (2016)(東京:大修館書店)

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

- 授業中のプレゼンテーション 70%
- 論文(指導法に関するもの) 30%

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN561J			
英語教育学研究	備考	2026年度開講せず、隔年開講	
科目名	英語教育学研究(カリキュラムデザイン)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) ルーゲン, ブライアン		

授業の概要・到達目標

Every English language teaching professional should know how to develop a course from scratch. This course provides students with an understanding of the approaches, theories, concepts and processes involved in developing language-teaching curricula for a variety of ELT environments. The course will introduce students to recent trends in ELT curriculum development, before focusing on the specific elements of curricular design. In the end, students will be able to conceptualize, design, and evaluate language courses and language teaching materials.

The goals of this course are:

- 1) to demonstrate an understanding of the specific elements involved in curricular design in ELT.
- 2) to analyze various course designs from different types of language courses.
- 3) to show a mastery of the knowledge (terminology), concepts, and issues surrounding curriculum development in ELT.

授業内容

Week 1: Introduction to curriculum development
Week 2: Environment analysis
Week 3: Needs analysis
Week 4: Principles
Week 5: Goals
Week 6: Content
Week 7: Sequencing
Week 8: Format and presentation
Week 9: Format and presentation
Week 10: Assessment
Week 11: Evaluation
Week 12: Adopting and adapting course books
Week 13: Teaching and curriculum design
Week 14: Course wrap-up & review

履修上の注意

- 1) Attendance is mandatory.
- 2) Active participation in classroom activities and discussions is required.
- 3) Students are required to complete all readings and tasks before the scheduled class discussion.

準備学習(予習・復習等)の内容

Each week, we will work on a different component of the curriculum development project.

Preparation and completion of course requirements, including all assignments, readings, and participation in out-of-class collaborative learning activities.

教科書

参考書

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

1. Class participation: 40%
2. Take-home quizzes (4 @ 15pts): 60%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN561E			
英語教育学研究	備考	英語による授業	
科目名	英語教育学研究(スピーチコミュニケーション)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 Ed.D.	ロッセール, ヒュー	

授業の概要・到達目標

Course Components

A) Presentations

Each student will give two 20-minute presentations - one practice, and one final. To give effective presentations, you will need to:

- 1) Carry out thorough and comprehensive research.
- 2) Develop a well-structured speech that clearly explains your main points.
- 3) Support and illustrate your main points through the incorporation of data, tables, graphs, quotations, and citations.
- 4) Analyse your data, with a focus on addressing the question "So what?".
- 5) Incorporate English words and expressions that will enable you to communicate your points effectively to the audience.
- 6) Make supporting PowerPoint slides that enable the audience to better understand your main points.
- 7) Combine # 1-4 and with effective presentation skills and to deliver an informative and stimulating presentation.

B) Using the Word Engine website (requires a small fee).

This website has been carefully designed to not only enable you to develop your knowledge of words that are commonly used in academic contexts, but to adjust the words that you study to your individual level. Each student will be expected to accumulate a minimum of 350 Correct Responses per week.

The learning targets for this course include the development of your research, PowerPoint, and presentations skills, as well as that of your academic vocabulary and oral fluency.

授業内容

Week 1—Introduction/Goals of the course.

Week 2—Using monolingual dictionaries/Complete My Presentation Topic.

Week 3—Choose topics and begin presentation preparation/Complete Presentation Outline.

Week 4—View and analyse model presentation/Complete Paraphrasing Exercises.

Week 5—Submit and discuss presentation outline./Complete My Fluency Expressions.

Week 6—Submit and discuss fluency expressions/Complete Summarising Exercises.

Week 7—Submit script and PowerPoint slides.

Week 8—Revise script and PowerPoint slides.

Week 9—Practice presentations—Round A/Complete Checklist and Self-Evaluation.

Week 10—Practice presentations—Round B/Complete Checklist and Self-Evaluation.

Week 11—Presentation analysis and improvement

Week 12—Presentation analysis and improvement

Week 13—Final presentations—Round A/Complete Final Self-Evaluation.

Week 14—Final presentations—Round B/Complete Final Self-Evaluation/Course questionnaire.

履修上の注意

Students will be required to select academic presentation topics, conduct research in English, support their claims with evidence, present and analyse relevant data, develop PowerPoint slides that improve the clarity and comprehensibility of their presentations, and regularly use Word Engine to expand their academic vocabulary.

準備学習(予習・復習等)の内容

Since your homework helps you to prepare for the next class, much of the value of doing the assignments will be lost if done late.

Memory research has shown that in order to gain the full benefits of using the Word Engine program, rather than having fewer and longer sessions, you should use it on a frequent or even daily basis.

教科書

Wallwork, Adrian. [English for Presentations at International Conferences, 2nd Ed.]. (Cham, Switzerland: Springer), 2016. Print.

参考書

A good English-English LEARNER dictionary is required. (And you must bring it to each class!!)

課題に対するフィードバックの方法

During the presentation preparation phase of the course, written and oral feedback, and scores are provided by the professor for the presentation outline, expressions for fluency, and PowerPoint slides - with the slides being evaluated according to clarity, consistency, and organisation. Similarly, students receive oral and written feedback from the professor, as well as their peers, following their practice and final presentations. And finally, students receive written and oral feedback, as well as scores, on their paraphrasing and summarising assignments.

成績評価の方法

Your grade for the course will be determined in the following manner:

Participation in discussions and use of English:30%

Homework Completion:20%

Presentations (15 + 15):30%

Use of Word Engine:20%

その他

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN521J			
英語教育学研究	備考		
科目名	英語教育学研究(心理言語学)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

英語や日本語を含む第二言語教育の専門家として、第二言語の習得に影響を与える学習者要因に対する理解を深め、学習者中心の教育を実践する上で必要となる基礎的知識を身につけることを目標とする。関連して、実証的手法を用いた論文の読解・執筆を通じて、基礎的な研究手法(統計的な分析を含む)に慣れるとともに、論文を批判的に検討できるようになることを第2の目標とする。

実際の授業では、主として英語で書かれた第二言語習得の学習者要因に関する基本的な文献を読む。授業では、担当者による報告、疑問点・問題点に関する全体討議、教員による補足説明等を行う。毎回の授業出席、積極的な討議参加に加え、課題の作成を含めた授業前後の入念な準備が要求される。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(授業の概要説明)
 - 第2回：Ch.1 Language Acquisition
 - 第3回：Ch.2 Second Language Acquisition
 - 第4回：リサーチ・プロジェクト(1)研究テーマの策定
 - 第5回：Ch.3 Instructed Second Language Acquisition
 - 第6回：Ch.4 Input, Interaction, and Output
 - 第7回：リサーチ・プロジェクト(2)調査方法・仮説の設定
 - 第8回：Ch.10 Cognitive Individual Differences
 - 第9回：Ch.11 Psychological Individual Differences
 - 第10回：リサーチ・プロジェクト(3)調査の実施
 - 第11回：Ch.12 Social Individual Differences
 - 第12回：Ch.13 The Research-Practice Dialogue
 - 第13回：リサーチ・プロジェクト(4)結果の分析・考察
 - 第14回：授業全体のまとめ
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。また、本授業では最終課題(レポート)として、受講者全員による共同研究の実施、ならびにその成果をまとめた共著論文の執筆を予定している。授業外でも多くの時間を要求されることから、履修を希望する院生は相当の覚悟を持って履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前後の入念な準備が要求されます。

教科書

Loewen, S., & Sato, M. (2024). A practical guide to second language teaching and learning. Cambridge University Press.

参考書

- Mackey, A., & Gass, S. (2022). Second language research: Methodology and design (Third edition). Routledge.
- Nassaji, H. (2025). Applied linguistics research: A comprehensive guide to methodology, design, analysis, and evaluation. Cambridge University Press.
- 廣森友人(編著). (2020). 『英語教育論文執筆ガイドブック: ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』大修館書店.

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(20%), 課題発表(20%), レポート(60%)により、総合的に判断します。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN591J			
英語教育学研究	備考		
科目名	リサーチメソッド研究(量的研究方法)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任教授 博士(学術)	中村 和幸	

授業の概要・到達目標

本授業は、別に開講されるリサーチメソッド(質的研究方法)と対になるものであり、両授業の履修によって、社会調査の理論を概観し、具体的な方法の基礎を身につける。

調査やデータ収集から展開される量的研究を適切に進めるには、最終的なデータ分析で得ることができる知見の内容を理解した上で、調査の企画や仮説の構築、データ収集法の設計を行う必要がある。本講義では、このような点を常に意識しながら、データ分析技法を中心に量的研究法の基礎について説明する。

最初に量的研究法について概観し、度数分布、平均、分散といったデータ記述・記述統計量や、ヒストグラム、散布図などの可視化の基礎を扱う。次に、カテゴリカルデータ分析(クロス集計)、推定、検定、分散分析、回帰分析等について説明する。最後に、これらを基礎とした調査設計について学ぶ。以上の内容について、講義の他に計算機演習も併用することで、理解を深めながら方法を身につける。

これによって、調査企画・設計の能力やデータ収集の技術といった、各種調査研究における量的研究を進めるための基礎知識と能力を身につけることを目的とする。

授業内容

- 第1回：量的研究方法について
- 第2回：調査目的と調査方法、データの記述と可視化
- 第3回：記述統計量
- 第4回：多変量間の関係とクロス集計
- 第5回：推測統計の考え方とサンプリング
- 第6回：推定
- 第7回：統計的仮説検定の考え方
- 第8回：さまざまな検定
- 第9回：分散分析と多重比較
- 第10回：回帰分析
- 第11回：因子分析
- 第12回：クラスター分析
- 第13回：カテゴリカルデータの取り扱い
- 第14回：発展的な量的研究方法

履修上の注意

統計手法に関しては考え方中心で説明するため、数学的に特別な準備は必要ない。

準備学習(予習・復習等)の内容

各自の研究課題に関連するデータを準備する、講義後の復習として演習内容を別のデータで実施するなど、積極的な予復習を行うこと。

教科書

- 『教育を読み解くデータサイエンス』耳塚寛明監修, 中西啓喜編著(ミネルヴァ書房, 2021)
- 『言葉と数式で理解する多変量解析入門』小杉考司(北大路書房, 2019)

参考書

- 『Quantitative Research Methods: From Theory to Publication』Nicholas Harkiolakis (CreateSpace Independent Publishing Platform, 2017)
- 『Quantitative Social Science: An Introduction』Kosuke Imai (Princeton University Press, 2017)
- 『社会調査の基礎』北川由紀彦, 山口恵子(放送大学教育振興会, 2019)
- 『社会統計学—社会調査のためのデータ分析入門』G.W.ボーンシュテット, D.ノーキ著, 海野道郎, 中村隆監訳(ハーベスト社, 1992)
- 『ガイドブック社会調査』森岡清志(日本評論社, 2007)

課題に対するフィードバックの方法

少人数での演習講義のため、講義内で個別にフィードバックする。

成績評価の方法

毎回の講義内で実施するSPSSによる演習課題の到達度評価50%, 最終レポート課題50%

その他

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT511J			
文化・思想研究		備考	隔年開講
科目名	文化関係・文化変容研究(日本近代文学A)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学) 小谷 瑛輔		

授業の概要・到達目標

日本近代文学研究において、様々なテーマに関して画期を成した論文を講読する。

各自で関心のある文献を挙げ、回ごとに担当を決めて講読していく。また、それ以外に共通で扱う文献として、小森陽一『文体としての物語』を指定する。

到達目標は、テキストとディスカッションから得られた知見を各自の論文に生かせるようになることである。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 - 第2回：履修者の指定する論文、または「物語としての文体／文体としての物語」
 - 第3回：履修者の指定する論文、または「文体としての自己意識——『浮雲』の主人公」
 - 第4回：履修者の指定する論文、または「『浮雲』における物語と文体」
 - 第5回：履修者の指定する論文、または「表現の理論／物語の論理」
 - 第6回：履修者の指定する論文、または「結末への意志／結末の裏切り——嵯峨の屋おむろにおける物語と表現」
 - 第7回：履修者の指定する論文、または「結末からの物語——「舞姫」における一人称」
 - 第8回：履修者の指定する論文、または「人称的世界の生成——鴎外ドイツ三部作における文体と構成」
 - 第9回：履修者の指定する論文、または「独白の系譜——広津柳浪の初期作品を中心に」
 - 第10回：履修者の指定する論文、または「くやしさと恥ずかしさ——「たけくらべ」における制度(ラング)と言説(ディスカール)」
 - 第11回：履修者の指定する論文、または「囚われた言葉／さまよいだす言葉」
 - 第12回：履修者の指定する論文、または「「こころ」を生成する心臓(ハート)」
 - 第13回：履修者の指定する論文、または「く読むことへの夢想」
 - 第14回：履修者の指定する論文、または「聴き手論序説」
- * 講義の内容・進度・順番は履修者の知識や関心に応じて変更することがあります。

履修上の注意

演習と講義を組み合わせて行う。履修者が文献の概要とディスカッション・クエスチョンをレジュメにまとめて発表するので、発表準備にそれなりの時間と労力がかかることを了解した上で履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で扱うテキストをあらかじめ読んでおくこと。

教科書

小森陽一『文体としての物語・増補版』(青弓社)

参考書

教科書内に挙げられているものを適宜参考にする。その他教員から指示する場合がある。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加度50%、研究発表50%

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIT511J			
文化・思想研究		備考	2026年度開講せず、隔年開講
科目名	文化関係・文化変容研究(日本近代文学B)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学) 小谷 瑛輔		

授業の概要・到達目標

日本近代文学研究において90年代以降重要な立場と見なされるようになった、「文化研究」について学ぶ。

各自で関心のある文献を挙げ、毎回担当を決めて講読していく。また、共通で扱う文献として、金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスカールの帝国』を指定する。

到達目標は、テキストとディスカッションから得られた知見を各自の論文に生かせるようになることである。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 - 第2回：第1章
 - 第3回：第2章
 - 第4回：第3章
 - 第5回：第4章
 - 第6回：第5章
 - 第7回：第6章
 - 第8回：受講者が指定する文献の講読
 - 第9回：第7章
 - 第10回：第8章
 - 第11回：第9章
 - 第12回：第10章
 - 第13回：第11章
 - 第14回：第12章
- * 講義の内容・進度・順番は履修者の知識や関心に応じて変更することがあります。

履修上の注意

文献講読の形式で授業は進められる。履修者が章ごとの概要とディスカッション・クエスチョンをレジュメにまとめて発表するので、発表準備にそれなりの時間と労力がかかることを了解した上で履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で扱うテキストをあらかじめ読んでおくこと。

教科書

金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスカールの帝国』(新曜社)

参考書

小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』(小沢書店)

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加度50%、発表50%

その他

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT511J			
文化・思想研究		備考	
科目名	文化関係・文化変容研究 (日本近代文学C)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学) 高橋 孝次		

授業の概要・到達目標

戦後日本で広く読まれた中間小説を、掲載された雑誌メディアとの関わりを軸として、実物の雑誌に触れてディスカッションを進めるほか、掲載された作品の分析などに関わらせつつ講じていく。

「中間小説」はしばしば「純文学と大衆小説のあいだ」という象徴的な空間に位置づけられて説明されるが、「純文学」や「大衆小説」という概念そのものの輪廓もまた歴史的な文脈の中で大きく揺れ動くため、単に作品そのものの価値だけでなく、同時代の雑誌メディアと小説家、読者と文壇、あるいは戦後文学の諸問題などとの重なりから理解していく必要がある。

今回は主に昭和30年代から40年代にかけて、時代を追って雑誌と作品をみていくが、履修生には作品を掲載メディアとの関わりから考えること、歴史的な文脈の中で作品を捉えることで、なにが見えてくるのか、その都度考えてもらいたい。

本授業は講義形式を前提とするが、必要に応じて自由にディスカッションを行い、自らの研究にも資するものとなるよう、実践的に理解を深めることをひとまずの到達目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション 雑誌メディアからみる中間小説
- 第2回：中間小説とジャンル 象徴的価値と市場価値
- 第3回：三島由紀夫・安部公房 世界文学と中間小説
- 第4回：世界文学と中間小説(報告と討議1)
- 第5回：世界文学と中間小説(報告と討議2)
- 第6回：松本清張・水上勉 昭和30年代以降のミステリの展開
- 第7回：昭和30年代以降のミステリの展開(報告と討議1)
- 第8回：昭和30年代以降のミステリの展開(報告と討議2)
- 第9回：小松左京・筒井康隆 日本SFの浸透と多様化
- 第10回：日本SFの浸透と多様化(報告と討議1)
- 第11回：日本SFの浸透と多様化(報告と討議2)
- 第12回：野坂昭如・五木寛之・大藪春彦
- 第13回：反骨とマスメディア(報告と討議1)
- 第14回：反骨とマスメディア(報告と討議2)

※受講生と相談の上で変更の可能性あり。

履修上の注意

初回イントロダクションでの話し合いや授業の進行状況、ディスカッションのフィードバックに応じて、雑誌メディア研究にどの程度重心を置くのか、扱う雑誌や作品をどれにするのか、など授業内容を調整する可能性がある。

準備学習(予習・復習等)の内容

履修者は事前に提示された文献や関連資料に目を通しておくこと。

教科書

特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。

参考書

小嶋洋輔・高橋孝次・西田一豊・牧野悠『中間小説とは何だったのか 戦後の小説雑誌と読者から問う』(文学通信、2024)、荒井真理亜・副田賢二・富永真樹・中村健編『戦前期週刊誌の文学と視覚表象:『サンデー毎日』の表現戦略』(文学通信、2024)、和田敦彦編『職業作家の生活と出版環境 日記資料から研究方法を拓く』(文学通信、2022)ほか

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッション、クラスウェブでの提出物に対するコメント等でフィードバックを行う。

成績評価の方法

ディスカッションへの参加(30%)と平常点(授業内での報告、毎回のリアクションペーパーなど・70%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIT511J			
文化・思想研究		備考	
科目名	文化関係・文化変容研究 (日本近代文学D)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学) 松本 和也		

授業の概要・到達目標

日本の近現代文学をフィールドとした研究に関して、設定した研究対象やテーマに応じ、同時代の文学言説をはじめとした同時代資料を活用した研究方法を実践的に学ぶ。第1に、文学作品を軸として、どのようなタイプの資料があるかを検討し、それらのアクセス方法を学び、研究プランとあわせた取捨選択の方法を学ぶ。第2に、同時代に大きな反響を呼んだ任意の文学作品をとりあげ、同時代評を収集し、作品に対する解釈と往還させながら分析を進めるトレーニングを行う。第3に、受講生それぞれのテーマに即して掘り下げたい資料体を設定し、資料収集・分析・考察を行う。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：資料を活かした研究論文の講読と討議(1)
- 第3回：資料を活かした研究論文の講読と討議(2)
- 第4回：資料を活かした研究論文の講読と討議(3)
- 第5回：資料を活かした研究論文の講読と討議(4)
- 第6回：同時代評分析のサンプル・スタディー(1)
- 第7回：同時代評分析のサンプル・スタディー(2)
- 第8回：同時代評分析のサンプル・スタディー(3)
- 第9回：同時代評分析のサンプル・スタディー(4)
- 第10回：テーマに即した資料収集・分析・考察(1)
- 第11回：テーマに即した資料収集・分析・考察(2)
- 第12回：テーマに即した資料収集・分析・考察(3)
- 第13回：テーマに即した資料収集・分析・考察(4)
- 第14回：まとめと展望

履修上の注意

授業内容に即して、授業時間外での準備が課される。また、授業中には積極的な発言が求められる。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回の授業内容に即して、指示する(主に、論文・テキストの精読、資料調査、報告資料の作成など)。

教科書

受講生の興味関心に応じて、適宜、指示する。

参考書

受講生の興味関心に応じて、適宜、指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回のレジュメ、報告内容については、その都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

報告資料作成および報告(70%)、授業時のディスカッションへの貢献(30%)、により総合的に評価する。

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT551J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容研究(フランス語圏A)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	鶴戸 聡	

授業の概要・到達目標

【異文化理解に関するフランスの理論的著作および文学作品を読む】

まずフランスにおける「異文化間教育」分野の創設者の一人であるマルティーン・アブダラ＝プレッツェイユによる概説書『異文化間教育』を読み、続けて水声社の叢書《エル・アトラス》からマグレブ系移民に関する文学テクストを読んでいく。

* 水声社の書籍はAmazonに卸していません。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：『異文化間教育』を読む
- 第3回：『異文化間教育』を読む
- 第4回：『異文化間教育』を読む
- 第5回：『異文化間教育』を読む
- 第6回：『異文化間教育』を読む
- 第7回：『移民の記憶』を読む
- 第8回：『移民の記憶』を読む
- 第9回：『シャアバの少年』を読む
- 第10回：『シャアバの少年』を読む
- 第11回：『ファティマ』を読む
- 第12回：『ファティマ』を読む
- 第13回：『ファティマ』を読む
- 第14回：まとめ

履修上の注意

世界と人間に対する幅広い関心をもって、積極的に議論に参加することを期待する。

準備学習(予習・復習等)の内容

教科書の各章を毎回読んで、自分なりの理解と疑問点をまとめておくこと。

教科書

マルティーン・アブダラ＝プレッツェイユ『異文化間教育』西山教行訳、白水社、文庫クセジュ、2021年〔原書第5版2017年〕。

参考書

- 水声社・叢書《エル・アトラス》より：
・ヤミナ・ベンギギ『移民の記憶』
・アズーズ・ベガーク『シャアバの少年』
・レイラ・セバル『ファティマ―辻公園のアルジェリア女たち』

* 水声社の書籍はAmazonに卸していません。

エマニュエル・サンテリ『現代フランスにおける移民の子孫たち』明石書店、2019年。
宮島喬『フランスを問う：国民、市民、移民』人文書院、2017年。
森千香子『排除と抵抗の郊外：フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会、2016年。

三原芳秋・渡邊英理・鶴戸聡＝編著『クリティカル・ワーズ 文学理論』フィルムアート社、2020年。

課題に対するフィードバックの方法

授業中に指示する。

成績評価の方法

授業への参加度(100%)。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIT551J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化関係・文化変容研究(フランス語圏B)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	鶴戸 聡	

授業の概要・到達目標

バンド・デシネ(フランスを中心とするヨーロッパのコミック)の概要を学ぶとともに、物語や図像表現を分析するための理論を検討する。

授業内容

- 第1回：イントロダクション バンド・デシネとは何か
- 第2回：バンド・デシネを読んでみる 「タンタンの冒険」を読む(1)
- 第3回：バンド・デシネを読んでみる 「タンタンの冒険」を読む(2)
- 第4回：バンド・デシネの歴史(1)
- 第5回：バンド・デシネの歴史(2)
- 第6回：バンド・デシネの歴史(3)
- 第7回：認知言語学からのアプローチ
- 第8回：ナラトロジーからのアプローチ(1)
- 第9回：ナラトロジーからのアプローチ(2)
- 第10回：図像表現をどう読むか
- 第11回：受講者による研究報告(1)
- 第12回：受講者による研究報告(2)
- 第13回：受講者による研究報告(3)
- 第14回：まとめ

* 上記のスケジュールは受講生の知識や理解度によって適宜調整する。

履修上の注意

幅広い関心をもって積極的に議論に参加することを期待する。

準備学習(予習・復習等)の内容

資料を毎回読んで、自分なりの理解と疑問点をまとめておくこと。
授業内で学んだ理論的枠組みを利用しながら簡単な発表も行う。

教科書

適宜PDFで資料を配布する。

参考書

古永真一『BD 第九の芸術』未知谷、2010年。
出原健一『マンガ学からの言語研究』ひつじ書房、2021年。
Jan Baetens, Hugo Frey, "The Graphic Novel: An Introduction (Cambridge Introductions to Literature)," Cambridge University Press, 2014.
Kai Mikkonen, "The Narratology of Comic Art (Routledge Advances in Comics Studies Book 3)," Routledge, 2017.

課題に対するフィードバックの方法

口頭発表を基調とするため、その場でフィードバックする。

成績評価の方法

授業の参加度70%、プレゼンテーション30%

その他

特修科目

科目ナンバー：(GJ) CUL511J			
文化・思想研究	備考		
科目名	文化関係・文化変容研究(記号と環境A)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 原田 義也		

授業の概要・到達目標

現代文明社会が、戦争やテロ、公害や乱開発を抑止することができず、さらには生きる希望を失って自ら命を絶ちたいと願う人々を生み出し続けているという事態に直面して、私たちは、自らが今まで疑うことなく抱き続けてきた常識や価値観を、根本的かつ謙虚に見直す必要に迫られています。この喫緊の課題に取り組むには、何よりもまず、私たち自身の世界認識の方法を多角的に捉え直し、自らを取り巻く環境との間に新しい宥和/融和的な知覚・行動様式を見出す思考技術を身につけることが求められますが、それを行っていく上で、人文・社会・自然科学の枠を横断する批判的思考としてのセミオ・リテラシーは、今日益々その重要性を増しているといえます。

このような問題意識に立脚しつつ、本授業では、世界認識のあり方をめぐる現代の諸問題を「記号と環境」の主題の下に概観・再考し、私たち一人ひとりの心に「新しい民主主義のプロジェクトが抱えて立つ概念的基盤を打ち立てる」(ネグリ=ハート)ことを目標としながら、毎回の講義テーマに対する理解を深めていきます。その際、受講生に念頭に置いてほしいことは、記号によって世界を表象し文化を生成するのは他でもなく私たち自身であり、私たちの世界認識のあり方如何によって、私たちを取り巻く自然環境・社会環境・精神環境(フェリックス・ガタリの言葉を借りれば「環境」「社会的諸関係」「人間の主観性」)の性質が決定されていく、ということです。そして、一人一人が能動的に自らの環境に関わるようになること、すなわち創造的な記号空間を自ら構築する力を育むことを、春・秋学期を通しての到達目標としたいと思います。本授業は、実質的には講義と演習を織り交ぜた形式で進められます。春学期のAではセミオ・リテラシーの基本的な議論を中心に学び、秋学期のBでは議論の具体的なテキストを講師の専攻分野である東スラヴ地域(ロシア・ウクライナ・ベラルーシ)の歴史・芸術・文化の中から積極的に取り上げて考察していく予定です。

授業内容

- 第1回 イントロダクション―授業の概要・到達目標
- 第2回 C.S.パースによる記号の種類(1)
- 第3回 C.S.パースによる記号の種類(2)
- 第4回 推論の構造―演繹・帰納・アブダクション(1)
- 第5回 推論の構造―演繹・帰納・アブダクション(2)
- 第6回 レトリックの意義(1)
- 第7回 レトリックの意義(2)
- 第8回 プリコラージュの作法(1)
- 第9回 プリコラージュの作法(2)
- 第10回 身体としての建築(1)
- 第11回 身体としての建築(2)
- 第12回 アフォーダンスと行為(1)
- 第13回 アフォーダンスと行為(2)
- 第14回 小括

履修上の注意

本授業では、記号論とその関連分野(言語学・文化人類学・生物学等)にまつわる若干の専門用語を取り扱いますが、授業目標の達成に必要な説明はその都度行いますので、基本的に履修に際しての当該分野における特別な準備は必要ありません。

なお、授業内容は、議論展開および進捗状況に応じて多少変更する場合があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

本授業では、必要に応じてプリント・資料等を配布します。事前に目を通すべき資料や踏まえるべき知識については、前週までにその旨を伝えますので、配布資料や参考書等で調査・確認の上、授業に臨んでください。

教科書

特に指定はありません。

参考書

- 『パースの記号学』米盛裕二(勁草書房)
- 『アブダクション―仮説と発見の論理』米盛裕二(勁草書房)
- 『レトリックの記号論』佐藤信夫(講談社学術文庫)
- 『野生の思考』レイヴン・ストロース(みすず書房)
- 『生きものの建築学』長谷川堯(講談社学術文庫)
- 『アフォーダンス―新しい認知の理論』佐々木正人(岩波書店)
- その他

課題に対するフィードバックの方法

受講生は、毎回の受講に際してリアクションペーパーを作成し、クラスウェブのレポート欄に提出します。提出されたリアクションペーパーの内容は、講師が取りまとめとてクラスウェブ経由で受講生に還元し、その内容に対する全体講評を次回授業の冒頭で行います。

成績評価の方法

成績評価の内訳は、授業への参加状況(出欠、授業への貢献度、報告・発表内容)が100%です。

その他

授業の到達目標に向けて、共に探究の歩みを進めましょう。
講師連絡先メールアドレス: harada_kokunichi@meiji.ac.jp

科目ナンバー：(GJ) CUL511J			
文化・思想研究	備考		
科目名	文化関係・文化変容研究(記号と環境B)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 原田 義也		

授業の概要・到達目標

現代文明社会が、戦争やテロ、公害や乱開発を抑止することができず、さらには生きる希望を失って自ら命を絶ちたいと願う人々を生み出し続けているという事態に直面して、私たちは、自らが今まで疑うことなく抱き続けてきた常識や価値観を、根本的かつ謙虚に見直す必要に迫られています。この喫緊の課題に取り組むには、何よりもまず、私たち自身の世界認識の方法を多角的に捉え直し、自らを取り巻く環境との間に新しい宥和/融和的な知覚・行動様式を見出す思考技術を身につけることが求められますが、それを行っていく上で、人文・社会・自然科学の枠を横断する批判的思考としてのセミオ・リテラシーは、今日益々その重要性を増しているといえます。

このような問題意識に立脚しつつ、本授業では、世界認識のあり方をめぐる現代の諸問題を「記号と環境」の主題の下に概観・再考し、私たち一人ひとりの心に「新しい民主主義のプロジェクトが抱えて立つ概念的基盤を打ち立てる」(ネグリ=ハート)ことを目標としながら、毎回の講義テーマに対する理解を深めていきます。その際、受講生に念頭に置いてほしいことは、記号によって世界を表象し文化を生成するのは他でもなく私たち自身であり、私たちの世界認識のあり方如何によって、私たちを取り巻く自然環境・社会環境・精神環境(フェリックス・ガタリの言葉を借りれば「環境」「社会的諸関係」「人間の主観性」)の性質が決定されていく、ということです。そして、一人一人が能動的に自らの環境に関わるようになること、すなわち創造的な記号空間を自ら構築する力を育むことを、春・秋学期を通しての到達目標としたいと思います。

本授業は、実質的には講義と演習を織り交ぜた形式で進められます。春学期のAではセミオ・リテラシーの基本的な議論を中心に学び、秋学期のBでは議論の具体的なテキストを講師の専攻分野である東スラヴ地域(ロシア・ウクライナ・ベラルーシ)の歴史・芸術・文化の中から積極的に取り上げて考察していく予定です。

授業内容

- 第1回 イントロダクション―授業の概要・到達目標
- 第2回 プロツキー『小さな曳船のパラード』を読む(1)
- 第3回 プロツキー『小さな曳船のパラード』を読む(2)
- 第4回 チェブラーシカはいかにして生まれたか(1)
- 第5回 チェブラーシカはいかにして生まれたか(2)
- 第6回 ノルシュテイン『話の話』は何を語るか(1)
- 第7回 ノルシュテイン『話の話』は何を語るか(2)
- 第8回 アレクシエーヴィチ『チェルノブイリの祈り』を読む(1)
- 第9回 アレクシエーヴィチ『チェルノブイリの祈り』を読む(2)
- 第10回 スリヴィンスキー『戦争語彙集』を読む(1)
- 第11回 スリヴィンスキー『戦争語彙集』を読む(2)
- 第12回 戦時下のウクライナで書かれた詩を読む(1)
- 第13回 戦時下のウクライナで書かれた詩を読む(2)
- 第14回 総括

履修上の注意

本授業では、記号論とその関連分野(言語学・文化人類学・生物学等)にまつわる若干の専門用語を取り扱いますが、授業目標の達成に必要な説明はその都度行いますので、基本的に履修に際しての当該分野における特別な準備は必要ありません。

なお、授業内容は、議論展開および進捗状況に応じて多少変更する場合があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

本授業では、必要に応じてプリント・資料等を配布します。事前に目を通すべき資料や踏まえるべき知識については、前週までにその旨を伝えますので、配布資料や参考書等で調査・確認の上、授業に臨んでください。

教科書

特に指定はありません。

参考書

- 『ちいさなタグボートのパラード』ヨシフ・プロツキー著・沼野恭子訳(東京外国語大学出版会)
- 『チェブラーシカ』佐藤千登勢(ユーラシアブックレット)
- 『話の話』解説・高畑勲(アニメージュ文庫)
- 『チェルノブイリの祈り』スベトラナ・アレクシエービッチ著・松本妙子訳(岩波現代文庫)
- 『戦争語彙集』オスタフ・スリヴィンスキー作・ロバートキャンベル訳著(岩波書店)
- 『三田文学』2022年夏季号(第150号)～2023年秋季号(第155号)
- その他

課題に対するフィードバックの方法

受講生は、毎回の受講に際してリアクションペーパーを作成し、クラスウェブのレポート欄に提出します。提出されたリアクションペーパーの内容は、講師が取りまとめとてクラスウェブ経由で受講生に還元し、その内容に対する全体講評を次回授業の冒頭で行います。

成績評価の方法

成績評価の内訳は、授業への参加状況(出欠、受講への貢献度、報告・発表内容)が100%です。

その他

授業の到達目標に向けて、共に探究の歩みを進めましょう。
講師連絡先メールアドレス: harada_kokunichi@meiji.ac.jp

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) ART511J			
文化・思想研究		備考	
科目名	文化関係・文化変容研究(カルチュラル・スタディーズA)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任講師 博士(文学)	張 佳能	

授業の概要・到達目標

「カルチュラル・スタディーズ」、とりわけポピュラー・カルチャーに関するテキストを精読する。「カルチュラル・スタディーズ」の歴史と基本概念を学習し、教科書や関連文献の精読を通して古典から近年の研究動向まで幅広く渉猟していく。その上で、「日本」という文脈のなかで「カルチュラル・スタディーズ」をどう位置付けるかについても考える。「カルチュラル・スタディーズ」という名目にこだわらず、メディア論や社会学をはじめ人文学の諸分野の知見を深めつつ、ディスカッション・口頭発表を経て各自の研究テーマに活用できるようになることを到達目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：総論と文献紹介～「カルチュラル・スタディーズ」とは何か？～
- 第3回：『ポップ・カルチャー批評の理論』(第1章～第2章)
- 第4回：『ポップ・カルチャー批評の理論』(第3章～第4章)
- 第5回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第6回：『ポップ・カルチャー批評の理論』(第5章～第6章)
- 第7回：『ポップ・カルチャー批評の理論』(第7章～第8章)
- 第8回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第9回：『ポップ・カルチャー批評の理論』(第9章～第10章)
- 第10回：『ポップ・カルチャー批評の理論』(第11章～第12章)
- 第11回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第12回：資料調査の指導
- 第13回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第14回：日本の「カルスタ」について考える

履修上の注意

講義の内容・進度・順番は履修者の知識や関心に応じて変更することがあります。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で扱うテキストをあらかじめ読んでおくこと。

教科書

『ポップ・カルチャー批評の理論：現代思想とカルチュラル・スタディーズ』(小島遊書房)

参考書

『カルチュラル・スタディーズ入門』(筑摩書房)
『アイドル・スタディーズ：研究のための視点、問い、方法』(明石書店)ほか

課題に対するフィードバックの方法

授業内で適宜解説・コメントを行い、ディスカッションの中で口頭フィードバックを行う。

成績評価の方法

口頭発表50%・ディスカッション参加50%

その他

教科書の各章の詳細については、必要に応じて以下出版社のサイトから確認してください。<https://www.tkns-shobou.co.jp/books/view/529>

科目ナンバー：(GJ) ART511J			
文化・思想研究		備考	
科目名	文化関係・文化変容研究(カルチュラル・スタディーズB)		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任講師 博士(文学)	張 佳能	

授業の概要・到達目標

「カルチュラル・スタディーズ」、とりわけ文化理論に関するテキストを精読する。各回で指定された「キーワード」のディスカッションを通して、諸概念への理解を深めつつ、「カルチュラル・スタディーズ」の問題意識と今後の展開を共に考える。先行研究の考え方や方法を各自の研究テーマに活用させるほか、「カルチュラル・スタディーズ」という分野の問題点も批判的に捉えられるようになることを到達目標とする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：キーワード(映画・メディア・大衆文化)
- 第3回：キーワード(構造主義・ポスト構造主義・言説)
- 第4回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第5回：キーワード(情報理論・精神分析)
- 第6回：キーワード(フェミニズム)
- 第7回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第8回：キーワード(文化の社会学)
- 第9回：キーワード(文芸批評・美の理論)
- 第10回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読
- 第11回：キーワード(ポストモダニズム・ポストコロニアリズム)
- 第12回：キーワード(マルクス主義)
- 第13回：資料調査の指導
- 第14回：参考書もしくは受講者が希望する文献の精読

履修上の注意

講義の内容・進度・順番は履修者の知識や関心に応じて変更することがあります。
なお春学期の「カルチュラル・スタディーズA」を受講してからの履修が望ましい。

準備学習(予習・復習等)の内容

各回で振り当てられたキーワードをあらかじめ調べておくこと。

教科書

『文化理論用語集：カルチュラル・スタディーズ+』(新曜社)

参考書

『表現文化の社会学入門』(ミネルヴァ書房)
『「知」の欺瞞：ポストモダン思想における科学の濫用』(岩波書店)ほか

課題に対するフィードバックの方法

授業内で適宜解説・コメントを行い、ディスカッションの中で口頭フィードバックを行う。

成績評価の方法

口頭発表50%・ディスカッション参加50%

その他

特になし。

特修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT511J			
文化・思想研究		備考	
科目名	文化関係・文化変容研究(日本古典文学)		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任准教授 博士(学術) 馬場 小百合		

授業の概要・到達目標

日本古典文学における歌の歴史を概観する。ひらがなの無い奈良時代の『古事記』や『万葉集』における歌に始まり、平安時代の『伊勢物語』などの歌物語、鎌倉時代の歌人藤原定家の選による『百人一首』の歌などを取り上げ、その表記や表現の特徴を理解する。各歌についての文法的解説にとどまらず、時代背景や所収作品における歌の位置づけなど、幅広い周辺知識への理解を深めることを目的とする。参加者による資料調査、グループワークなども予定されている。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：和歌の修辭法(1)
- 第3回：和歌の修辭法(2)
- 第4回：漢字で書かれた歌(1)：『万葉集』
- 第5回：漢字で書かれた歌(2)：『古事記』
- 第6回：歌物語の歌：『伊勢物語』『大和物語』
- 第7回：和歌と絵画
- 第8回：勅撰和歌集の成立：『古今和歌集』(1)
- 第9回：勅撰和歌集の成立：『古今和歌集』(2)
- 第10回：和歌に関する論文を読む
- 第11回：藤原定家と『百人一首』
- 第12回：『百人一首』の歌(1)
- 第13回：『百人一首』の歌(2)
- 第14回：『百人一首』の歌(3)、まとめ

履修上の注意

日本古典文法についての高度な予備知識は前提としないが、予習復習を通じて最低限の知識を身につけていることを求める。

準備学習(予習・復習等)の内容

事前に指定した資料や論文を読み、次回の授業内容に関する古典用語や文法について辞典等で調べること。復習として、配布された資料や参考文献を読むこと。

教科書

指定無し。

参考書

授業中に適宜紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

リアクションペーパーの全体講評をOh-ol Meijiで公開または次回授業時に口頭で行う。

成績評価の方法

授業への貢献度(50%)最終レポート(50%)

その他

科目ナンバー：(GJ) PHL551J			
文化・思想研究		備考	
科目名	日本思想研究A		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	長尾 進	

授業の概要・到達目標

この講義では、日本思想のうち、「武」および「武芸」に関する思想について学びます。

平安末期以降明治維新まで、日本では武士が700年近く政治の中核を占めました。そのことによって、日本の政治形態や社会の在り方、文化の発展には「武」をめぐる思想が少なからず影響を与えています。また、中世に発展した各武芸はそれぞれに思想をもっていました。また、共通するのはあくまで「平らかな世」を実現するためにのみ「武」を用いるという、「平法」の思想でした。加えて各武芸は、能楽などの芸道論に刺激を受けてそれぞれの「道」の思想を確立し、近世には仏教や儒学の影響をうけてさらにその深化が図られました。

本講義では、「平法」の思想と、他の芸道に影響を受けて発展した武芸思想について概括的に捉えるとともに、その代表的著作の吟味を通して、武芸に通底する思想について理解を深めることを到達目標とします。

授業内容

- 第1回：日本思想の大系における「武」および「武芸」に関する思想の位置づけ。
- 第2回：「平法」という思想
- 第3回：中世における芸道論の芽生え(能楽、茶の湯など)。芸道論の武道への影響
- 第4回：能楽の影響、世阿弥『風姿花伝』(年来稽古条々)を読む
- 第5回：『風姿花伝』(別紙口伝)を読む
- 第6回：武芸伝書形成の背景
- 第7回：柳生宗矩『兵法家伝書』(殺人刀)を読む
- 第8回：『兵法家伝書』(活人剣)を読む
- 第9回：『兵法家伝書』と沢庵『不動智神妙録』
- 第10回：日本武道における禅の影響
- 第11回：宮本武蔵『五輪書』の武道思想上における位置づけ
- 第12回：『五輪書』を読む(地之巻、水之巻)
- 第13回：『五輪書』を読む(火之巻、風之巻、空之巻)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

日本思想研究B(秋学期)と合わせて履修することによって、理解がより深まります。

準備学習(予習・復習等)の内容

当該回の資料は必ず授業の前に読み、わからないところは図書やインターネット等で調べるなどして、準備学習(予習)してください。

復習については、単元のまとめごとにごとにアサインメントを提出してもらいますので、その作成過程のなかで復習することになります。

教科書

教科書は用いません。授業の前週までに、資料を配布または配信します。また、適宜、ヴィジュアル教材(映像等)を使用します。

参考書

『近世芸道論 一日本思想大系61』西山松之助・渡辺一郎・郡司正勝校注(岩波書店)
『道の思想』叢書身体思想Ⅰ 寺田透(創文社)

課題に対するフィードバックの方法

対面での対話、クラスウェブのアンケート機能や、レポートのフィードバック機能等を用いて、双方向のやりとりをします。

成績評価の方法

学期中に読んだ事項のなかから、とくに興味や関心をもったり、もっと深く掘り下げてみたいと思ったテーマに関する期末レポートを提出してもらいます(50%)。これに、単元のまとめごとにごとにアサインメント(40%)、質問・意見など授業への意欲や積極性(10%)を勘案して、総合的に評価します。

その他

特になし。

博士前期課程

特修科目

科目ナンバー：(GJ) PHL551J			
文化・思想研究		備考	
科目名	日本思想研究B		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授	長尾 進	

授業の概要・到達目標

この講義では、日本思想の内、近世中期～近代の武道・武士道思想について学びます。

近世中期以降、幕藩体制の緩みと武士の情弱への警鐘もあって、武士や儒学者たちのなかから武道（武芸）・武士道への復古的思潮が顕れてきます。一方で山鹿素行をはじめとして、幕藩体制における農・工・商三民の上になつた官僚としての武士のあるべき生き方を説いた「土道論」も著されるようになります。そのうち近世後期になると、異国船の出現などの「外患」を梃子として、富国強兵の論旨のもと新たな武道・武士道思想が創出されました。その最たるものは、後期水戸学における武道思想でした。

明治維新後、武道は文明開化の世情にそぐわないものとして一時衰退の一途を辿りますが、西南戦争を契機としてその実用的価値が見直され、治安組織（警察）における教育法として採用されて、学生の間にも普及してゆきます。そして、日清戦争を契機として国民の間にも尚武の気風が起り、これに愛国精神が重なって「武徳」という思想が登場してきます。一方で武士道は、近代においてキリスト教信仰や皇国史観などそれぞれの立場から見直され、また意味づけがなされ、一部では「武徳」思想との融合が図られてゆきます。

昭和初期から第二次世界大戦中にかけては、武道思想も戦時色の影響を受け、軍国主義的思潮のなかに組み込まれていきます。戦後は、その反動で占領政策に基づいた「民主主義」の名目での新しい武道のあり方が模索されてきました。

近代以降の武道思想は、このように時々の社会情勢や国際情勢との間で大きく揺れ動いてきましたが、嘉納治五郎が説いた「精力最善活用」や「自他共栄」思想のように、本来はそれらとは一線を画した、また国境を越えて共感しうる普遍的価値をもつものです。この講義を通じて、受講生の皆さん自身が、日本武道や武士道本来の価値を見極めることが、到達目標です。

授業内容

- 第1回：江戸期思想史における武道思想や武士道論・土道論の位置づけ
- 第2回：復古・懐古主義的武士道論 大道寺友山「武道初心集」、山本常朝「葉隠」
- 第3回：儒学（古学派）における武士道論 山鹿素行の「土道論」と赤穂義士
- 第4回：享保の改革と武道思想 一荻生徂徠「鈴録」
- 第5回：寛政の改革と武道思想 一松平定信「修身録」「修行録」
- 第6回：後期水戸学影響下の武道思想 一藤田東湖「常陸帯」と、米田是谷「武技論」
- 第7回：嘉納治五郎と近代修養主義 「柔道一斑並ニ其教育上ノ価値」から「精力善用・自他共栄」へ
- 第8回：1890年代における「武徳」思想の登場と、近代における武士道論の諸相
- 第9回：日本人論としての新渡戸「Bushido—the Soul of Japan」
- 第10回：日本人論としての新渡戸「Bushido—the Soul of Japan」 つづき
- 第11回：近代武道における「道」の思想 嘉納治五郎と西久保弘道
- 第12回：戦時中における「体練」の思潮と武道
- 第13回：戦後の占領政策と民主主義が武道思想に与えた影響
- 第14回：まとめ 一新しい武道思想の創造 「普遍」と「固有」の対立を超えて

履修上の注意

日本思想研究A（春学期）と合わせて履修することによって、武道思想についての理解がより深まります。

準備学習（予習・復習等）の内容

当該の回に関わる資料は、その前週までに配布または配信しますので、必ず授業の前に読み、わからないところは図書やインターネット等で調べるなどして準備学習（予習）してきてください。復習については、単元のまとめりにアサインメントを提出してもらいますので、その作成過程のなかで復習することになります。

教科書

教科書は使いません。授業の前週までに、資料を配布・配信します。また、適宜、ヴィジュアル教材（映像等）を使用します。

参考書

- 『徳川思想小史』源了圓（中公新書）
- 『武道の名著』渡辺一郎編（東京コピイ出版部）
- 『史料 明治武道史』渡辺一郎編（新人物往來社）
- 『近代武道史研究資料集』渡辺一郎編（筑波大学体育科学系・武道論）
- 『武道のすすめ』小林信二（局津書房）
- 『今なぜ武道か』中村民雄（日本武道館）
- 『武士道の名著—日本人の精神史』（山本博文、中公新書）
- 『武国日本』（佐伯真一、平凡社新書）

課題に対するフィードバックの方法

対面での対話、クラスウェブのアンケート機能や、レポートのフィードバック機能等を用いて、双方向のやりとりをします。

成績評価の方法

学期中に目を通した文献のなかから、とくに興味や関心をもったり、もっと深く掘り下げてみたいと思ったテーマに関する期末レポートを提出してもらいます（50%）。これに、単元のまとめりに提出してもらったアサインメント（40%）、質問・意見など授業への意欲や積極性（10%）を勘案して、総合的に評価します。なお、出席はとりまじし、総合評価の際の参考にします。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) PHL511J			
文化・思想研究		備考	隔年開講
科目名	日本思想研究C		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	博士（文学）	美濃部 仁

授業の概要・到達目標

この授業では、西田幾多郎の論文「私と汝」（1932年）を読むことを通して、とくに他者とは何かについて考える。西田における他者について考えるためには、とくに「無の場所」と「時」を理解しておくことが重要であると思われるので、最初の数回は、それを理解するためにあてることを予定している。その上で、テキストを丹念に読んでゆきたい。

授業内容

- 第1回 西田幾多郎の思想の概略
- 第2回 「純粹経験」
- 第3回 ジェイムズとヘーゲル
- 第4回 「無の場所」
- 第5回 「個物」
- 第6回 「時」
- 第7回 まとめとディスカッション
- 第8回 「私と汝」講読（1）——実在と時
- 第9回 「私と汝」講読（2）——非連続の連続
- 第10回 「私と汝」講読（3）——物質と生命
- 第11回 「私と汝」講読（4）——行為
- 第12回 「私と汝」講読（5）——私と汝
- 第13回 「私と汝」講読（6）——死即生
- 第14回 まとめ

履修上の注意

哲学の知識をある程度もっている学生を対象とした授業です。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、前回の授業で問題となったことについて確認をおこないます。そのための準備をして授業に臨むようにしてください。

教科書

上田閑照編『西田幾多郎哲学論集Ⅰ』（岩波文庫）

参考書

授業中に紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

授業中に、授業内容についての理解と考察の深まりについて確認し、評価をおこないます。

その他

特にありません。

特修科目

科目ナンバー: (GJ) PHL511J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず、隔年開講	
科目名	日本思想研究D		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部 仁	

授業の概要・到達目標

カントの『純粋理性批判』の感性論と分析論を読みます。『純粋理性批判』は、それ以後の哲学に決定的影響を与えた哲学の古典としてよく知られた著作です。この授業では、カントに影響を与えた思想や、カントから影響を受けた思想も取り上げ、カントの思想の特徴を際立てながら、とくにカントの基礎概念を理解することを目標とします。

授業内容

- 第1回 カントと『純粋理性批判』について
- 第2回 超越論的感性論(1): アプリオリとアポステリオリ、超越論的認識
- 第3回 超越論的感性論(2): 直観と概念、純粋直観
- 第4回 超越論的感性論(3): 空間
- 第5回 超越論的感性論(4): 時間
- 第6回 まとめ
- 第7回 超越論的分析論(1): 超越論的論理学
- 第8回 超越論的分析論(2): 判断表
- 第9回 超越論的分析論(3): 量のカテゴリー、質のカテゴリー
- 第10回 超越論的分析論(4): 関係のカテゴリー、様相のカテゴリー
- 第11回 超越論的分析論(5): 超越論的演繹
- 第12回 超越論的分析論(6): 超越論的統覚
- 第13回 超越論的分析論(7): 原則
- 第14回 まとめ

履修上の注意

哲学史の知識をある程度もっており、ドイツ語でテキストを読むことができる学生を対象とした授業です。

準備学習(予習・復習等)の内容

テキストを予め読んで、質問を準備した上で授業に臨んでください。

教科書

Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft (どの版でもかまいません)

参考書

授業中に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

授業における議論への貢献、また、授業中の発表によって評価します。

その他

特にありません。

科目ナンバー: (GJ) PHL541J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	日本思想研究E		
開講期	春学期集中	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学)	松本 直樹	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

M・ハイデガー『存在と時間』(M. Heidegger, Sein und Zeit)の議論を手がかりに、哲学の基本概念の一つである「実存」概念の意義を、その関連諸概念との繋がりとともに考える。

【到達目標】

『存在と時間』の同時代と後世への巨大な影響については、今さら言うべきことはない。「現存在」「実存」「世界内存在」「死への存在」「時間性」など、今日、狭い意味での哲学のみならず、多様な思想領域でいわば「常用」されている諸概念の多くが、この書から生まれた。本講座の目標は、思想研究やその応用分野に携わる研究科学生のみなさんに、こうした諸概念をそれぞれの立場で有意義に活用することができるだけの基本的な素養を身につけてもらうことである。

授業内容

- 第1回: イントロダクション
- 第2回: 「実存」概念の基本(1) —— 存在の間との関連
- 第3回: 「実存」概念の基本(2) —— 自己関係的な存在
- 第4回: 「世界内存在」とは(1) —— 自己理解の場としての世界
- 第5回: 「世界内存在」とは(2) —— 存在理解の場としての世界
- 第6回: 「情態性」と「理解」(1) —— 引き渡されの諸様相
- 第7回: 「情態性」と「理解」(2) —— 自己隠蔽と世界開示
- 第8回: 「不安」と「気遣い」(1) —— 単純化としての不安
- 第9回: 「不安」と「気遣い」(2) —— 単独化としての不安
- 第10回: 「ひと」と「頹落」(1) —— 自己理解と他者理解
- 第11回: 「ひと」と「頹落」(2) —— 自己理解と存在理解
- 第12回: 「死」と「良心」(1) —— 自己関係性の根拠
- 第13回: 「死」と「良心」(2) —— 自己関係性の遂行
- 第14回: 「存在と時間」とはどのような課題か

<授業日程> ※2025年度参考

この授業は、集中講義としておこなわれる。

- ・前半第1～7回(On-line 講義)
- いずれも月曜5限 4/28、5/12、26 6/9、23 7/7、21
- ・後半第8～14回(対面集中講義)
- 8/18(月)3～5限、8/19(火)1～4限

履修上の注意

- (1) 授業の進行を妨げる行為には厳正に対処する。
- (2) 理解しやすさには極力、配慮するが、受講者にも積極的・能動的に考える姿勢を望みたい。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業内で提示した問題について、参考書(下記のもの、ならびに授業内で指示するもの)などに目を通しつつ、各々が考えるところをきちんと文章化してまとめること。

教科書

指定しない。

参考書

- (1) Martin Heidegger, Sein und Zeit, 19. Aufl., Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006
『存在と時間』の原典。ドイツ語を履修済・習得済の人には、やはり原典に触れることを勧めたい。
- (2) M・ハイデガー『存在と時間』上・下巻、筑摩書房(ちくま学芸文庫)、1994年古くとも現状、最も読みやすく、また信頼の置ける邦訳。
- (3) 秋富克哉他編『ハイデガー読本』、法政大学出版局、2014年
『存在と時間』についての予備知識をもたない人は、本書の第5～10章を読まれるとよい。
以上の他にも、適宜、授業内で紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出されたレポートに対し、Oh-ol Meijiにて全体講評を行う。

成績評価の方法

学期末レポートで評価する(100%)。

その他

国際日本学研究科

博士後期課程

(授業科目・担当者及び履修方法)

修了要件・履修方法について（博士後期課程）

1 修了要件について

- (1) 本研究科の博士後期課程においては、3年以上在学し、20単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、博士学位請求論文の審査に合格した者には、博士の学位が授与されます。
- (2) 単位の修得にあたっては、次の要件を満たさなければなりません。
 - ア 必修科目のうち、指導教員が担当する研究論文指導Ⅰ～Ⅵ（12単位）を必修とする。
 - イ 選択必修科目のうちから、2単位以上を修得しなければならない。
 - ウ 指導教員が必要と認めた場合には、博士前期課程の講義科目（特修科目）について、4単位を限度として、修了に必要な単位数に含めることができる。
 - エ 指導教員が必要と認めた場合には、他研究科（専門職学位課程を含む。）の授業科目及び研究科間共通科目を履修することができる。

2 履修にあたっての注意事項

指導教員の指導のもとに各自の履修・研究計画を立てなければなりません。

各自の研究計画にしたがって、4月の定められた期日までに当該年度の「履修計画書」（指導教員の承認が必要）を提出し、履修登録を行ってください。

3 修了見込証明書について

博士学位請求論文の審査に合格後、大学院委員会において博士の学位授与が承認された場合に、修了見込証明書を発行します。

授業科目及び担当者一覧（博士後期課程）

〔国際日本学専攻〕

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ		
必修科目	ポップカルチャー	研究論文指導 I	演2	1	専任教授	藤本 由香里	○		110	
		研究論文指導 II	演2	1					110	
		研究論文指導 III	演2	2					111	
		研究論文指導 IV	演2	2					111	
		研究論文指導 V	演2	3					112	
		研究論文指導 VI	演2	3					112	
	社会・情報・国際関係	研究論文指導 I	演2	1	専任准教授	森川 嘉一郎	○		113	
		研究論文指導 II	演2	1					113	
		研究論文指導 III	演2	2					114	
		研究論文指導 IV	演2	2					114	
		研究論文指導 V	演2	3					115	
		研究論文指導 VI	演2	3					115	
	言語・国際交流	社会・情報・国際関係	研究論文指導 I	演2	1	専任教授	呉 在 焜	○		116
			研究論文指導 II	演2	1					116
			研究論文指導 III	演2	2					117
			研究論文指導 IV	演2	2					117
			研究論文指導 V	演2	3					118
			研究論文指導 VI	演2	3					118
言語・国際交流		研究論文指導 I	演2	1	専任教授	田中 牧 郎	○		119	
		研究論文指導 II	演2	1					119	
		研究論文指導 III	演2	2					120	
		研究論文指導 IV	演2	2					120	
		研究論文指導 V	演2	3					121	
		研究論文指導 VI	演2	3					121	
言語・国際交流	研究論文指導 I	演2	1	専任教授	廣 森 友 人	○		122		
	研究論文指導 II	演2	1					122		
	研究論文指導 III	演2	2					123		
	研究論文指導 IV	演2	2					123		
	研究論文指導 V	演2	3					124		
	研究論文指導 VI	演2	3					124		
言語・国際交流	研究論文指導 I	演2	1	専任教授	小 森 和 子	○		125		
	研究論文指導 II	演2	1					125		
	研究論文指導 III	演2	2					126		
	研究論文指導 IV	演2	2					126		
	研究論文指導 V	演2	3					127		
	研究論文指導 VI	演2	3					127		

授業科目		単位	配当年次	職格	担当教員	研究指導	備考	ページ	
必修科目	言語・国際交流	研究論文指導Ⅰ	演2	1	専任准教授	マクロクリン・ デイヴィッド・アンセルム	○	2026年度開講せず	128
		研究論文指導Ⅱ	演2	1				2026年度開講せず	128
		研究論文指導Ⅲ	演2	2				2026年度開講せず	129
		研究論文指導Ⅳ	演2	2				2026年度開講せず	129
		研究論文指導Ⅴ	演2	3				2026年度開講せず	130
		研究論文指導Ⅵ	演2	3				2026年度開講せず	130
		研究論文指導Ⅰ	演2	1	専任教授	岸 磨貴子	○	2026年度開講せず	131
		研究論文指導Ⅱ	演2	1				2026年度開講せず	131
		研究論文指導Ⅲ	演2	2				2026年度開講せず	132
		研究論文指導Ⅳ	演2	2				2026年度開講せず	132
		研究論文指導Ⅴ	演2	3					133
		研究論文指導Ⅵ	演2	3					133
	研究論文指導Ⅰ	演2	1	専任教授	美濃部 仁	○		134	
	研究論文指導Ⅱ	演2	1					134	
	研究論文指導Ⅲ	演2	2					135	
	研究論文指導Ⅳ	演2	2					135	
	研究論文指導Ⅴ	演2	3					136	
	研究論文指導Ⅵ	演2	3					136	
	研究論文指導Ⅰ	演2	1	専任教授	小谷 瑛 輔	○		137	
	研究論文指導Ⅱ	演2	1					137	
	研究論文指導Ⅲ	演2	2					138	
	研究論文指導Ⅳ	演2	2					138	
	研究論文指導Ⅴ	演2	3					139	
	研究論文指導Ⅵ	演2	3					139	
選択必修科目	ポップカルチャー特別研究	講2	1・2・3	専任教授	藤本 由香里		2026年度開講せず	140	
		講2	1・2・3	専任准教授	森川 嘉一郎		2026年度開講せず	140	
		講2	1・2・3	専任教授	宮本 大人		3年に一度開講	141	
	社会・情報・国際関係特別研究	講2	1・2・3	専任教授	呉 在 烜		3年に一度開講	141	
	言語・国際交流特別研究	講2	1・2・3	専任教授	岸 磨貴子		3年に一度開講	142	
		講2	1・2・3	専任教授	田中 牧 郎		2026年度開講せず	142	
		講2	1・2・3	専任教授	小森 和 子		3年に一度開講	143	
		講2	1・2・3	専任教授	廣森 友 人		2026年度開講せず	143	
		講2	1・2・3	兼任講師	朝日 祥 之		2026年度開講せず	144	
	文化・思想特別研究	講2	1・2・3	専任教授	美濃部 仁		2026年度開講せず	144	
		講2	1・2・3	専任教授	小谷 瑛 輔		2026年度開講せず	145	
		講2	1・2・3	兼任講師	松本 直 樹		集中講義、 3年に一度開講	145	

必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

指導教員の研究課題は、特に少女マンガにおける漫画表現の特性・歴史的展開、マンガの国際比較等であるが、マンガ表現に限らず、アニメやゲーム、舞台表現等の女性向けポップカルチャー領域の特性分析など、履修者の研究テーマに応じて、適切なテキストや講義内容を選択していく。

ポップカルチャーは新しい学問領域で、まだ誰も手をつけていない研究課題がたくさんある。けれど一方で、すぐれた先行研究も着々と増えてきている。それらの先行研究をきちんと踏まえつつ、まだないところに問いを立て、次の学問展開の基礎となるような論文を書いていくことを目指す。とくにこの学期では、先行研究の収集を行いつつ、計画している研究課題の設定が本当に妥当なものであるかの検討を集中的に行う。

授業内容

- 第1回：研究課題と計画の発表/研究方法の検討
- 第2回：先行研究(文献)の収集結果と解説(1)
- 第3回：先行研究(文献)の収集結果と解説(2)
- 第4回：先行研究(学術論文)の収集結果と解説(1)
- 第5回：先行研究(学術論文)の収集結果と解説(2)
- 第6回：先行研究の報告(1)
- 第7回：先行研究の報告(2)
- 第8回：先行研究の報告(3)
- 第9回：先行研究の整理と課題の検討
- 第10回：サンプル調査の方法の検討
- 第11回：サンプル調査の報告(1)
- 第12回：サンプル調査の報告(2)
- 第13回：サンプル調査の報告(3)
- 第14回：これまでの総括と方針の再検討

履修上の注意

先行研究を検討するに際して、それが自分の問題意識とクロスするポイントはなにか、常に自分の研究課題にフィードバックさせる読みをこころがけ、焦点がより絞られていくような方向で読み込んでいくこと。狭い範囲の先行研究でなく、広い目配りと、細心の注意をもって先行研究の収集・理解につとめること。

準備学習(予習・復習等)の内容

繰り返しになるが、先行研究を検討するに際して、それが自分の問題意識とクロスするポイントはなにか、常に自分の研究課題にフィードバックさせる読みをこころがけ、焦点がより絞られていくような方向で読み込んでいくこと。狭い範囲の先行研究でなく、広い目配りと、細心の注意をもって先行研究の収集・理解につとめること。

教科書

必要に応じて適宜指定する。

参考書

必要に応じて適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

優れた論文を書くために必要なのは、1.課題設定の妥当性、2.先行研究の正確な理解、3.その上でオリジナリティのある研究の方向を定めること、4.新しいデータの収集・分析の方法の妥当性と積極性、5.それらすべてを緊密に結びつける論理性。これらを意識した報告と発表ができていないかを判断し、評価を行う。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

ポップカルチャー研究でも先行研究は数多くあるが、それらの相互の関係や論点の整備はまだ十分とはいえない。研究を進めていく際には、隣接の領域での研究結果や、当該ジャンルの歴史的成立の経緯、諸外国ではどうなっているのか、などにも目配りが必要とされる。この学期では具体的な研究結果を積み重ねつつ、立体的な問題構成を意識した指導を行う。

授業内容

- 第1回：これまでの研究成果の報告と問題点の検討
- 第2回：実際のデータやインタビュー等資料の再検討
- 第3回：外国語の既存研究の収集と解説
- 第4回：外国語の既存研究の収集結果と解説
- 第5回：外国語の既存研究の報告(1)
- 第6回：外国語の既存研究の報告(2)
- 第7回：外国語の既存研究の報告(3)
- 第8回：新たに浮上してきた視点の整理
- 第9回：隣接領域の既存研究の収集と解説
- 第10回：隣接領域の既存研究の収集結果と解説
- 第11回：隣接領域の既存研究の報告(1)
- 第12回：隣接領域の既存研究の報告(2)
- 第13回：隣接領域の既存研究の報告(3)
- 第14回：新たに浮上した視点の整理と研究の再検討

履修上の注意

海外文献の読み込みには十分時間を取り、準備して授業に臨むこと。また、隣接領域の文献を読む際には、常に自分の研究への応用可能性を意識して読むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

繰り返しになるが、海外文献の読み込みには十分時間を取り、準備して授業に臨むこと。また、隣接領域の文献を読む際には、常に自分の研究への応用可能性を意識して読むこと。

教科書

必要に応じて適宜指定する。

参考書

必要に応じて適宜指定する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

優れた論文を書くために必要なのは、1.課題設定の妥当性、2.先行研究の正確な理解、3.その上でオリジナリティのある研究の方向を定めること、4.新しいデータの収集・分析の方法の妥当性と積極性、5.それらすべてを緊密に結びつける論理性。これらを意識した報告と発表ができていないかを判断し、評価を行う。

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

1年たったこの段階では、先行研究をきちんと踏まえた上で、自分なりのオリジナルな研究視点を打ちだし、それを積極的に外部に問うていくことができる実力と実績を養う。比較的まとまってきた論考から、短くても完成した論文を創り上げ、外部の査読に耐える論文を作成することを達成目標とする。

授業内容

- 第1回：現時点での研究発表・研究の概要
- 第2回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(1)
- 第3回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(2)
- 第4回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(3)
- 第5回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(4)
- 第6回：問題点の整理
- 第7回：学会投稿論文のテーマ設定
- 第8回：学会投稿論文の構成の検討
- 第9回：学会投稿論文を完成させる上での問題点の検討
- 第10回：問題点を補うべき資料収集方針の検討
- 第11回：学会投稿論文の要旨発表
- 第12回：学会投稿論文の提出
- 第13回：問題点の指摘と検討
- 第14回：改善した論文の提出

履修上の注意

最終的な論文としての完成を目指して形を整えていくにあたって、比較的まとまってきた論考から、短くても完成した論文を創り上げ、外部の査読に耐える論文を作成するため、アウトプットのしかたを意識するように心がける。

準備学習（予習・復習等）の内容

提出の前に、きちんと伝わる論文になっているかどうか読み返し、とくに留学生は日本語をチェックしてもらって訂正してから提出するという手順を守ること。

教科書

とくに指定しない。

参考書

とくに指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

優れた論文を書くために必要なのは、1.課題設定の妥当性、2.先行研究の正確な理解、3.その上でオリジナリティのある研究の方向を定めること、4.新しいデータの収集・分析の方法の妥当性と積極性、5.それらすべてを緊密に結びつける論理性である。今学期はとくに、短くても、具体的な論文においてそれが実現できているかを判断し、評価を行う。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

研究を積み重ねて来る中で、どうしても、もっと広く視点をとって、自分がやっている研究の歴史的・社会的背景や文脈を押さえる必要が出てくる。1年半の積み重ねの中で見えてきた社会的文脈を押さえるための先行研究を検討する。同時に、積み重ねてきた研究結果の具体的な報告を随時検討していく。研究発表とそれに伴う新しい課題の検討、そこから必要になってくる歴史的・社会的側面の裏付けとなる既存研究の探索と報告は、実際には交互に行われることになることが予想される。

授業内容

- 第1回：これまでの研究成果の報告と問題点の検討
- 第2回：歴史的・社会的側面の裏付けとなる既存研究の収集と解説
- 第3回：歴史的・社会的側面の裏付けとなる既存研究の収集結果と解説
- 第4回：歴史的・社会的側面の裏付けとなる既存研究の報告(1)
- 第5回：歴史的・社会的側面の裏付けとなる既存研究の報告(2)
- 第6回：歴史的・社会的側面の裏付けとなる既存研究の報告(3)
- 第7回：論点の整理と方法の検討
- 第8回：現時点での研究発表・研究の概要
- 第9回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(1)
- 第10回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(2)
- 第11回：現時点での研究発表・部分ごとの詳細検討(3)
- 第12回：問題点の整理
- 第13回：さらに参考となると思われる文献の探索
- 第14回：総括

履修上の注意

自分の研究が、社会全体の中ではどういう意味を持ち、どういう位置づけとすることができるのかを意識すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

指定された論文や文献だけでなく、日ごろから基礎文献や、分野は違っても優れた論文に目を通すように心がけること。

教科書

必要に応じて指定する。

参考書

必要に応じて指定する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

優れた論文を書くために必要なのは、1.課題設定の妥当性、2.先行研究の正確な理解、3.その上でオリジナリティのある研究の方向を定めること、4.新しいデータの収集・分析の方法の妥当性と積極性、5.それらすべてを緊密に結びつける論理性。これらを意識した報告と発表ができているかを判断し、評価を行う。

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

博士課程最終年度前期では、博士論文の完成に向けて、テーマおよび方法の最終的な再検討と、構成・論理の見直しを行うしつつ、ブラッシュアップをはかっていく。

授業内容

- 第1回：これまでの研究成果の報告と再検討
- 第2回：研究テーマ・個々の課題・構成の再検討
- 第3回：最新の先行研究の調査と報告(1)
- 第4回：最新の先行研究の調査と報告(2)
- 第5回：訂正点・改善点の確認
- 第6回：見直し後の研究全体の構成の報告と討論
- 第7回：個別の途中経過の報告と討論(1)
- 第8回：個別の途中経過の報告と討論(2)
- 第9回：個別の途中経過の報告と討論(3)
- 第10回：全体の論旨の中間発表とアドバイス
- 第11回：個別の途中経過の報告と討論(4)
- 第12回：個別の途中経過の報告と討論(5)
- 第13回：個別の途中経過の報告と討論(6)
- 第14回：総括と今後の課題の確認

履修上の注意

最終的な学位請求論文の完成に向けて、論文そのものをブラッシュアップしていくとともに、論文に取り入れることができる新しい研究成果が出ていないかどうか常に意識しておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

ここまできて、何か具体的に課題を与えられなくては何も出来ないようでは、そもそも研究に向かないでしょう。指導がいらないくらいの研究、「これでどうだ!」という研究を期待します。

教科書

とくに指定しない。

参考書

必要に応じて指定する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

優れた論文を書くために必要なのは、1.課題設定の妥当性、2.先行研究の正確な理解、3.その上でオリジナリティのある研究の方向を定めること、4.新しいデータの収集・分析の方法の妥当性と積極性、5.それらすべてを緊密に結びつける論理性。これらを意識した報告と発表ができていないかを判断し、評価を行う。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

博士論文の最終的な完成に向けて、論理の展開、発表のしかた、わかりやすさなど、討議を重ねてさらにブラッシュアップしていきます。

授業内容

- 第1回：これまでの研究成果全体の報告と確認
- 第2回：研究課題と構成の最終検討
- 第3回：博論完成までのスケジュールの最終検討
- 第4回：研究成果全体の発表と討議
- 第5回：個別の研究成果と発表構成の詳細な検討(1)
- 第6回：個別の研究成果と発表構成の詳細な検討(2)
- 第7回：個別の研究成果と発表構成の詳細な検討(3)
- 第8回：見えてきた課題の整理
- 第9回：再構成した研究成果と構成の詳細な検討(1)
- 第10回：再構成した研究成果と構成の詳細な検討(2)
- 第11回：再構成した研究成果と構成の詳細な検討(3)
- 第12回：最終発表のための課題の整理
- 第13回：最終発表
- 第14回：最終的なブラッシュアップのための課題確認

履修上の注意

最終的なブラッシュアップに向けて、最終段階の細かい検討に入っていきます。この段階では、研究はすでにかなり固まっているはずですが、取り入れるべき新しい研究成果には常に注意を払い、変更が必要と判断されたら、素早く対応してください。

準備学習（予習・復習等）の内容

自分の能力の限界まで出し切った、最高の博士論文に仕上げる。

教科書

とくに指定しない。

参考書

必要に応じて指定する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

優れた論文を書くために必要なのは、1.課題設定の妥当性、2.先行研究の正確な理解、3.その上でオリジナリティのある研究の方向を定めること、4.新しいデータの収集・分析の方法の妥当性と積極性、5.それらすべてを緊密に結びつける論理性。これらを総合した上で実際の論文の評価を行う。

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

研究課題はマンガ、アニメ、ゲームなどにより構成されるおたく文化の研究、およびこの文化領域のアーカイブ構築である。博士後期課程初年次の前半の指導にあたり、研究テーマの企画立案と調査法の検討に重心を置き、予備調査を通してその実施可能性が十分に確認されることを目標とする。

授業内容

- 第1回：研究テーマの企画立案：既存研究の報告(1)
- 第2回：研究テーマの企画立案：既存研究の報告(2)
- 第3回：研究テーマの企画立案：既存研究の報告(3)
- 第4回：研究テーマの企画立案：調査法の検討(1)
- 第5回：研究テーマの企画立案：調査法の検討(2)
- 第6回：研究テーマの企画立案：調査法の検討(3)
- 第7回：予備調査の経過報告と討論(1)
- 第8回：予備調査の経過報告と討論(2)
- 第9回：予備調査の経過報告と討論(3)
- 第10回：中間発表と討論
- 第11回：予備調査の経過報告と討論(4)
- 第12回：予備調査の経過報告と討論(5)
- 第13回：予備調査の経過報告と討論(6)
- 第14回：期末発表と討論

履修上の注意

既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。研究のテーマや方法が定まるまでは、複数のテーマを併行して進める。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

研究課題はマンガ、アニメ、ゲームなどにより構成されるおたく文化の研究、およびこの文化領域のアーカイブ構築である。博士後期課程初年次の後半の指導にあたり、予備調査で用いられた調査法の、さらなる運用に重心を置き、その洗練を目標とする。

授業内容

- 第1回：研究テーマの再検討：これまでの成果の発表と討論
- 第2回：研究テーマの再検討：最新の既存研究の報告
- 第3回：研究テーマの再検討：調査法の再検討
- 第4回：調査の経過報告と討論(1)
- 第5回：調査の経過報告と討論(2)
- 第6回：調査の経過報告と討論(3)
- 第7回：調査の経過報告と討論(4)
- 第8回：調査の経過報告と討論(5)
- 第9回：中間発表と討論
- 第10回：調査の経過報告と討論(6)
- 第11回：調査の経過報告と討論(7)
- 第12回：調査の経過報告と討論(8)
- 第13回：調査の経過報告と討論(9)
- 第14回：年度末発表と討論

履修上の注意

最新の既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授	森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

研究課題はマンガ、アニメ、ゲームなどにより構成されるおたく文化の研究、およびこの文化領域のアーカイブ構築である。博士後期課程二年次においては、研究成果を学外に広く公表していくことを目標とし、前半の指導においては、そのための準備に重心を置く。

授業内容

- 第1回：研究テーマの再検討：これまでの成果の発表と討論
- 第2回：研究テーマの再検討：最新の既存研究の報告
- 第3回：研究成果の学外発表の検討：発表の場の検討
- 第4回：研究成果の学外発表の検討：発表に向けた準備の検討
- 第5回：調査の経過報告と討論(1)
- 第6回：調査の経過報告と討論(2)
- 第7回：調査の経過報告と討論(3)
- 第8回：調査の経過報告と討論(4)
- 第9回：中間発表と討論
- 第10回：調査の経過報告と討論(5)
- 第11回：調査の経過報告と討論(6)
- 第12回：調査の経過報告と討論(7)
- 第13回：調査の経過報告と討論(8)
- 第14回：期末発表と討論

履修上の注意

最新の既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授	森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

研究課題はマンガ、アニメ、ゲームなどにより構成されるおたく文化の研究、およびこの文化領域のアーカイブ構築である。博士後期課程二年次においては、研究成果を学外に広く公表していくことを目標とし、後半の指導においては、発表内容の洗練に重心を置く。

授業内容

- 第1回：研究テーマの再検討：これまでの成果の発表と討論
- 第2回：研究テーマの再検討：最新の既存研究の報告
- 第3回：研究成果の学外発表の検討：発表内容の検討
- 第4回：研究成果の学外発表の検討：プレゼンテーションの検討
- 第5回：調査の経過報告と討論(1)
- 第6回：調査の経過報告と討論(2)
- 第7回：調査の経過報告と討論(3)
- 第8回：調査の経過報告と討論(4)
- 第9回：中間発表と討論
- 第10回：調査の経過報告と討論(5)
- 第11回：調査の経過報告と討論(6)
- 第12回：調査の経過報告と討論(7)
- 第13回：調査の経過報告と討論(8)
- 第14回：期末発表と討論

履修上の注意

最新の既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

研究課題はマンガ、アニメ、ゲームなどにより構成されるおたく文化の研究、およびこの文化領域のアーカイブ構築である。博士後期課程三年次においては、学位請求論文の完成を目標とし、前半の指導においては、その準備に重心を置く。

授業内容

- 第1回：研究テーマの再検討：これまでの成果の発表と討論
- 第2回：研究テーマの再検討：最新の既存研究の報告
- 第3回：学位請求論文の検討：構成の検討
- 第4回：学位請求論文の検討：完成に向けた手順の検討
- 第5回：経過報告と討論(1)
- 第6回：経過報告と討論(2)
- 第7回：経過報告と討論(3)
- 第8回：経過報告と討論(4)
- 第9回：中間発表と討論
- 第10回：経過報告と討論(5)
- 第11回：経過報告と討論(6)
- 第12回：経過報告と討論(7)
- 第13回：経過報告と討論(8)
- 第14回：期末発表と討論

履修上の注意

最新の既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) POP712J			
ポップカルチャー研究	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 森川 嘉一郎		

授業の概要・到達目標

研究課題はマンガ、アニメ、ゲームなどにより構成されるおたく文化の研究、およびこの文化領域のアーカイブ構築である。博士後期課程三年次においては、学位請求論文の完成を目標とし、後半の指導においては、その洗練に重心を置く。

授業内容

- 第1回：学位請求論文の検討：構成の再検討
- 第2回：学位請求論文の検討：完成に向けた手順の再検討
- 第3回：経過報告と討論(1)
- 第4回：経過報告と討論(2)
- 第5回：経過報告と討論(3)
- 第6回：経過報告と討論(4)
- 第7回：経過報告と討論(5)
- 第8回：中間発表と討論
- 第9回：経過報告と討論(6)
- 第10回：経過報告と討論(7)
- 第11回：経過報告と討論(8)
- 第12回：経過報告と討論(9)
- 第13回：経過報告と討論(10)
- 第14回：年度末発表と討論

履修上の注意

最新の既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回各々の研究の進捗について、発表を準備すること。

教科書

使用しない。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各回の個々の研究進捗の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

発表と討論への貢献を含む実習過程（30%）と、研究成果（70%）の双方により総合的に評価を行う。

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) MAN762J			
社会・情報・国際関係研究	備考		
科目名	研究論文指導I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

研究課題は、日本企業のものづくりシステムの国際比較です。この論文指導では、日本企業のものづくりシステムに関する先行研究をサーベイするための準備に取り組む。そのため、それに関する既存研究論文や文献を過去に遡って広く収集し、整理することを目的とする。

授業内容

第一課題 基礎研究の収集
第1回：既存研究(文献)収集リストの作成
第2回：既存研究(文献)収集と報告
第3回：既存研究(学術論文など)収集リストの作成
第4回：既存研究(学術論文など)収集と報告
第二課題 日本語文既存研究の整理
第5回：既存研究の整理について(解説)
第6回：既存研究の報告(1)
第7回：既存研究の報告(2)
第8回：既存研究の報告(3)
第9回：既存研究の報告(4)
第三課題 外国語文既存研究の整理
第10回：既存研究の整理について(解説)
第11回：既存研究の報告(1)
第12回：既存研究の報告(2)
第13回：既存研究の報告(3)
第14回：既存研究の報告(4)

履修上の注意

十分な準備の上で、研究指導に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、既存の研究文献を読んでそのポイントをまとめて授業で報告すること。
授業はその報告に基づいて議論を行う方式で進める。

教科書

特に用いない。

参考書

その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行う。

成績評価の方法

研究指導の各課題に対する準備と報告に基づいて評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN762J			
社会・情報・国際関係研究	備考		
科目名	研究論文指導II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

研究課題は、日本のものづくりシステムの代表的なトヨタ生産のシステムの形成・発展について学習し、戦後日本のものづくりシステムがどのような環境で形成されたかを探究することを課題とする。

授業内容

第一課題:トヨタ生産方式の形成と発展について
第1回：トヨタ生産方式の萌芽
第2回：トヨタ生産方式の萌芽に対する労使の対応
第3回：トヨタ生産方式の成立:1960年代前半
第4回：トヨタ生産方式の発展(1):1960年代後半
第5回：トヨタ生産方式の発展(2):1970年代
第6回：トヨタ生産方式の変容(1):1980年代
第7回：トヨタ生産方式の変容(2):バブル期
第二課題:トヨタ生産方式の進化論的解釈
第8回：トヨタ的開発・生産システムの競争合理的側面
第9回：トヨタ的開発・生産システムの発生と進化
第10回：トヨタ自動車におけるフォード・システムの導入
第11回：日本の自動車部品サプライヤー・システム
第12回：「ブラック・ボックス」部品取引システム
第13回：生産開発のダイナミックな側面
第14回：トヨタ新組立システムにみる組織内進化プロセス

履修上の注意

十分な準備の上で、研究指導に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、既存研究文献を中心に講義と議論を進めるので、参考文献を必ず読んで授業に臨むこと。

教科書

「トヨタ生産方式の生成・発展・変容」佐武弘章(東洋経済新報社)
「生産システムの進化論」藤本隆宏(有斐閣)

参考書

その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行う。

成績評価の方法

報告・議論(50%)と期末レポート(50%)に基づいて評価する。

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) MAN762J			
社会・情報・国際関係研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

研究課題は、アメリカの大量生産方式の原型となったフォード・システムの形成とその原理を学習し、それがトヨタ生産システムに与えた影響とトヨタ生産システムとの違いを明確にすることである。

授業内容

- 第一課題 フォード・システムの形成・普及・変容
 第1回：フォード・システムとは何だったのか
 第2回：フォード・システムの日本への受容
 第3回：フォード・システムの形成(1)自動車事業におけるフォード・システム移転の試み
 第4回：フォード・システムの形成(2)自動車事業における流れ作業への模索
 第5回：フォード・システムの海外への普及と変容(1)混流生産
 第6回：フォード・システムの海外への普及と変容(2)ジャスト・イン・タイム生産
 第7回：フォード・システムの海外への普及と変容(3)部品表の完成
 第二課題 大量生産方式とリーン生産方式の国際比較
 第8回：大量生産方式はなぜ敗れたのか
 第9回：自動車産業を変えたリーン生産革命
 第10回：工場システムをいかに確立させるか
 第11回：生産開発競争で日本が優位に立った理由
 第12回：リーン生産における部品供給方式
 第13回：リーン生産と販売システム
 第14回：欧米におけるリーン生産方式の普及

履修上の注意

十分な準備の上で、研究指導に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回、テキストを中心に講義と議論を行いながら授業を進めるので、必ずテキストを読んで授業に臨むこと。

教科書

「ものづくり寓話：フォードからトヨタへ」和田一夫(名古屋大学出版会)
 「リーン生産方式が世界の自動車産業をこう変える」J.P.ウォーマック他(経済界)

参考書

その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行う。

成績評価の方法

報告・議論(50%)と期末レポート(50%)に基づいて評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN762J			
社会・情報・国際関係研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

研究課題は、日本企業の職場組織と人的資源管理、完成車メーカーと部品メーカー間の部品取引方式を学習し、日本企業の人的資源管理と企業間関係を欧米と比較してその違いを明らかにすることである。

授業内容

- 第一課題 職場の労働組織と人的資源管理
 第1回：日本企業の中での技能形成
 第2回：日本企業の中の職場組織と昇進・報酬管理
 第3回：日米比較への展開：技能のタイプと組織戦略の補完性
 第二課題 自動車産業における部品取引方式
 第4回：継続的部品取引を統御する契約的枠組み
 第5回：関係的技能の構造・深さ・次元
 第6回：部品取引関係の比較制度的特性
 第7回：日本におけるメーカーとサプライヤーとの関係
 第8回：サプライヤー・システムの構造・機能・発生
 第9回：日本のサプライヤー関係における信頼の役割
 第10回：組織間関係の共振化
 第11回：日本のサプライヤー・システムの事例
 第12回：部品取引におけるリスク分担とモラル・ハザード
 第13回：米国自動車産業における部品取引方式
 第14回：自動車産業における部品取引関係の日米比較

履修上の注意

十分な準備の上で、研究指導に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業はテキストを中心に講義と議論を行いながら進めるので、テキストを必ず読んで授業に臨むこと。

教科書

「日本の企業組織 革新的適応のメカニズム」浅沼万里(東洋経済新報社)
 「サプライヤー・システム」藤本隆宏他編著(有斐閣)

参考書

その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行う。

成績評価の方法

報告・議論(50%)と期末レポート(50%)に基づいて評価する。

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) MAN762J			
社会・情報・国際関係研究	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

研究課題は、日本企業の製品開発能力とその仕組みについて学習し、それが欧米企業と比較してどのような違いがあるかを明らかにすることである。

授業内容

- 第1回：製品開発力と企業間競争
- 第2回：世界の自動車産業における開発競争
- 第3回：パフォーマンスの尺度：リードタイム・品質・生産性
- 第4回：製品開発のプロセス(1)コンセプトの設定と製品企画
- 第5回：製品開発のプロセス(2)製品および工程エンジニアリング
- 第6回：プロジェクト戦略(1)製品のバラエティと技術革新
- 第7回：プロジェクト戦略(2)部品メーカーとの協業と部品の共通化
- 第8回：製造能力：隠れた優位性の源泉(1)試作車の製作と金型の開発
- 第9回：製造能力：隠れた優位性の源泉(2)パイロット・ランとランプアップ
- 第10回：問題解決サイクルの連携調整(1)開発段階の重複化
- 第11回：問題解決サイクルの連携調整(2)連携調整の実例
- 第12回：リーダーシップと組織：重量級PM制(1)組織のパターン
- 第13回：リーダーシップと組織：重量級PM制(2)PMの技能と行動
- 第14回：効果的な製品開発のパターン：部品と全体

履修上の注意

十分な準備の上で、研究指導に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業はテキストを中心に講義と議論を行いながら進めるので、必ずテキストを読んで授業に臨むこと。

教科書

「製品開発力」(増補版)藤本隆宏、キムB.クラーク(ダイヤモンド社)

参考書

その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行う。

成績評価の方法

報告・議論(50%)と期末レポート(50%)に基づいて評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) MAN762J			
社会・情報・国際関係研究	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(経済学) 呉 在烜		

授業の概要・到達目標

研究課題は、日本企業の海外への技術移転・現地経営と、韓国・台湾・中国の経営方式を事例研究を中心に比較、考察することである。

授業内容

- 第1回：日本企業の国際化と技術移転
- 第2回：日本企業の生産管理を中心とした現地経営の特徴
- 第3回：日本企業の人事管理を中心とした現地経営の特徴
- 第4回：日本企業の技術移転と現地経営の事例(1)ホンダ
- 第5回：日本企業の技術移転と現地経営の事例(2)トヨタ
- 第6回：韓国企業の生産方式と経営方式
- 第7回：韓国企業の中国ビジネスの全体像
- 第8回：中国における韓国企業の現地経営の事例(1)現代自動車
- 第9回：中国における韓国企業の現地経営の事例(2)LG電子
- 第10回：中国における台湾企業の経営スタイル
- 第11回：中国の地域イノベーションと台湾企業のR&D
- 第12回：中国における民営企業と自動車企業の競争力
- 第13回：中国電機企業の技術创新能力：海信集団の事例
- 第14回：日本・中国・韓国・台湾企業のものづくりと経営の比較

履修上の注意

十分な準備の上で、研究指導に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

授業はテキストを中心に講義と議論を行いながら進めるので、必ずテキストを読んで授業に臨むこと。

教科書

「中国における日・韓・台企業の経営比較」板垣博編著(ミネルヴァ書房)
「日中韓」産業競争力構造の実証分析」上山邦雄他編著(創成社)

参考書

その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行う。

成績評価の方法

報告・議論(50%)と期末レポート(50%)に基づいて評価する。

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語は、漢文(古典中国語)や英語など、異言語との接触を通して豊かになってくるとともに、複雑なものにもなってきた。研究論文指導Ⅰ～Ⅵでは、現代の日本語の構造と社会的な機能がどのように形成されてきたのかという歴史的な視野を重視して、具体的なテーマに基づく博士論文執筆を目指した指導を行う。研究課題や調査方法は学生の自主性を尊重するが、ゼミナール形式による討議を重ねることで、誰にも理解される明解な研究を構築していく。研究論文指導Ⅰでは、先行研究の確実な把握を目指す。

授業内容

- 第1回：研究課題の設定
- 第2回：先行研究の収集と整理
- 第3回：先行研究の報告(1)
- 第4回：先行研究の報告(2)
- 第5回：先行研究の報告(3)
- 第6回：先行研究の報告(4)
- 第7回：研究課題の再設定
- 第8回：先行研究の再収集と整理
- 第9回：先行研究の報告(5)
- 第10回：先行研究の報告(6)
- 第11回：先行研究の報告(7)
- 第12回：先行研究の報告(8)
- 第13回：先行研究の論点整理
- 第14回：先行研究の総括と仮説の設定

履修上の注意

先行研究の収集と読解を念入りに行ってください。

準備学習(予習・復習等)の内容

先行研究を読み込む学習を行います。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

博士論文に結実する要素のうち、研究課題の妥当性、先行研究のまとめの確実性によって評価します。

その他

受講者の研究状況によって、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) LIN732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語は、漢文(古典中国語)や英語など、異言語との接触を通して豊かになってくるとともに、複雑なものにもなってきた。研究論文指導Ⅰ～Ⅵでは、現代の日本語の構造と社会的な機能がどのように形成されてきたのかという歴史的な視野を重視して、具体的なテーマに基づく博士論文執筆を目指した指導を行う。研究課題や調査方法は学生の自主性を尊重するが、ゼミナール形式による討議を重ねることで、誰にも理解される明解な研究を構築していく。研究論文指導Ⅱでは、先行研究を踏まえた仮説の設定と、それを実証するための調査の設計に重点を置く。

授業内容

- 第1回：仮説の設定
- 第2回：調査の企画(1)
- 第3回：調査の企画(2)
- 第4回：調査の設計(1)
- 第5回：調査の設計(2)
- 第6回：予備調査結果の報告(1)
- 第7回：予備調査結果の報告(2)
- 第8回：調査データの分析法の検討(1)
- 第9回：調査データの分析法の検討(2)
- 第10回：仮説の再検討
- 第11回：調査の再設計(1)
- 第12回：調査の再設計(2)
- 第13回：調査の再設計(3)
- 第14回：調査の再設計(4)

履修上の注意

調査の設計は何度もやり直すことで、取得されるデータの信頼性が高まります。

準備学習(予習・復習等)の内容

調査の設計を多角的に練っていくことが中心になります。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

博士論文に結実する要素のうち、仮説の妥当性、調査の設計の妥当性によって評価します。

その他

受講者の研究状況によって、内容を若干変更する場合があります。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語は、漢文(古典中国語)や英語など、異言語との接触を通して豊かになってくるとともに、複雑なものにもなってきた。研究論文指導Ⅰ～Ⅵでは、現代の日本語の構造と社会的な機能がどのように形成されてきたのかという歴史的な視野を重視して、具体的なテーマに基づく博士論文執筆を目指した指導を行う。研究課題や調査方法は学生の自主性を尊重するが、ゼミナール形式による討議を重ねることで、誰にも理解される明解な研究を構築していく。研究論文指導Ⅲでは、調査の実施とデータ分析に重点を置く。

授業内容

- 第1回：調査結果の報告(1)
- 第2回：調査結果の報告(2)
- 第3回：調査結果の報告(3)
- 第4回：調査結果の報告(4)
- 第5回：データ分析(1)
- 第6回：データ分析(2)
- 第7回：データ分析(3)
- 第8回：調査結果の評価(1)
- 第9回：調査結果の評価(2)
- 第10回：再調査の設計
- 第11回：再調査結果の報告(1)
- 第12回：再調査結果の報告(2)
- 第13回：データ分析(4)
- 第14回：データ分析(5)

履修上の注意

データ分析は、試行錯誤も含めて、様々な角度から実施する必要があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

データの分析を多角的に行うことが中心になります。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

博士論文に結実する要素のうち、調査の妥当性、データ分析の信頼性によって評価します。

その他

受講者の研究状況によって、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) LIN732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語は、漢文(古典中国語)や英語など、異言語との接触を通して豊かになってくるとともに、複雑なものにもなってきた。研究論文指導Ⅰ～Ⅵでは、現代の日本語の構造と社会的な機能がどのように形成されてきたのかという歴史的な視野を重視して、具体的なテーマに基づく博士論文執筆を目指した指導を行う。研究課題や調査方法は学生の自主性を尊重するが、ゼミナール形式による討議を重ねることで、誰にも理解される明解な研究を構築していく。研究論文指導Ⅳでは、データに基づく論理構築に重点を置く。

授業内容

- 第1回：データ分析の総合(1)
- 第2回：データ分析の総合(2)
- 第3回：データ分析の総合(3)
- 第4回：仮説の検証(1)
- 第5回：仮説の検証(2)
- 第6回：仮説の修正(1)
- 第7回：仮説の修正(2)
- 第8回：補完調査の設計
- 第9回：補完調査の報告
- 第10回：個別事例の研究と議論(1)
- 第11回：個別事例の研究と議論(2)
- 第12回：個別事例の研究と議論(3)
- 第13回：個別事例の研究と議論(4)
- 第14回：研究の論点整理

履修上の注意

データ分析の結果を総合して仮説を検証し、必要に応じて仮説を修正することが必要です。

準備学習(予習・復習等)の内容

データをもとに多角的に考えることが中心になります。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

博士論文に結実する要素のうち、データ分析の信頼性、仮説の妥当性、議論の論理性によって評価します。

その他

受講者の研究状況によって、内容を若干変更する場合があります。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語は、漢文(古典中国語)や英語など、異言語との接触を通して豊かになってくるとともに、複雑なものにもなってきた。研究論文指導I～VIでは、現代の日本語の構造と社会的な機能がどのように形成されてきたのかという歴史的な視野を重視して、具体的なテーマに基づく博士論文執筆を目指した指導を行う。研究課題や調査方法は学生の自主性を尊重するが、ゼミナール形式による討議を重ねることで、誰にも理解される明解な研究を構築していく。研究論文指導Vでは、論理構築のための議論に重点を置く。

授業内容

- 第1回：仮説の再構築
- 第2回：個別分析による議論の展開(1)
- 第3回：個別分析による議論の展開(2)
- 第4回：個別分析による議論の展開(3)
- 第5回：個別分析による議論の展開(4)
- 第6回：個別分析による議論の展開(5)
- 第7回：個別分析による議論の展開(6)
- 第8回：データと議論の整合化(1)
- 第9回：データと議論の整合化(2)
- 第10回：データと議論の整合化(3)
- 第11回：データと議論の整合化(4)
- 第12回：議論の再構築による結論への導き(1)
- 第13回：議論の再構築による結論への導き(2)
- 第14回：論理構築の確認

履修上の注意

議論の詰めは十分か、多方面から確認する必要があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

議論の構築のために多角的に考えることが中心になります。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

博士論文に結実する要素のうち、議論の論理性を中心に評価します。

その他

受講者の研究状況によって、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) LIN732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	田中 牧郎	

授業の概要・到達目標

日本語は、漢文(古典中国語)や英語など、異言語との接触を通して豊かになってくるとともに、複雑なものにもなってきた。研究論文指導I～VIでは、現代の日本語の構造と社会的な機能がどのように形成されてきたのかという歴史的な視野を重視して、具体的なテーマに基づく博士論文執筆を目指した指導を行う。研究課題や調査方法は学生の自主性を尊重するが、ゼミナール形式による討議を重ねることで、誰にも理解される明解な研究を構築していく。研究論文指導VIでは、結論の妥当性と論文の完成度に重点を置く。

授業内容

- 第1回：論文の全体構成の確認
- 第2回：結論の導出(1)
- 第3回：結論の導出(2)
- 第4回：仮説の最終確認
- 第5回：調査の最終確認
- 第6回：データ分析の最終チェック(1)
- 第7回：データ分析の最終チェック(2)
- 第8回：議論の最終確認(1)
- 第9回：議論の最終確認(2)
- 第10回：参照文献リストの最終確認
- 第11回：博士論文の完成(1)
- 第12回：博士論文の完成(2)
- 第13回：博士論文の発表
- 第14回：博士論文の自己評価

履修上の注意

論文の完成度を高めるために細心の注意を払う必要があります。

準備学習(予習・復習等)の内容

博士論文の完成に向けた細心の思考が重要になります。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。レポートについては、後日コメントします。

成績評価の方法

博士論文の完成度をを中心に評価します。

その他

受講者の研究状況によって、内容を若干変更する場合があります。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN722J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

本演習が対象とする研究分野は応用言語学、心理言語学、第二言語習得研究であり、テーマは第二言語習得に影響を与える学習者要因(あるいは、個人差要因)の理論実証的研究である。研究論文指導Ⅰでは、当該研究領域における最新の研究動向を体系的に整理する。その過程を通じて、先行研究での研究課題の設定や調査計画の立て方について批判的に検討することができるとともに、その成果を自らの研究計画の立案に活かすことができるようになることを目的とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
- 第2回 Individual Differences in Second Language Acquisition
- 第3回 Explicit and Implicit Language Aptitudes
- 第4回 Working Memory
- 第5回 Declarative and Procedural Memory as Predictors of Second Language Development
- 第6回 Learning Styles and Strategies
- 第7回 Metacognition
- 第8回 中間まとめ
- 第9回 Motivation
- 第10回 Mindsets
- 第11回 Goal Complexes
- 第12回 Willingness to Communicate
- 第13回 Anxiety
- 第14回 Enjoyment

* 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

Li, S., Hiver, P., & Papi, M. (Eds.). (2022). The Routledge handbook of second language acquisition and individual differences. Routledge.

参考書

必要に応じて、講義時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN722J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

本演習が対象とする研究分野は応用言語学、心理言語学、第二言語習得研究であり、テーマは第二言語習得に影響を与える学習者要因(あるいは、個人差要因)の理論実証的研究である。研究論文指導Ⅱでは、研究論文指導Ⅰに引き続き、当該研究領域における最新の研究動向を体系的に整理する。その過程を通じて、研究仮説の立て方や分析方法について批判的に検討することができるとともに、その成果を自らの研究計画の立案に活かすことができるようになることを目的とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨN(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
- 第2回 Self-Efficacy
- 第3回 Learner Beliefs
- 第4回 Identity
- 第5回 Age
- 第6回 Individual Difference Factors for Second Language Pronunciation
- 第7回 Individual Difference Factors for Second Language Vocabulary
- 第8回 中間まとめ
- 第9回 Surveys
- 第10回 Narrative Methods
- 第11回 Ethnography
- 第12回 Psychometric Assessments
- 第13回 Measures of Implicit Attitudes
- 第14回 Methods for Complexity Theory in Individual Differences Research

* 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

Li, S., Hiver, P., & Papi, M. (Eds.). (2022). The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Individual Differences. Routledge.

参考書

廣森友人(2023).『改訂版 英語学習のメカニズム: 第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』大修館書店.
中田達也・鈴木祐一(編). (2022).『英語学習の科学』研究社.

その他、必要に応じて、講義時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN722J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

本演習が対象とする研究分野は応用言語学、心理言語学、第二言語習得研究であり、テーマは第二言語習得に影響を与える学習者要因(あるいは、個人差要因)の理論実証的研究である。研究論文指導Ⅲでは、博士論文の執筆を念頭に置き、自らが追求したい研究課題や研究仮説の設定とそれらに基づいた調査計画の立案について学ぶとともに、研究を遂行する上で必要となる研究手法(統計解析)を実践的に身につけることを目的とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
 - 第2回 研究課題の明確化と先行研究の調査(1)
 - 第3回 研究課題の明確化と先行研究の調査(2)
 - 第4回 研究課題の明確化と先行研究の調査(3)
 - 第5回 研究仮説の設定と研究方法の検討(1)
 - 第6回 研究仮説の設定と研究方法の検討(2)
 - 第7回 研究仮説の設定と研究方法の検討(3)
 - 第8回 中間まとめ
 - 第9回 統計解析ワークショップ(1)
 - 第10回 統計解析ワークショップ(2)
 - 第11回 統計解析ワークショップ(3)
 - 第12回 調査計画のまとめと研究発表に向けた準備(1)
 - 第13回 調査計画のまとめと研究発表に向けた準備(2)
 - 第14回 学生による研究発表と講評
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定する。

参考書

必要に応じて、講義時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN722J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

本演習が対象とする研究分野は応用言語学、心理言語学、第二言語習得研究であり、テーマは第二言語習得に影響を与える学習者要因(あるいは、個人差要因)の理論実証的研究である。研究論文指導Ⅳでは、博士論文の執筆を念頭に置き、実際の調査実施と分析・考察、ならびに調査結果の報告・公表の仕方について学ぶとともに、研究を遂行する上で必要となるより高度な研究手法(統計解析)を実践的に身につけることを目的とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
 - 第2回 本調査の実施と振り返り(1)
 - 第3回 本調査の実施と振り返り(2)
 - 第4回 本調査の実施と振り返り(3)
 - 第5回 調査結果の多角的検討と関連研究との比較(1)
 - 第6回 調査結果の多角的検討と関連研究との比較(2)
 - 第7回 調査結果の多角的検討と関連研究との比較(3)
 - 第8回 中間まとめ
 - 第9回 統計解析ワークショップ(1)
 - 第10回 統計解析ワークショップ(2)
 - 第11回 統計解析ワークショップ(3)
 - 第12回 研究発表に向けた準備と意見交換(1)
 - 第13回 研究発表に向けた準備と意見交換(2)
 - 第14回 学生による研究発表と講評
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定する。

参考書

必要に応じて、講義時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN722J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

本演習が対象とする研究分野は応用言語学、心理言語学、第二言語習得研究であり、テーマは第二言語習得に影響を与える学習者要因(とりわけ、学習動機、学習方略、学習スタイルなど)の理論実証的研究である。研究論文指導Vでは、研究論文指導Ⅲ、Ⅳで学んだことを踏まえ、博士論文執筆にかかる問題点を再検討する(必要に応じて、研究計画の練り直しや再調査を実施する)とともに、研究のさらなる充実化、精緻化を図ることができるようになることを目的とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
 - 第2回 受講者の研究テーマに基づく発表と意見交換(1)
 - 第3回 受講者の研究テーマに基づく発表と意見交換(2)
 - 第4回 受講者の研究テーマに基づく発表と意見交換(3)
 - 第5回 受講者の研究テーマに基づく発表と意見交換(4)
 - 第6回 受講者の研究テーマに基づく発表と意見交換(5)
 - 第7回 受講者の研究テーマに基づく発表と意見交換(6)
 - 第8回 中間まとめ
 - 第9回 博士論文の全体構想の検討とその検証(1)
 - 第10回 博士論文の全体構想の検討とその検証(2)
 - 第11回 博士論文の全体構想の検討とその検証(3)
 - 第12回 博士論文の全体構想の検討とその検証(4)
 - 第13回 博士論文の全体構想の検討とその検証(5)
 - 第14回 博士論文の全体構想の検討とその検証(6)
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定する。

参考書

必要に応じて、講義時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN722J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア) 廣森 友人		

授業の概要・到達目標

本演習が対象とする研究分野は応用言語学、心理言語学、第二言語習得研究であり、テーマは第二言語習得に影響を与える学習者要因(とりわけ、学習動機、学習方略、学習スタイルなど)の理論実証的研究である。研究論文指導VIでは、研究論文指導Ⅲ、Ⅳで学んだことを踏まえ、博士論文の完成を目指すとともに、一連の研究から得られた成果を国内外における学会発表や学術論文としてまとめる。その過程を通じて、当該研究領域における研究のさらなる発展・深化に貢献することができるようになることを目的とする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン(授業の目的、概要、進め方、評価に関する説明など)
 - 第2回 博士論文の各論の検討とその検証(1)
 - 第3回 博士論文の各論の検討とその検証(2)
 - 第4回 博士論文の各論の検討とその検証(3)
 - 第5回 博士論文の各論の検討とその検証(4)
 - 第6回 博士論文の各論の検討とその検証(5)
 - 第7回 博士論文の各論の検討とその検証(6)
 - 第8回 中間まとめ
 - 第9回 博士論文全体の論理性と表現の適切性の確認(1)
 - 第10回 博士論文全体の論理性と表現の適切性の確認(2)
 - 第11回 博士論文全体の論理性と表現の適切性の確認(3)
 - 第12回 博士論文全体の論理性と表現の適切性の確認(4)
 - 第13回 博士論文全体の論理性と表現の適切性の確認(5)
 - 第14回 博士論文全体の論理性と表現の適切性の確認(6)
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前の入念な準備が要求されます。

教科書

履修者の興味・関心を踏まえて決定する。

参考書

必要に応じて、講義時に紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行う。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(25%)、論文レビュー(25%)、課題発表(50%)により評価する。

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN752J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅰでは、第二言語習得研究(英語・日本語)の中で語彙を扱った先行研究(特に、付随的語彙学習、未知語の意味推測、単語認知処理、日中同形語の習得を中心に)についてレビューを行い、レビュー論文を執筆し、投稿する。それによって、これまでの研究成果を整理し、研究動向を捉え、受講者自身の研究の方向性を探る。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 修士論文の振り返り
- 第3回 修士論文で残された課題の確認と当該課題の研究意義の検討(1)
- 第4回 修士論文で残された課題の確認と当該課題の研究意義の検討(2)
- 第5回 修士論文で残された課題の確認と当該課題の研究意義の検討(3)
- 第6回 関連領域の射程範囲と、その概要の検討(1)
- 第7回 関連領域の射程範囲と、その概要の検討(2)
- 第8回 関連領域の射程範囲と、その概要の検討(3)
- 第9回 研究の種の発掘(1)
- 第10回 研究の種の発掘(2)
- 第11回 研究の種の発掘(3)
- 第12回 先行研究リスト作成
- 第13回 先行研究レビューの検討(1)
- 第14回 先行研究レビューの検討(2)

履修上の注意

本科目において、修士論文で残された課題を、研究課題の側面、調査方法の側面、分析方法の側面、関連領域との関係における本研究の位置づけの側面など、さまざまな側面から、受講者自身が振り返ることが重要である。自らの修士論文について、客観的に、かつ、論理的に、見直す姿勢を持つこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回課題を課すので、その指示に従うこと。

教科書

事前の指定はないが、進捗状況に応じて、指示する。

参考書

事前の指定はないが、進捗状況に応じて、指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

毎回の課題(50%)、期末課題(50%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN752J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅱでは、研究論文指導Ⅰで行った先行研究レビューに基づいて、今後期待される研究課題を、研究方法別、研究課題別、母語別に整理し、リストアップする。その上で、残された研究課題と受講者の修士論文との継続性や関連性を精査し、意義のある、実行可能性のある研究課題案を検討する。当該研究課題案を実験計画に落とし込み、第1回目のパイロット調査を実施する。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 先行研究レビューのまとめ(1)
- 第3回 先行研究レビューのまとめ(2)
- 第4回 今後期待される研究課題の検討:研究方法編(1)
- 第5回 今後期待される研究課題の検討:研究方法編(2)
- 第6回 今後期待される研究課題の検討:研究方法編(3)
- 第7回 今後期待される研究課題の検討:研究課題・母語別編(1)
- 第8回 今後期待される研究課題の検討:研究課題・母語別編(2)
- 第9回 今後期待される研究課題の検討:研究課題・母語別編(3)
- 第10回 研究課題の立案(1)
- 第11回 研究課題の立案(2)
- 第12回 パイロット調査の計画立案(1)
- 第13回 パイロット調査の計画立案(2)
- 第14回 パイロット調査の研究計画完成

履修上の注意

先行研究レビューを執筆しながら、今後の実行可能性のある研究課題を立案するためには、研究手法や統計分析についての自習が必要となる。自立的、主体的な姿勢で、授業に臨むこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回課題を課すので、指示に従うこと。

教科書

事前には指定しない。受講生の予備知識に応じて、研究方法や統計に関する教科書を指定する。

参考書

受講生の予備知識に応じて、その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

毎週の課題(50%)、期末の課題(50%)

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN752J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森	和子

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅲでは、研究論文指導Ⅱで行った第1回パイロット調査の結果を、論文の形にまとめ、学会等で研究成果を報告することで、博士論文の研究課題を確定する。さらに、研究課題に即した実験方法を習得し、当該実験方法にて、第2回パイロット調査(必要に応じて、複数回のパイロット調査)を行い、実験方法を確定し、研究計画書を作成する。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 第1回パイロット調査の分析(1)
- 第3回 第1回パイロット調査の分析(2)
- 第4回 第1回パイロット調査の分析(3)
- 第5回 パイロット調査に基づく論文構想(1)
- 第6回 パイロット調査に基づく論文構想(2)
- 第7回 研究成果発表準備(1)
- 第8回 研究成果発表準備(2)
- 第9回 研究成果発表準備(3)
- 第10回 第1回パイロット調査に基づく新たな研究課題の検討と新たな研究方法の習得(1)
- 第11回 第1回パイロット調査に基づく新たな研究課題の検討と新たな研究方法の習得(2)
- 第12回 第1回パイロット調査に基づく新たな研究課題の検討と新たな研究方法の習得(3)
- 第13回 博士論文研究計画の立案(1)
- 第14回 博士論文研究計画の立案(2)

履修上の注意

研究成果発表を視野に入れながら、第1回パイロット調査の分析を行うだけでなく、同時に今後の新たな研究課題の掘り起こしを進めること。さらに、より高度な研究手法や分析手法の習得を目指すこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回課題を課すので、指示に従うこと。

教科書

指定しない。

参考書

受講生の予備知識に応じて、その都度、紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

毎週の課題(50%)、期末の課題(50%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN752J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森	和子

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅳでは、研究論文指導Ⅲで作成した研究計画書に基づいて予備調査を実施する。予備調査の結果に基づき、研究計画書を確定し、本実験の準備に入る。同時に、予備調査の結果を論文の形にまとめ、学会等で発表を行う。

授業内容

- 第1回 イントロダクション
- 第2回 博士論文研究計画の確認
- 第3回 博士論文研究計画の最終確定
- 第4回 実験計画立案(1)
- 第5回 実験計画立案(2)
- 第6回 実験計画立案(3)
- 第7回 予備調査準備(1)
- 第8回 予備調査準備(2)
- 第9回 予備調査実施(1)
- 第10回 予備調査実施(2)
- 第11回 予備調査分析(1)
- 第12回 予備調査分析(2)
- 第13回 実験計画修正(1)
- 第14回 実験計画修正(2)

履修上の注意

博士論文の予備調査を実施するとともに、自主的、積極的に、学会発表を行っていくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回課題を課すので、指示に従うこと。

教科書

指定しない。

参考書

指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

毎週の課題(50%)、期末の課題(50%)

その他

特になし。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN752J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

研究論文指導Vでは、本実験の実施と分析を行い、博士論文の完成を目指す。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 実験計画の最終確定
- 第3回 本調査準備(1)
- 第4回 本調査準備(2)
- 第5回 本調査準備(3)
- 第6回 本調査実施
- 第7回 本調査実施と分析(1)
- 第8回 本調査実施と分析(2)
- 第9回 本調査実施と分析(3)
- 第10回 本調査実施と分析(4)
- 第11回 追加調査検討
- 第12回 論文執筆(1)
- 第13回 論文執筆(2)
- 第14回 論文執筆(3)

履修上の注意

本調査の実施と並行して、論文の全体構想を練っていくこと。また、研究課題に応えられる結果や材料がそろっているかを常に意識しながら、必要に応じて、再調査や追加調査を検討していくこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

教員の指導に基づいて研究を進めるとともに、自律的に研究を進めること。

教科書

指定しない。

参考書

指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

ゼミ用SlackやTeamsにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

毎週の課題(50%)、期末の課題(50%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN752J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

研究論文指導VIでは、博士研究に残された課題を整理し、受講者自身が研究を客観的に振り返り、評価する。その上で、受講者が、博士論文執筆後、自律的に研究を遂行するためには、次なる課題をどこに設定するべきかを見極め、今後の研究の展望を明確にする。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨ
- 第2回 論文執筆と次なる課題の検討(1)
- 第3回 論文執筆と次なる課題の検討(2)
- 第4回 論文執筆と次なる課題の検討(3)
- 第5回 論文執筆と次なる課題の検討(4)
- 第6回 博士論文の推敲(1)
- 第7回 博士論文の推敲(2)
- 第8回 博士論文の推敲(3)
- 第9回 博士論文の推敲(4)
- 第10回 博士論文の推敲(5)
- 第11回 博士研究の振り返りと新たな研究計画の検討(1)
- 第12回 博士研究の振り返りと新たな研究計画の検討(2)
- 第13回 今後の研究計画立案
- 第14回 自身の研究に対する評価と今後の研究の方向性の確定

履修上の注意

博士論文の推敲においては、学会等での口頭発表でのフィードバックが有効であるため、積極的に学会発表を行うこと。また、博士論文完成は研究のゴールではなく、スタートであることを認識し、研究者として目指すべき次なる方向性を常に意識しながら、自らの研究能力を客観的に評価し、真摯に研究に向かう姿勢を養うこと。

準備学習(予習・復習等)の内容

この段階では、自らが自らに課題を出せるようにならない。よって、準備学習は、受講者自身が決め、行っていくことが期待される。

教科書

指定しない。

参考書

指定しない。

課題に対するフィードバックの方法

ゼミ用SlackやTeamsにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

博士論文(50%)と今後の研究計画(50%)

その他

特になし。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN722E			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導I		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This course introduces the context in which educational research is conducted. Research paradigms are introduced and explained. The goal is to be able to give one's research a strong philosophical foundation.

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Conceptions of Social Reality
- 第3回：Overview of Research Paradigms
- 第4回：Positivism and the Scientific Method
- 第5回：Post-positivism
- 第6回：Naturalistic and Interpretive Approaches to Research
- 第7回：Review: Analyzing the Research Approach of Example Studies
- 第8回：Mixed Methods Research (MMR)
- 第9回：Review: Analyzing MMR Studies
- 第10回：Critical Educational Research
- 第11回：Review: Analyzing Critical Research Studies
- 第12回：Theory in Educational Research
- 第13回：Determining Causation
- 第14回：Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

None.

教科書

None.

参考書

Cohen, L., Manion, L., & Morrisom, K. (2018). *Research Methods in Education* (8th Ed.). London: Routledge.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Weekly discussion on assigned content 50%
Presentation 50%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN722E			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導II		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This course explores the concept of individual learner differences and their role in second language learning. It provides an overview of the most widely researched individual differences, such as motivation, self-regulation, learner beliefs, and learner identity.

授業内容

- 第1回：Introduction to Individual Differences
- 第2回：Personality
- 第3回：Language Aptitude
- 第4回：Motivation: Self-Determination Theory
- 第5回：Motivation: Socio-dynamic Perspectives
- 第6回：Motivation: Complex Dynamic Systems Perspectives
- 第7回：Motivation: Directed Motivational Currents
- 第8回：Self-Regulation: Introduction
- 第9回：Learning Strategies and Self-Regulation
- 第10回：Learner Beliefs
- 第11回：Language Anxiety
- 第12回：Creativity
- 第13回：Identity
- 第14回：Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

None.

教科書

No textbook.

参考書

Dornyei, Z. & Ryan, S. (2015). *The Psychology of the Language Learner Revisited*. London: Routledge.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Weekly discussion on assigned content 50%
Presentation 50%

その他

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN722E			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This course builds on Dissertation I by exploring the research methods used in the field of Second Language Acquisition (SLA). It looks at key issues in research methodology, planning and designing research, and collecting and analyzing data.

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Main Research Methodologies (Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods)
- 第3回：Research Ethics
- 第4回：Longitudinal and Cross-sectional Research
- 第5回：Quantitative Data Collection
- 第6回：Qualitative Data Collection
- 第7回：Mixed Methods Research (MMR)
- 第8回：Classroom Research
- 第9回：Quantitative Data Analysis
- 第10回：Qualitative Data Analysis
- 第11回：Data Analysis in MMR
- 第12回：Reporting Research Results
- 第13回：Analysis of Research Studies
- 第14回：Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

None.

教科書

None.

参考書

Dornyei, Z. (2007). *Research Methods in Applied Linguistics*. Oxford, UK: OUP.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Weekly discussion on assigned content 50%
Presentation 50%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN722E			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This course explores the field of motivation research in motivation by presenting a number of theories of motivation. The course also examines how these theories are applied to the field of SLA, thereby providing a deeper understanding of motivational research.

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Origins of Motivation Research
- 第3回：Expectancy-Value Theories of Motivation
- 第4回：Attribution Theory
- 第5回：Social Cognitive Theory
- 第6回：Goals and Goal Orientation
- 第7回：Affect and Motivation
- 第8回：Interest and Motivation
- 第9回：Intrinsic and Extrinsic Motivation I
- 第10回：Intrinsic and Extrinsic Motivation II
- 第11回：Sociocultural Influences
- 第12回：Teacher Influences
- 第13回：Classroom and School Influences
- 第14回：Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

None.

教科書

No textbook.

参考書

Schunk, D. H, Pintrich, P. R., & Meece, J. L. (2008). *Motivation in Education* (3rd Ed.). Columbus, Ohio: Pearson.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Weekly discussion of assigned content 50%
Presentation 50%

その他

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN722E			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This course provides a thorough introduction to the field of self-regulated learning. It explores self-regulation in the light of theories of the self, achievement goal motivation, interest, self-efficacy beliefs, attribution theory, and self-determination theory.

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Self-Theories and Self-Regulation
- 第3回：Goal Setting
- 第4回：Goal Pursuit
- 第5回：Self-Regulation of Motivation (SRM) Model
- 第6回：Interest and Self-Regulation
- 第7回：Self-Efficacy Beliefs
- 第8回：Self-Determination Theory (SDT) Perspective of Self-Regulation
- 第9回：Attribution Theory
- 第10回：Gender, Self-Regulation, and Motivation
- 第11回：Cultural Differences and Cultural Identity
- 第12回：Adaptive Help-Seeking
- 第13回：Achievement Values and Regulation of Achievement Behaviours
- 第14回：Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

It is helpful if you read books related to literacy studies in advance.

教科書

None.

参考書

Schunk, D. H. & Zimmerman, B. J. (Eds.). (2008). Motivation and Self-Regulated Learning. London: Routledge.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Weekly discussion on assigned content 50%
Presentation 50%

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN722E			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任准教授 Ed.D. マクロクリン, デイヴィット		

授業の概要・到達目標

This course offers an introduction to Sociocultural Theory (SCT) and its role in second language education. Learner narratives are used to illustrate the content of the theory.

授業内容

- 第1回：Introduction
- 第2回：Mediation
- 第3回：Narrative: Mona
- 第4回：Zone of Proximal Development (ZPD)
- 第5回：Narrative: Madame Tremblay
- 第6回：Languaging
- 第7回：Narratives: Jody/Sophie and Rachel
- 第8回：Everyday and Scientific Concepts
- 第9回：Narrative: Thaya
- 第10回：Cognition and Emotion
- 第11回：Narrative: Grace
- 第12回：Activity Theory
- 第13回：Narrative: Sandra
- 第14回：Review

履修上の注意

Only English is used in class.

準備学習（予習・復習等）の内容

None.

教科書

None.

参考書

Swain, M., Kinnear, P., & Steinman, L. (2011). Sociocultural Theory in Second Language Education: An Introduction Through Narratives. Bristol, UK: Multilingual Matters.

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

Weekly discussion on assigned content 50%
Presentation 50%

その他

必修科目

科目ナンバー：(GJ) EDU732J			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

教育工学選書および学習科学ハンドブックなど、院生の研究領域を整理した文献をもとに議論し、国内外の研究の動向について確認する。その上で、院生の研究の問いが学術的にどのように位置づけられるのか、またどのような意義があるかについて議論し、整理する。先行研究を整理したものは、国内外の学会で8-9月の間に関連学会で発表し、フィードバックを得て、発展させていく。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：研究計画についての発表
 - 第3回：教育工学と学習科学、その他関連領域についての文献研究(1)
 - 第4回：教育工学と学習科学、その他関連領域についての文献研究(2)
 - 第5回：教育工学と学習科学、その他関連領域についての文献研究(3)
 - 第6回：教育工学と学習科学、その他関連領域についての文献研究(4)
 - 第7回：教育工学と学習科学、その他関連領域についての文献研究(5)
 - 第8回：教育工学と学習科学、その他関連領域についての文献研究(6)
 - 第9回：研究の問いと学術的意義に関する発表
 - 第10回：研究方法についての計画発表(1)
 - 第11回：研究方法についての計画発表(2)
 - 第12回：8月の学会発表にむけた研究計画発表
 - 第13回：8月の学会発表にむけた抄録提出
 - 第14回：8月の学会発表にむけた発表
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1) 本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2) 各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3) 本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

- 定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
- ・関連する文献調査をまとめたレポート 40%
 - ・先行研究の批判的考察と研究の問いの提示 40%
 - ・研究発表(中間報告) 20%

その他

科目ナンバー：(GJ) EDU732J			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

研究方法を中心に行う。研究の問いを明らかにするための研究方法を確定しその方法について関連書籍や論文を読み議論を進める。文献を読みながら、実際に収集したデータを分析し、分析結果を吟味していく。その結果を2-3月の国内外の学会にて発表し、フィードバックを得て発展させていく。また、分析を通して明らかになってきた新たな問いを研究するための研究計画をたて着手していく。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：博士論文構想発表と議論(1)
 - 第3回：博士論文構想発表と議論(2)
 - 第4回：データ収集の方法論についての講義(1)
 - 第5回：データ収集の方法論についての講義(2)
 - 第6回：データの分析の方法論についての講義(1)
 - 第7回：データの分析の方法論についての講義(2)
 - 第8回：収集したデータの分析結果についての検討(1)
 - 第9回：収集したデータの分析結果についての検討(2)
 - 第10回：収集したデータの分析結果についての検討(3)
 - 第11回：先行研究レビューの批判的考察—研究の独創性について(1)
 - 第12回：先行研究レビューの批判的考察—研究の独創性について(2)
 - 第13回：研究発表の準備(1)
 - 第14回：研究発表の準備(2)
- * 講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1) 本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2) 各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3) 本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

- 定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。
- ・博士論文の進捗報告 60%
 - ・研究の背景・目的・方法までをまとめた1万字論文 40%

その他

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) EDU732J			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

研究論文指導ⅠとⅡで行ったデータの分析結果を、さらに先行研究と関連させて議論を進めていく。関連する文献を幅広くレビューし、院生の研究の学術的意義を明確にしていく。また分析の結果、足りない部分のデータをさらに収集し、分析を行う。そこでまとめた論文を8月以降の学会誌に投稿する。

授業内容

- 第1回：学術雑誌への投稿論文の計画、進捗発表
 - 第2回：研究の背景と目的・方法論についての発表とディスカッション(1)
 - 第3回：研究の背景と目的・方法論についての発表とディスカッション(2)
 - 第4回：追加のデータ収集・分析のための議論(1)
 - 第5回：追加のデータ収集・分析のための議論(2)
 - 第6回：データ収集と分析結果の発表と議論(1)
 - 第7回：データ収集と分析結果の発表と議論(2)
 - 第8回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(1)
 - 第9回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(2)
 - 第10回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(3)
 - 第11回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(4)
 - 第12回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(5)
 - 第13回：研究発表の準備(1)
 - 第14回：研究発表の準備(2)
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意してください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。

- ・博士論文の進捗報告 60%
- ・修士論文(ドラフト)の提出 40%

その他

科目ナンバー：(GJ) EDU732J			
言語・国際交流関係	備考	2026年度開講せず	
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通して明らかになった新たな問いについての研究に着手する。関連する文献を読み、問いを明らかにし、そのための方法論を確定し、データ収集と分析を行う。査読の結果を受けてその修正を行い、そのプロセスでさらに文献調査を行いながら学術的意義を高めていく。その結果を2月の学会誌で投稿し、査読プロセスを経て改善していく。

授業内容

- 第1回：本演習の概要、進め方、評価の説明
 - 第2回：研究論文指導Ⅲで提出した論文のフィードバック(1)
 - 第3回：研究論文指導Ⅲで提出した論文のフィードバック(2)
 - 第4回：博士論文の修正/今後の展開のための計画発表
 - 第5回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(1)
 - 第6回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(2)
 - 第7回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(3)
 - 第8回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(4)
 - 第9回：博士論文の進捗状況報告とディスカッション(5)
 - 第10回：投稿論文の計画発表(1)
 - 第11回：投稿論文の進捗発表(2)
 - 第12回：関連する文献に関する議論
 - 第13回：投稿論文の進捗発表(3)
 - 第14回：投稿論文の進捗発表(4)
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、反転授業、オンライン講座への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意してください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。

- ・修士論文の進捗報告 40%

その他

必修科目

科目ナンバー：(GJ) EDU732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

博士論文全体の構成を確定し、博士論文完成に向けて取り組んでいく。研究の中心となる学術的問いを確定し、その背景の批判的考察を完成させる。同時に、これまで収集・分析してきた結果、目的、背景についての一貫性を見直し、不足分があれば追加で調査を行なっていく。副査からのフィードバックをもとに完成にむけて形を整えていく。

授業内容

- 第1回：博士論文全体の構成についての発表
- 第2回：研究の問いとそれに至る学術的議論についての発表(1)
- 第3回：研究の問いとそれに至る学術的議論についての発表(2)
- 第4回：研究の問いとそれに至る学術的議論についての発表(3)
- 第5回：研究の問いとそれに至る学術的議論についての発表(4)
- 第6回：理論的枠組みについての議論(1)
- 第7回：理論的枠組みについての議論(2)
- 第8回：理論的枠組みについての議論(3)
- 第9回：理論的枠組みについての議論(4)
- 第10回：研究の方法と分析結果についての発表(1)
- 第11回：研究の方法と分析結果についての発表(2)
- 第12回：論文の課題と展望についての議論(1)
- 第13回：論文の課題と展望についての議論(2)
- 第14回：博士論文の進捗報告

*講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンラインで行い、さらに、他大学院とのオンライン研究会への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。
- (4)生成AIの利用について：本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。生成AIを使用した場合は、どの部分に、どのツールを、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱うことがある。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。

- ・博士論文の進捗報告 60%
- ・博士論文(ドラフト)の提出 40%

その他

科目ナンバー：(GJ) EDU732J			
言語・国際交流関係	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

研究論文指導Vで形になりつつある博士論文を、関連学会や研究会で発表しフィードバックを得ながらさらに加筆修正をしていく。博士論文を完成させ、発表にむけた資料やスライドの作成にも取り組んでいく。

授業内容

- 第1回：博士論文の進捗報告(1)
- 第2回：博士論文の進捗報告(2)
- 第3回：博士論文の進捗報告(3)
- 第4回：博士論文の進捗報告(4)
- 第5回：博士論文の進捗報告(5)
- 第6回：博士論文の進捗報告(6)
- 第7回：博士論文の進捗報告(7)
- 第8回：博士論文の進捗報告(8)
- 第9回：博士論文の進捗報告(9)
- 第10回：博士論文の発表資料確認(1)
- 第11回：博士論文の発表資料確認(2)
- 第12回：博士論文の発表練習
- 第13回：博士論文の相互チェック
- 第14回：博士論文の軽微な修正

*講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

- (1)本演習では、ICTを多用します。演習のための資料をオンラインで共有し、議論の記録、先行研究のリストの作成をオンライン上で行い、さらに、他大学とのオンライン研究会への参加も予定しています。
- (2)各自、パソコン、タブレットなどの端末を持ってきてください。事前に充電がされているように注意をしてください。
- (3)本演習では、受講生の関心や理解状況にあわせて上記のシラバスを一部調整することがあります。
- (4)生成AIの利用について：本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。生成AIを使用した場合は、どの部分に、どのツールを、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱うことがある。

準備学習（予習・復習等）の内容

- ・発表の際には、事前に資料を準備し、共有してください。
- ・発表担当でない回については、必ず発表者の資料に目を通しておいてください。
- ・反転授業およびオンライン講座への参加は演習時以外の時間を使います。

教科書

必要に応じて指示しますので、特に指定はしません。

参考書

院生の研究テーマに即して、演習時に示します。

課題に対するフィードバックの方法

院ゼミ生は毎回のゼミの振り返りをTeamsにて提出します。教員は提出された投稿に対して適宜フィードバックを行い、特に重要だと思われる内容を次の院ゼミで取り上げ、全体で共有します。

成績評価の方法

定期試験を行わず、平常試験(小テスト・レポート等)で総合評価します。

- ・博士論文の進捗報告 60%
- ・博士論文の発表 40%

その他

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) PHL712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

研究指導は、学生が自らの関心の所在を探り、問われるべき事柄を明確化し、それを学術論文という形に仕上げることを目的としておこなわれる。

研究論文指導Ⅰでは、学生の研究テーマに関わる基礎的テキストの一つを選び、講読する。その際、用いられている概念を正確に理解すること、テキストの背景にある著者の思想の体系を明らかにすることに努める。また、研究の進捗状況を見るために、何度か研究発表の機会を設ける。

授業内容

- 第1回：研究テーマについて
- 第2回：テキスト講読(1)
- 第3回：テキスト講読(2)
- 第4回：テキスト講読(3)
- 第5回：テキスト講読(4)
- 第6回：テキスト講読(5)
- 第7回：研究発表(1)
- 第8回：テキスト講読(6)
- 第9回：テキスト講読(7)
- 第10回：テキスト講読(8)
- 第11回：テキスト講読(9)
- 第12回：テキスト講読(10)
- 第13回：まとめと討論
- 第14回：研究発表(2)

履修上の注意

とくに、ありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを正確に読むために、紹介した参考書等を参照しながら、テキストの筋道が自分の中で明瞭になるまでよく考え、質問を準備してから授業に臨むようにしてください。

教科書

授業の中で指定します。

参考書

授業の中で紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

論じられるべき問題がどの程度明らかになっているか、見出された問題にどの程度取り組んでいるか等によって評価します。

その他

特にありません。

科目ナンバー：(GJ) PHL712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅱでは、Ⅰに引き続き、学生の研究テーマに関わる基礎的テキストを講読する。その際には、Ⅰにも記したように、用いられている概念を正確に理解すること、テキストの背景にある著者の思想の体系を明らかにすることに努める。また、研究の進捗状況を見るために、何度か研究発表の機会を設ける。

授業内容

おおよその授業計画は次の通り。

- 第1回：研究の進捗状況について
- 第2回：研究発表(1)
- 第3回：テキスト講読(1)
- 第4回：テキスト講読(2)
- 第5回：テキスト講読(3)
- 第6回：テキスト講読(4)
- 第7回：まとめと討論(1)
- 第8回：研究発表(2)
- 第9回：テキスト講読(5)
- 第10回：テキスト講読(6)
- 第11回：テキスト講読(7)
- 第12回：テキスト講読(8)
- 第13回：まとめと討論(2)
- 第14回：研究発表(3)

履修上の注意

とくに、ありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを正確に読むために、紹介した参考書等を参照しながら、テキストの筋道が自分の中で明瞭になるまでよく考え、質問を準備してから授業に臨むようにしてください。

教科書

授業の中で指定します。

参考書

授業の中で紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

論じられるべき問題がどの程度明らかになっているか、見出された問題にどの程度取り組んでいるか等によって評価します。

その他

特にありません。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) PHL712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部 仁	

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅲでは、Ⅰ・Ⅱに引き続き、学生の研究テーマに関わる基礎的テキストを講読する。その際には、Ⅰ・Ⅱにも記したように、用いられている概念を正確に理解すること、テキストの背景にある著者の思想の体系を明らかにすることに努める。また、研究の進捗状況を見るために、何度か研究発表の機会を設ける。

授業内容

- 第1回：研究の進捗状況について
- 第2回：研究発表(1)
- 第3回：テキスト講読(1)
- 第4回：テキスト講読(2)
- 第5回：テキスト講読(3)
- 第6回：テキスト講読(4)
- 第7回：まとめと討論(1)
- 第8回：研究発表(2)
- 第9回：テキスト講読(5)
- 第10回：テキスト講読(6)
- 第11回：テキスト講読(7)
- 第12回：テキスト講読(8)
- 第13回：まとめと討論(2)
- 第14回：研究発表(3)

履修上の注意

とくに、ありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

テキストを正確に読むために、紹介した参考書等を参照しながら、テキストの筋道が自分の中で明瞭になるまでよく考え、質問を準備してから授業に臨むようにしてください。

教科書

授業の中で指定します。

参考書

授業の中で紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

論じられるべき問題がどの程度明らかになっているか、見出された問題にどの程度取り組んでいるか等によって評価します。

その他

特にありません。

科目ナンバー：(GJ) PHL712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部 仁	

授業の概要・到達目標

研究論文指導Ⅳでは、学生の研究対象に関わる先行研究を取り上げる。その際、できるかぎり研究対象に立ち戻って、先行研究の妥当性を検討するようにする。また、研究の進捗状況を見るために、何度か研究発表の機会を設ける。

授業内容

- 第1回：研究の進捗状況について
- 第2回：研究発表(1)
- 第3回：先行研究の検討(1)
- 第4回：先行研究の検討(2)
- 第5回：先行研究の検討(3)
- 第6回：先行研究の検討(4)
- 第7回：討論(1)
- 第8回：研究発表(2)
- 第9回：先行研究の検討(5)
- 第10回：先行研究の検討(6)
- 第11回：先行研究の検討(7)
- 第12回：先行研究の検討(8)
- 第13回：討論(2)
- 第14回：研究発表(3)

履修上の注意

とくに、ありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

先行研究は、紹介するだけでなく、自分の立場から評価するようにしてください。

教科書

特にありません。

参考書

授業の中で紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

研究の拡がりや深まりによって評価します。

その他

特にありません。

博士後期課程

必修科目

科目ナンバー：(GJ) PHL712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

研究論文指導Vでは、IVに引き続き、研究対象に関わる先行研究を取り上げる。その際には、IVにも記したように、できるかぎり研究対象に立ち戻って、先行研究の妥当性を検討するようにする。また、研究の進捗状況を見るために、何度か研究発表の機会を設ける。

授業内容

第1回：研究の進捗状況について
第2回：研究発表(1)
第3回：先行研究の検討(1)
第4回：先行研究の検討(2)
第5回：先行研究の検討(3)
第6回：先行研究の検討(4)
第7回：討論(1)
第8回：研究発表(2)
第9回：先行研究の検討(5)
第10回：先行研究の検討(6)
第11回：先行研究の検討(7)
第12回：先行研究の検討(8)
第13回：討論(2)
第14回：研究発表(3)

履修上の注意

とくに、ありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

先行研究は、紹介するだけでなく、自分の立場から評価するようにしてください。

教科書

特にありません。

参考書

授業の中で紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

研究の拡がりや深まりによって評価します。

その他

特にありません。

科目ナンバー：(GJ) PHL712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

研究論文指導VIでは、研究成果をまとめ、ひとつの論文に仕上げることを目指す。論文の構成を考えて目次をつくり、それに沿ってあらためてこれまでの研究結果を発表し、詳しく検討を加える。最後には、今後の研究課題も視野に入れ、今回の論文の位置づけをおこなう。

授業内容

第1回：研究の進捗状況について
第2回：研究発表(論文の構成について)
第3回：論文発表(1)
第4回：論文発表(2)
第5回：論文発表(3)
第6回：論文発表(4)
第7回：論文発表(5)
第8回：論文発表(6)
第9回：論文発表(7)
第10回：論文発表(8)
第11回：論文発表(9)
第12回：論文発表(10)
第13回：論文発表(11)
第14回：回顧と展望

履修上の注意

とくに、ありません。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、研究全体の目的を確認するようにしてください。

教科書

特にありません。

参考書

授業中に指示します。

課題に対するフィードバックの方法

毎回、授業中にディスカッションの時間をとります。フィードバックもそのなかでおこないます。

成績評価の方法

論文によって評価します。

その他

特にありません。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅰ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本の近代文学研究に関して、自身の選択したテーマについて研究を進めていく。この分野の研究は、文学作品の表現を分析することはもちろん、その時代の社会状況や文壇で共有されたトピック、作家自身の伝記的事実や他の文化のジャンルとの関わりなど、多様な問題を視野に入れることによって新たに切り拓かれてきた。多様な方法論や知識、切り口を把握した上で、自身の研究課題を設定し、成果を出していくことが目標である。研究論文指導Ⅰでは、研究課題をいかに設定すればよいかを意識しつつ、関連する先行研究の把握を進める。

授業内容

- 第1回：研究課題の設定
- 第2回：先行研究の概観
- 第3回：先行研究の検討(1)
- 第4回：先行研究の検討(2)
- 第5回：先行研究の検討(3)
- 第6回：先行研究の検討(4)
- 第7回：研究課題の再設定
- 第8回：先行研究の再収集
- 第9回：先行研究の検討(5)
- 第10回：先行研究の検討(6)
- 第11回：先行研究の検討(7)
- 第12回：先行研究の検討(8)
- 第13回：先行研究の論点整理
- 第14回：先行研究の総括と研究上の課題の検討

履修上の注意

新規性のある研究を進めるには、まずは関連する先行研究をしっかりと押さえることが重要です。重要なものを漏らさず把握していく姿勢を持つよう努めて下さい。

準備学習(予習・復習等)の内容

その回に扱う先行研究をよく読んで授業に参加して下さい。また、報告が当たっている週にはレジュメを切って報告の準備を進めて下さい。

教科書

使用しません。

参考書

あらかじめ指定しているものはありません。適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表内容とディスカッションへの取り組み、研究の進捗によって評価します。

その他

履修者の研究テーマや研究の進捗状況に応じて、内容は適宜変更します。

科目ナンバー：(GJ) LIT712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅱ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本の近代文学研究に関して、自身の選択したテーマについて研究を進めていく。この分野の研究は、文学作品の表現を分析することはもちろん、その時代の社会状況や文壇で共有されたトピック、作家自身の伝記的事実や他の文化のジャンルとの関わりなど、多様な問題を視野に入れることによって新たに切り拓かれてきた。多様な方法論や知識、切り口を把握した上で、自身の研究課題を設定し、成果を出していくことが目標である。研究論文指導Ⅱでは、作品の表現を詳細に検討し、同じ作家や関連する作家の作品を視野に入れて、作品の位置付けを探る。

授業内容

- 第1回：文学史的位置付けの検討
- 第2回：関連作品の検討
- 第3回：対象作家の関連作品の検討(1)
- 第4回：対象作家の関連作品の検討(2)
- 第5回：対象作家の関連作品の検討(3)
- 第6回：対象作家の関連作品の検討(4)
- 第7回：研究課題の再設定
- 第8回：同時代の文学史的動向の概観
- 第9回：同時代の他作家の関連作品の検討(1)
- 第10回：同時代の他作家の関連作品の検討(2)
- 第11回：同時代の他作家の関連作品の検討(3)
- 第12回：同時代の他作家の関連作品の検討(4)
- 第13回：文学史の部分的再検討
- 第14回：総括と研究上の課題の検討

履修上の注意

研究を進めるには、対象とする作品だけでなく、関連する多くの文学作品を視野に入れ、自分なりの読み方を持っていくことが効いてきます。日頃から旺盛に作品を読む姿勢を持って下さい。

準備学習(予習・復習等)の内容

その回に扱う作品や資料をよく読んで授業に参加して下さい。また、報告が当たっている週にはレジュメを切って報告の準備を進めて下さい。

教科書

使用しません。

参考書

あらかじめ指定しているものはありません。適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表内容とディスカッションへの取り組み、研究の進捗によって評価します。

その他

履修者の研究テーマや研究の進捗状況に応じて、内容は適宜変更します。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅲ		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本の近代文学研究に関して、自身の選択したテーマについて研究を進めていく。この分野の研究は、文学作品の表現を分析することはもちろん、その時代の社会状況や文壇で共有されたトピック、作家自身の伝記的事実や他の文化のジャンルとの関わりなど、多様な問題を視野に入れることによって新たに切り拓かれてきた。多様な方法論や知識、切り口を把握した上で、自身の研究課題を設定し、成果を出していくことが目標である。研究論文指導Ⅲでは、文学作品以外の一次資料を視野に入れ、その一次資料について理解するための文学研究以外も含めた先行研究を把握していく。

授業内容

- 第1回：文学作品以外も含めた一次資料の調査課題の検討
- 第2回：文学作品以外も含めた一次資料の概観
- 第3回：一次資料の調査と検討(1)
- 第4回：一次資料の調査と検討(2)
- 第5回：一次資料に関する多様な分野の先行研究の収集と検討(1)
- 第6回：一次資料に関する多様な分野の先行研究の収集と検討(2)
- 第7回：研究課題の再設定
- 第8回：一次資料に関する多様な分野の先行研究の調査方針の再検討
- 第9回：一次資料の調査と検討(3)
- 第10回：一次資料の調査と検討(4)
- 第11回：一次資料に関する多様な分野の先行研究の収集と検討(3)
- 第12回：一次資料に関する多様な分野の先行研究の収集と検討(4)
- 第13回：多様な一次資料を踏まえた文学作品の分析
- 第14回：総括と研究上の課題の検討

履修上の注意

研究を進めるには、文学作品以外の一次資料を独自に調査し、分析できることが武器になります。見ておくべき資料へのアンテナを常に張って研究に取り組んで下さい。

準備学習(予習・復習等)の内容

その回に扱う作品や資料をよく読んで授業に参加して下さい。また、報告が当たっている週にはレジュメを切って報告の準備を進めて下さい。

教科書

使用しません。

参考書

あらかじめ指定しているものではありません。適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表内容とディスカッションへの取り組み、研究の進捗によって評価します。

その他

履修者の研究テーマや研究の進捗状況に応じて、内容は適宜変更します。

科目ナンバー：(GJ) LIT712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導Ⅳ		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本の近代文学研究に関して、自身の選択したテーマについて研究を進めていく。この分野の研究は、文学作品の表現を分析することはもちろん、その時代の社会状況や文壇で共有されたトピック、作家自身の伝記的事実や他の文化のジャンルとの関わりなど、多様な問題を視野に入れることによって新たに切り拓かれてきた。多様な方法論や知識、切り口を把握した上で、自身の研究課題を設定し、成果を出していくことが目標である。研究論文指導Ⅳでは、進めてきた研究について学会で口頭発表し、学術雑誌に論文として投稿することを目指す。

授業内容

- 第1回：研究計画の検討
- 第2回：学会発表へ向けた準備(1)
- 第3回：学会発表へ向けた準備(2)
- 第4回：学会発表へ向けた準備(3)
- 第5回：学会発表の予行演習
- 第6回：学会発表レジュメの推敲
- 第7回：学会発表
- 第8回：投稿論文の執筆計画
- 第9回：投稿論文の執筆と添削指導(1)
- 第10回：投稿論文の執筆と添削指導(2)
- 第11回：投稿論文の執筆と添削指導(3)
- 第12回：投稿論文の執筆と添削指導(4)
- 第13回：論文の投稿
- 第14回：総括と研究上の課題の検討

履修上の注意

研究は、学会・研究会での口頭発表や投稿論文の形で成果を発表することが目標です。どのように聞かれるか、読まれるかを意識しながらまとめていくようにして下さい。

準備学習(予習・復習等)の内容

その回に扱う作品や資料をよく読んで授業に参加して下さい。また、報告が当たっている週にはレジュメを切って報告の準備を進めて下さい。

教科書

使用しません。

参考書

あらかじめ指定しているものではありません。適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表内容とディスカッションへの取り組み、研究の進捗によって評価します。

その他

履修者の研究テーマや研究の進捗状況に応じて、内容は適宜変更します。

必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導V		
開講期	春学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本の近代文学研究に関して、自身の選択したテーマについて研究を進めていく。この分野の研究は、文学作品の表現を分析することはもちろん、その時代の社会状況や文壇で共有されたトピック、作家自身の伝記的事実や他の文化のジャンルとの関わりなど、多様な問題を視野に入れることによって新たに切り拓かれてきた。多様な方法論や知識、切り口を把握した上で、自身の研究課題を設定し、成果を出していくことが目標である。研究論文指導Vでは、研究成果を継続して出していくことを目指す。

授業内容

- 第1回：研究計画の検討
- 第2回：学会発表へ向けた準備(1)
- 第3回：学会発表へ向けた準備(2)
- 第4回：学会発表へ向けた準備(3)
- 第5回：学会発表の予行演習
- 第6回：学会発表レジュメの推敲
- 第7回：学会発表
- 第8回：投稿論文の執筆計画
- 第9回：投稿論文の執筆と添削指導(1)
- 第10回：投稿論文の執筆と添削指導(2)
- 第11回：投稿論文の執筆と添削指導(3)
- 第12回：投稿論文の執筆と添削指導(4)
- 第13回：論文の投稿
- 第14回：総括と研究上の課題の検討

履修上の注意

研究は、一つ成果を出すことに終わらず、それが次の研究テーマにもつながることで継続的に成果を出していくことが重要です。たゆまず新しい研究課題を見出していくよう努めて下さい。

準備学習(予習・復習等)の内容

その回に扱う作品や資料をよく読んで授業に参加して下さい。また、報告が当たっている週にはレジュメを切って報告の準備を進めて下さい。

教科書

使用しません。

参考書

あらかじめ指定しているものはありません。適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表内容とディスカッションへの取り組み、研究の進捗によって評価します。

その他

履修者の研究テーマや研究の進捗状況に応じて、内容は適宜変更します。

科目ナンバー：(GJ) LIT712J			
文化・思想研究	備考		
科目名	研究論文指導VI		
開講期	秋学期	単位	演2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本の近代文学研究に関して、自身の選択したテーマについて研究を進めていく。この分野の研究は、文学作品の表現を分析することはもちろん、その時代の社会状況や文壇で共有されたトピック、作家自身の伝記的事実や他の文化のジャンルとの関わりなど、多様な問題を視野に入れることによって新たに切り拓かれてきた。多様な方法論や知識、切り口を把握した上で、自身の研究課題を設定し、成果を出していくことが目標である。研究論文指導VIでは、博士論文の完成を目指す。

授業内容

- 第1回：研究計画の検討
- 第2回：学会発表・論文投稿へ向けた準備(1)
- 第3回：学会発表・論文投稿へ向けた準備(2)
- 第4回：学会発表・論文投稿へ向けた準備(3)
- 第5回：学会発表・論文投稿へ向けた準備(4)
- 第6回：学会発表の予行演習・論文の推敲
- 第7回：学会発表・論文投稿
- 第8回：博士論文の参考文献リストの確認
- 第9回：博士論文の構成の確認
- 第10回：博士論文の執筆
- 第11回：博士論文の推敲
- 第12回：博士論文の完成
- 第13回：博士論文の発表
- 第14回：博士論文の振り返りと自己評価

履修上の注意

博士後期課程在学中の研究は、博士論文にまとめあげることが一つの最終目標となります。最終的な形を意識して研究に取り組んで下さい。

準備学習(予習・復習等)の内容

その回に扱う作品や資料をよく読んで授業に参加して下さい。また、報告が当たっている週にはレジュメを切って報告の準備を進めて下さい。

教科書

使用しません。

参考書

あらかじめ指定しているものはありません。適宜指示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業中のディスカッションの中で口頭でフィードバックを行う。

成績評価の方法

発表内容とディスカッションへの取り組み、研究の進捗によって評価します。

その他

履修者の研究テーマや研究の進捗状況に応じて、内容は適宜変更します。

博士後期課程

選択必修科目

科目ナンバー：(GJ) POP711J			
ポップカルチャー研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	ポップカルチャー特別研究		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授	藤本 由香里	

授業の概要・到達目標

指導教員の研究課題は、特に少女マンガにおける漫画表現の特性・歴史的展開、マンガの国際比較等であるが、マンガ表現に限らず、たとえば舞台表現等の女性向けポップカルチャー領域の特性分析や、ジェンダーの側面からの分析など、履修者の研究テーマに応じて、適切なテキストや講義内容を選択していく。講義形式だとたとえば、海外各国のマンガ文化と受容についてなどの解説、あるいは、ジェンダーや他者理解の側面から、少女マンガの性別越境表現等について解説していく、などが考えられる。

ポップカルチャーは新しい学問領域で、まだ誰も手をつけていない研究課題がたくさんある。けれども一方で、すぐれた先行研究も着々と増えてきている。それらの先行研究をきちんと踏まえつつ、まだないところに問いを立て、次の学問展開の基礎となるような論文を書いていくことを目指す。

指導教員の研究領域と、履修者の研究テーマがクロスするところで指導教官が講義を行い、あるいは共通の問題を討議できるフィールド・作品・文献をお互いに共有し、討論を行うことで、履修者が自分の研究テーマについて、より深く、より広い視野をもって論文を仕上げられるようにサポートする。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：研究課題と計画の発表/研究方法の検討
- 第3回：指導教員による講義(1)
- 第4回：講義のテーマを研究に生かす方法についての討議(1)
- 第5回：共通の素材や文献の共同研究(1)
- 第6回：共通の素材や文献の共同研究(2)
- 第7回：共通の素材や文献の共同研究(3)
- 第8回：共通の素材や文献の共同研究(4)
- 第9回：指導教員による講義(2)
- 第10回：講義のテーマを研究に生かす方法についての討議(2)
- 第11回：先行研究(文献)の収集結果と解説
- 第12回：先行研究(学術論文)の収集結果と解説
- 第13回：先行研究の整理と課題の検討
- 第14回：総括

履修上の注意

履修者が自身の研究テーマについてより深く、広い視座を持てるようになることを目指しますので、臆せず自分の考えを述べ、必要なことを積極的に求めていってください。

準備学習（予習・復習等）の内容

具体的なテーマに沿って指定します。

教科書

特に指定しない。受講者の関心によって必要なら選定する。

参考書

特に指定しない。受講者の関心によって必要なら選定する。

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

講義で得た知識を前提に自分なりに問いをたて、その課題に答えを出す小論文の提出を求めます。それが50%。講義内での積極的な発言や問題意識が50%

その他

科目ナンバー：(GJ) POP711J			
ポップカルチャー研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	ポップカルチャー特別研究		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任准教授	森川 嘉一郎	

授業の概要・到達目標

マンガ・アニメ・ゲームの研究・批評・教育活動を展開していく上で必要な素養を身に付けることを目標とする。毎回この分野の動向や研究に関するトピックを取り上げ、関連課題を課し、翌週に受講生が成果発表を行うというトレーニングを反復する。

授業内容

- 第1回：マンガ・アニメ・ゲームの関連商品の研究(1)
- 第2回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの関連商品の研究(2)
- 第3回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの関連商品の研究(3)
- 第4回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの関連商品の研究(4)
- 第5回：課題の成果発表、マンガ・アニメ・ゲームと場所の研究(1)
- 第6回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームと場所の研究(2)
- 第7回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームと場所の研究(3)
- 第8回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームと場所の研究(4)
- 第9回：課題の成果発表、マンガ・アニメ・ゲームの展示運用の研究(1)
- 第10回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの展示運用の研究(2)
- 第11回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの展示運用の研究(3)
- 第12回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの展示運用の研究(4)
- 第13回：課題の進捗発表、マンガ・アニメ・ゲームの展示運用の研究(5)
- 第14回：課題の成果発表

履修上の注意

既存の関連研究を収集するなど、自主的に研究を進めておくこと。

準備学習（予習・復習等）の内容

授業で取り上げたトピックに関し、各々の研究テーマと関わりについて、文献等によって知見を補強すること。

教科書

適宜指示する。

参考書

各々のテーマに沿って適宜指示する。

課題に対するフィードバックの方法

各課題について、個々の研究進捗や成果の発表の都度、講評や助言を行う。

成績評価の方法

各回の課題の成果発表の内容により評価を行う。

その他

選択必修科目

科目ナンバー: (GJ) POP711J			
ポップカルチャー研究	備考	3年に一度開講	
科目名	ポップカルチャー特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	宮本 大人	

授業の概要・到達目標

日本のアニメーション史概説。アニメーションを論じる基本的な観点を押さえた上で、戦前、戦中から戦後、現在までの主要な作品について見ていく。

授業内容

- 第1回: なぜアニメーションの歴史が問題になるのか
 第2回: 戦前・戦中のアニメーション—「桃太郎 海の神兵」と「くもとちゅうりっぷ」—
 第3回: 東映動画の仕事(1)—日本初の大規模アニメーション会社の出発—
 第4回: 東映動画の仕事(2)—長編動画製作体制の確立—
 第5回: 「アニメ」の始まり—虫プロの設立と「鉄腕アトム」—
 第6回: 東映動画の仕事(3)—高畑勲と宮崎駿の台頭—
 第7回: 「劇画」からアニメへ—「あしたのジョー」の場合—
 第8回: 東映動画からテレビアニメへ(1)—二つの「ルパン三世」—
 第9回: 東映動画からテレビアニメへ(2)—「アルプスの少女ハイジ」と「未来少年コナン」—
 第10回: タツノコプロの仕事
 第11回: 「アニメ」の青年期—「宇宙戦艦ヤマト」と「機動戦士ガンダム」—
 第12回: 「アニメ」の自意識—「うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー」—
 第13回: 「アニメ」をいったん終わらせる—GAINAXと「新世紀エヴァンゲリオン」—
 第14回: ネット時代のアニメ—「ほしのこえ」以後—

履修上の注意

授業内容についての積極的な質問を歓迎する。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回で取り上げる作品を極力見ておくこと。

教科書

用いない。

参考書

その都度指示する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内、またはオーメ이지を通じてコメントする。

成績評価の方法

期末レポート、または授業内での発表等、受講者数に応じて、初回、または第2回までに決定する。

その他

特になし。

科目ナンバー: (GJ) MAN761J			
社会・情報・国際関係研究	備考	3年に一度開講	
科目名	社会・情報・国際関係特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授	博士(経済学) 呉	在 烜

授業の概要・到達目標

日本企業の多面的な側面を概観的に検討して、現代におけるその問題点や課題、解決策について研究する。

授業内容

- 第1回 インTRODクシヨン
 第2回 日本的経営とは
 第3回 日本企業の経営理念・企業統治
 第4回 日本企業の経営方式
 第5回 日本企業の雇用制度
 第6回 日本企業の経営戦略
 第7回 日本企業の組織構造・企業文化
 第8回 日本企業のものづくり方式(1)歴史
 第9回 日本企業のものづくり方式(2)開発・生産方式
 第10回 日本企業のものづくり方式(3)製品アーキテクチャ
 第11回 日本企業の流通システム
 第12回 日本企業の国際化と国際経営
 第13回 デジタル化と日本企業の対応
 第14回 総括:問題と課題

履修上の注意

講義と議論形式で授業を行う。なお、生成 AI は、文献検索・アイデアの発想・文章校正の目的に限り利用を認めます。ただし、最終的な文章の内容・構成・主張は学習者自身の責任で作成してください。提出物には、AI を利用した場合は「AI 名」「利用目的」「出力結果の利用方法」を提出物に明記してください。記載がない場合、再提出を求められることや、不正行為として扱われることがあります。

準備学習（予習・復習等）の内容

毎回、参考文献や図書を紹介するので、事前に学習して参加すること。

教科書

特になし。

参考書

その都度、紹介します。

課題に対するフィードバックの方法

課題に対しては授業の時間中に解説の時間を設けて行います。

成績評価の方法

授業への参加度(60%)とレポート(40%)で評価します。

その他

対面授業形式で行います。

博士後期課程

選択必修科目

科目ナンバー：(GJ) EDU731J			
言語・国際交流研究	備考	3年に一度開講	
科目名	言語・国際交流特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(情報学) 岸 磨貴子		

授業の概要・到達目標

- 授業の概要
本講義は、社会科学研究におけるパフォーマンス・アプローチの理論的基盤と方法的な可能性を探求することを目的とする。社会科学における知の生成、記述や分析ととまらず、「行為」「関係」「表現」「生成」として捉える視点から再検討する。
本講義では、Playing with Purpose: Adventures in Performative Social Science を中核文献として用い、複数の概念を精査しながら、議論を通して理解を深めていく。単なる内容理解にとどまらず、「どのように語られているのか」「なぜこの形式が選ばれているのか」という表現形式そのものを研究対象として扱い、社会科学研究における(知の生成)を再考する。
受講生は、既存の研究方法を批判的に検討するとともに、自身の研究テーマにパフォーマンス視点を用いる位置づけ方を探究する。
- 到達目標
本講義を通して、受講生は以下を達成することを目指す。
(1) 社会科学における知の生成、記述や分析ととまらず、「行為」「関係」「表現」「生成」として捉える視点から再検討できる。
(2) パフォーマンスな研究実践を、方法論・認識論・倫理の観点から分析できる。
(3) 自身の博士研究に対して、パフォーマンスな視点を理論的・方法的に位置づけ、研究計画として構想できる。
(4) 研究成果の「表現」「共有」「読まれ方」を含めた知の生成プロセスを、批判的に再考できる。

授業内容

- 第1回 | オリエンテーション
「パフォーマンスな社会科学」とは何か
社会科学における「performative turn」
研究するとは何を「する」ことなのか
- 第2回 | パフォーマンスとしてのアート
表現は研究になりうるのか(指定図書1章)
アート/パフォーマンス/社会科学の境界
「表現=付加」ではなく「表現=探究」
語りの形式が生じ知
問い「なぜこの研究は“書く/演じる”必要があったのか
- 第3回 | パフォーマンスとしての探究
知は行為のなかで生まれる(指定図書2章)
Research as Performance
実践・関係・出来事としての探究
「結果」ではなく「過程」をどう扱うか
- 第4回 | 生まらな経験を研究する
ライフ、物語、エスノグラフィ (指定図書3章)
Writing Lives / Ethnographic Narratives
研究者の生はどこまで研究に含まれるのか
パフォーマンスの倫理
「自己」を研究に含めることのリスクと可能性
- 第5回 | 関係のなかで立ち上がる知
対話・協働・多声性(指定図書4章)
デュオグラフィ的思考
複数の声が共存するキャスト
「合意しないまま共に書く/研究する」
極力関係とパフォーマンス
- 第6回 | 「書き方」を分析する
物議構成的な語り、読者の位置づけ
従来の学術論文との違い
「形式=方法論」という視点
- 第7回 | 実践としての社会科学
研究はフィールドで何を起こすのか
教育・コミュニティ・ワークショップ
「役に立つ研究」とは何か
- 第8回 | 倫理・脆弱性・リスク
パフォーマンス研究の倫理
語ること/語られることの危うさ
研究参加者・研究者双方の脆弱性
IRBでは扱いきれない倫理
博士研究で避けて通れない論点
- 第9回 | 他領域の研究との接続①
生成・関係・世界とともに考える(Tim Ingoldの文献から)
人類学における動き
「世界を記述する」から「世界とともに考える」へ
- 第10回 | 理論との接続②
知・身体・環境(Tim Ingoldの文献から)
身体性・素材・環境
ニューテオリズムとの接続
パフォーマンスはなぜ身体を必要とするのか
- 第11回 | 研究成果をどう届けるか
読む/見る/感じる研究
読者・観客の生成
研究成果の共有形態
論文・演劇・展示・映像
「評価される研究」との緊張関係
- 第12回 | 学術世界との接続
パフォーマンス研究はどこで拒まれるのか
アカデミアとのコンフリクト
正統性・妥当性・評価
博士論文として成立させるための戦略
- 第13回 | 自分の研究をパフォーマンスに読む
受講生の研究を読む
各自の研究テーマを持ち寄る
パフォーマンスな再記述/再構成
方法論・表現・倫理の再検討
- 第14回 | パフォーマンス・ソシヤル・サイエンスの未来
研究・教育・社会をどうつなげるのか
パフォーマンス・アプローチの境界と可能性
博士研究として「何を引き受けるのか」

履修上の注意

- 本演習ではICTを多用する。資料のオンライン共有、議論の記録、先行研究リストの作成をオンライン上で行う。
- 各自、ノートパソコンやタブレット端末等を持参すること。事前に十分な充電を行うこと。
- 受講生の関心や理解状況に応じて、シラバス内容の一部を調整する場合がある。
- 14回の授業のうち、7回をオンラインリアルタイムで実施する(具体的な日は受講生と協議の上決定する)
- 生成AIの利用について:本授業では生成AIの利用を制限しない。ただし、課題への取り組みにおけるAI利用の透明性を重視する。生成AIを使用した場合は、「その部分」に、どのツールを、どのような目的で使用したかを提出物に明記すること。記載がない場合、不正行為として扱うことがある。

準備学習(予習・復習等)の内容

- 発表担当回では、事前に発表資料を作成し、指定された方法で共有すること。
- 発表担当でない回においても、必ず発表者の資料に目を通し、議論に参加すること。

教科書

Playing with Purpose: Adventures in Performative Social Science
Gergen, M. M., & Gergen, K. J. (2012). Playing with purpose: Adventures in performative social science. Routledge.

参考書

課題に対するフィードバックの方法

- 各回の課題はクラスウェアにて提出する。
- 教員は提出された内容に対して随時フィードバックを行い、特に重要な論点については次回の演習で取り上げ、全体で共有する。・反転授業およびオンライン講座への参加は、演習時間外に行う。

成績評価の方法

-文献読解や議論への参加(12回×5点=60点)を中心に、担当章の発表と議論(2回×10点=30点)、および学期末に提出する省察的レポート(10%)によって総合的に判定する。

その他

科目ナンバー：(GJ) LIN731J			
言語・国際交流研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	言語・国際交流特別研究		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術) 田中 牧郎		

授業の概要・到達目標

博士後期課程の研究は、その成果を学会発表や学術論文の形で順次公表することが必要である。本授業では、何らかの学術的枠組で日本語を研究対象とする院生を主たる受講者として、研究テーマの発見、探索的調査、仮説や研究課題の設定、調査の設計、得られたデータの分析、考察の展開、結論と課題の導出、という一連の過程を、いくつかの研究事例によって、学んでいく。研究事例には、教員自身の研究、参加院生の研究、優れた学術論文、大規模プロジェクトを取り上げ、原則として1回につき1事例ずつを扱っていく。

授業内容

- 第1回：日本語研究の方法概観
- 第2回：教員の研究事例
- 第3回：優れた研究事例1
- 第4回：院生の研究事例1
- 第5回：院生の研究事例2
- 第6回：院生の研究事例3
- 第7回：コーパス構築プロジェクトの事例
- 第8回：社会調査プロジェクトの事例
- 第9回：言語問題プロジェクトの事例
- 第10回：優れた研究事例2
- 第11回：院生の研究事例4
- 第12回：院生の研究事例5
- 第13回：院生の研究事例6
- 第14回：この授業のまとめ

履修上の注意

日本語学・日本語教育学を専門とする院生を主たる対象に想定していますが、それ以外の専門の院生も履修可能です。

準備学習(予習・復習等)の内容

取り上げる研究事例については、あらかじめ論文や報告書等を読んでから授業に参加して下さい。自身の研究事例を発表する当番の人は、当該授業の1週間前までに、論文や報告書とレジюмеを、Oh-ol Meijiで共有してください。

教科書

使用しません。

参考書

授業時に提示します。

課題に対するフィードバックの方法

授業内のプレゼンに対してはその場でコメントします。提出物を課した場合は後日コメントします。

成績評価の方法

授業時の取り組みによって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

選択必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN751J			
言語・国際交流研究	備考	3年に一度開講	
科目名	言語・国際交流特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(学術)	小森 和子	

授業の概要・到達目標

博士論文の執筆において、また、その先の研究者としての研究活動において必要となる研究能力の一つに、自らの研究を客観的に見つめ、自らの研究能力を正当に評価する能力がある。特に、実証研究においては、「この研究方法で、このデータで、この分析方法で、仮説を証明したことになるのか、課題を達成したと言えるのか」をモニターしながら、自らの研究を精緻化していかなければ、客観性に欠く、独りよがりの研究になってしまう恐れがある。そこで、本講義では、受講者が自らの過去の、および直近の研究成果や研究過程を振り返り、それを自らが評価し、受講者同士で共有することを通して、振戻した研究者としての研究能力の育成を目指す。

本授業では、一学期を三つのクールに分けて、進める。第Iクールでは、発表担当の受講生が、すでに執筆した修士論文について、あるいは、現在取り組んでいる博士論文について、研究の目的、意義、先行研究、研究課題、研究方法、分析方法、分析結果、考察内容(研究課題への回答を含む)、研究の意義の達成度、残された課題などについて、報告する。第IIクールでは、博士論文の研究概要について、研究課題と研究方法(データの取り方の妥当性も含む)、研究方法(データ)と分析方法(分析方法の妥当性も含む)、分析結果と考察、のそれぞれの整合性を、発表担当者自身が振り返る。特に、データを最大限活用するために、データと分析方法の整合性の確認、および、考察が貧弱になっていないか、考察が妥当かを確認するために、分析結果と考察への整合性の検討に、特に力点を置いて進める。さらに、可能であれば、受講生相互に自身が得意とする分析方法をワークショップ的に学び、共有する。第IIIクールでは、各自の博士論文・博士研究は取り組む価値や意義があるものかどうか、客観的に見直し、自信をもって一人前の研究者として自らの研究を評価する。データの前に謙虚でありながら、着実に力を身につけている自らの研究能力を評価し、次のステージに向かう準備として、博士論文完成のために残されている自身の課題を整理し、その課題をどのように解決するかを検討する。

授業内容

- 第Iクール 概要の発表
- 第1回 インTRODクッション
- 第2回 受講生の専門と興味関心の共有(1)
- 第3回 受講生の専門と興味関心の共有(2)
- 第4回 受講生の専門と興味関心の共有(3)
- 第5回 受講生の専門と興味関心の共有(4)
- 第IIクール 課題・方法の整合性の確認
- 第6回 研究課題と研究方法・分析方法・考察の整合性(1)
- 第7回 研究課題と研究方法・分析方法・考察の整合性(2)
- 第8回 研究課題と研究方法・分析方法・考察の整合性(3)
- 第9回 研究課題と研究方法・分析方法・考察の整合性(4)
- 第IIIクール 博士論文完成への道
- 第10回 研究の新規性・独自性、学術的意義・教育的意義、社会へのインパクト・還元、次の研究への発展性(1)
- 第11回 研究の新規性・独自性、学術的意義・教育的意義、社会へのインパクト・還元、次の研究への発展性(2)
- 第12回 研究の新規性・独自性、学術的意義・教育的意義、社会へのインパクト・還元、次の研究への発展性(3)
- 第13回 研究の新規性・独自性、学術的意義・教育的意義、社会へのインパクト・還元、次の研究への発展性(4)
- 第14回 振り返り・まとめ

履修上の注意

受講者がそれぞれの専門と本授業がどのように関わるかを熟考しながら、履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

毎回課題を課すので、指示に従うこと。

教科書

配布資料を使用する予定。

参考書

履修者の専門を見た上で、授業内で指定する。

課題に対するフィードバックの方法

授業内でフィードバックを行うほか、Teamsやメールにて実施。詳細は初回に指示する。

成績評価の方法

毎週の課題(50%)、期末の課題(50%)

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) LIN761J			
言語・国際交流研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	言語・国際交流特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(国際広報メディア)	廣森 友人	

授業の概要・到達目標

英語や日本語を含む第二言語教育の専門家として、第二言語の習得に影響を与える学習者要因(とりわけ、学習動機、学習ストラテジー、学習スタイル)に対する理解を深め、学習者中心の教育を実践する上で必要となる基礎的知識を身につけることを目標とする。関連して、実証的手法を用いた論文の読解・執筆を通じて、基礎的な研究手法(統計的な分析を含む)に慣れるとともに、論文を批判的に検討できるようになることを第2の目標とする。

実際の授業では、主として英語で書かれた第二言語習得の学習者要因に関する基本的な文献を読む。授業では、担当者による報告、疑問点・問題点に関する全体討議、教員による補足説明等を行う。毎回の授業出席、積極的な討議参加に加え、課題の作成を含めた授業前後の入念な準備が要求される。

授業内容

- 第1回：イントロダクション(授業の概要説明)、第二言語習得と学習者要因研究
 - 第2回：Individual Differences: An Overview
 - 第3回：Age
 - 第4回：リサーチ・プロジェクト(1)研究テーマの策定
 - 第5回：Sex/Gender
 - 第6回：Learning Style
 - 第7回：リサーチ・プロジェクト(2)調査方法・仮説の設定
 - 第8回：Language Learning Strategies
 - 第9回：Autonomy
 - 第10回：リサーチ・プロジェクト(3)調査の実施
 - 第11回：Motivation
 - 第12回：A Holistic View
 - 第13回：リサーチ・プロジェクト(4)結果の分析・考察
 - 第14回：授業全体のまとめ
- *講義内容は必要に応じて変更することがあります。

履修上の注意

毎回の授業出席、積極的な討議参加を心掛けること。また、本授業では最終課題(レポート)として、受講者全員による共同研究の実施、ならびにその成果をまとめた共著論文の執筆を予定している。授業外でも多くの時間を要求されることから、履修を希望する院生は相当の覚悟を持って履修すること。

準備学習(予習・復習等)の内容

課題の作成を含めた授業前後の入念な準備が要求されます。

教科書

Griffiths, C., & Soruç, A. (Eds.). (2020). Individual differences in language learning: A complex systems theory perspective. Palgrave Macmillan.

参考書

廣森友人(編著)。(2020)。『英語教育論文執筆ガイドブック：ジャーナル掲載に向けたコツとヒント』大修館書店。

課題に対するフィードバックの方法

提出された課題に対しては、授業内外に時間を設けて、口頭あるいは文書によりフィードバックを行います。

成績評価の方法

授業(討議含む)への参加状況(20%)、課題発表(40%)、レポート(40%)により、総合的に判断します。

その他

博士後期課程

選択必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIN731J			
言語・国際交流研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	言語・国際交流特別研究		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学)	朝日	祥之

授業の概要・到達目標

社会言語学では、言語変異、言語行動、バイリンガリズム、セクシュアリティ、ナラティブ研究、会話分析、多言語使用などの研究で、特定の地域社会・集団・個人を対象にしたフィールドワークを実施し、そこで観察される言語使用に潜む規則性を発見するとともに、その学術的意義を研究成果としてまとめることが求められる。本科目は、このような「人」を対象とした調査研究の方法論を学ぶとともに共同研究を実践する。授業では、まず、データ収集のためのフィールドワークの技法を取り上げ、関連する研究事例を学んだ上で、共同研究テーマを設定する。受講生とともに調査研究を行い、その成果をまとめる。本科目で扱う内容は言語学を中心とするが、国際日本学研究科におけるその他の研究分野（言語教育、社会学、日本学、ポップカルチャー、多文化共生、文化人類学、異文化間教育学等）とも密接に関連している。

授業内容

- 第1回：イントロダクション：フィールドワークを行うこと
- 第2回：フィールドワークの技法(1)アプローチ
- 第3回：フィールドワークの技法(2)データ収集
- 第4回：フィールドワークの技法(3)データ整備と保管
- 第5回：社会言語学の研究事例(1)言語変異・言語行動・バイリンガリズム
- 第6回：社会言語学の研究事例(2)セクシュアリティ・ナラティブ研究
- 第7回：社会言語学の研究事例(3)会話分析・多言語使用研究
- 第8回：共同研究テーマの策定
- 第9回：データ収集・分析(1)
- 第10回：データ収集・分析(2)
- 第11回：データ収集・分析(3)
- 第12回：分析結果の発表(1)
- 第13回：分析結果の発表(2)
- 第14回：まとめ

履修上の注意

本科目は共同研究を実施し、その成果を国内外の学会で発表すること、研究論文を執筆することを目指します。履修を希望する院生は共同研究に積極的に参加することが期待されます。言語学・言語教育学のみならず関連する分野を専門とする院生も歓迎します。

準備学習（予習・復習等）の内容

研究事例の授業においては、指定する論文を授業開始時までに読んでおいてください。また研究テーマを設定した上で共同での準備、作業をお願いします。

教科書

なし

参考書

授業時に提示します。

課題に対するフィードバックの方法

メール等でコメントを返します。

成績評価の方法

授業時の取り組みによって評価します。

その他

特になし。

科目ナンバー：(GJ) PHL711J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化・思想特別研究		
開講期	秋学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	美濃部	仁

授業の概要・到達目標

この講義では、フィヒテ思想の頂点とも言える講義録『1804年の知識学(第2講義)』を、とくに「絶対的存在」と「現象」の関係に注目して理解することを試みる。この講義録は「真理論」(1～15講)と「現象論」(16～28講)の2部から構成されている。はじめにフィヒテの思想の展開を考える上でこの講義録の位置を確認した上で、まず真理論を概観し、それを準備として、現象論の叙述を、テキストを顧みながら追い、それを通して、絶対的存在が現象するとはどういうことであるのかを明らかにすることに努める。

授業内容

- 第1回 フィヒテの思想の展開と『1804年の知識学(第2講義)』
- 第2回 真理論(1):知識学の課題と「光」
- 第3回 真理論(2):観念論的立場と実在論的立場
- 第4回 真理論(3):知識学の立場と「自己内に閉じて完結した存在」
- 第5回 まとめ
- 第6回 現象論(1):「現象論」あるいは「現象学」の課題
- 第7回 現象論(2):「前提」とは何か
- 第8回 現象論(3):「当為」とは何か
- 第9回 現象論(4):「自から」ということ
- 第10回 現象論(5):「自己内に閉じて完結した存在」と「現象」
- 第11回 現象論(6):「原現象」としての「自我」
- 第12回 現象論(7):「像としての像」としての「自我」
- 第13回 現象論(8):絶対的存在の現象
- 第14回 まとめ

履修上の注意

ドイツ語のテキストを用いて授業をおこないます。

準備学習（予習・復習等）の内容

予め関係のテキストを指示しますので、それを読んで、質問をまとめてから授業に臨むようにしてください。

教科書

J. G. Fichte, *Die Wissenschaftslehre. Zweiter Vortrag im Jahre 1804*, Philosophische Bibliothek 284

参考書

美濃部仁「フィヒテの現象概念—『1804年の知識学』第2部の「現象学」—」(池田・合田・志野・美濃部著『何処から何処へ—現象学の異境的展開—』知泉書館、2021年所収)

課題に対するフィードバックの方法

授業中にフィードバックをおこないます。

成績評価の方法

授業中の議論と発表によって評価します。

その他

選択必修科目

科目ナンバー：(GJ) LIT711J			
文化・思想研究	備考	2026年度開講せず	
科目名	文化・思想特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	専任教授 博士(文学)	小谷 瑛輔	

授業の概要・到達目標

日本近代文学研究において90年代以降重要な立場と見なされるようになった、「文化研究」について学ぶ。

各自で関心のある文献を挙げ、毎回担当を決めて講読していく。また、共通で扱う文献として、小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』を指定する。

到達目標は、テキストとディスカッションから得られた知見を各自の論文に生かせるようになることである。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
 - 第2回：第1章
 - 第3回：第2章
 - 第4回：第3章
 - 第5回：受講者が指定する文献の講読
 - 第6回：第4章
 - 第7回：第5章
 - 第8回：第6章
 - 第9回：第7章
 - 第10回：受講者が指定する文献の講読
 - 第11回：第8章
 - 第12回：第9章
 - 第13回：第10章
 - 第14回：第11章
- * 講義の内容・進度・順番は履修者の知識や関心に応じて変更することがあります。

履修上の注意

文献講読の形式で授業は進められる。履修者が章ごとの概要とディスカッション・クエスチョンをレジュメにまとめて発表するので、発表準備にそれなりの時間と労力がかかることを了解した上で履修すること。

準備学習（予習・復習等）の内容

各回で扱うテキストをあらかじめ読んでおくこと。

教科書

小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』（小沢書店）

参考書

金子明雄・高橋修・吉田司雄編『ディスクールの帝国』（新曜社）

課題に対するフィードバックの方法

成績評価の方法

授業時の取り組みによって評価します。

その他

履修者の専門分野や人数に応じて、内容を若干変更する場合があります。

科目ナンバー：(GJ) PHL711J			
文化・思想研究	備考	集中講義、3年に一度開講	
科目名	文化・思想特別研究		
開講期	春学期	単位	講2
担当者	兼任講師 博士(文学)	松本 直樹	

授業の概要・到達目標

【授業の概要】

M. ハイデガー（Martin Heidegger）『形而上学とは何か（Was ist Metaphysik?）』をドイツ語原典・日本語訳を併用しつつ精読し、「存在の意味を問う」というハイデガーの思索の根本的な構図を学ぶ。

【到達目標】

主著である『存在と時間（Sein und Zeit）（1927）』と、その刊行の二年後に行われた講演『形而上学とは何か』（1929）によって、ハイデガーが戦前・戦後の日本の哲学界・思想界に及ぼした影響はきわめて大きい。本講座の目標は、国際日本学科で様々な思想研究やその応用に携わる研究科学生のみなさんにそうした歴史的意義をもつ思想についての基本的な理解を得てもらうこと、また同時に、この短い講演に凝縮された哲学的な思考の作法を身につけてもらうことである。

授業内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：形而上学的に問うこと
- 第3回：学問する実存のあり方
- 第4回：諸学問の本性と無
- 第5回：無を問うことの困難
- 第6回：無と否定の関係
- 第7回：気分による開示の全体性格
- 第8回：不安における存在者の開示
- 第9回：覆蔵としての無の開示性
- 第10回：証言としての無化のふるまい
- 第11回：覆蔵された不安と現存在の徳
- 第12回：形而上学の根本の問
- 第13回：「何故に」をめぐる問
- 第14回：「存在を問う」とはどのような可能性か

- (1) 以上は大まかな目安であって、読解の速度や議論の密度により、回ごとの進み方や順序は変わる可能性もある。また、必要に応じて別のテキストを参照することもある。
- (2) ドイツ語原典と日本語訳を併用するのでドイツ語の履修は必須ではないが、教員による解説や出席者の議論はしばしばドイツ語原典に言及することになるので、その点は承知のうえで受講してほしい（ドイツ語未修者にも理解できるように、最大限の配慮はするつもりである）。
- (3) なお、本講義は前半7回をオンラインで、後半7回を2日間の対面集中講義で行う。日程は以下のとおり。
 - 前半第1～7回（オンライン講義）
4/27、5/11、5/25、6/8、6/22、7/6、7/20（いずれも月曜5限）
 - 後半第8～14回（対面集中講義）
8/17（月）3～5限、8/18（火）1～4限

履修上の注意

- (1) 「授業内容」の項でも述べたように、本講義は前半7回をオンラインで、後半7回を2日間の対面集中講義で行う。日程は以下のとおり。
 - 前半第1～7回（オンライン講義）
4/27、5/11、5/25、6/8、6/22、7/6、7/20（いずれも月曜5限）
 - 後半第8～14回（対面集中講義）
8/17（月）3～5限、8/18（火）1～4限
- (2) 授業の進行を妨げる行為には厳正に対処する。
- (3) 理解しやすさは極力、配慮するが、受講者にも積極的・能動的に考える姿勢を望みたい。

準備学習（予習・復習等）の内容

予習： 指定の範囲を事前に熟読し、自分なりの見解や疑問をもって授業に臨むこと。
復習： 授業内で提示した問題について、各々が考えるところをきちんと文章化してまとめること。

教科書

指定しない。毎回、指定範囲をコピーして配布する。

参考書

『形而上学とは何か』そのものについては、よい参考書がない。ハイデガー思想の全体については

秋富克哉他編『ハイデガー読本』、法政大学出版局、2014年

を参考にされたい。とくに『形而上学とは何か』を読み進めるうえで基本となる主著『存在と時間』については、本書の第5章～第10章を読まれるとよい。

この他にも、適宜、授業内で紹介する。

課題に対するフィードバックの方法

提出されたレポートに対し、Oh-ol Meijiにて全体講評を行う。

成績評価の方法

平常点（授業への参加・貢献度）70% + 学期末レポート30%（学期末レポートを提出しなかった受講者は、平常点の如何に関わらず不合格とする）。

その他

とくになし。

学校法人明治大学環境方針

2002年11月18日制定

1 基本理念

21世紀を迎えた我々が直面している環境問題は、地球温暖化、生態系の破壊、エネルギー問題、大気汚染、廃棄物問題、化学物質による汚染など空間的にも時間的にも大きな広がりをもっており、単に一部の地域・民族にとどまるものではなく、地球全体・人類全体にとって緊急かつ恒常的に取り組むべき最重要課題となっている。

明治大学は、教育研究機関の社会的使命として、この環境問題に対し、高い関心を持ち、知的、道徳的及び実践的能力を備えた問題解決能力のある人材を育成・輩出することにより、環境改善の啓発活動を積極的に展開し、かつ自らも環境保全活動を実践し、社会において指導的な役割を果たしていく。

そのために、明治大学は、環境問題に主体的に取り組み、「環境に優しいキャンパスづくり」を目指し、常にこの環境問題を視野に入れた教育研究、その他事業等活動を推進し、省エネルギー・省資源・3R (Reduce、Reuse、Recycle)などにより自らの環境負荷低減に努めるとともに、最先端の教育・研究、技術及び設備の活用並びに環境保全に資する研究成果の社会への還元によって環境の保全に積極的に努力していく。

明治大学は歴史と伝統に基づき、「都心型大学」としての英知を結集し、情報発信基地として、明治大学を構成する教職員、学生及び取引先関係会社の職員が協力して、次の活動を積極的に推進する。

2 基本方針

- (1) 教育研究活動その他事業活動を推進するに当たり、環境関連の法律・規則・協定、当大学の校規等を遵守する。
- (2) 環境目的及び目標を可能な限り具体的・定量的に設定して、明治大学環境マネジメントシステム(MEMS:Meiji Environmental Management System)を構築・運用し、適切な内部環境監査を実施して、その継続的な改善を図る。
- (3) 環境に配慮した事業活動を行い、省エネルギー、省資源、3R及び化学物質の管理並びに生物多様性への配慮を積極的に進め、環境負荷の低減に努める。
- (4) 環境にかかわる教育研究活動、公開講座の開催等を展開し、環境保全にかかわる意識の高揚・普及を図る。
- (5) 環境方針を当大学の教職員、学生・生徒、取引先関係会社の職員等に周知するとともに、学外に対しても文書、当大学のホームページ(<http://www.meiji.ac.jp/>)等を通して積極的に公開し、理解と協力を求めていく。

2016年5月10日
学校法人 明治大学
理事長 柳谷 孝

交通遅延発生時の授業等の措置について

	<p>緊急時には、Oh-o! Meiji システム又は本学ホームページ等でお知らせを配信しますので、必ず確認するようにしてください。</p>
1 悪天候等により大規模な交通遅延が予想される場合	<p>悪天候等により、授業日に大規模な交通遅延が予想され、授業の臨時休講等の特別な措置を講じる場合には、当該授業開始時間の3時間前までを目途に、本学ホームページ・Oh-o! Meijiシステムを通じてお知らせします。</p>
2 本学への通学における主要交通機関に遅延が生じた場合	<p>本学の各キャンパスへの通学における主要路線に大規模な遅れや運休が生じた場合は、急遽特別な措置を講じる場合があります。その場合には、本学ホームページ・Oh-o! Meijiシステムを通じてお知らせします。</p> <p>なお、自身が利用する交通機関の遅延・運休により、授業を遅刻または欠席せざるを得なかった場合は、交通機関にて遅延証明書等を入手したうえで、各授業担当教員にご相談ください。</p>

大規模地震等災害発生時の対応について

1 大規模地震発生時の行動	<p>授業中に大規模地震が発生した場合は、あわてず次のような安全行動をとり、館内放送の指示に従ってください。本学の建物は耐震建築又は耐震補強がなされており、容易に倒壊することはないと想定しています。</p> <p>(1) 地震発生時の行動</p> <p>身の安全を図り、揺れがおさまるまで次の事項に留意し、冷静に行動してください。(大きな地震でも1～2分で揺れはおさまります。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机の下に隠れる、衣類や鞆等で頭を覆う等の安全行動をはかり、落下物から身を守ってください。 ・自動販売機、ロッカー等は倒れたり、窓ガラスが割れたりすることでケガをする恐れがあるため、近寄らないでください。 <p>(2) 地震直後の行動</p> <p>大きな地震の後には、必ず余震が来るとおぼやかしてください。余震を念頭におきながら、次の事項に留意し、冷静に行動してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・余震に注意し、避難口を確保してください。避難口確保の際は、各教室に備え付けのドアストッパーを利用してください。あわてて外に出るとかえって危険な場合があります。 ・ガスの元栓・コンセント等、火の元を確認してください。出火した場合は、消火器等を利用した初期消火活動を行うとともに、最寄りの防災センター・守衛所に連絡してください。 ・教室内の安全を確認してください。 <p>(3) 地震後の行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・傷病者がいる場合、最寄りの防災センター・守衛所に連絡してください。 ・教室内の安全の再確認及び周囲の状況の確認をしてください。
---------------	--

(4) 避難行動

- ・地震が発生しても身近に危険がなければ避難する必要はありません。しかし、館内や近隣での火災、壁に大きな亀裂が入るなど躯体への影響が懸念される場合、薬品漏出、実験機器転倒の恐れ等がある場合には、屋外へ避難することになります。その際は、館内放送の指示に従い、教員・職員の誘導により、各建物ごとに指定された「一時集合場所」へ移動してください。
- ・授業中の場合は、授業の受講者単位で移動してください。
- ・傷病者や身体障がい者の避難をサポートしてください。
- ・屋外に避難する時は、衣類や持ち物で頭を覆い、落下物から身を守ってください。地面の亀裂や陥没、隆起及び塀や電柱の倒壊に注意してください。
- ・避難には必ず階段を利用し、エレベーター及びエスカレーターは使用しないでください。
- ・各キャンパスの一時集合場所は、明治大学HP内にある「明治大学防災ガイド」(<https://www.meiji.ac.jp/koho/disaster/guide/index.html>)を確認してください。

(5) 帰宅困難対策について

大規模地震が発生した場合、交通機関が麻痺し帰宅困難となる場合があります。無理に帰宅せず、大学施設等の安全な場所に留まるようにしてください。なお、大学では、非常用の食料等を備蓄しています。

2 火災発生時の対応

(1) 火災を発見した場合の行動

- ・大声で「火事だ」と叫び、周りの人に知らせてください。
- ・最寄りの防災センター・守衛所・事務室に連絡してください。
- ・消火栓の火災報知器ボタンを押してください。
- ・消火できそうな火災は、消火器等を利用して初期消火にあたってください。

(2) 初期消火のポイント

- ・炎や煙に惑わされず、燃えているものを確かめてください。
- ・燃えているものに適した消火器等を使用し、適切な距離(3~5m)から消火してください。
- ・出来るだけ多くの人で消火器等を集めて、一気に消火してください。
- ・2か所以上から同時に出火していたら、人命に影響を及ぼす場所の消火を優先してください。

(3) 避難行動

- ・煙が発生した場合には、姿勢を低くし、ハンカチを口と鼻にあてるなどして煙を吸わないようにしてください。
- ・建物内で火災が発生した場合、その煙・熱等で感知器が作動し、自動で防火戸・防火シャッターが閉鎖します。避難する前に防火戸が閉まった場合は、避難方向に出られるよう開けられます。
- ・防火戸・防火シャッターが自動で閉鎖しない場合は、煙の拡散を防ぐために必ず手動で閉めるようにしてください。
- ・避難には必ず階段を利用し、エレベーター及びエスカレーターは使用しないでください。

3 災害発生時の連絡方法

- (1) 非常時には、電話線の切断、故障、電話パニック等のため、電話がつながりにくくなります。また、大学では家族から学生の安否の問い合わせがあっても、個別の確認には即座に対応できないことがあります。普段から、非常時の連絡方法について、家族、友人又はクラス・ゼミ単位で話し合っておいてください。(遠方の親戚や友人を安否確認の中継点にする・災害用伝言ダイヤル・災害用伝言板 (Web171)・Google パーソンファインダー等を利用するなど。)
- (2) 大学からの情報の伝達・安否確認については地震発生後、体制が整い次第、HP及び所属の学部事務室等から「Oh-o! Meiji システム」を通じてお知らせしますので、その指示に従ってください。

また、補助的手段として、X (旧 Twitter) からも情報発信を行います。以下の大学のアカウントをフォローしておくことをお勧めします。

明治大学公式アカウント (@Meiji_Univ_PR)

《参考》

・災害発生時の公衆電話・

災害が発生し、加入電話の発信が規制されると、緊急通報 (119) も含めて電話がかかりにくくなります。そうした時は、比較的公衆電話がつながるようです。あらかじめ公衆電話がどこにあるか確かめておきましょう。災害救助法が適用される規模の災害が発生した際に運用されますが、電力会社からの送電が止まっても、NTT回線がつながっていれば、無料で電話がかけられます。

4 平常時の備え

- (1) 大学HPに掲出の「明治大学防災ガイド」には避難マニュアル、避難場所、備蓄品、帰宅困難時の対応、応急手当など災害時に必要な情報が載っています。必ず確認をしてください。
- (2) 非常時に備え、避難経路、避難先等を確認しておいてください。避難路 (通路、階段等) には物を置かないようにし、出入口周辺のロッカー、戸棚等の転倒防止などを実施してください。また、落下物防止の観点から、ロッカー、戸棚等の上には物を置かないようにしてください。
- (3) 火災の発生に備え、消火器・消火栓の位置、使用方法を確認しておいてください。
- (4) 実験室や研究室では化学薬品や発火物等の危険物の安全対策を施してください。
- (5) 応急手当の方法を身につけてください。また、機会を見つけて防災訓練、救急救命訓練等に参加してください。

大地震発生時の避難マニュアル (中野キャンパス) 【学生用】

大地震発生時の初動マニュアル

地震発生時の行動

- (1) **身の安全の確保！(落下物に注意)**
机の下などへ！書棚・ロッカー等の備品から離れる。



地震直後の行動

- (1) **余震に注意** 天吊りプロジェクタやガラスからは離れる。
- (2) **火の元確認。初期消火！**
出火した時は、落ち着いて消火活動と防災センターへの通報
- (3) **避難口の確保、避難場所の確認**
出入口等を開け、逃げ道を確認
あわてて外部に出るとかえって危険な場合がある。
- (4) **館内放送に注意、その指示に従う。**
- (5) **教室の安全を確認**
声をかける、ケガ人がいないか確認



地震後の行動

- (1) **教職員、館内放送の指示に従う。**
傷病人がいないか再度確認し、いた場合は、防災センターに通報する。
- (2) **教室の安全再確認**
火の元のチェック。

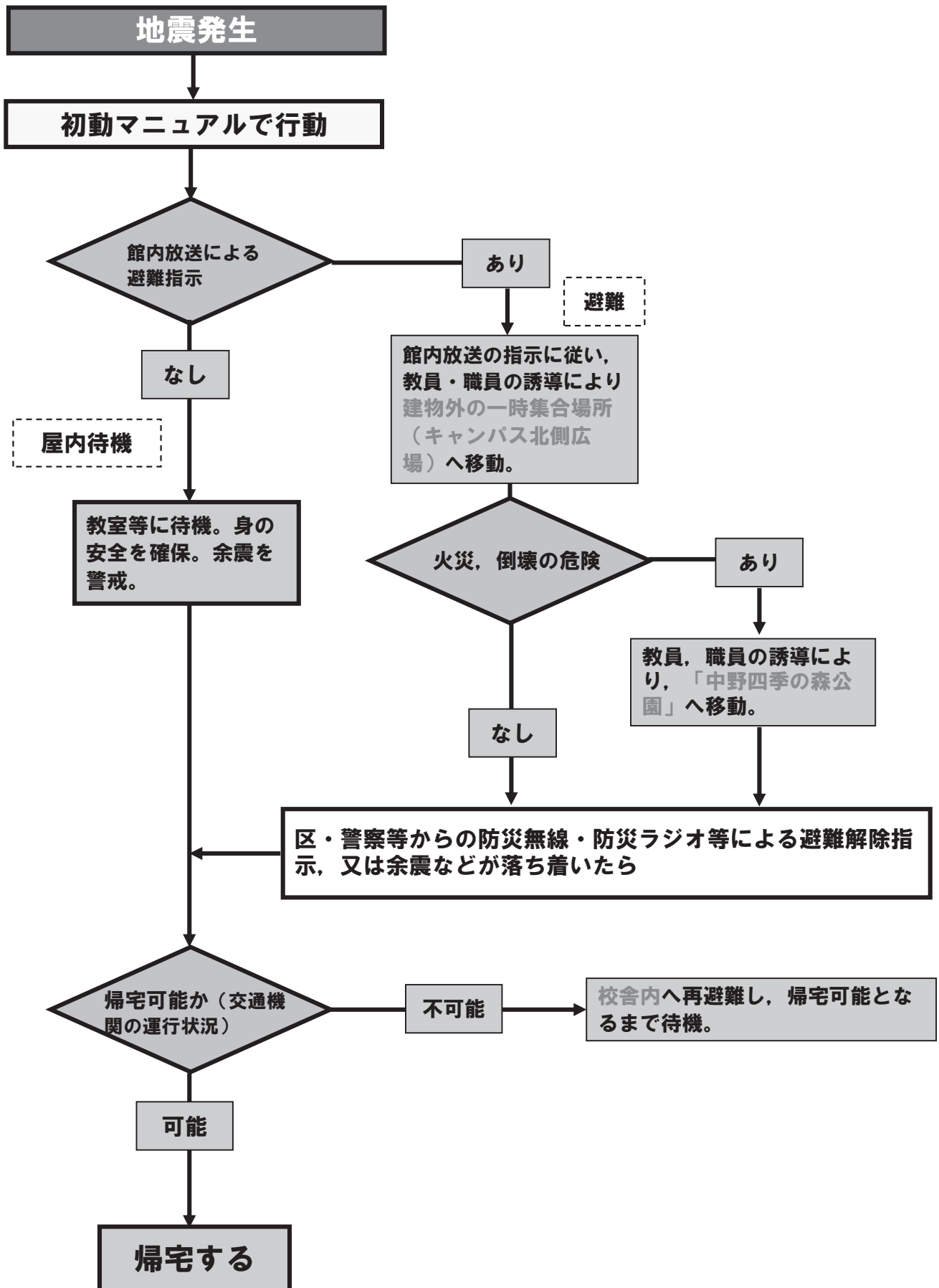


以下、大規模地震発生時の避難フローへ

緊急連絡先：防災センター（03-5343-8105）



避難フロー



大地震発生時にはこうしよう

【日常的な備え】

教室内に、地震が発生した場合の対応及び避難経路図を掲出していますので確認してください。エレベーター付近の消火栓扉内には、防災センターに通じる非常電話を設置しています。教室内の電話と併せて確認してください。

※中野キャンパスでは、緊急地震速報端末が設置されており、震度「4」以上の地震が発生すると予測される場合に、緊急地震速報が鳴動する設定となっています。

【地震時の心構え】— 落ち着いて行動 —

地震時の生命の危険性は、発生した瞬間とその後起こる火事にあると言われています。大きな揺れでも1～2分です。まずは、身の安全を確保して、落ち着いて行動をしてください。本学の建物は耐震建築がなされており、建物が容易に倒壊することはないと想定しています。

【地震発生時の行動】— 身の安全確保 — < 自助 >

落下物や転倒物から身の安全を確保するため、机の下に隠れたり、天吊りプロジェクター、窓ガラス、自動販売機やロッカーなどから離れるようにしてください。

【地震直後の行動】— 避難口の確保と火の始末 —

小さな揺れのときや大きな揺れがおさまったときに、出入口を開けて避難口を確保し、速やかに火の始末を行ってください。

【地震後の行動】— 状況確認と救出・消火 — < 共助 >

余震に注意しながら、周りの状況を確認し、傷病人等助けを必要とする人や、火災を発見したら、周りの人と協力して対応するとともに、防災センターにも連絡をしてください。(防災センターから119番通報します。)消火の際は、身の安全を第一に考え、消火器では消えないような火災のときは、無理に消そうとせず直ちに避難してください。

【エレベーター】

大きな地震の時は最寄り階に止まるように設定されていますが、乗っているときに地震に気づいた際は、全ての階のボタンを押して、停止した階で降りてください。また、万が一、降りられなくなったら、エレベーター内の非常ボタンを数秒間押して警備員に連絡した後、エレベーター保守業者による救助を待ってください。(閉じ込めの発生しているエレベーターは業者の最優先対応となります。)

【屋外避難】

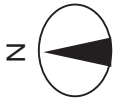
地震が発生しても、身近に危険がなければ避難する必要はありません。しかし、館内や近隣での火災や、壁に大きな亀裂が走るなど躯体への影響が懸念される場合には、屋外へ避難することになります。その際は、館内放送の指示に従い、教員・職員の誘導により建物外の「一時(いつとき)集合場所(キャンパス北側広場)」へ移動してください。その後、「中野四季の森公園」に移動します。なお、授業中に地震が発生した場合は、授業単位で避難するようにしてください。

※中野キャンパスでは、原則震度「4」以上の場合に、防災センターより館内放送を行います。

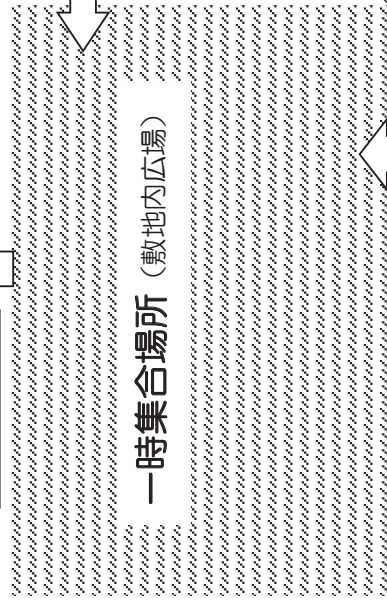
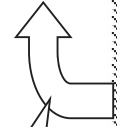
【大学からの情報の伝達・安否確認】

地震発生後、体制が整い次第、大学ホームページ及び中野キャンパス事務部から「Oh-o! Meiji システム」を通じて、大学からの情報の伝達・安否確認をお知らせします。その際に大学への安否連絡方法もお知らせしますので、その指示に従ってご連絡ください。X(公式アカウント@Meiji_Univ_PR)でも情報発信を行います。

中野キャンパス



火災、倒壊の
危険がある場合



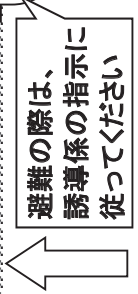
一時集合場所 (敷地内広場)



低層棟
1~5F



アトリウム



避難の際は、
誘導係の指示に
従ってください



高層棟
B1~14F



中野四季の森公園

中野区役所
指定広域避難場所です。

高田寺方面

中野駅方面

明治大学大学院
国際日本学研究科 ☎03-5343-8039

〒164-8525 東京都中野区中野 4-21-1
明治大学中野キャンパス